

異世界食堂 おバカな料理人

京勇樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある都会の一角の地下に、一件のこじやれたレストランがあった

そのレストランの名前は、〈洋食のねこや〉

近くでは名の知られたレストランである

月曜日から金曜日までは、通常営業

そして、土曜日は特別営業

その特別営業の日は、別の名前で呼ばれる

その名前は

〈異世界食堂〉

だ

6月9日

タイトル変更

目次

プロローグ	1
一皿目 メンチカツ	5
二皿目 モーニングセット	13
面接と研修	19
三皿目 トウフステーキ	23
四皿目 ビーフシチュー	29
五皿目 おにぎり	36
ある商会の老人と孫	40
六皿目 ミートソーススパゲッティ	43
七皿目 テリヤキチキン	48
八皿目 エビフライ	53
少年の志	63
九皿目 チョコレートパフェ	68
知った理由	74
10皿目 カレーライス	78
11皿目 チキンカレー	84
新しい仲間	89
12皿目 シーフードフライの盛り合わせ	94
13皿目 カツ丼	101
14皿目 味噌カツ丼	107
少女の一步	112
少女との面接	115
15皿目 和風ハンバーグ	120
16皿目 オムライス	123

記録の地平線	127
17皿目 キーマカレー	130
18皿目 牛丼	135
新たな始まり	139
19皿目 マルゲリータピザ	142
20皿目 フライドチキン	148
21皿目 納豆スパゲッティ	152
22皿目 プリン・アラモード	160
リリカルマジカル	166
23皿目 ハヤシライス	169
24皿目 コーヒーフロート	176
25皿目 豚のしょうが焼き	182
サイコロ、コロコロ	188
26皿目 チーズフォンデュ	192
27皿目 クッキー	197
28皿目 チーズケーキ	205
29皿目 ビーフステーキ	210
スライムの国	216
30皿目 シーフードドリア	219
再会する戦友	223
31皿目 コロッケ	227
32皿目 サンドイッチ	232
33皿目 パウンドケーキ	235
世界樹の世界から	240
34皿目 パエリア	243

アレツタの一日 前	247
アレツタの一日 後	250
35皿目 クリームソーダ	254
36皿目 豚汁	259
ロボットマニア率いる騎士団	263
37皿目 青椒肉絲	266
38皿目 アップルパイ	270
39皿目 ツナマヨコーンパン	275
40皿目 クレープ	280
41皿目 タンメン	285
42皿目 カキフライ	288
43皿目 ホワイトシチュー	291
44皿目 カレーパン	295
一年の始まり	298
45皿目 お汁粉	300
46皿目 アーモンドチョコ	305
神々の住まう地から	312
47皿目 回鍋肉	314
交1皿目 オニオングラタンスープ	318
48皿目 デミグラスハンバーグ	323
49皿目 シュークリーム	327
歌って戦う少女達	330
50皿目 カツカレー	333
51皿目 キノコスパ	338
52皿目 大学芋	343

53皿目	スイーツポテト	346
54皿目	炊き込みご飯	351
55皿目	モンブランプリン	355
56皿目	ポトフ	361
57皿目	おでん	366
58皿目	年越しそば	370
59皿目	アサリの酒蒸し	373
新しい仲間		
60皿目	炒飯	381
61皿目	シーフードピラフ	383
62皿目	ライスバーガー	387
交2皿目	タンドリーチキン	392
63皿目	豚まん	399
64皿目	お子様ランチ	402
65皿目	フルーツゼリー	408
66皿目	天津飯	415
67皿目	鰯の塩焼き	419
68皿目	バーベキュー	423
69皿目	スコッチエッグ	426
70皿目	麻婆豆腐	434
年末		
71皿目	スコーン	439
72皿目	ハムカツ	442
73皿目	スイカシャーベット	448
幕間 新装開店		
455		455

74	皿目	ロースカツ	457
75	皿目	親子丼	464
76	皿目	カルビ丼	468
77	皿目	マカロニグラタン	472
		一年の始まり	479
78	皿目	チョココロネ	481
79	皿目	ハンバーガーセット	484
80	皿目	ナポリタン	489
81	皿目	ポテトチップス	493
82	皿目	オイルサーディン	498
83	皿目	かき氷・抹茶宇治金時	502
84	皿目	ホットドッグ	507
85	皿目	モンブラン	511
86	皿目	フルーツグラタン	516
		霊夢の友人達	520
87	皿目	かきたま餡掛けにゆうめん	524
		理由	527
		指摘	530
88	皿目	スパニッシュオムレツ	534
89	皿目	中華粥	539

プロローグ

日本のある街のビル街

そのあるビルの地下に、小洒落た料理店があった
その名前は、《洋食のねこや》

今の店長が、先代の店長から店を継いで10年
月曜日から金曜日は、通常営業として開店

そして土曜日、《特別営業》をやっている

特別営業と聞いたら、普通は予約限定と思うだろう
しかし、違った

特別営業は、お客が何者なのか

扉の向こうがどんな場所かは、知らない

だがその土曜日は、異世界食堂とも呼ばれていた

それが、洋食のねこやのもう一つの呼ばれ方だ

そして、別世界のある炭坑町の外れの丘

そこに、一人の女性が居た

長い茶髪を、三編みにした女性だった

その女性は、双眼鏡を覗いていた

そして、目的の場所を見つけたらしく

「……！ 見つけた、あそこね！」

と言つて、移動を始めた

森を抜けて、山を上り、その炭坑に入った

そこは、廃坑になった元炭坑だった

女性はその中に入り、奥を目指した

途中で幾つもの罨を掻い潜り、少し広い空間の岩に腰掛けた

すると、その岩がガコンと沈みこんだ

「しまった!?! 何かの罨!?!」

と女性は叫んだが、罨は起動しない

不思議そうにしていると、何か重い物が動く音が聞こえた

「ん?」

周囲を見回すと、ある一ヶ所の巨大な岩が無くなり、その奥に猫の

絵が描かれたドアがあった

女性は、恐る恐ると近寄り

「ドア……よね？」

と不思議そうに首を傾げた

そして、腰のバッグの中から一冊の本

日記を取り出して読み

「文字は分からないけど……これは、ネコ……よね？」

と呟いた

そして、ゆつくりとドアを開けた

そうして見えたのは、様々な種族の人々が揃って楽しそうに料理を食べている光景だった

その光景を見て、女性

トレジャーハンターの、サラールゴールドは呆然とした表情で

「なんなの……ここは……」

と呟いた

すると

「いらっしやい！」

「洋食のねこやに、ようこそ！」

と二人の男性が声を掛けてきた

それに思わず、サラは腰からナイフを抜いて

「……ねこや？」

と首を傾げた

すると、若い青年が

「はい、しがない料理屋ですよ」

と言った

それを聞いたサラは

「料理屋？ こんな廃坑で？」

と驚いていた

それを聞いた髭の生えた男性

店長は

「廃坑？」

と首を傾げた

そして、パチンと指を鳴らして

「お客さん。もしかして、ウイリアムさんのドアから来ました?」

と問い掛けた

すると、サラは

「ウイリアムIIゴールドを知ってるの!」

と店長に詰め寄った

すると、店長は

「何年か前まで、ウチに来てくださった常連さんですよ」

と説明した

それを聞いた青年は

「僕が雇われるより、更に前ですか?」

と問い掛けた

すると、店長は

「明久がきたのは、二年前か。それより前だな」

と言った

しかし、サラは

(ここに、お爺ちゃんウイリアムの秘宝が有るのは、間違いないんだけど)

と思った

そして、二人に

「それより、ウイリアムIIゴールドの秘宝はどこ?」

と問い掛けた

しかし、店長は

「ウイリアムさんの秘宝は知りませんが、料理を食べませんか?」

と言った

すると、明久が

「そんな物騒なのは仕舞って、お好きな席に座ってください」

と席に座るように、促した

そして二人して、両手に大量の皿を持って奥に引っ込んだ

それをサラは、呆然としながら見送ったが、ぐうーと腹の虫が鳴り、顔を真っ赤にしながら座った

すると、明久が

「こちら、メニューになります。お客さん、東大陸語は読めますか？」

とサラに問い掛けた

すると、サラは

「ええ、読めるわ」

と返した

それを聞いて、明久は

「では、どうぞ」

とメニューを手渡し、机の上にコップを置いた

すると、そのコップを見たサラが

「ちよっと、水は頼んでないわよ？」

と言った

それを聞いて、明久は

「そちらのレモン水は、サービスですよ」

と言って、離れたのだった

そしてサラは、ウィリアムの秘宝を知ることになる

一皿目 メンチカツ

イスに座ったサラ・ゴールドは、明久に手渡されたメニューを開いた

様々な種類の料理があり、それらの説明文も記載されている
しかし、どのような料理かはサラには想像出来なかった

だからサラは、なにか分かればと周囲で料理を食べている人々を見た

（あのリザードマンが食べてるのは、玉子を使った料理かしら？

あっちの剣客が食べてるのは、肉料理……みたいね）

しかし、全員が違う料理を食べているために参考にならない
だが、一つ分かったことがあった

それは、提供されている全ての料理が、どれも見たことない料理だ
ということ

（どうしたものかしら……）

とサラが、悩んでいた

その時、店長が近づき

「注文は決まりましたか？」

とサラに問い掛けた

するとサラは、意を決して

「それじゃあ、日替りランチを頼もうかしら」

と言った

すると、それを聞いた店長がピクリと反応

それに気づいたサラは

「なにかしら？」

と店長に問い掛けた

すると、店長は

「いえね……これも何かの縁なんでしょうね」

と懐かしそうに言いながら、日替りランチの内容が書かれてる入り
口のボードを見た

サラも追って見てみれば、そこに書かれてるメニューの名は《メン

チカツ》だった

「メンチカツは、ウイリアムさんの好きなメニューなんです」

店長は僅かに目を細めて、そう言った
すると、リザードマンの客が

「マスター……オムライス、オカワリ」

と言った

それを聞いた店長は

「あ、はい！」

とそのリザードマンに返事した

そして、キッチンの方に顔を向けて

「明久！ 日替り頼むー！」

と言った

すると、キッチンの方から

「分かりました！」

と返事がされた

そして、店長は

「では、メニューをお下げします」

とサラが持っていたメニューを持って、下がった

それを見送ったサラは

「お爺ちゃんが、好きだった料理……」

と呟いた

それから、数分後

「お待たせしました。本日の日替りランチの、メンチカツ定食です」

と、明久が料理を持ってきた

作りたてだからだろう、時おりパチパチと音がする

そして、明久は

「こちらは、コンソメスープと焼きたてのパンです。おかわり自由です
ので、何時でもお申し付けください。それと、そちらのソースとレ
モンの果汁を掛けても、美味しいですよ」

と説明し、下がった

サラはそれを見送り、改めてメンチカツを見た

サラから見たメンチカツの第一印象は

(なんか……石みたい)

と思った

色が茶色で、トゲトゲしていたからだ

サラは僅かに考えて

「まずは、こつちからね」

と言って、パンを手を取った

「うわ……この白パン、柔らかい……」

サラが知っていたパンは黒いパンなのだが、かなり固いのだ
しかも、塩が多目に使われているので、少ししょっぱい

保存向けだから、ある意味仕方ないだろう

だが、提供された白パンは柔らかくモチリしていて、食べてみれば、ほのかに甘かった

(この白パン、いい素材が使われてるのね……)

サラはそう思いながら、次はコンソメスープを飲んだ

そして、一口飲むと

(このスープは、様々な野菜の旨味が凝縮されてるのね……最後の一滴まで、飲み干したくなる……)

と思った

そして、最後のメンチカツ

それを見たサラは、用意されていたフォークとナイフを持ち

(この料理は、味が予想出来ないわ……)

と思った

そして、恐る恐るとナイフとフォークをメンチカツに当てた

(固く……ない！ むしろ、柔らかいわ！)

石みたいだと思っていたサラは、予想外の柔らかさに驚いた

そして、一個目のメンチカツを四等分して

(どんな味なのかしら……)

と思い、喉を鳴らした

そして、ゆっくりと口に運んだ

その後、サラの口の中にジューシーな脂が溢れた

「っ、これって……!」

驚愕から、サラは思わず声を漏らした

(これ、良質な肉を小麦粉で包んで揚げたのね! それにより、良質な肉の旨味が、この中にギュツと詰まってるんだわ!!)

サラはそう思いながら、一個目のメンチカツを無我夢中で食べた

そして、二個目を同じように四分分した時

(確か、あの料理人はソースっていうのと、この黄色い果実を掛けると美味しいって言ってたわね)

と明久の言葉を思い出した

そしてサラは、机に備え付けられていたソースと、皿に乗っていたレモンの汁を掛けた

それを、フォークで口に運んだ

その直後、サラは再び驚愕した

(凄い! このソースっていう様々な素材の旨味が凝縮されたので、更に美味しくなった! それに、少しくどい位だった脂が、酸味の強い果実の汁でさっぱりするわ!)

その味は、サラの予想を良い方向に裏切った

そしてサラは

(メンチカツは、これで完成した料理なのね!!)

と思った

そしてすぐに

(こんなの、一皿で終われる訳がないわ!)

と思った

だから、キッチンの方に顔を向けて

「メンチカツおかわり!!」

と言った

すると、明久がひよいと顔を覗かせて

「はい、分かりました!」

と言った

その後サラは、メンチカツを夢中で食べ続けた

そして、入店して数十分後

「ふう……ご馳走さま」

と言った

すると、店長が姿を現し

「どうぞ」

と一つの箱を、サラの前に置いた

それを見たサラは、店長を見て

「これは？」

と問い掛けた

すると、店長は

「こちらは、メンチカツサンドです」

と言った

そして続けて

「お客さんの食いつぷりが気持ちよくて、思わず作ってしまいました

……ウイリアムさん、帰る時には必ずこちらも注文していたんです」

と語った

それを聞いたサラは

「でも、私……手持ちがそんなに……」

と首を振った

すると店長は、ニカリと笑みを浮かべて

「なに、今日はウイリアムさんの奢りつてことにしておきますよー！」

と言った

それを、キッチンで聞いていた明久は

(ウイリアムさんの知らぬ間に、ウイリアムさんの財布がピンチに

……)

と苦笑いを浮かべた

それを聞いたサラは、ゆっくりと紙箱の入ったビニール袋を受け取

り

「そういうことなら、貰うわ」

と言った

そして、サラが立ち上がると

「あ、そういえば、ウイリアムさんは……」

と店長がサラに問い掛けた

その理由は、この三年程来店していなかったからだ
すると、サラは

「三年前に、死んだわ……大往生だったわ」

と言った

それを聞いた店長は

「そうですか……」

と僅かに肩を落とした

すると、サラが

「でも、最後まで書いてた日記には、ここの料理が食べられないのが、
悔しかったみたいよ」

と微笑みながら言った

そして、店長に

「美味しかったわ、また来るわね」

と言った

それを聞いた店長は、頭を下げながら

「はい、またのご来店をお待ちしています。また7日後にいらしてください」

と言った

それを聞いたサラは、ドアを潜ったのだった

すると、一連の光景をカウンター席で見っていた老賢者が

「言うならば、メンチカツ二世だな……」

と呟いた

それを聞いた隣の席の侍は

「メンチカツ二世？」

と首を傾げた

どうやら、意味が分からないらしい

すると、老賢者は

「なに、言った通りじゃよ」

と言った

そして、店長に

「マスター、ビールおかわり」

と言った

それを聞いた店長は

「はい、ビールですね」

と言つて、奥に消えた

その時になつて、侍は

「ああー、メンチカツ二世か!!」

と納得した様子で声を上げた

そして、心中で

(ここ数年見ていなかったな、メンチカツの奴は)

と思った

そして、ビールを持ってきた店長と、キッチンで料理を作っている

明久を見て

「時は巡る……か」

と呟いたのであった

場所は変わり、廃坑道

ドアを潜ったサラは、後ろを振り向いた

すると、ドアはスツと消えた

それを見たサラは

「異世界食堂……か」

と言つて、その場から離れた

そして、ビニール袋に入った紙箱を見下ろして

「これが、ウイリアム・ゴールドの秘宝……か」

と昔を思い出したのだった

サラが幼かった頃、サラが隠した秘蔵の焼き菓子クッキーをウイリアムが見

つけて食べてしまったのだ

それをサラが怒ると

『俺には、どんなに隠しても見つけてしまうぞ！ 特に、旨い物はな

！』

と自慢気に言っていたのだ

そしてサラは、メンチカツの味を思い出し

「まさに、ウィリアム・ゴールドらしい秘宝だわ」
と言ったのだった

二皿目 モーニングセット

「ではな、店長。明久よ」

「はい、またのお越しを」

「ありがとうございます」

赤いドレスを着た人がドアから出ると、店長と明久の二人は深々と溜め息を吐き

「明久、お疲れ」

「お疲れさまでした、店長」

と互いに労った

そして、店内を軽く掃除して

「あー……：食器類の片付けは、明日にするか」

「ですねえ……：あー、疲れた」

と厨房奥の、エレベーターに向かった

その時、明久が

「あ、コーンスープが残ってたんだ」

とコンロに置かれた鍋の中を見た

すると店長が

「まあ、明日の俺達の朝飯だな」

と言った

そして店長は、厨房とフロアの電気を消してから

「ほんじゃあ、お疲れさま」

と言って、エレベーターに乗ったのだった

この直後だった

実は、店の入り口が一度開いていたことを、二人は知らなかった

そして、翌日

洋食のねこやの唯一の定休日の日曜日

明久と店長の二人は、店の上階の自室からエレベーターで店に降りた

そして、厨房に入った時

「うおっ!?!」

と店長が驚いた

何せ、厨房の床で一人の少女が寝ていたからだ

その少女を見て、二人は

「この子、何処から……」

「と言つても、答えは一つですよ。店長」

と小声で会話していた

その時、その少女が目覚めて起き上がった

その拍子に、その少女が被っていた帽子が落ちた

すると、その少女の両側頭部には、羊を彷彿させる角があった

(こりゃあ、完全に向こうの人だな)

(ですね……魔族ってやつかな?)

二人が小声で話していると、その少女も意識がはつきりしたらしく

「わあ!? 帽子! 私の帽子!」

店長と明久の二人を見て、慌てて落としたりした帽子を探し始めた

すると店長が、帽子を拾い

「探し物は、これかい?」

と手渡した

そして、少女が帽子を被ると明久が

「それで、君の名前は?」

と問い掛けた

すると少女は、帽子を少し目深に被りながら

「……アレッタです」

と名乗った

その後三人は、フロアーに移動

アレッタを座らせて、話を聞くことにした

そして要約すると、アレッタは明久が察した通りに魔族

正確には、半魔族だった

ただそれは、なんでも約70年前に起きた大戦以降はある一定数居るらしい

しかし、土曜に開くドア向こうの世界では、蔑みの対象らしい

だから、彼女のような半魔族は人里離れた山奥等に、集落を作って

住む

しかし、彼女の両親が流行り病に掛かって他界

頼れる人物が居なかった彼女は、その集落から出て街に入った

しかし、中々働く場所が見つからない

そして、両親が残したお金も無くなり、ある廃屋で寝泊まりしていたら

「ここに入るドアを見つけた……と」

「は、はい！」

アレツタの話聞き終えた店長は、イタズラを含めてリモコンで直上の電気を点けた

それを見た明久は

「あ、リモコンでも点いたんですね」

と店長に問い掛けた

それに、店長が答えている間アレツタは

(どうしよう……まさか、魔術師様の家に入ってしまったなんて！)

と内心で慌てていた

実際は料理店なのだが

(しかも、お鍋の中の黄色いスープも全部飲んじゃったし！ どうなるんだろ、私!?)

とグルグルと考えていると、店長と明久が

「まあこの際、コーンスープはいいとしてだ」

「僕達も、お腹空いてますしね」

と話していた

そして、少しすると

「アレツタさん……だったか？」

とアレツタに視線を向けた

「は、はい！」

呼ばれたアレツタは、体を大きく震わせた

それを見ながら、店長が

「朝飯、食ってくかね？」

と問い掛けた

するとアレツタは、キョトンとして

「で、でも……」

と言葉を濁した

すると、明久が

「僕達、朝食がまだなんだ。それで、僕達だけ食べるのも気が引けるしね……」

と言った

それを聞いても、アレツタは躊躇っていた

すると店長が

「タダだが、どうする?」

「いただきます! はっ!」

店長の問い掛けを聞いて、アレツタは即答した

それを聞いて、二人は笑みを浮かべながら立ち上がり

「それじゃあ、待ってな」

「すぐに作るからね」

と言つて、厨房に入った

そして二人は、手早く料理を作り始めた

それを見たアレツタは

「凄い……この方達、料理人なんだ……」

と感嘆した様子で、呟いた

そして、数十分後

「ほいよ」

「ねこや特製のモーニングセットだよ」

と二人が、作った料理を持ってきた

メインはプレーンなオムレツだ

そして、付け合わせにサラダとスープ、パンが付いている

それを置くと、二人は座り

「それじゃあ、食べようか」

と言った

それを聞いて、アレツタは

「崇高なる我等が魔族の神よ……」

唱え始めた

それを聞いて、二人が首を傾げると

「わああ!? 何でもないです!」
と慌てた

だが、内心では

(この方達……私が魔族と知っても、差別しない?)

と首を傾げていた

すると明久が

「ほら、冷めない内に食べて」

と薦めた

薦められたアレツタは、スプーンを持つと

(はしたないかもしれないけど、真ん中から食べよう)

とオムレツの真ん中に、スプーンを刺した

するとスプーンは、何の抵抗もなくオムレツに埋まった

(わっ! まるで、空気みたい!)

そう思いながらも、アレツタはスプーンでオムレツを掬った

そして

(無くならないうちに、食べないと)

と思つて、口に運んだ

そして、二度目の驚愕を感じた

「なに、これ!」

それは、アレツタが食べたことのない味だった

フワリとしながらも、濃厚な味わい

だというのに、クドくない

まさしく、幾らでも食べられる

それだった

そして何よりも、暖かかった

だから、アレツタの目から涙を流した

暖かい料理は、久しぶりだった

すると、アレツタが泣いていることに気づいた二人は

「うお、どうした!」

「ごめん、嫌いな食物が混じってた!？」

と慌てて問い掛けた

すると、アレツタは

「違います……こんな暖かい料理が……久しぶりで……」

と泣きながら、語った

それを聞いた二人は、顔を見合わせて

「それは良かった……」

「お代わり、いるかい？」

と問い掛け、アレツタが頷いたので、明久は厨房に入ったのだった

そして、数十分後

「ごちそうさまでした」

と三人は言った

すると、店長が

「なあ、アレツタさん……良ければ、うちで働かないか？」

と問い掛けたのだった

面接と研修

「ここで、働かせてもらえるんですか!？」

店長の言葉を聞いて、アレツタが驚いた表情で問い掛けた
すると、店長は

「ああ、さつき言ってたろ？ 仕事を探しにきたけど、まだ見つからないって」

と言った

それを聞いて、アレツタは無言で頷いた

それを見て、店長が

「ここは、分かっているだろうが料理屋でな。今は、俺と明久の二人で料理を提供してる。だが、二人だと何かと厳しくてな……」

と説明を始めた

その説明を、アレツタは真剣に聞いている

「働くのは、七日に一度。就業時間は、朝早くから夜遅くまで……そうだなあ……一日で、銀貨十枚でどうだ？」

「ええ!? そんなに!？」

店長が告げた金額を聞いて、アレツタは驚愕した

異世界では、形は様々だが、お金は三種類のみだ

それが、銅貨、銀貨、金貨である

日本円にすると、銅貨が一枚約百円

銀貨が一枚約千円

金貨が、一枚約一万円に相当する

なお、店長が提示した金額は、アレツタからしたら破格の給料だった

彼女のような半魔族では、安く雇われるのがザラだった

酷い条件では、一日働いて銅貨二枚というのもあった

それらと比べたら、店長が出したのは余りにも破格だった

「でも、私なんか……」

とアレツタが躊躇っていると、店長が

「ただし、かなり急がしいからな。あ、あと一日三食出すぞ」

「やります！ はっ!?」

食べ物に飢えていたアレツタは、店長の言葉を聞いて即答していた
それに笑みを浮かべつつ、店長は

「やるなら、さっきみたいなの泣き顔はダメだぞ？」

と念押しした

するとアレツタは、感極まったらしく、涙を滲ませながらも笑みを
浮かべて

「はいー」

と返答した

それを聞いた店長と明久は、立ち上がり

「よろしくな、アレツタさん」

「これからよろしくね」

と握手した

そして店長と明久は、アレツタを軽く見て

「まずは」

「衛生……ですね」

と言った

今のアレツタだが、はつきり言って汚れている

料理店としては、相応しくないだろう

そして、少しすると二人が

「買い物」

「シャワー」

と互いを指差して、頷いた

すると、明久が

「アレツタさん、着いてきてください。シャワーの使い方、教えますか
ら」

と言った

その間に店長は、財布を取りに行った

そして数十分後、身綺麗になったアレツタが、ウェイトレス姿で
立っていた

なお、彼女が着ていた服は洗濯中だ

ウエイトレス姿のアレッタを見て、二人は

「サイズは問題無さそうだな」

「靴は、大丈夫？ 小さくない？」

と言った

するとアレッタは

「はい、大丈夫です！」

と元気よく答えた

それを聞いた二人は、頷いてから

「それじゃあ、これから研修を行うからな。この研修中も給料は出るから、しつかりな」

「最初は、僕がお客さん役するから。頑張ってね」

と言った

するとアレッタは

「よろしくお願いします！」

と言った

それから数時間後、アレッタの研修は問題なく終了

アレッタの採用が決まったのだった

そして店長と明久は、アレッタが扉を開けて外に出たら

「それじゃあ、今度からよろしくな」

「最初は六日後だけど、間違えないでね」

と言った

それを聞いたアレッタは、頭を下げながら

「よ、よろしくお願いします！」

と言った

そして六日後、アレッタが宿にしていた廃教会内に、ドアが現れた

それを見たアレッタは、小さく

「よしっ」

と気合いを入れてから、ドアを開いた

そして

「おはようございます！」

と元気よく挨拶した

すると、机を拭いていた二人が振り向いて

「おはよう」

「今日からよろしくね」

と口々に言ってきた

「はい！ よろしくお願います！」

二人に再度頭を下げると、アレツタは明久に案内されたロッカー
ルームに向かい、着替えた

そして二人と一緒に、店の準備を終わらせ、お客が入るのを待つて
いた

その時ドアが開き、客が入ってきた

それを見たアレツタは

「いらっしやいませ！ ねこやにようこそ！」

と元気よく、接客を始めたのだった

三皿目 トウフステーキ

「いらっしやいませ！・洋食のねこやにようこそ！」

アレツタはそう言いながら、訪れたお客達を出迎えた
訪れたお客は様々で、色々な料理を注文していく

そんな中、一人のお客が来店した

森に住む種族、エルフの女性だ

そのエルフの女性

ファルダニアは、来店すると

「ここは……」

と不思議そうに、店内を見回した

するとアレツタは

「ここは、洋食のねこやです！」

と説明した

それを聞いたファルダニアは

「ねこや？」

と首を傾げた

するとアレツタは

「はい！・料理をお出しするお店です！」

と言った

そして、席に案内

メニユーを手渡した

それから数分後

「メニユーは決まりましたでしょうか？」

とアレツタが問い掛けた

すると、ファルダニアは

「卵も牛乳も肉も魚も使わない料理、あるかしら？」

と問い掛けた

それを聞いたアレツタは、困惑した様子で

「し、少々お待ちください！・確認してきます！」

と言って、キッチンに向かった

なぜ、ファルダニアはそんな注文をしたのか

それは、彼女がエルフだということが挙げられる

エルフというのは、森で動物達と共存する種族だ

だからエルフたる彼女からしたら、動物は獲物ではなく森で共に住む仲間

そんな仲間を殺して食すというのは、エルフからしたら野蛮な行為という考えだった

では、そんなエルフ達の食生活はというと、基本的には自分達が育てた農作物と森に自生している野草やキノコ等を調理して食べるのだ

だから、先のような注文をしたのだ

しかも彼女、ファルダニアは扉が出た森のエルフの中では、随一の料理研究家としても知られている

そんなファルダニアからしたら、(この世界の)人間の料理というのは、未熟に過ぎた

そんな彼女は、少しして

(ダメそうだし、帰ろうかしら……)

と思った

その時、アレツタと一緒に店長と明久がやってきて

「注文承りました。こちらにお任せという、形でよろしいですか?」

とファルダニアに問い掛けた

それを聞いたファルダニアは、思わず立ち上がり

「ねえ、分かってるの? 私は、動物系は一切口にしないし、少し入っても分かるからね!?!」

と店長達に食って掛かった

すると明久は、微笑みを崩さず

「ええ、大丈夫ですよ。流石にスープ等は出せませんが、その他でしたら、問題なく提供出来ます」

と答えた

明久の自信満々な表情を見て、ファルダニアは

「そう……分かったわ」

と引き下がった

それを聞いた店長達は、恭しく頭を下げながら

「承りました、少々お待ちください」

と言つて、下がった

料理が来るまでの間、ファルダニアは周囲を見回した

ねこやの料理を知るためである

(基本的には、知らない料理ばかりね……ただ、どれもこれも動物を材料に使つてる……)

動物を材料にしているだけでファルダニアからしたら、大きな減点だった

しかし、食べている客は誰も彼もが幸せそうに食べている

(本当に、動物を使わないで作れるの?)

とファルダニアは疑っていた

その考えが覆されたのは、それから十数分後だった

トレイを持ったアレツタが現れて

「お待たせしました! トウフステーキです!」

と机に置いた

出された料理を見て、ファルダニアは

「トウフステーキ……?」

と驚いた

ファルダニアが知る限り、ステーキは動物の肉を焼いた料理だったからだ

しかし、提供されたトウフステーキは違った

「はい。こちらのポンズソースを掛けても、美味しいですよ」

アレツタはそう説明すると、今度はご飯が盛られた皿を置いて

「では、ごゆっくり」

と頭を下げながら、下がった

ファルダニアはアレツタを見送つてから、鉄板で焼かれている豆腐を見て

(ステーキつて、動物の肉を焼いた料理の筈よね……なのに、これは違う……多分、この白いのがトウフつて食材かしら?)

と考え始めた

トウフステーキの見た目は肉厚で、ボリユームが有るように見える表面には焼き目があり、香ばしい匂いがしている

その匂いを嗅ぎつつ、ファルダニアはフォークとナイフを持って

(問題は、味よ)

とフォークを刺した

その瞬間、驚いた

(なにこれ！ 柔らかい!? 見た目と違って、簡単にフォークが刺さった！)

豆腐に刺したフォークは、抵抗なく簡単に刺さった

その柔らかさを考慮しつつ、今度はナイフで適度な大きさに切った

そして、少し持ち上げると

(本当に柔らかいのね……こんなに震えるなんて……)

と思った

そしてファルダニアは、意を決して口に入れた

その直後、ファルダニアの口の中に熱さが広がった

だがそれと同時に、口の中に濃厚な味が広がった

「なにこれ!?!」

その濃厚さに、ファルダニアは思わず声が出た

味としては、かなり淡泊なほうだろう

しかし、素材の濃厚な味わいが口の中に一気に広がった

(この料理、シンプルだけど凄い美味しいわ!)

ファルダニアはそう思うと、また豆腐を口に運び、続けてご飯を口にした

(このライスというのは、灰かに甘いわ……料理の引き立て役になるのね……)

ファルダニアはそう思いながら、水を飲んだ

そして、また豆腐を食べようとした時

(そう言えば、このポンズソース……だったかしら? これを掛けると、更に良いって言ってたわね)

とアレツタの言葉を思い出した

だからファルダニアは、横に置いてあった銀の器を持ち上げて、中の黒い液を満遍なく掛けた

すると、まだ熱かった鉄板に液が触れて、パチパチと弾ける音が響いた

それと同時に、先ほどまでとは違う良い匂いが鼻腔をくすぐったその匂いに、ファルダニアは

(この匂い……酸味が強い果実を使ってるのかしら?)

と内心で首を傾げながら、一口サイズに豆腐を切った

そして見てみると、先ほどまで白かった面が僅かに黒くなっていたそれは、先ほど掛けた液の色

(どんな味になっているのかしら……)

ファルダニアはそう期待しながら、豆腐を口に運んだ

そして、驚いた

(凄い！ 淡泊だった味が、味わい深くなったわ！)

今ファルダニアの口の中には、様々な味が広がっていた

先ほど匂いで分かった、酸味の強い果実

それだけでなく、ソースのベースとなっているのだろうしよっぱい味

なによりも、根幹となっているのは特徴的な潮の香りの素材

それらの味わいが一気に口に広がって、ファルダニアに食欲を増進

させた

気が付けばファルダニアは、無我夢中で料理を口に運び続けた

そして、食べ始めて十数分後

「いちそうさま」

とファルダニアは言いながら、フォークとナイフを置いた

すると、店長が近寄り

「如何でした?」

と問い掛けた

すると、ファルダニアは

「悔しいけど、美味しかったわ」

と素直に答えた

その答えに、店長は満足そうに頷いた

その直後、ファルダニアは店長をビシツと指差し

「でも、いい!?! 私がこのまま、負けるだなんて思わないで! 必ず、貴方達より美味しい料理を作ってみせるわ!!」

と言った

どうやら、負けたままというのは嫌なようだ

言いたいことを言ったからか、ファルダニアは満足そうに鼻を鳴らした

それを見た店長は

「分かりました……我々も、負けぬように常に精進しましょう」

と答えた

すると、明久も同意するようにカウンター向こうから親指を立てていた

するとファルダニアは、笑みを浮かべて

「それじゃあね」

とねこやから去った

この後、ファルダニアは亡くなった母親を思い出しながらねこやの料理を振り返り、料理研究の旅に出ることになるのだった

四皿目 ビーフシチュー

「ありがとうございましたー!」

とアレツタは、最後のお客を見送った

その時、今が夜だと気付いた

(あ、お月様だ……お店の中はいつも明るいから、時間の感覚が分からないや……)

アレツタ達が住む世界では、電気は普及していない

だから明かりはランプ等が一般的で、夜になればランプが有っても薄暗いのだ

アレツタが夜空を見上げていると、明久が顔を出して

「アレツタさん、今のが最後のお客さんかな?」

とアレツタに問い掛けた

するとアレツタは、ドアを閉めながら

「あ、はい。そうです!」

と明久に答えた

すると、明久の後ろに店長が現れて

「だったら、そろそろ『最後の客』が来るから、テーブルの上を片付け
といてくれ」

と言った

それを聞いたアレツタは、首を傾げながら

「最後のお客様……?」

と言った

それを聞いた明久が

「大食いのお客でね。他のお客との兼ね合いもあって、別枠で来店し
てもらってるんだ」

「なるほど……?」

明久の言葉を聞いて、アレツタは納得の言葉を言ったものの、困惑
している様子だった

すると、キッチンで鍋の中をかき混ぜていた店長が

「すげーよな。この鍋、全部食っちゃうんだぜ?」

と笑いながら言った

それを聞いたアレツタは、驚いた表情で

「全部!？」

と声を上げた

そして、何か気になったのか

「そう言えば、別枠で来店してもらってるって言ってましたよね？」

と問い掛けた

すると、明久が

「あ、その約束をしたのは、先代の店長なんだ」

と一枚の写真に、目を向けた

その写真には、一人の男性が写っていた

白髪と白い髭が特徴の男性だった

「先代のマスター!？」

「おう、俺の爺さんだな」

アレツタが驚くと、店長が笑いながらそう言った

「爺さんのモットーはな、飯屋は飯が旨ければそれでいい。例えそれが、洋食だろうが、和食だろうが、中華だろうが関係ない。だから、あの扉が異世界に繋がったのかもしれないな」

店長は鍋の中を確かめながら、そう言った

その時だった

カウベルが鳴り、来客を告げた

「いらっしや……」

キッチンから顔を出した三人は、来店したお客を見て固まった

何故ならば

「くっくっく……来たぞ、店主達!」

そこには、全裸の美女が居たからだ

三人はどう対処していいか分からず、固まっていると

「失礼シマス」

と開いたままだった扉から、新たに魔族らしい人物が入ってきた

そして、美女に

「女王ヨ、コチラへ」

と外を指し示した

「なんだ、バルログ」

その美女は問い掛けながらも、魔族
バルログに請われて、一度外に出た
すると

「女王ヨ、人前デハ服ヲ御召シナラネバ礼節ヲ欠クトアレホド」

「おお、そうであったわ」

と会話が聞こえてきた

そして、数分後

「改めて、来たぞ。店主達よ」

と今度は、赤いドレスを着て現れた

その身からは、凄まじい圧が放たれている

それを受け流しつつ

「いらっしやいませ」

「ご注文は？」

と明久と店長は問い掛けた

すると女王は

「決まっておろう。妾が頼むのは、常に一品のみよ」

と言った

それを聞いた二人は、笑みを浮かべて

「ですよね」

「では、お待ちください」

とキッチンに入っっていった

それを見送った女王は、適当な椅子に座った

それを見たアレツタは、キッチンに続く入り口の影から女王を見て
いた

女王のスタイルは、はつきり言っってグラマラスだった

出る所は出て、引っ込む所は引っ込んでいる

アレツタからしたら、羨望の的だった

すると、視線から気付いていたのか

「その娘」

と呼ばれた

「は、はいー!」

呼ばれたアレツタは、小走りで女王に近づいた
すると女王は、アレツタの頬を摘まんで

「料理はまだか?」

と問い掛けた

その問い掛けに、アレツタは

「さひほほ、ひゅうもんひはははひでふよー!」

と言った

どうやら、頬を摘ままれているために、上手く喋れないようだ
それを聞いた女王は

「ふむ、それもそうか」

とアレツタの頬から、手を離れた

その隙に、アレツタは

「か、確認してきますー!」

とキッチンに駆け込んだ

そして、キッチンに立っていた二人に

「マスター、明久さん……本当に、あのお客様が
大食いのお客様なんですか?」

と涙目で問い掛けた

すると、二人は笑いながら

「そうだよー」

「粗相して、アレツタが食べられないようにな」

と言った

店長の言葉に、アレツタは

「え、ええ!?!」

と驚いた

だが、店長は笑って

「冗談だよ」

と言った

そのタイミングで、店が揺れた

するとアレツタが

「わ、地震ですか？」

恐る恐ると、周囲を見回した

すると、明久が

「いや、多分お腹が鳴ったんじゃないかな？」

と言った

それを聞いたアレツタが、驚いていると

「ほれ、出来たから、持って行ってくれ」

と店長が、皿を置いた

それをトレイに乗せて、アレツタはフロアに行き

「お待たせしました、ビーフシチューです」

と女王の前に置いた

それを見た女王は、自身の体を抱き締めながら

(ああ……この匂いこそが、妾を魅了する……)

と、ビーフシチューの匂いを思い切り吸い込んだ

そして、スプーンで一掬いし口に運んだ

その直後

「美味しい!!」

とその華奢な体からは想像も出来ない声量で、店を震わせた

それに驚いたアレツタが座り込んでみると、背後に明久と店長が現れて

「いやあ、相変わらずだなあ」

「確かにな」

と言った

そんな二人に

「あのビーフシチューというのは、どんな料理なんですか？」

と問い掛けた

すると、二人が

「そうだな……ねこや自慢の一品、ビーフシチュー」

「簡単に言えば煮込み料理だけど、野菜が苦手な子供も簡単に食べられる料理だ」

と言った

それを聞いたアレツタは

「私は食べられますよー!」

と顔を赤くしながら、反論した

そんなアレツタに、二人は笑い

「そして、ビーフシチューたる所以。それが、牛肉だ」

「食べやすいように、一口サイズに切っており、それを長時間煮込むことにより、口に入れただけでホロホロと崩れる……」

と説明した

そのタイミングで、女王が口から火を噴いた

それを見たアレツタは驚き、店長は苦い表情を浮かべ、明久は消火器を掴んでいた

そして食べ始めて十数分後、女王は綺麗に食べ終わった

そして、立ち上がった

それを見たアレツタは

(あれ、お代わりはしないのかな?)

と首を傾げた

すると女王は、店長と明久に近寄り

「本当ならば妾は、鍋一杯の金貨を渡したいんだがな」

と言いながら、胸元から金貨を二枚出して手渡した

それを店長が受け取ると、明久が鍋を指し示して

「どうぞ、お持ちください」

と言った

それを聞いた女王は、鍋に歩み寄り

「ふむ……よし」

と満足そうに頷いた

中が一杯なのを確認したようだ

そして、蓋を閉めると

「では、貰っていくぞ」

と言って、寸胴鍋を軽々と持ち上げた

それを見たアレツタが驚くが、女王はそんなアレツタを見て

(七日前の迷い子か……)

と思った

そして、一度鍋を置くと

「頑張って働くがいい、娘よ」

と言つて、アレツタの頭を撫でた

「は、はいー!」

アレツタが頷くと、女王は鍋を再び持ち上げて退店した

その女王の正体は、かつて攻め込んできたエルフが率いる大軍を燃やし尽くした、伝説の六柱の龍

その一柱

通称、赤の女王なのだった

五皿目 おにぎり

赤の女王が帰って、ホールを片付けた後

「お疲れ」

「お疲れ様です」

「お疲れ様でした!」

三人は、そのホールに集まった

そして、店長と明久が

「今日一日お疲れ」

「どうだった?」

とアレツタに問い掛けた

するとアレツタは、一日を振り返り

「とつても……疲れました」

と言った

それを聞いて、店長は大笑い

明久は

「だろうね」

と苦笑した

だが、アレツタは

「でも、とつても楽しかったです!」

と言った

それを聞いて、二人は

「そうか……」

「それは、良かった……」

と微笑みを浮かべた

すると店長が、指を鳴らして

「つと、そうだった。忘れない内に渡さないとな」

と言って、封筒をアレツタに手渡した

「これは、今日の給料だ」

「ありがとうございます!」

封筒を受け取ったアレツタは、頭を下げた

すると、今度は明久が

「それと……はい、これ」

と紙袋を手渡した

「これは？」

「余ったご飯で作ったおにぎりと、味噌汁が入ったポット。お腹が空いたら、食べてね」

アレツタの問い掛けに、明久はそう言った

おにぎりが何か分からず、アレツタは僅かに首を傾げたが、時間が無かったので、すぐに着替えて帰宅した

そして、自分が住んでる廃教会の窓から星空を見上げて

「お父さん、お母さん……私、ねこやっていう素敵な料理店で、働くことになりました」

と語りだした

それは、死に別れた両親への報告だった

「店長さんと明久さんは、凄く優しいし、凄く美味しい料理を作る凄い人達なんだ……」

アレツタはそう言いながら、二人を思い出した

二人は優しく、アレツタに様々なことを教えた

そして

「次も頑張るから、見守っててね。お父さん、お母さん……」

そこまで言うと、アレツタはあることを思い出した

「そうだ。体を洗わないと」

それは、以前の研修の時に明久が

『僕達料理店はね、体を綺麗に保つことが大切なんだ。だから、毎日体は洗ってね』

と言つて、アレツタに石鹸を与えたのだ

それを思い出したアレツタは、近くの井戸から汲んだ水を貯めてある、水瓶から水を木桶に汲み、体を洗い始めた

アレツタとして驚いたのは、明久から渡された石鹸が、自分の世界の石鹸とは段違いで泡立つことだった

「凄い泡……それに、いい匂い……」

アレツタはそう言いながら、全身を隈無く洗った
なお次いでに、服も洗濯し干した

「これで良しー!」

アレツタがそう言った時、お腹が鳴った

「うっ……食べちゃおうかな……」

と言ってアレツタが見たのは、明久から手渡された紙袋

「確か……おにぎりって言ってたよね……」

アレツタはそう言って、紙袋の中から銀色の塊

アルミ薄に包まれたおにぎりを三個と、銀色のポットを取り出した
そして、何時もの式句を述べてから、ポットの中を器に入れた

「あ……これ……」

それは、ねこやで提供している味噌汁

具は、あのファルダニアに出した豆腐だった

それを見たアレツタは、ゆっくりと味噌汁を飲んだ

(暖かい……体がポカポカする……)

味噌には保温効果が有り、飲めば体を内側から暖める

そのことをアレツタは知らないが、ゆっくりと一杯目の味噌汁を飲
み干した

そして二杯目の味噌汁を器に注ぎ

「えっと、これかな……」

と言って、ひとつ目のおにぎりのアルミ薄を開けた

中から出てきたのは、お米の塊だった

上の部分からは、焼いてある魚

鮭が見えている

「これが、おにぎり……」

アレツタはそう言うのと、一口食べた

「わ……焼いたお魚って、こんなにライスに合うんだ……」

焼いた鮭が非常に合い、アレツタは頬張るように食べ始めた

途中で喉に詰まったが、それは味噌汁で事なきを得た

そうしてひとつ目を食べ終わると、アレツタは二つ目を開けた

二つ目のおにぎりは、ひとつ目とは違う具

解した梅干しが、見えていた
梅干しを知らないアレツタは

「なんだろう、これ……」

と首を傾げた

だが

「でも、店長と明久さんが、食べられない料理を出すわけがないよね」と言つて、かぶりついた

次の瞬間、アレツタは梅干しの酸っぱさに驚いた

「び、びつくりした……けど、なんだろう……」

最初は、梅干しの酸っぱさに驚いたアレツタだったが、口の中には唾が溢れてくる

そして何より、もっと食べたいと思わせる

だからアレツタは、梅干し入りのおにぎりも頬張るように食べた
そして、最後のひとつ

「なんだろう、これ……あの黒いのも無いし、茶色い……」

それは、焼おにぎりだった

なお、アレツタが言った黒いというのは、海苔のことである

アレツタは、一通り焼おにぎりを見ると、一口食べた

すると口の中に、芳ばしい味が広がっていった

(凄い……まるで、焼いたライスで包んであるみたい……)

最後の焼おにぎりも、アレツタは食べ終わった

そして、寝床に寝転がり

「ねこやで働き始めたから、少しは余裕が持てるけど……やっぱり、仕事は探そう」

と言つて、眠りに就いたのだった

ある商会の老人と孫

老人

トマスⅡアルフェイドは、小麦を中心とした様々な食材を扱ってきたアルフェイド家を繁栄させた人物だ

店

アルフェイド商会の主力商品は、小麦を使った麺

しつかり乾燥させれば、長期保存が出来る商品だが、味付けが簡素なために人気が無かった食材だ

庶民の食べ物とすら呼ばれ、位置付けられた麺を王侯貴族の主食にまで押し上げたのが、正にトマスだった

その秘訣は、トマスが考案し発売した数々のソース

乳と小麦粉で作る庶民的なソースに、王国ではあまり知られていない魚醤を交ぜ、キノコを炒めて作るソースから始まり、王国西の港街の名物たる魚の卵の塩漬けを大胆に使ったソース

先の塩漬けとガランの粉を混ぜて辛味を増したソース等々

それらアルフェイド印のソースは、それまで単純な味付けしかなかった麺の地位を大きく向上させたのだ

それにより、歴史的な長かつたが小規模な商会だったアルフェイド商会は、一代にして王国屈指の大商会にまで発展

その立役者たるトマスは、《料理発明の天才》と持て囃されたしかし、トマスは自覚していた

自身が天才などではなく、ただ運が良かっただけなのだ
実家の小麦を入れる倉庫の奥

その最奥にて、トマスがたまたま見つけたのだ

約30年前からトマスは、トマスは28日に一度は客としてではなく、商人として異世界食堂

洋食のねこやに赴いていた

今のトマスは、もはや商人としては隠居している
しかしトマスには、先代の店長との盟約があった

互いの店が存在する限り、《取り引き》を続けていく、と

そして今日、トマスは店に行く準備をしていた

「……ふむ、よし」

長年愛用している数多く入る背負い袋

その中に、店長から頼まれている数多の品々が入っていることを入念に確認し、トマスは一言漏らした

同じドアが使えるのは、一回毎に一度だけ

一度開けて入ったら、外からは決して開けられない

そして一度入って出たら、ドアは消える

それが、ドアのルール

それ故に、トマスは入念に洩れが無いかを確認してから店に行く準備を終えたトマスは、今回初めて連れていく人物

自身の孫たる、シリウスⅡアルフェイドに顔を向けて

「よし、行くとしようか。シリウス」

と言った

するとシリウスは、奥にあるドアを見て

「このドアが、異世界に……本当なんですか？ お爺様」

と疑問の言葉を発した

なおこのシリウスが、次代のアルフェイド商会の後継者だ

シリウスの言葉に、トマスは

(まあ、無理もないか)

と思っていた

何故ならば、異世界に繋がるドアとなると、長寿のエルフとの出会いすら超えるお伽噺の類いだ

トマスすら、初めて見た時は信じられなかった程だ

「行けば分かる。なに、大丈夫だ。異世界とは言っても、然程儂らの世界と変わらん。何より、この先にあるのは儂……否、アルフェイド商会の恩人と言すべき店だ」

そう言うと、トマスは真鍮製のドアノブを回した

キッチンと手入れされているドアノブは、何の抵抗もなく回った

そして、トマスにとっては聞き慣れたカウベルの音が鳴りながら、ドアがゆつくりと開いていく

「恩人の、店……？ 一体、何の店なんですか？」

入店しようと足を一步踏み入れたタイミングで、シリウスはそう問
い掛けた

すると、トマスは

「異世界食堂……料理屋だ」

と言って、シリウスを伴って入店した

そうして少年は、料理を知る

六皿目 ミートソーススパゲツテイ

「ここは……」

「ここが、異世界食堂さ……さ、座るぞ」

シリウスが呆然としていると、トマスがそう言った

そこに、アレツタが近寄り

「いらっしやいませー。ねこやにようこそー」

と出迎えた

そのアレツタの姿を見て

「ん？ 君は……」

とトマスは、僅かに固まった

そこに、店長が現れて

「新しく雇った給仕ですよ。トマスさん。お好きな席に座ってください

い」

と言った

すると、遅れて明久が現れて

「こちら、預かりますね」

と言って、トマスが持っていた袋を預かった

それを見たトマスは、興味津々といった様子で見回すシリウスに

「お前ならば分かるだろ、シリウス。ここが、異世界だとな」

と言った

それを聞いて、シリウスも

「はい……見たこともない物が、多数……」

と呟いた

シリウスが見ていたのは、電気やラジオだった

そこに、店長が現れて

「どうぞ、今月の売り上げです」

と言って、トマスの前に持ち運び式の金庫を置いた

「ん」

トマスは短く返答すると、その金庫の中を確認した

(ふむ……先月より、上がってるか……)

トマスは目算で売り上げを確認すると、店長に顔を向けて
「では、何時も通りに」

と言って、その中から数枚取った
それを見た店長は、金庫の蓋を閉めると奥に消えた

それと入れ替わるように、トレイを持ったアレツタが現れて
「お水とメニューをお持ちしました」

と差し出した

しかしトマスは、コップは受け取ったら

「すまんが、頼む物は既に決まっているんだ」
と言った

そして

「僕はミートソーススパゲッティの大盛りを」

と注文した

「シリウスも、それでいいな？」

「あ、はい！」

トマスが問い掛けると、シリウスは背筋を伸ばして返答した
それを聞いたトマスは

「では、ミートソーススパゲッティの大盛りを二つと、食後にコーヒー
を一つ」

と注文した

それを聞いたアレツタは

「はい、承りました！」

と言って、奥に入ってしまった

それを見送ると、トマスは

「さて、シリウス。ここではな、様々な料理が出てくる」
とシリウスに語りかけた

「様々な料理……」

「うむ。そのどれもが、とてつもなく美味しい。よく勉強しなさい」

トマスの言葉に、シリウスは神妙そうな表情を浮かべて頷いた
だが、内心では

(どういう意味だろ……)

と首を傾げていた
そして、十数分後

「お待たせしました。ミートソーススパゲッティの大盛りです！」
とアレツタが、二人の前に皿を置いた

「こちらの二つは、自由に使ってください。では、ごゆつくり」

アレツタはそこまで言うのと、手を上げている別の客の方に向かった
それを見送ると、トマスは

「さあ、食べようか」

と言って、フォークを持った

「は、はいー」

トマスの言葉に、シリウスもフォークを持った

その間にトマスは、フォークで麺を巻き取り口に運んでいた

(ふむ……やはり、まだまだか……)

「んっ!？」

そしてシリウスは、その美味しさに目を見開いた

(酸味のあるソースがベースだけど、その中に細かい良質な肉と、細かく刻んだ野菜があり、それらが見事に調和してる!)

シリウスはそう思うと、フォークでソースの表面を僅かに掻いた

そこから見えたのは、細かく刻んだ具

それらを包んでいるのは、赤いペースト

その正体に行き着いて、シリウスは

「お祖父様！ なぜ、この料理に我が商會が独占しているマルメツト
が使われているのですか？」

とトマスに問い掛けた

更に、シリウスは

「それだけじゃありません……この味……より洗練されていますが……
商會で売っているソースに似ています！」

と言った

それを聞いたトマスは

「……やはり、気づいたか……シリウス、儂はな……この味をここ以外
でも食べたかっただけなんだ」

と言った

それを聞いたシリウスが、固まっていると

「料理発明の天才……人々は儂をそう呼ぶがな、そんなのはただの虚名だ……」

と語り出した

「もう、30年も前になるか……儂はたまたま、倉の奥に、ここに繋がる扉を見つけた……そして、出会ったのだよ。ここの料理に……」

その言葉には、懐かしさが感じられた

だからか、シリウスは思わず聞き入っていた

「それから儂は、ここの料理……特に、儂らアルフェイド商会の主力商品の麺料理の再現を始めた……そうして、あれだけのソースを売り出したが……まだ、納得していないのが実状だ」

確かに、余りにも味が違うことはシリウスにも分かった

素材レベルだけでなく、調理技術

それらが重なって出来上がるのが、ソースの出来

「しかし、儂ももう年だ……商会からは、身を退いている……だからな、シリウス……お前が、舵を執れ」

「つつ!? 僕がですか!?!」

トマスの言葉に、シリウスは驚いた

すると、トマスは頷き

「うむ……儂よりも、舌が味に敏感だ……お前ならば、ここの味に近付けることが出来る筈だ」

と言った

確かに、約30年前よりも料理の味は洗練されてきていて、シリウスはそれに慣れている

ならば、そこから違いに気づける筈だと、トマスは思ったのだ

それを聞いたシリウスは

「分かりました、お祖父様」

と真剣な表情で頷いた

それを、カウンター越しから見ていた明久は、その姿を過去の自分と重ねていた

今やねこやのキッチンに立っているが、明久も味の探求のために
様々な店に行ったりしていた

その中で、このねこやに行き着き、働かせてもらっている

「頑張れ、少年……」

明久はそう言うと、調理に意識を戻したのだった

そしてこの後、このシリウスが新たな目玉商品を開発し売り出すこ
とになるが、それはまた別の話

七皿目 テリヤキチキン

異世界食堂

そこには店主が代替わりしても、先代からのお馴染みの客が足繁く通っている

その内の一人は、大賢者アルトリウス

彼は魔族との間に起きた戦争を終わらせた、四英雄の一人である

その彼は、先代店主の時から常連客

そして、先代店主からの常連客は他にも居る

「約一月振りか」

と言って入店したのは、扉の向こうの世界でその名を轟かせる剣豪
タツゴロウである

「おお、久しいなテリヤキの」

「そうだな、ロースカツ」

と二人が会話した時、アレツタが近寄り

「いらっしやいませ！ ねこやにようこそ！」

と言った

「む？」

アレツタを初めて見たタツゴロウは、首を傾げた
すると、明久が来て

「新人給仕のアレツタです。一ヶ月振りですね、タツゴロウさん」

と言った

その光景にタツゴロウは、昔を思い出した

それは、先代店主がまだ若かった今の店長を紹介した時の光景

それと、約二年前に明久が働き始めた時に今の店長から紹介された

時の光景

それらを思い出したタツゴロウは

(私も、老いる訳だ……)

と思った

その後、近くの席に座り

「すまぬが、何時ものを頼む」

とアレツタに言った
するとアレツタは、首を傾げながらも

「何時もの……?」
と呟いた

それを見たタツゴロウは

(そうだった、新人だったな)

と思った

そして、改めて

「テリヤキチキンを頼む。それとセイシュのヒヤを。ライスとツケモノは先に持ってきてくれ」

と注文した

「分かりました！ 少々お待ちください！」

注文を受けたアレツタは、奥へと消えていった

そして、少しして

「お待ちせしました！ ライスとオミソシル、それとツケモノです！」
とアレツタが、先にと頼まれたご飯を持ってきた

「テリヤキチキンとセイシュは、後でお持ちします。では、ごゆっくり」

「うむ」

置かれたご飯と味噌汁。そして沢庵を見て、タツゴロウは箸を握み、ご飯を一口食べた

タツゴロウの故郷たる東の国にも、ご飯はある

しかし、それは茶色くボソボソしていて、最早別物と呼べる

そして、口の中に広がるご飯の仄かな甘さが無くなる前に、沢庵を食べた

ボリボリと音をたてながら食べると、口の中に丁度いい塩気が広がっていく

それが無くならない内にまたご飯を食べ、最後に味噌汁を一気に半分近く飲んだ

それを見たアルトリウスは

「よくもまあ、ご飯だけで食べるの」

と呆れたように言った
するとタツゴロウは

「故郷でも、よく食べていたからな」
と答えた

それを聞いて、アルトリウスは

「郷愁か？」

と言った

それに対して、タツゴロウは

「そんな洒落たものではない」

と返した

なおタツゴロウだが、あまり故郷には帰っていない

世界中を旅しているのだから、仕方ないのかもしれないが

そこに

「お待たせしました！・ テリヤキチキンとセイシユのヒヤです！」

とアレツタが現れた

そして、タツゴロウの前に料理と徳利を置いた

「うむ、来たか」

タツゴロウはそう言うと、箸でテリヤキチキンを持ち上げた

（やはり、皮と肉の対比は美しい……タレが塗られた皮に、まるで乙女の柔肌のような白い肉……）

タツゴロウは少しの間、持ち上げた肉を見てから、口に運んだ

（旨い！ 旨すぎる！ 程よく抜けた脂に、甘辛いタレがよく合う！

そして何よりも、このテリヤキにこそライスが合う！）

とご飯と共に噛み締めていた

ふとその時、あることを思い出した

それは、古馴染みとのやり取り

何の料理が、一番ご飯に合うか

その話題で、何時もカレーライスかテリヤキチキンかカツ丼かオムライスかで、口論になる

（何時か、あやつらとも決着を付けねばな）

タツゴロウはそう思いながら、テリヤキチキンを日本酒と共に味

わっていた

そこに、アルトリウスが

「むう……テリヤキチキンも旨そうだな……」

と羨ましそうに言った

それを聞いたタツゴロウは

「……食うか？」

と問い掛けた

それを聞いて、アルトリウスは

「くれるのか!？」

と嬉しそうにした

だがタツゴロウは、ロースカツの皿を指差し

「ロースカツの真ん中の一切れとなら、交換してやる」

と交換条件を突き付けた

それを聞いたアルトリウスは

「ぐっ……」

と呻いた

そして、少しして

「端の一切れでは、ダメか？」

「ダメだ。真ん中しか受け付けん」

アルトリウスの言葉に、タツゴロウは即座にそう言った

それを皮切りに、二人の間で緊張感が高まり始めた

だが、不意に二人は吹き出してから笑った

幾らなんでも、店の迷惑になることを長年来店している二人がする

訳がない

そもそも、本当に迷惑行為をすれば二度とドアを開けられなくなる

ことを、二人は前例と共に知っている

そうして二人は、談笑しながら料理を食べ続けた

そして、しばらくして

「やけど……」

とタツゴロウが何か始めた

「ん？ 何をしているんだ？」

「ん、シメのミニテリヤキ丼と言ったところだ」

アルトリウスが問い掛けると、タツゴロウは現物を見せながらそう言った

ご飯の上に、三切れ程乗っている

「お前……凶体デカイ癖に、やってることは小さいな……」

「旨いんだから、仕方ない……だが惜しむらくは、酒も料理も、ここでしか味わえないことだな」

アルトリウスの言葉に、タツゴロウがそう言う

「さもありなん」

と言った

そうして食べ終わると、二人は

「さて、そろそろ帰るかな……でないと、弟子達が五月蠅いからな」

「そうか……店主よ！ 会計はここに置くぞ！」

と立ち上がった

だが、そこに

「あ、タツゴロウさん！」

と店長が、タツゴロウを呼んだ

「ん？ どうした？」

「実は、一つ聞きたいことが……」

タツゴロウが振り向くと、店長はそう言った

そして、店長は

「ハインリヒ・ゼーレマン……という方、知りませんか？」

と問い掛けたのだった

八皿目 エビフライ

それは、今から数年前の出来事だった

公国

東大陸では帝国と並び立つ大国の、ある外れの砦

その間近にある森にて、モスマンと呼ばれる毒を持った魔物が大発
生した

それを知ったその砦の指揮官は、このままでは長く持たないと判断
し、一人の若い騎士

ハインリヒ・ゼーレマンに、一つの手紙を託した

それは、砦の危機をしたためた手紙

それを、王城まで届けろと指示を下した

その指示を受けて、ハインリヒは馬を走らせた

だが不幸にも、その馬も毒に犯されていたのだ

王城まで半分を過ぎた辺りで、馬は泡を吹いて倒れてしまった

それを見たハインリヒは、鎧を脱ぎ捨てて手紙と防衛のための家宝
たる名剣だけを持ち、走り出した

それから、どれほど走ったのか

砦を出た時はまだ朝早かったが、既に陽は暮れていた

ハインリヒはそこまで、騎士として鍛えた体力で走り続けていた

しかし、ハインリヒとて人間

疲労で最早、足は重かった

そんな時に、ハインリヒはある一つの小屋を見つけた

そしてその小屋には、猫の彫刻が彫られている

それを見たハインリヒは

(仕方ない………危急の事態だ!)

と判断して、扉を開け

「私は、公国の騎士、ハインリヒ・ゼーレマン！ 大至急、水と食糧の
提供を要求する！」

と言いながら、剣を抜いた

そんなハインリヒに答えたのは

「いらっしやい」

という、いささかのんびりした声だった

そしてハインリヒは、入る時に見た小屋よりも広い室内と内装を見て

「なんだ、ここは……」

と呆然とした声を漏らした

すると出迎えた人物、店長は

「ここは、洋食のねこやという料理屋です」

と説明した

「料理屋？ こんな荒野のど真ん中ですか？」

店長の説明を聞いて、ハインリヒは困惑していた

入った小屋があったのは、明らかに開拓地に見られる簡素な小屋だったからだ

「荒野？ また新しい場所に出ましたかね？ ここはそちらからしたら、異世界にあるんです」

「異世界？ バカにしているのか？」

店長の言葉を聞いて、ハインリヒは目を細めた

しかし店長は、苦笑いを浮かべて

「まあ、そんな反応しますよね。しかし、事実でして」

と言った

そしてハインリヒに

「そんな物騒なの仕舞って、座ってくださいよ。今、メニューとお冷やをお持ちしますんで」

と言って、キッチンに入ってしまった

それを聞いたハインリヒは、剣を鞘に仕舞ってからゆっくりと席に座った

そこに、店長が現れて

「お客さん、東大陸語は読めますか？」

と問い掛けた

「うむ、読めるが……」

「では、どうぞ」

ハインリヒの答えを聞いて、店長はメニューを手渡すと

「注文が決まりましたら、呼んでください」

と言って、キッチンに入っていった

それを見送ったハインリヒは

(とりあえず、腹が膨れればなんでもいい)

と思いつながら、適当にメニューを開いた

すると、あるメニューが目に入った

それは、エビフライ

「エビフライ……南方の海で獲れたシユライプを、細かくしたパン

……シユライプだと!？」

最初は小声だったが、材料が何か気づくと大声を上げた

何故ならば、ハインリヒは元々海辺の街で生まれ騎士になる為に出

るまで住んでいた

そして騎士になる為に出て以来、帰郷していない

(い、いかん！ シユライプの味を思い出して、睡が！)

ハインリヒは唾を飲み込むと、カウンターの方を向いて

「店主……このエビフライとやらをくれ!!」

と大声で注文した

すると、店長が顔だけを出して

「あいよ。少々お待ちください」

と言った

それを聞いたハインリヒは、メニューを端に置いて

(しかし、本当にこんな所でシユライプが食べられるのか？ 保存が

難しく、遠くまでは運べないはずだが……)

と思いつながら、水を飲んだ

ふとその時、ハインリヒは気づいた

(この水もそうだ……荒野にあるというのに、水が清んでいて冷たい)

そこまで考えると、お絞りを手に取った

(おお！ このタオルも心地よい！)

ハインリヒはそのお絞りで、手だけでなく顔も拭いた

そしてお絞りを畳み、メニューの近くに置いた
そこに

「お待たせしました。エビフライです」

と店長が、料理を乗せた皿をハインリヒの前に置いた

そして、メニューを脇に挟むと

「お好みで、タルタルソースを着けても、美味しいですよ。では、ご
ゆっくり」

と言つて、店長は下がっていった

「こ、これが……シユライプだど!?」

ハインリヒが知っているシユライプ^{エビ}は、くるっと丸くなっているも
のだった

しかし、出されたエビフライは真つ直ぐ伸びている

(この尻尾は、確かにシユライプのものだ……よしっ)

ハインリヒは意気込むと、フォークとナイフを掴んだ

そして、食べやすいサイズに切り断面図を見た

(これは……故郷のシユライプよりも肉厚だ……余程良い環境で育つ
たようだな)

その断面図から見たシユライプは、衣に包まれながらもプリプリと
した肉厚の身

それは、ハインリヒの故郷で獲れていたシユライプよりも肉厚だっ
た

(さて、問題は味だが……)

ハインリヒはそう思いながら、エビフライを食べた
すると口の中で、シユライプの味が一気に広がった

「おおー！これは、実に旨い!!」

と思わず笑みを浮かべながら言ったが、直ぐに気を引き締めて

(いかん！ 任務が最優先だぞ、ハインリヒ！ 味を楽しむよりも、今
は腹を膨れさせることに集中だ！)

と自分自身に言い聞かせた

そして、二口目を食べると

(やはり、旨い!! 素材もだが、店主の腕が高いのか!? 素材の味を活

かしている!!)」

と店長を賞賛していた

そして、三口目を食べようとした

その時、店長が言ったことを思い出した

(確か……このタルタルソースを着けても、美味しい……だったか？

いや、このまま……)

ハインリヒはそう思い、タルタルソースの器を見た

そして

(ふむ……見た目は、なかなか美しい)

タルタルソースを着けたエビフライを見て、そう思った

そして、一口食べて

「な、なんだこれは!？」

と驚愕の声を上げた

(卵の味の中に、ハーブと酸味のある素材が複雑に絡み合い、調和している!! それとエビフライ……これは、正にセツシヨン!!)

ハインリヒはそう思うと、皿に残っているエビフライを見て

(これで、このエビフライは完成した料理! こんな……一皿では足りぬ!!)

と思い、キッチンの方を見た

「店主! もう一皿頼む!!」

「あいよっ!」

ハインリヒの注文を受けて、店長は予め準備していたエビの調理を始めた

お代わりの頼むと、予想していたからである

その間にハインリヒは、皿に残っていたエビフライを食べて、野菜やスープにも食べ始めた

(この野菜も素晴らしい! シャキシヤキとしていて、甘みがある! これだけで、幾らでも食べられそうだ! それに、白パンも柔らかくモチモチとしている! スープも、肉と野菜の味が溶け出している! 最後の一滴まで、飲み干したくなるほどだ!!)

と夢中に食べていると、店長が来て

「はいよ、エビフライお待ち。お客さん、気に入ったみたいですね」と皿を置いた

よく見れば、エビフライの数が増えている

「おおー。かたじけない!!」

ハインリヒはそのエビフライを見て、満面の笑みを浮かべた

そして、無我夢中で食べ続けた

そうして、暫くして

「ふう……美味だった……きて、砦に……」

と言って、ハツとした

今自分は、任務で王城に向かつてる途中だと思い出したのである
しかも、急いで出てきたために財布も砦に置いてきていた

(仕方ない!)

ハインリヒはそう意気込むと、皿を取りに来た店長に

「店主よ。すまないが今は、生憎と手持ちが無い」

と切り出した

それを聞いた店長は

「だったら、ツケで大丈夫ですが……」

と返した

しかしハインリヒは

「いや、あれほど素晴らしい料理を出して貰って、金を払わぬというのは失礼だ……だから、これを預ける!」

と言って、腰に差していた剣を差し出した

「へ、剣!?!」

「我が家に伝わる家宝の名剣だ! それを預ける! 私が金を払うまで、預かってほしい!」

店長が驚いている間にそう言うと、ハインリヒはドアに向かった

そして、ドアの取っ手を掴み

「では、また来る!」

と言って、ドアを開けた

すると店長が

「あ、お客さん! ウチは、七日に一度しか!!」

と言ったが、ハインリヒには聞こえていなかった

その後ハインリヒは、無事に王城にたどり着き、自分が居た砦が危機に陥ったことを伝えた

それにより、王城から来た援軍により砦は危機を脱出

その時の功績により、ハインリヒは別の砦の司令官となることが決まった

そして、それから十日後

扉が有った小屋に向かったが、そこに有るのは只のボロ小屋と仕舞われていた耕具類のみ

扉は無かった

それからハインリヒは、司令官として別の砦に赴任

司令官として忙しい日々を過ごしながら、ねこやでのことを思い出していた

それは、約七年経った今もだった

「あれは、やはり夢だったのか……?」

そう呟くが、家宝の名剣は無くなっていた

だから、夢ではないはず

とハインリヒは思いながら、窓から外を見ていた

その時、ドアがノックされて

「司令官、失礼します。司令官にお客様です」

と入ってきた兵士が言った

それを聞いたハインリヒは

「客だとう? このような、辺境の砦にか?」

と問い掛けた

彼が赴任した砦は、公国でもかなり外れの方にある砦で、来るのは伝令か時々来る行商位だ

そこにまさか、自分宛に客が来るとは思っていなかったのだ
すると兵士は

「はい……タツゴロウと名乗る御仁です」

「なっ!? タツゴロウだと!」

兵士が告げた名前を聞いて、ハインリヒは驚いた

異世界食堂の常連客の一人、タツゴロウ

その名前は、彼等の世界に於いて剣を使う者ならば知らぬ者は居ない伝説の剣客だった

刀一本で、数多くの魔物を葬ってきた最高の剣士

それが、タツゴロウである

「本物なのか？」

「は……吟遊詩人達の歌に出てくる通りの出で立ち……私は本物と思えますが……」

ハインリヒの問い掛けに、兵士はそう返答した

何せ、最高の剣士として知れ渡っているタツゴロウだ

時々、名を騙る輩も少なからず現れるのだ

「……ここにお通ししろ」

「はっ」

ハインリヒの指示を聞いて、兵士は退室した

それを見送ったハインリヒは、傍らに立て掛けてある剣を見た

その剣も、確かに名剣である

しかし、家宝の名剣には劣る剣だった

そして、数分後

「初めまして、ゼーレマン卿。拙者は、タツゴロウともうします」

と片膝を突くタツゴロウが、名乗った

その名乗りと、タツゴロウから溢れている気迫

それを感じ取ったハインリヒは

(間違いない！ 本物だ！)

と確信した

そして、敬礼しながら

「初めまして、タツゴロウ殿。しかし、世界に名を轟かせるタツゴロウ殿が、私に何用でしょうか？」

と問い掛けた

するとタツゴロウは、片腕を背中に回し

「実は、ある人物から届け物を頼まれましたな」

と言って、袋に入れられた細い物を差し出した

それを受け取ったハインリヒは、タツゴロウに

「開けても?」

と問い掛け、タツゴロウは無言で頷いた

そしてハインリヒは、封を解いた袋の中から取り出した物を見て驚愕した

「これは、無くなっていた家宝の名剣!」

それは、店長に預けた家宝の名剣だった

するとタツゴロウが

「はい……店主から頼まれました、届けに参りました」

と言って、立ち上がった

そして、続けて

「店主から伝言を預かっています……『七日に一度、ねこやでお待ちしています』……と」

と言った

それを聞いたハインリヒは

「では、またエビフライが食べられるのですか!」

と嬉しそうに言った

だが、直ぐに表情を引き締めて

「あ、いや……料金も支払っていないのに、また食べる訳にはいかないだけで……」

と何やら言い始めた

しかし、タツゴロウは気にした様子もなく

「確か……この近くにも、扉がありましたな」

と思い出しながら言った

それを聞いたハインリヒが、タツゴロウに視線を向けた

するとタツゴロウは、手を差し伸べて

「共に参りませんか? かの店……異世界食堂へ」
と誘った

するとハインリヒは

「是非!」

と言って、タツゴロウの手を掴んだ

その後二人は、共に砦を離れて扉の有る場所に向かった
そして、ハインリヒは扉を開けると同時に

「店主よ！ エビフライを頼む!!」
と言った

その声量に、店内に居た客の何人かが驚いていた
すると、カレーライスを置いた明久が

「店長！ 例のお客様が来ましたよ！」
と言った

すると、店長が現れて

「お待ちしてましたよ、ハインリヒさん」
と優しく出迎えた

その店長を見て、ハインリヒは嬉しそうにしたのだった

少年の志

明久がねこやで働き始めたのは、今から二年前になる

その前のことだが、明久は少し特殊だった高校を卒業すると、かつての友人達には何も言わずに料理学校に進学

料理に関する勉強を始めた

したのだが、明久が入学して少し経った時に、その料理学校にある有名料理店のシェフが来た

それ自体は、なんら珍しいことではない

しかしそのシェフは、明久の腕を見ると

『あの少年を、学生にするには惜しい』

と料理学校の教師や校長に直訴

そして明久は、本来二年通うはずだった料理学校を、異例の一年で卒業

絶賛された腕は、引く手あまただった

しかし明久は

『僕は、まだ納得していない』

としてその全てを断り、味の探究の旅に出たのだ

その後明久は、日本全国を一年掛けて回り続けて味の探究を続けた
そしてある日

「ここが、ねこやビル……確か、この地下に……あつた」

明久は、その料理店

洋食のねこやに来た

日本全国を回っていき、その内の何店かの店長にオススメの店を問
い掛けた

すると、数カ所の店長はねこやの名前を挙げたのだ

昔の味を守りつつ、常に新しいメニューの追加を辞めない店として
それを聞いた明久は、最後にねこやに来た

「いらっしやいませー！ 洋食のねこやにようこそー！」

ウェイターに明るく出迎えられ、明久は空いている席に案内された

そして頼んだのは、洋食の基本にしてシェフの腕を知ることが出来る料理

オムレツだった

頼んで少しすると、オムレツが運ばれてきた

「うわ……」

そのオムレツを見て、明久は思わず言葉を漏らした

オムレツは綺麗な黄色で、形も見事に整えられている

まずこの時点で、シェフたる店長の腕が伺える

(問題は、味だけど……)

明久はそう思うと、スプーンで一ヶ所を切り出し、口に運んだ

(美味しいっ！ 素材の味を活かしつつ、シンプルな味付けで更に際

立たせてる！ 要点を抑えてる証拠だ！)

明久はオムレツを食べつつ、パンとコンソメスープも口にしました

(このコンソメスープも、凄い丁寧に作ってるんだ……素材の味が濃

く出てるのに、それらが綺麗に纏まつてる……)

全ての味に明久は、店長の技量を感じた

それから明久は、何日間か通い続けた

そして数日後、閉店する少し前

「お願いします！ ……ここで働かせてください！」

と明久は、店長に深々と頭を下げていた

今明久達が居るのは、キッチン奥の休憩スペースである

そこには、明久と店長の他に、その時間まで残っていたウェイター

が三人居た

明久の言葉を聞いて、一人の女性ウェイターが

「えっと……ウェイターとしてじゃなく？」

と言った

すると、明久は

「料理人としてです！」

と言って、顔を上げた

それを聞いて、別の女性ウェイターが

「熱意はいいけど……」

と口ごもって、店長を見た

すると、店長は明久をジッと見て

「もしや、お前さん……吉井明久か？」

と首を傾げた

「あ、はい。そうです」

「おお、やっぱりか」

明久が認めると、指を鳴らした

すると、男性ウエイターが

「店長、知ってるんですか？」

と問い掛けた

その問い掛けに、店長は

「ああ、俺達料理人の間じゃあ、有名だな」

と言って、奥のエレベーターに向かった

それを見送ると、最初の女性ウエイターが

「なになに、君。何やったの？」

と問い掛けてきた

すると明久は、困ったような笑みを浮かべて

「いや、まあ……」

と頭を掻いた

すると、二番目の女性ウエイターが

「あ、かわいい……食べたい位」

と小声で言うと、明久の背筋に悪寒が走った

すると、男性ウエイターが

「あいつ、少し前に彼氏にフラれたらしいからな……気を付けろ」

と忠告された

なんだかんだして、数分後

「ほれ」

と店長が、一冊の雑誌を机の上に置いた

題名は、月刊料理人

「こんな雑誌が、あるんですね」

「まあ、読んでて損は無い。位だな」

男性ウエイターの言葉に店長は答えながら、付箋が貼られているページを開いた

「ぶふっ!？」

そのページには、卒業証書を受けとる明久の姿が見開きで掲載されていた

「なにになに……昨年卒業した、天才少年の一年を追った……え？」

記事の一文を読んだ男性は、驚いた表情で明久を見た

その時明久は、両手で顔を覆っていた

すると、二人の女性が

「えつと……少年がその料理学校に入学したのは、今から二年と少し前……彼は高校卒業後にその料理学校に入学……少し経ったある日、その料理学校にある三ツ星ホテルの総料理長が特別教師として来校……そこで彼の腕を見て、絶賛しその学校の校長に直訴……え」

「それにより、彼は本来二年の教育課程を異例の飛び級で一年で卒業……そんな彼を獲得しようとして、様々なホテルや料理店はスカウトするも、彼は全て拒否……その理由が、まだ自分の味に納得していないから……その後彼は、卒業後に姿を眩ました……我が社は、独自に彼のその後を追った……彼は約一年掛けて、北は北海道から南は沖縄まで、日本全国を回っていた……え」

とまた明久を見た

この時点で明久は、体をガタガタと震わせていた

すると、店長が

「そんな君がウチの料理食べてる時、驚いたさ。なんでウチにつてな」と笑っていた

そして、明久を見て

「しかも、今日になって働かせてくださいと来た。驚いた驚いた」と言った

すると、明久は

「この料理は、基本を忠実に守りつつ、かなり高い水準でした……そこに、僕が求める味があると思ったんです……」

と恥ずかしそうに言った

それを聞いて、店長は

「……いいのか？ 別にウチは、そこまで有名って訳でも無いと思うが？」

と明久に問い掛けた

すると明久は

「構いません……お店が有名かは関係ありません……美味しい料理を提供出来るかが、料理人の使命だと思っています」

と答えた

そして、少しして

「うし、分かった……試しに、今日の賄いを作ってもらおうぞ。メニューは任せる」

と言った

それを聞いた明久は

「はい！ 任せてください！」

と言って、エプロンを借りてキッチンに立った

その結果は、推して知るべし

明久は、ねこやの第二シェフとして採用されたのだった

九皿目 チョコレートパフエ

「大丈夫ですか、姫様？」

「……はい、大丈夫です」

僅かに開けたドアの隙間からの問い掛けに、ベッドから体を僅かに起こした若い女性

アーデルハイトは、少し気だるげに答えた

彼女は、東大陸の二大大国の片割れ

帝国の姫である

そんな彼女が居るのは、帝都の城ではなく、ある離れの城だった
今彼女は、通称で《貧民殺し》と呼ばれる病気に掛かっているのだ
貧民殺しはどんな薬だろうが魔法を使おうが、治せない病気で、治すには空気が綺麗な所でゆっくりと療養するしかないのだ
しかも、しっかりと栄養も取らないといけない
だから、貧民殺しと呼ばれていた

(最低でも、二年はこの離れで過ごささないといけないのね……)

アーデルハイトはそう思いながら、窓の外を見た

その時、不意に風を感じて

「？ 窓は開いてないのに……」

と風が来た方向を見た

すると、ある一つのドアがあった

「あんなドア……有ったかしら？」

アーデルハイトはそう言うと、そのドアに近寄った

「このドア……何か、見覚えが……」

アーデルハイトはそう言うと、体を冷やささないようにと肩掛けを羽織ってからドアを開けて潜った
すると

「いらっしやい」

「いらっしやいませ」

と二人の男性が出迎えた

店長と明久である

ただ、店長は何処か驚いた表情を浮かべている
すると、アーデルハイトは

「あ、あの……ここは、何処ですか？」

と困惑した様子で、二人に問い掛けた

すると、明久が

「ここは、洋食のねこやって言います。お客さん達からしたら、異世界
です」

と説明した

それを聞いたアーデルハイトが

「異世界……」

と驚いた表情で、呟いた

その直後、アーデルハイトは咳き込んで倒れそうになった

それを、近くに居た店長が支えて

「大丈夫ですか!?! 明久!」

「はい、すぐに!」

店長に言われて、明久はキッチンに走った

そして、少しすると椅子に座らせた彼女に飲みやすい温度にしたお

湯を提供

それを飲んで落ち着いたのか、アーデルハイトは

「ありがとうございます……」

と二人に頭を下げた

その元気の無い姿に、明久と店長は顔を見合わせて

「まだ開店してませんが、何か食べませんか? サービスしますよ?」

「大抵のものなら、出せますよ?」

とアーデルハイトに問い掛けた

するとアーデルハイトは、少し悩んでから

「それでは、その……雲を、食べたいんです」

と言った

それは、彼女の幼い頃の思い出からの注文だった

実は、アーデルハイトが貧民殺しに掛かったのは二度目なのだが、

一回目に掛かった時

今から十年程昔、まだ祖父が生きていた時に何処かに連れていってもらい、甘い雲を食べた記憶があったのだ

しかし、何処で食べたのか余りにも臆気で、自信が無かった

アーデルハイドの注文に、明久と店長は僅かに顔を見合わせた
そして店長が

「承りました、少々お待ちください」
と言った

それを聞いて、アーデルハイドは

「本当に、食べられるのですか？ 雲を」

と問い掛けた

すると、明久が微笑みを浮かべて

「ええ、食べられますよ。何せここは、異世界食堂ですから」

と答えた

それから、数分後

「お待たせしました。雲……チョコレートパフェです」

と店長は、アーデルハイトの前に高い器に盛られた料理

チョコレートパフェを出した

それを見たアーデルハイトは、驚いた

その見た目は、小さい時に見たのとはほぼ同じだったからだ

「では、ぐゅっくり」

店長はそう言うと、キッチンに消えた

それを見送ったアーデルハイトは、スプーンを取って

(では……この白い所から)

とチョコレートソースが掛かった生クリームに、スプーンを刺した

(凄い柔らかい……)

アーデルハイトは、抵抗無くスプーンが刺さったことに驚いた

そしてスプーンを持ち上げると、一口食べた

「っ！ 美味しいー！」

アーデルハイトはそう言って、また生クリームを食べた

(帝国の甘い料理とは、全然違う！)

帝国の甘い料理

つまりデザートは、甘ければ甘いほどよしという考えで作られていて、アーデルハイドからしたら、甘さがしつこかった

(こちらの雲は、甘さはそれほどでもない……しかし、こちらの方が断然いい！)

控えめな甘さにの生クリームに、掛けられたほろ苦いチョコレートが非常に合っていた

それだけでなく、盛られていたフルーツも美味しかった

(この緑色のは程よい酸味で、甘さに慣れた口の中を引き締めてくれる。こちらの生成り色のはまったりしていて、もつと食べたくなる！

この焼き菓子は、雲と非常に合う！)

と食べていき、最後に真ん中の白い丸い物体

アイスクリームをスプーンで、口に運んだ

その瞬間、口の中に一気に冷たさが広がった

その時、彼女は思い出した

(あ……私、昔、ここに来たことがある……)

それは、今から約十年程昔

最初に貧民殺しに掛かった時だ

その時もアーデルハイドは、離れの城

隠居した偉大なる祖父

帝国を建国したヴィルヘイムの居城に来た時のことだ

当時幼かったアーデルハイトは、一人家族から離されて離れの城に来たことを寂しく思っていた

それを察したのか、ある日にヴィルヘイムが

『いいかい、アーデルハイト。このことは、秘密じゃよ』

と念押しして、アーデルハイトを異世界食堂に連れてきた

そうして出されたのが、今と少し違うが、パフェだった

そして戻ってくると、ヴィルヘイムは

『寂しい思いをさせて、すまないな。アーデルハイト……しかし、忘れないでほしい。ワシらは、何時でもアーデルハイトのことを思っている……家族は、心で繋がっている』

と言った

それを思い出した彼女は、目端に滲んでいた涙を拭い

(お祖父様……私、頑張ります)

と心に決めた

そして、彼女がパフェを食べ終わった頃合いを見計らい

「どうぞ。食後のコーヒーです」

と店長が、アーデルハイトの前にカップを置いた

彼女は最初、コーヒーを不思議そうに見ていたが、ゆっくりと飲み始めた

すると、店長が

「ここは、七日に一度開いてますんで。何時でもいらしてください」

と教えた

すると、彼女は

「また来ても、いいんですか?」

と店長に問い掛けた

すると店長は、笑みを浮かべながら何時ものポーズ

左手の親指を立てながら、軽く腕を上げて

「ええ。何時でもお待ちしております」

と言った

それを見たアーデルハイトは、更に思い出した

昔パフェを出したのは、まだ若かった店長だということを

そして彼女は、笑みを浮かべ

「はい、また来ます」

と告げた

そうして、彼女が退店した十数分後

「おはようございますー!」

「おう」

「おはよう」

アレッタが出勤してきた

するとアレッタは

「あれ? 何かいいことでもありました?」

と店長に問い掛けた
すると店長は

「ん？ そうだな……雲が、晴れた……かな？」
と言ったのだった

知った理由

明久がねこやで働き始めて、暫くが経った

ある土曜日、明久は買い物に出ていた

この頃の明久は、店長から聞いた土日は休みという言葉を聞いていて、その土日は料理研究に費やしていた

自費で食材と調味料を買い、部屋に備え付けられているキッチンで料理研究をしていた

もちろん、その日もそうだった

「うーん……全体的に上手くいつてるんだけど……何かが足りない気がするんだよなあ……」

自分が作った料理を味見した明久は、そう言って腕組みしながら首を傾げた

「うーん………確実に、何かが足りないんだよなあ」

明久は再びそう言うと、うーんと唸りだした

そして、数分後

「ダメだ………これだつてというのが、浮かばない………」

と明久は、項垂れた

そして明久は、溜め息混じりに

「仕方ない………店長にアドバイスを貰おう」

と言つて、部屋を出た

今明久が住んでいるのは、ねこやのあるねこやビルの上の階の一部屋だ

同じ階に、店長の部屋もある

「店長！・ 居ますかあ？」

店長の部屋の前に行くと、明久はノックしながら店長を呼んだ

しかし、返事は無い

すると明久は、首を傾げて

「留守かな………あ、でも………店長も日頃から料理の研究してるみたいだし………お店のほうかな？」

と言つて、エレベーターで下に降りていった
そして、店に入ると

「ん……賑やかだ……」

と店内が、かなり賑やかなことに気づいた
するとそこに、店長が現れて

「んなっ!?! 明久!?!」

と驚きの声を上げた

その直後

「店主！ カツ丼お代わりだ!!」

「ワシはロースカツをお代わりじゃ!」

と注文が、ひっきりなしに聞こえてきた

それを聞いた店長は

「あ、はい！ わかりました!」

と返答した

すると、明久は

「店長……もしかしくなくとも、かなり忙しいですね?」

と問い掛けた

すると店長は

「あ、ああ……そうだが……」

と言った

すると明久は、エレベーターのスイッチを押して

「ちよつと待つててください……」

と言つて、エレベーターに乗った

そして、数分後

「手伝います」

と明久は、洗濯して乾かしたばかりのコック服を着て現れた
すると店長は

「い、いや。別に無理しなくても……」

と止めようとした

しかし明久は

「無理ではありませんよ。それに、待つてるお客さんを待たせるほう

が、悪いですよ」

と言った

それを聞いた店長は、少し考えると

「すまん……手伝ってくれ……今日は、かなり忙しいんだ」

と明久に言った

それを聞いて、明久は

「お任せください」

と答えて、キッチンに立った

それから二人は、怒濤のような注文をこなし続けた

そして、数時間後

「ありがとうございました！」

「またお越しくださいませ！」

と、その時の最後の客を見送った

その後二人は、一旦休憩フロアにまで下がった

そして、明久は

「で、この営業はなんですか？」

と店長に問い掛けた

すると店長は、苦い表情を浮かべながら

「……特別営業だ」

と語りだした

それは、七日に一度だけ開く異世界食堂

ドアの向こうがどうなっているのかは、店長は知らない

だが、店に来るお客達は異世界食堂ごと、ねこやの料理を楽しみに来る

店長は今まで、一人で料理を提供してきた

それを聞いた明久は

「店長、今日から僕も手伝いますね」

と提案した

それを聞いた店長は

「いや、それは……」

と明久を止めようとした

すると明久は

「未熟者ですが、僕だってねこやの料理人です。それに、僕が手伝いたいのと……やっぱり、誰でもいい……お客さんの笑顔が見たいんです」

と言った

それを聞いた店長は、少しの間悩んだ

そして

「……分かった。頼んだぞ」

と明久に言った

それを聞いた明久は

「はい！ お任せください！」

と言ったのだった

この日から異世界食堂は、二人態勢になったのだった

10皿目 カレーライス

「お待たせしました！ カレーライスの大盛です！」

と言いなながらアレツタは、皿を一人の男性

公国の最強提督と名高い、アルフォンス・フリーユゲルの前に置いた

するとアルフォンスは、満足そうに

「うむ！ やはり、カレーライスこそ至高！ テリヤキやらカツ丼やらオムライスは邪道よ！」

と言った

それを聞いた各注文者は、アルフォンスを睨んだ

しかし、そこは最強と名高いアルフォンス

各人の怒気を、サラリと受け流した

そして、スプーンで一掬いして、一気に一口

「うむ、美味しい！」

アルフォンスは満足そうに、そう告げた

その後食べ終わると、アレツタが皿の回収に来た

すると、アルフォンスが

「千回食べてきたが、飽きる気がしないな」

と言った

それを聞いたアレツタは、驚いた表情で

「千回もですか！ 凄いですね!!」

と言った

それを聞いて、アルフォンスは

「ああ、そういえば君には話していなかったね」

と思ひ出すように言った

そのの意味が分からず、アレツタが首を傾げていると

「あれは、厚い雲に覆われた酷い嵐の夜だった……」

とアルフォンスは、語りだした



それは、今から約二十数年前のことだった

アルフォンスは当時、公国艦隊の提督として商船団の護衛をしていた

その商船団に、海の魔物

クラークンが襲い掛かった

もちろんアルフォンスは、その商船団を守るために艦隊に攻撃するように指示を下した

しかし、相手は伝説級の海の魔物たる、クラークン

アルフォンスが指揮する艦隊は、大打撃を受けながらも果敢にクラークンに攻撃を敢行した

そんな時、アルフォンスはクラークンに体当たり

アルフォンスの乗っていた船は、体当たりとクラークンの攻撃で碎け散った

その後アルフォンスは、人が居ない島

つまり、無人島に流れ着いた

しかもその無人島には、数多くの魔物が住み着いていた

アルフォンスは鍛えた剣技を活かし、その魔物達を倒し続けた

それよりも、アルフォンスとして悪かったのは、その無人島の位置だった

アルフォンスはほぼ毎日、崖から船が通らないか遠くを見続けた

しかし、影すら見えない

どうやらその無人島は、航路から外れているようだった

それでもアルフォンスは、船を待ち続けた

だが無人島で一人過ごし続けるアルフォンスを、絶望が覆いかけた
そんな時だった

ある崖の上に、それを見つけた

異世界食堂への、扉を

それが気になったアルフォンスは、ナイフを構えながらドアを開けた
た

「なんだ………は………」

内装を見たアルフォンスは、思わずそう呟いてしまった

そこに

「いらつしやい。あんた、随分とボロボロだな」

と先代店長が現れた

その先代店長に案内されて、アルフォンスは椅子に座ると「金なら、こんなにある。この店で、一番美味しいのをくれ！」と注文した

それを聞いた先代店長は、少しするとカレーライスを出したその匂いにアルフォンスは、空腹感を刺激させられた

久し振りの料理らしい料理に、アルフォンスは喉を鳴らしたそして先ずは、スプーンで茶色いスープ

つまりは、ルーを一掬いして口に入れた

その直後、アルフォンスを猛烈な辛さが襲った

その辛さにアルフォンスは、思わずコップの水を飲み干した

だが次の瞬間には、その辛さが絶望に覆われかけていたアルフォンスを目覚めさせた

そこからアルフォンスは、無我夢中にカレーライスを頬張った

辛いから止まりそうになるが、むしろその辛さがスプーンを動かした
続けた

時々、端に盛られている福神漬けで辛さを和らげて、口の中の味のリセットを図る

そしてある程度食べると、汗を拭って水を飲む

それから約二十年、アルフォンスは七日に一度異世界食堂に訪れては、カレーライスを食べた

だがその生活も、終わりを告げる時が来た

それは、アルフォンスがその島に訪れた時と同じような酷い嵐の翌日

なんと島に、船団が来たのだ

それも、アルフォンスの祖国たる公国の船団だった

そのことに呆然としてみると、アルフォンスの前に船から降りてきた捜索隊が現れた

その捜索隊は、アルフォンスと出会うと驚いた

まず、地図にも乗っていない島に人が居たこと
そしてなにより、それが死亡したと思われるいたアルフォンスだっ
たこと

なお船団が島に来た理由だが、船団の内の一隻が先日の嵐で破損
その破損では航行が難しく、更に船内に備蓄していた木材では足り
なかつたのだ

だから、たまたま見えたその島に接岸したのだ
そして勿論だが、修理には数日を要する

その最終日前日に、アルフォンスは異世界食堂に来店
今までと同じように、カレーライス注文
食べた

その時、店長は代替わり
更に、新しく明久が居た

その二人に

「店長達よ、今までありがとうな」

と言って、退店した

だがアルフォンスは、その店に様々な人種や公国の一人の騎士が居
たことを思い出し

(ふむ……どうせ、公国に帰っても引退は決まっている……ならば、扉
を探してみようか)

と決めた

それから、約三ヶ月後

元々は、農業用開拓地の一角だった場所

そこにあつた、もはや誰もが忘れてしまっただろうボロボロの物置
小屋

そこに、異世界食堂への扉があつたのだ

「あつた……やはり、探してみるものだな」

アルフォンスはそう言うと、扉を開けて入店

三ヶ月振りのカレーライスを食べたのだ

「我ながら、波乱に満ちた人生だな……」

語り終わったアルフォンスは、改めて認識したという感じで、そう

眩いた

すると、話を聞き終わったアレツタが

「ご苦労なさったんですね……」

と涙を拭きながら、そう言った

そこに、明久が現れて

「アレツタちゃん、仕事サボらないでねえ」

と言いながら、頭に手を置いた

それを傍目に、アルフォンスは店内を見回した

店長は代替わりし、更には新しい料理人たる明久と給士としてアレツタが働いている

最初は、先代店長と限られた客しか居なかったが、今や客は大勢来る

その違いを思い出したアルフォンスは

(私も、歳を取るわけだ……)

と内心で納得していた

すると明久が

「アルフォンスさん。カレーライスのお代わりは、どうしますか？」

と問い掛けてきた

その問い掛けに、アルフォンスは

「勿論、お代わりするぞ！ それも、大盛だ！」

と言った

それを聞いた明久は、頷こうとした

だが、何かを思い出したように

「そうだ、アルフォンスさん。実は、折り入ってご相談があるんです」

と言った

それを聞いたアルフォンスが、明久の方に視線を向けた

すると、店長も来て

「実は、宗教上の理由で豚肉は食べられないけど、鶏肉は食べられる。という外国の方々からの要望で、新しく作ったんです」

と言った

それを聞いたアルフォンスは、興奮した様子で

「異世界の異国の、新しいカレーライス！」
と言った

そして、二人に

「して、そのカレーライスの名前は!？」

と問い掛けた

すると、明久が

「はい、チキンカレーです」
と教えた

11 皿目 チキンカレー

それは、長い永い時の中、その場所で考え続けていた
そこには、その存在しか居ることを許されていない空間
普通の生命では、生きること叶わぬ場所

月

そこに居るのは、巨大な黒い龍

それは、悠久の時を生きてきた伝説の龍の一体だった

今から約十数万年以上昔、その世界は混沌が支配していた

それに立ち向かったのが、伝説の六体の龍だった

金、青、緑、白、赤、黒

その六体にはそれぞれ支配する属性があり、六体はその属性を駆使
して混沌に立ち向かった

何度も負けかけて、何度も混沌を滅し続けた

気の遠くなるほど戦い続けた

その結果、混沌を滅ぼすことに成功

しかしそれにより、一つ弊害があった

混沌の討伐により、星の生命体は黒の放つ死の力に耐えられなく
なってしまったのだ

それを憂いた黒は、自ら月に住むことにした

誰も死なせたたくないから

そうして、長い永い時の間、思考し続けた

そんなある日、黒の前に一つの扉があった

(扉……?)

長い間月に居た黒だったが、その扉は初めて見た

普段だったら、無視していただろう

だが長い間一人で居た孤独からか

はたまた気紛れかは、分からない

だが黒は

(入ってみよう……準備しなきゃ……)

と考えて、ある姿になったのだった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「チキンカレーか……」

「はい。是非、アルフォンスさんに試食してほしいんです。あ、お代は頂きません」

明久がそう言うと、アルフォンスは暫く考えて

「よし、分かった。食べてみよう！ 一皿くれ！」

と言った

すると、明久、店長、アレツタの頭の中に

(私にも……ソレ、頂戴……)

と声が聞こえた

「承りました、では二人前で……ん？」

「……あれ？」

「今、頭の中に声が……って!？」

一番先に見つけたのは、ドアの方に視線を向けた明久だった

ドアの前には、珍しく髪の毛の黒いエルフラしき少女が裸で立っていた

「おおお、お客さん！ 服は!？」

「デジャヴ!？」

「まさかの二度目!？」

三人が困惑していると、その少女は

(服? ……ああ、なるほど……少し待って)

アレツタをジッと見てから、コクリと頷いた

次の瞬間、色違いではあるが、アレツタの着ているウエイトレス服

と全く同じ服を構成した

ウエイトレス服だった理由は、恐らくだが女の子がアレツタだけ

だったからだろう

魔法に疎い殆どの人員は感嘆するのみだが、一人だけ飲み掛けている

たビールを吹き出した

(これでいい?)

「あ、はい……いやあ、魔法って凄いな……」

「ですね。テレパシーまで……そういえば、アレツタちゃんは？」

「私は、人間の血が濃い方で、使えませんか!?!」

店長達は呆気に取られていたが、吹き出した人物

老賢者、アルトリウスは

(魔法だど? 今アレは、何の触媒も使わずに、魔力とイメージのみで服を編み上げた……そんなの、ワシにも不可能だ……)

とその少女が行ったことに、戦慄していた

そして、その少女を見て

(もしか、あ奴……赤の同類か?)

とその少女の正体に、行き着いた

その間に、その少女を席に座らせて、明久とアレツタがトレイに料理を乗せてきて

「お待たせしました、チキンカレーです!」

とそれぞれの前に置いた

すると、チキンカレーを見たアルフォンスが

「ほう……あのカレーライスとは、大分違うな」

と呟いた

すると、明久が

「はい。今まで出していたカレーライスより、かなり辛いですから、気をつけてください。もし良ければ、こちらの粉チーズを使ってみてください」

と説明した

そして、明久が離れると、アルフォンスは

「まずは、スープからだな」

と言って、スプーンで赤いルーを掬った

それを喰い、少女もルーを掬って口に運んだ

「むうっ!? い、いかん! これは辛い!!」

ルーを味わったアルフォンスは、猛烈な辛さに襲われて、慌ててコップの水を飲み干した

だが、少女は多少驚いてはいるが、平然としている

すると、落ち着いたアルフォンスが

「なるほど……野菜が見当たらないと思えば、溶けてなくなるまで煮

込んであるのか」

と呟き始めた

それを聞いた少女は

（この男の言っていることは、分かる……このスープの中に、様々な味が溶け出して混ざりあっている……）

と思った

するとアルフォンスが、再びスプーンを持ち

「やはりカレーは、ライスと共に、だな」

と言って、ルーと一緒にご飯を掬った

そして、一口頬張った

すると

「やはりか!!」

とアルフォンスは、納得の声を上げ、少女は驚きで目を見開いていた

「ライスと一緒に食べることで、先ほど感じた猛烈な辛さが和らいで、先ほどよりも溶けている野菜の旨味をより感じる!!」

アルフォンスのその言葉に、少女は思わず頷いた

「そして何より、このチキンだ！ チキンの味だけでなく、溶けている野菜の旨味が合わさって、まさに主役だ！」

（うん、確かに……この力強さ……彼女を思い出す……）

アルフォンスの言葉に頷く少女の脳裏には、遙か昔に共に戦った烈火の如き人物が思い浮かんでいた

すると、アルフォンスは

「おお。そういうえば、あの若者が言っていたな。これを掛けても、美味しいと」

と言って、粉チーズの入った容器を持ち上げた

そして少し振って、一部に粉チーズを掛けて

「ふむ……中々の色合いだな……それに、カレーの熱さでチーズが溶けて伸びる」

とスプーンで持ち上げて、食べた

その直後、目を見開き

「おおー！ 更に辛さが和らぎ、食べやすい！ それだけでなく、チーズの濃厚な乳の風味が合わさって、ハーモニーを奏でている!!」

と絶賛

アルフォンスは残っているチキンカレーの半分、粉チーズを掛け、残り半分には掛けなかった

どうやら、そうやって二種類の味を楽しむようだ

気付けば、少女も同じようにしていた

そして、食べている二人を、キッチンから見ていた一同は

「同じカレーを食べてるとは、思えないですよね……」

「確かにな」

「対極的だしね」

と会話していた

アルフォンスは汗を流しながらに對して、少女は汗もかかずに食べている

余りにも、対極的だろう

それを見て、アレツタが

「だけど……幸せそうです」

と嬉しそうに言ったのだった

新しい仲間

「ふう……美味かったぞ！」

アルフォンスが満足そうに言うと、明久が近寄り

「どうでしたか、アルフォンスさん？」

と問い掛けた

するとアルフォンスは

「うむ！ 文句なしだ！ これならば、また食べたい！」

と太鼓判を押した

それを聞いた明久は

「ありがとうございます、それならメニュー入りは間違いなしですね」

と笑顔を浮かべた

アルフォンスが満足気に頷くと、少女がスツと皿を出した

どうやら、まだ食べたいらしい

それを見たアルフォンスは、嬉しそうに

「おお、同好の志が出来たのは嬉しいな！ よし、この少女の分は私の

ツケから払つといてくれ！ ではな！」

と言つて、退店した

それを見送りつつ、明久は少女からお皿を受け取り

「そんなに、美味しかったですか？」

と問い掛けた

すると少女は、無言でコクコクと頷いた

それを見た明久は、嬉しそうに

「うん、良かった」

と頷き、キッチンに入った

そのキッチンでは、店長がシチューが入ったお鍋を掻き回していた

最後のお客

あの赤の女王のために、焦がさないように掻き回しているのだ

「店長、チキンカレーはメニュー入り決定ですよ。アルフォンスさんの太鼓判でした」

「おお、それは良かった！ 少し不安だったからな」

明久の言葉を聞いて、店長は安堵の溜め息を吐いた
すると明久は

「じゃあ、新しいカレーを更に作りますか」

「それは、明久に任せていいか？ そろそろ、最後のお客が来る頃だ」

明久の言葉を聞いて、店長はそう言った

それを聞いた明久は、時計を見て

「あ、そうですね。あの人が来る時間ですね」

と同意しながら、チキンカレーをよそい、アレツタに渡した

そのチキンカレーを、少女の前に置いた

その直後

「店主達よ、来たぞ!!」

と元気よく、赤の女王が入店してきた

だが赤の女王は、チキンカレーを食べ始めた少女を見ると、驚いた
表情を浮かべた

それは、少女も同じだった

少女も、赤の女王を見て驚いていた

(なんと……珍しい奴と再会した……なあ、黒よ)

赤の女王は、その少女

黒の龍と同じだった

否、彼女達は遙か過去に共に戦った仲間だった

世界を救いし六柱の龍

その一柱が、常連客の一人たる赤の女王

そしてもう一柱が、今チキンカレーを食べている黒の龍なのだ

入店した赤の女王は、ビーフシチューを注文すると、黒の龍の前に
座った

それを見た店長は

「珍しい……あの人が、誰かと一緒に食べるなんてな……」
と呟いた

その黒と赤だが、端目に見たらただ黙々と食べているようにしか見
えない

だが実際には

(久しいな、黒よ……何万年振りか)

(約三万年……赤は、相変わらずだ……)

とテレパシーで、会話していた

(まさか、かの場所にも扉が現れるとはな……)

(赤は、あの扉を知ってるんだ……)

(ああ。約30年前から出ている。この店に来るための扉だ)

黒からの問い掛けに、赤はそう教えた

(この店に……)

(ああ。我々は、この店を異世界食堂と呼んでいる。このような食事、知らぬだろうか?)

赤の問い掛けに、黒は無言で頷いた

すると、赤は

(さて質問だが、この店で一番美味しいと思うのは?)

と問い掛けた

その問い掛けに、黒はチキンカレーを指差した

すると、赤は

(ふむ。お前はそれか……まあ、間違いだがな)

と言いながら、胸元に手をつ突っ込んだ

そして取り出したのは、一枚の金貨

(そして、この料理を食べるには、こういった金が必要だ)

赤がそう教えると、黒は少し固まり

(……持ってない……)

と俯いた

それを聞いた赤は

(やはり、かの場所に有る訳がないか……)

と納得していた

(この料理は、また食べたい……)

(ならば、我に任せろ)

黒の言葉を聞いて、赤はそう言って

「店主達よ！ 少しいいか！」

と店長達を呼んだ

「はい」

「どうしました?」

と店長と明久が現れると、赤は黒を指差し

「すまぬが、こいつは金を知らないのだ。まあ、かなり辺境に住んでるからな。だから、こいつをこの店で雇ってくれぬか?」

と提案した

それを聞いた、店長、明久、黒は驚いた表情で赤を見た

(赤! 私が居たら、人間は!)

(安心しろ、黒よ。あれから、どれほど時が経ったと思っている? 今の人間達は、かなり頑丈になっている。それに、この店に来る連中はこここの料理を食べて、生命力に溢れている)

黒の抗議に、赤はそう答えた

黒が司るのは、死

数万年前の人間や亜人達は、その黒が放つ気に当てられただけで命を落としていた

今はかなり押さえるために、人の姿を取っている

だが、流れていない訳ではない

ほんの僅かずつだが、流れている

それを危惧したのである

(まあ、我に任せろ)

赤はそう言うと、店長と明久に

「どうする?」

と問い掛けた

すると、二人は

「いやまあ、今でもかなりギリギリですから、助かるっちゃあ助かりませんが……」

「お客さんは、それでいいんですか?」

と黒に問い掛けた

その問い掛けに、黒は躊躇った

そんな黒の肩を、赤は優しく叩き

(お前は、永い間待ったんだ……もういい筈だ)

と促した

それを聞いた黒は、数秒間悩んでから、コクリと頷いた

それを見た二人は

「わかりました」

「それじゃあ、これからよろしくね」

と受け入れた

その後、彼女はクロと呼ぶことが決まり、お金を払う代わりに三食チキンカレーを出すことで決まった

こうして、新しいウェイターが加わったのだった

12 皿目 シーフードフライの盛り合わせ

「おい、ギレム……確か、美味しい魚料理を食べる店に連れていくと言っていたな……?」

「おうー!」

と会話しながら歩いていたのは、二人のドワーフだった

そんな二人が歩いているのは、険しい山道だ

「だったらなぜワシらは……山道を歩いておるんじや……」

「この先に、その美味しい魚料理を出す場所があるからに決まってるからじやろ」

ギレムの言葉を聞いて、ガルドは額に青筋を浮かべて

「山の上の方にか!?!」

と怒鳴った

その言葉に、ギレムは満面の笑みを浮かべて親指を立てた

「のう、ギレム……ワシはお前さんのことを、友人じやと思っておったわ……だがな!」

そのジエスチャーに怒り、ガルドは腰に携えていた斧に、手を伸ばした

その時、ガルドはその先に、一軒の不細工な山小屋があることに気が付き

「なんじや……あの山小屋は……」

と呟いた

すると、ギレムが

「おうー! ワシが建てたんじや! 流石に専門外だから、ちと不格好じやがの」

と答えた

それを聞いたガルドは、怒りで顔を赤くしながら

「おい……まさか、此処じやとか言わんよな……?」

と低い声で、問い掛けた

すると、ギレムは

「おう！ 此処が入り口じゃ！」

と言った

その瞬間、ガルドは斧を抜いて振り上げた

その時、その山小屋の奥に、趣の違うドアがあることに気付いた

「ん？ なんじゃ、あの扉は……？」

「あれが、目的の店……異世界食堂じゃ！」

ギレムはそう言って、ドアを開けた

すると、二人の耳にカウベルの音が聞こえて

(いらっしやいませ)

と頭の中に、声が聞こえた

それを聞いたガルドは、条件反射の域で斧を掴んだ

「待て！ 周りを見てみい」

だがそんなガルドを、ギレムは制止

周囲を見た

誰も、慌てていない

「どうやら……此が今の普通のようじゃな」

ギレムがそう言うと、アレツタが近寄り

「いらっしやいませ！ 洋食のねこやによるこそ！」

ともてなした

すると、ギレムは

「おう！ 今日のシーフードフライの盛り合わせは、なんじゃ？」

と問い掛けた

その問い掛けに、アレツタは

「はい！ 今日タラとイカ、それとホタテです！」

と説明した

それを聞いたギレムは、椅子に座りながら

「おう！ それじゃあ、そのシーフードフライの盛り合わせを二人前とビールを大ジョッキで二つじゃ！」

と注文した

その注文を受けたアレツタは、クロと一緒にキッチンに消えた

それを見たギレムは、物珍しそうに周囲を見ているガルドに

「ガルド、お前さんも座ったらどうじゃ」

と座るように、促した

「お、おお……」

促されたガルドは、小声で

「ギレム、ここは一体……？」

と問い掛けた

するとギレムは、得意気に

「ここはな、異世界食堂じゃ！ 魚料理だけでなく、あらゆる美味しい料理や美味しい酒がたんまりあるわい！」

と語った

それを聞いたガルドは、改めて店内を見回した

確かに、異世界と言われて納得してしまっている自分が居た

出身国だけでなく、様々な種族の者達がそれぞれ、料理を美味しくうに食べている

すると、クロとアレツタが大ジョッキを一つずつ持って現れて

「お待たせしました。ビールの大ジョッキです。シーフードフライの盛り合わせは、もう少々お待ちください」

と言って、大ジョッキを置いてから離れた

それを見送りながら、ギレムは

「このビールちゅうのはな、冷えた状態で飲むのが、一番美味しい！」

と力説し、大ジョッキを持ち上げた

それにガルドも追従し、大ジョッキを持ち上げた

そして

「乾杯!!」

と言いながら、大ジョッキをぶつけてから、一気に飲み始めた
そして、半分以上飲み干すと

「つかああああ！ 旨いもんじゃな！ このビールちゅうんわ!!」

とガルドが、上機嫌に言った

それを聞いたギレムは

「そうじゃろ！ そうじゃろ！ この喉ごしが堪らんわい！」

と同意した

そして、二人して

「嬢ちゃん！ このビールをお代わりじゃ！」

「もちろん、大ジョッキじゃ！」

と注文した

それを聞いたアレツタが返事すると、二人は残っていたビールを飲み干した

そして

「ビールも旨いが、このジョッキじゃ……これ程透明に作るのには、相当の腕が要る」

とガルドが、大ジョッキを軽く叩いた

ガルドは、ガラス職人なのだ

「ふむ。お主が言うんじやから、間違いないな……しかし、普段は細工を中心にしたお主から見たら、もの足りんのではないかの？」

ギレムのその言葉に、ガルドは首を左右に振って

「いや……ここまでになると、これ自体が一つの芸術作品……装飾は、要らぬ」

と断言した

そして、ジツとジョッキを見て

「今度、作ってみるか」

と呟いた

そこに

(お待たせしました。ビールの大ジョッキです)

と二人の頭の中に、声が聞こえた

気付けば、クロが両手に大ジョッキを持っていた

そしてクロが大ジョッキを置き、空の大ジョッキを持っていくと、入れ換わりに

「お待たせしました！ シーフードフライの盛り合わせです！」

とアレツタが現れた

そして二人の前に、狐色に揚げられた山盛りのシーフードフライの盛られた皿を置いた

「では、ぐゅっくりどうぞ」

アレツタがそう言つて下がると、ギレムが

「うむー。今回も美味そうじゃわい！」

と嬉しそうに言った

すると、ガルドが

「これが、魚料理……」

と怪しんでいた

無理もないだろう

ガルドが知る魚料理というのは、保存のためにしよっぱかったり生臭かったりで、美味しいと思つたことがなかったのだ

彼等の住むドワーフの国は、周囲を高い山に囲まれている

そんな地形ゆえ、商人達も中々来ないのだ

来ても、山を越えるために保存用に塩漬けされている

だからガルドは、魚の味を殆ど知らないのだ

「して、これらはなんじゃ？」

「この葉っぱみたいなのが、タラ。この丸いのがホタテつう貝。それに、ワシもよく知らん、イカという魚だ」

ガルドの問い掛けに、ギレムは一つずつ指差しながら教えた

そして、フォークを持ち

「さて、食うぞ!!」

と意気込んだ

ガルドは半信半疑ながらも、フォークで最初にタラのフライを刺して、口に運んだ

「ふおおおー！ これは美味しい!! これが、魚の味か!？」

初めての魚の味に、ガルドはそう声を上げた

すると、ギレムは

「そうじゃろー！ そうじゃろー！」

と同意しながら、バクバクと食べていく

ガルドも負けじと食べながら

「淡泊ながら、このフワフワとした食感が堪らんわい！ それに……つぶはあ！ ビールにも合う!!」

と上機嫌に笑った

それにギレムは

「まったくじゃ！ おい！ ビールのお代わりじゃ！」

とビールを軽く飲み干し、注文した

そしてガルドは、次に円形のフライ

ホタテのフライを刺して、口に運んだ

「ほおおお！ これも、また旨い！ 不思議な柔らかさだが、中から旨味が溢れてくる！」

「まったくよ！ このイカというのは、独特の噛みごたえだが、噛む度に味が染み出すようだ！」

二人はそうやって、皿に盛られていたシーフードフライを、次々と食べていく

そして、最後の一つをガルドが食べていると

「む？ それは、なんじゃ？」

とギレムが、シーフードフライに何かを付けていることに気付いたするとギレムは、それ

タルタルソースの盛られた器を指差して

「おお！ これは、タルタルソースつうてな。シーフードフライを食べる時には、外せんソースじゃ！」

と言った

それを聞いたガルドは

「そういうことは、先に言わんかい！」

と怒声を張り上げた

そして、アレツタに

「嬢ちゃん！ シーフードフライの盛り合わせ、お代わりじゃ！」
と注文した

その後、二人は飲み食いを繰り返した

そして気付けば、二人はあの山小屋の床に寝転がっていた
起きたガルドは、周囲を見回して

「あそこは……夢じゃなかったようじゃな」

ガルドは近くに転がっていた酒の空瓶を見て、そう呟いた

そして、酔い潰れているギレムを見て

「こいつには、感謝じやの」

と呟いた

そうして、机に触れて

「まずは、この山小屋をもっと立派な見た目にせんとな」

と言った

その後、ある山に立派な山小屋が建ち、山を越えてくる旅人達の休憩所になった

しかし、その山小屋の一角に、分厚い鋼のドアを有った

そのドアの奥には、何も無いと山小屋を建てたドワーフは言うが、その山小屋に定期的に二人のドワーフです足しげく通い続けるのだった

美味しい料理と酒を、堪能するために

13 皿目 カツ丼

「店長達よ！ 何時ものを頼むぞ!!」

と大声で注文しながら入店してきたのは、獅子の頭の魔族だったその人物を見て、明久は

「ああ、ライオネルさん。カツ丼大盛りですね。席に座って、待っててください」

と言って、キッチンに入った

それを聞いたライオネルは、適当な席に着席

出された水を飲みながら、ふと過去に思いを馳せた

それは、今から約二十年程前だった

彼はそれまで、旧き時代の魔族の生き方をしていた

約数十年も前に魔王が討たれてから、ずっと

彼はそれが当然だと信じ、繰り返ししていた

しかしある日、それは脆くも崩れ去った

その生活を壊したのは、たった一人のハーフエルフだった

ハーフエルフの剣士

嘗て魔王を討伐した、四英雄の一人

アレクサンドル

アレクサンドルにより、ライオネルが率いてた部下は全滅

そしてライオネル自身も、一太刀で敗北した

その後、ライオネルは剣闘奴隷として

ライオネルの部下達は、ライオネルの身分が決まるまで牢獄に監禁されることに決まった

剣闘奴隷から解放されるには、部下の分も含めて、金貨一万枚が必要と説明されたが、ライオネルは勝つ気がしなかった

たった一度の敗北が、ライオネルが長年築きあげた自信を、跡形もなく破壊していた

だからライオネルは、勝つ自信が一切沸かずに頭を抱えて悩んでいた

その時、ライオネルの居た牢獄の奥に扉があることに気付いた
それを見たライオネルは、最初は不思議に思った

なぜ、牢獄の中に別の扉が有るのかと

だがライオネルは、それは直ぐに頭の角に追いやり、扉を開けるた
めに、ドアノブに手を伸ばした

(どうせ、どうなるかは決まってる……だったら、どうにでも……)

と半ば自棄になりながらも、扉を開けた
すると

『いらっしやい』

と予想外の言葉が、ライオネルに掛けられた

ライオネルは室内を見回すと

『なんだ、ここは……』

と迎え入れた人物

先代店長に問い掛けた

すると先代店長は

『ここはな、洋食のねこやつつう飯屋だ！ いやあ、デカイお客さんだ
な！』

と朗らかに答えた

それを聞いたライオネルは、改めて店内を見回して

『あまり流行っているようには、見えないな』

と中々に辛辣なことを言った

すると先代店長は、豪快に笑いながら

『まあ、そうだな！ まあ、あんたらの世界には、まだ扉は少ないか
ら、仕方ないわな！』

と言った

それを聞いたライオネルは、不思議そうに首を傾げた

だが先代店長は、気にせず

『とりあえず、席に座ってくんな！ それで、何を食う？』

と席に座るように、促した

ライオネルは適当に座ると、先代店長に

『何が有るんだ？』

と問い掛けた

その問い掛けに、先代店長は

『そりゃあんた、何だつてあるぞ！ 料理屋だからな！』
と断言した

それを聞いたライオネルは、少し俯きながら

『……だったら、肉が食いたい……それに……戦いに……勝てそうなの……』

と呟くように言った

すると、直ぐに頭を上げて

『あ、いや！ 気にしないでくれ！』

と言った

だが、先代店長は

『よし、待っててくんない！』

と言った

それを聞いたライオネルは、驚いた表情で

『あ、あるのか!?!』

と問い掛けた

すると、先代店長は

『まあ、半分こじつけだがな！』

と言つて、キッチンに入つていった

その時、少し離れた席に座っていた別の客

アルフォンスが

『店長よ！ カレーライス、お代わり！』

と注文していた

それから、数分後

『お待ちどおさん！ カツ丼だ』

と先代店長が、ライオネルの前に丼を置いた

『肉と卵。それに、オラニエとライスで栄養抜群だ！ 食いな！』

『あ、ああ……』

ライオネルが頷くと、先代店長はまたキッチンに消えた

それを見送つてから、ライオネルはフォークを取った

そして先に、見えていた肉をフォークで刺して、口に運んだ

『おおー、柔らかい!』

その柔らかさに、ライオネルは驚愕の声を漏らした

そして、別の肉を刺して断面図を見て

(食べるために育てた豚か! 話には聞いていたが、こんなに美味くなるのか!)

と驚いていた

ライオネルが知っている豚肉は、野生の物なので少し硬い

その違いに驚いたのだ

そして、再び肉を食べると、肉の下にライスがあることに気づいた

そのライスを、フォークに乗せて口に運んだ

(んん? 甘辛いタレが掛かっているから、不味くはねえが……ようは、水増しってやつか?)

とライオネルが首を傾げていると、アルフォンスが

『ふむー、やはり、カレーはライスと共にだな!』

と言った

それを聞いたライオネルは、少し考えてから

(一緒にか……)

とフォークの上に、ライスとカツを乗せた

(見た目は、中々だな……)

ライオネルはそう思うと、口に運んだ

その直後

『うめえええええええ!!』

と、文字通り吼えた

そして、丼を見ながら

(なるほど! 肉だけじゃあ、味が少し濃い! 逆に、ライスだけじゃあ少し薄い! その二つと、甘く煮られているオラニエ! 三つを一緒に食べることで、バランス良く、絶妙な味わいになる! これで、カツ丼は完成してるのか!!)

と思った

そこから、ライオネルは文字通りにカツ丼を掻き込み始めた

余りの美味しさに、止まらなくなったのだ
そして、一杯食べ終わったのだが

『足りねえ……全然、足りねえ……』

とライオネルは呟いた

そこに

『ほいよ、カツ丼お代わりだ』

と先代店長が、新たな丼を置いた

するとライオネルは

『いや、しかし……今俺は、手持ちが……』

と申し訳無さそうにした

すると、先代店長は

『ん？ 気にしなくていいぞ？ つけで』

と言った

それでも、ライオネルは躊躇っていた

すると先代店長は

『嫌なら、俺の飯になっちゃうぜ？ 金なら、ある時払いの催促無しだ』

と言った

それを聞いたライオネルは

『……ありがてえ』

とそのカツ丼を、受け取った

結局ライオネルは、カツ丼を三杯お代わりした

すると、そこに先代店長が歩みより

『さて、お代だが……』

と言い掛けた

それを聞いたライオネルは

『おいおい、ある時払いつて言ったじゃねえか』
と言った

すると先代店長は、わざとらしい顔で

『おっと、そうだったか？』
と首を傾げた

その仕草を見て、ライオネルは気付いた

先代店長は言外に、何時でも来いと言っているのだと

魔族と知りながらも、暖かく出迎えてくれているのだと

実を言えばライオネルは、魔族としての力を振るって、食べ物を強奪することも考えた

だが、一人の客として暖かく出迎えてくれた先代店長に、そんなことはしたくなかったのだ

だからライオネルは、去り際に

『また来るぞ、店長……今度は、金を持ってな!』

と言って、退店した

その後ライオネルは、強力な魔物たるマンティコアをたった三撃で撃破

それを皮切りに、その闘技場で無敗の王者として君臨するようになり、嘗ての部下達は警備係として働くことになったのだ

(お待たせしました、カツ丼の大盛りです)

頭の中に聞こえた声で、ライオネルの意識は今に戻った

そして、カツ丼を置いたクロを見て

(あいつ……かなり強いな……)

と思った

だが、すぐにカツ丼の蓋を開けて

(だが、ここでは戦わん。ここは飯屋なんだ……飯を食う所で、戦う訳にはいかん……何時かは、戦ってみたいがな)

と思うと、何時ものようにカツ丼を一口食べ

「美味しい!!」

と咆哮をあげたのだった

14 皿目 味噌カツ丼

「つはあ……今日も、疲れたあ……」

と言ったのは、白を基調にした服を着た日本人の青年
藤丸立夏だった

その隣には、白いパーカーを着て、眼鏡を掛けた少女が居て
「お疲れ様です、先輩」
と労った

そんな彼女の名前は、マシユ・キリエライト
今この二人は、前代未聞の大偉業を為している途中なのだ
「今日は、どうしようかな……」

立夏はそう言いながら、自室に向かおうとした
その時

「あれ……」
と足を止めた
「どうしました、先輩？」

マシユがそう問い掛けると、立夏はある方向を指差して
「あんな扉、有ったっけ？」
とマシユに問い掛けた

問われたマシユは、その方向を見て
「いえ……初めて見ました、あのような扉……」
と呟いた

その先にあったのは、一つの木製の扉
二人はその扉に近づいて
「えつと……つて、日本語だこれ」

立夏はその扉に書かれている文字を見て、思わず驚いた
何故なら、今居る場所では英語が日常的に用いられている
立夏も、ある程度は英語が話せるので苦ではない
しかし、久し振りに日本語を見たので、驚いたのだ
「なんて、書いてあるんです？」

「洋食のねこや……だね」

マシユの問い掛けに、立夏はそう答えながら、扉を開けた

「いらっしやいませ、洋食のねこやにようこそ！」

入店した二人を出迎えたのは、ウェイター

アレツタだった

今まで様々な場所を巡った二人だが、目の前のアレツタのように、流暢な日本語を話す亜人は余り会ったことが無かった

だから固まっていると

「どうしたのかな？」

と、キッチンから一人の成年

明久が出てきた

「あ、明久さん」

「え」

「ひ、人!？」

そんな明久を見て、立夏とマシユは驚きの声を上げたのだった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「なるほどね……人理焼却か……」

と言ったのは、立夏とマシユの二人から話を聞いた明久である

「つまり、それによって人類が全滅するかもしれない……つと」

「はい」

「その通りです」

明久の言葉を聞いて、立夏とマシユは頷いた

今三人が居るのは、本来は従業員の休憩室だ

「よく頑張ってるね、君たちは……僕より、若いだろうに……」

明久がそう言うと、立夏が

「でも、俺達にしか出来ないのなら、やります」

と力強く断言した

それを聞いた明久は、頷くと

「よし、料理を出してあげるよ」

と言って、立ち上がった

すると、立夏が

「けど、俺達は今お金が……」

と慌てていた

立夏達はねこやに来る少し前に、人理焼却に関する旅から戻ったばかりで、財布を持っていなかった

「ん？ 大丈夫。ツケでいいよ」

明久はそう言うと、通常のメニューを二人に出して

「何がいいかな？ なんなら、メニューに無いのも、ある程度は出せるよ？」

と言った

それを聞いたマシユは、メニューを開いて見始めた
だが立夏は、少し迷った様子で

「あの……」

と明久に、視線を向けた

「なにかかな？」

明久が問い掛けると、立夏は遠慮気味に

「味噌カツ丼……いいですか？」

と明久に問い掛けた

マシユが視線を向けると、立夏は懐かしむように

「その……母さんの得意料理だったので……」

と言った

それを聞いた明久は

「ん、了解」

と二人を、休憩室からホールの方に移動させた

料理が出されるまでの間、二人はホールに居る様々な種族の客を見ていた

「さっきの方……吉井明久さんは、異世界食堂と言っていましたか……納得ですね」

「うん……あそこに居るのは……竜人っていうのかな？ あっちは、エルフ……あれは、侍みたいだね……」

と二人は、珍しそうに見ていた
そこに

(お待たせしました、味噌カツ丼です)

と頭の中に、声が聞こえた

そして目の前に、一つずつ丼が置かれた

丼を置いたクロは

(では、ごゆっくり)

と言って、去っていった

見送った二人は、丼の蓋を開けた

「これが……味噌カツ丼……」

「うん……懐かしい……」

二人の鼻に、味噌の濃厚な匂いが漂ってくる

二人は、箸を持つと

「では」

「いただきます」

と挨拶してから、食べ始めた

「わっ……凄く美味しいです！ 味噌の濃厚さと、出汁が合わさって、トンカツの脂を包み込んでます！ エミヤさんの凄く美味しいですが、流石は本職の方です！」

一口食べたマシユは、興奮した様子でそう言った

エミヤというのは、よくキッチンに立っている赤い弓兵である

なぜ弓兵が、キッチンに立っているのかは、気にしてはいけない(戒め)

味噌カツ丼を一口食べた立夏は、薄く涙を流しながら

「……うん、美味しいね……」

とマシユに同意した

少し味に差違はあるが、立夏にとっては懐かしい味だった

母親が、よく祝いの日に作ってくれた

明久が作ったのは、その味に迫っていた

それが、立夏に涙を流させていた

そして同時に、改めて決意させた

「絶対に、人理焼却を防ぐ……！」

立夏はそう言うのと、味噌カツ丼を食べることに意識を集中させた

それを見ていた明久は、眩くように
「うん……頑張れ、二人共……」
と言ったのだった

少女の一步

「……だよね……」

と言ったのは、一人の日本人の少女だった
長い黒髪が特徴で、年齢は二十になったばかりだ
そんな彼女が見ているのは、一軒の店の扉

「今日は休業日らしいけど……大丈夫、だよね……お婆ちゃんから、鍵借りたし」

その少女、早希は言いながら、ポケットの中から出した鍵を見た

それは、彼女の祖母から貸し出された鍵だ

彼女の両親は厳格な人物で、二十歳まではバイト禁止にしていた
学生は学業が本分で、バイトに時間を割いて成績を落とす訳にはい
かない

と言っていた

それは早希も納得していて、二十歳になるまでは我慢していた
そんな彼女だが、やはり周りでバイトして欲しい物を買っていた友
達には羨ましいと思っていた

そして、約一ヶ月前に二十歳を迎えた

だから早希は、近場でバイト先を探していた

そこに、祖母が現れた

そうして手渡されたのは、一つの古びた鍵

「洋食のねこや……お爺ちゃんがお婆ちゃんと開いた店みただけど
……」

彼女だが、今通っているのは料理学校だ

もうすぐで卒業だが、何時かは自分で店を切り盛りしたいと思っ
ている

そして何より、憧れの人物が居た

それは、自分が通っている学校でのある意味で伝説とも呼べる偉業
を成した人物

「……今、何処に居るんだろ……」

早希はそう言いながら、ある一冊の雑誌を取り出した
それは、ある人物を扱った特集号

「一年で卒業して、その後は日本全国を旅……その理由が、味の探究
……料理人ならではの理由だなあ……」

その人物の年は、卒業時には19歳
今は22歳になっている筈だ

「そういえば、お婆ちゃんは早希なら大丈夫な筈だと言ってたけど
……どういう意味だろ……?」

それは、鍵を手渡された時だった

祖母は鍵を渡す時に、少し意味深な笑みを浮かべて

『まあ、少し特殊だけど……早希なら大丈夫な筈だよ』
と言っていたのだ

その意味が、まだ早希には分からない

「そもそも、亡くなったお爺ちゃんのこともよく知らないし……」

今から行こうと思っている、洋食のねこやの先代店主

山方大樹

そのモットーは、料理人は美味しい料理を提供出来ればそれでよし
その代わり、値引きもボツタクリもしない

それを信条として、戦後少しした後には店を開いたらしい
お爺ちゃんとの出会いは、戦時中と聞いていた

詳しくは聞いていないが、大変だったらしい

「今は、叔父さんが経営してるんだよね……」

丁度よく周りに、ねこやで働いている友人が居たから聞いた

『時給は安いけど、賄いが凄く美味しい』

『今はもう一人の料理人のおかげで、賄いのレパートリーが劇的に増
えた』

とのことだった

そのもう一人の料理人というのは、結局教えてもらえなかったが、
まあ会えば分かるだろう

早希はそう思って、ペットボトルを飲み干して、階段を降りたの

だ
っ
た

少女との面接

「……完全に風邪ですね」

と言ったのは、体温計を見た明久である

その明久の前には、布団で寝ている店長の姿がある

「体調管理は……気を付けてたんだがな……」

「まあ最近、気温差が激しかったですからね……」

明久はそう言うのと、横にD A O A R Aのペットボトルを置いて立ち上がり

「とりあえず、今日はゆつくりと休んでください。僕が何とかしますから」

と言って、部屋から出ようとした

すると、店長が

「あー……今日、俺の親戚がバイトの面接に来るから……頼んだぞ」

と言った

それを聞いた明久は、ドアを潜って

「分かりました。丁寧に対応します」

と言ったのだった

この時明久は、その店長が若干笑みを浮かべていることに気づかなかったのだった

そして、開店してから少しして

「いらつしやいませ！ 洋食のねこやにようこそ！」

と一人の少女を、アレツタが出迎えた

「え、えつと……お客さんってわけじゃなくて……」

「？」

入ってきた少女

早希の言葉に、アレツタは首を傾げた

すると、早希は

「え、えつと……店長さん、呼んでください」

と言った

それを聞いたアレツタは

「えっと、店長はちよつと体調不良でおやすみなんです。ですので、もう一人の方を呼んできますね！」

と言つて、キッチンに消えた

それを聞いた早希は、思わず首を傾げた

(そう言えば、二人目って誰だろ……?)

早希は祖母から店長のことは聞いていたが、二人目のことは何も聞いていなかった

そう考えていたら、アレツタが一人の料理人と共に出てきた

その人物を見て、早希は頭の中が真っ白になった

なにせその人物は、早希の憧れの人物

自分を通っている、料理学校の伝説を打ち立てた人物なのだから

(え?! な、なんでここに彼が!?)

と早希が狼狽している間に、アレツタともう一人の料理人

明久が近寄り

「えっと、もしかして君が店長が言つてた親戚さんかな？」

と早希に問い掛けた

その問い掛けに早希は、思わず無言で頷いた

それを見た明久は

「良かった。それじゃあ、こつちに来て」

と早希を、キッチンの方に招き入れた

そして早希を、キッチンの奥

休憩フロアに入れた

案内される短い間、早希は混乱しながらも必死に考えていた

(な、なんで彼がここに!?! 彼は確か、卒業後は日本一周をした……)

そこまでは、月刊料理人に掲載されてた。けど、その後はまた行方が分からなくなつてた筈……噂では、海外に行つたつて言われてたけど……)

と思考している間に、休憩フロアに到着

明久に促されて、早希は椅子に座つた

すると、明久は

「えつと……店長からはバイトの面接って聞いたけど……」
と問い掛けた

その問い掛けに、早希はコクコクと頷きながら

「こ、こちらに履歴書を用意しました！」

と言つて、机の上にカバンを置いて開けた

その拍子に、カバンが倒れて、カバンの中が机の上に広がった

そして、明久はある一冊の雑誌が目に入り

「ぶっ!？」

と吹き出した

それは、以前に店長が出した月刊料理人の明久を取り扱った特集号
だった

「あ、わあ!？」

それに気付いた早希は、慌てて雑誌をカバンに仕舞った

しかし、明久はバツチリ見ている

「もしかして、君の通っている学校って……」

と問い掛けた

すると、早希は

「はい……栄哲料理学校です……貴方が一年で卒業した……」

と言った

それを聞いた明久は、右手で顔を覆って

「あちゃー……」

と声を漏らした

しかし、すぐに背筋を伸ばして

「だけど、それとこれは別……キッチンと、面接するからね……」

と言った

それを聞いた早希は、頷き

「お、お願いします！」

と頭を下げた

「まず、君は何を目指してるのかな？」

「はい、料理人です！ 美味しい料理を提供出来る料理人になりたい
です！」

明久の問い掛けに、早希はそう答えた

それを聞いた明久は、コクリと頷き

「それじゃあ、ここを受けた理由は？」

と問い掛けた

すると、早希は

「最初は祖母の紹介でしたが、調べているうちにここで働きたいと思
いました」

と答えた

その後も、少しの間面接は続いた

それが終わると、明久は

「これで、面接を終えます。お疲れ様でした」

と頭を下げた

すると、早希も頭を下げて

「ありがとうございました！」

と言った

それに頷くと、明久は

「えっと、一つ聞きたいんだけど……」

「はい、なんででしょうか！」

明久が問い掛けると、早希は思わず背筋を伸ばした

それを見た明久は、半ば確信しながらも

「君が憧れてる料理人は、誰？」

と問い掛けた

すると早希は、少し顔を赤らめて

「その……貴方です……吉井明久さん」

と告げた

それを聞いて、明久は

「まあ、同じ料理学校だもんね……僕のことを知ってるか……」
と呟いた

そして、早希に

「だけど、僕は君が憧れるような人物じゃあ……」
と言いかけた

だが、それを遮るように早希は

「いえ、貴方は私が憧れる料理人です……学校に残っていた、映像……その手際は、既に一流の域でした……しかし貴方は、それに満足することなく、飽くなき探求心で卒業後は、味の探求のために日本を一周……その姿は、正に私が目指す料理人の姿でした」

と言った

それを聞いた明久は、恥ずかしそうに頭を掻いた

そして、立ち上がり

「それじゃあ、何か食べるかい？」

と問い掛けた

15皿目 和風ハンバーグ

「し、しかし……私は、面接に来たのに……」

「幸いにも、今日はお客さんが中々来ないし。それに……料理屋に来たのに、何も出さないっていうのは、僕の矜持に反する」

早希が躊躇っていると、明久はそう言った

それを聞いた早希は、少し考えて

「では……ハンバーグをお願いします。和風で」
と言った

それを聞いた明久は、少し考えて

「ふむ……紫蘇は？」

と問い掛けた

その問い掛けに、早希は

「あ、お願いします」

と言った

それを聞いた明久は、頷いてからキッチンに入った

そして、十数分後

「お待たせしました。和風ハンバーグです」

と早希の目の前に、ハンバーグが置かれた

そして明久は

「それじゃあ、ごゆっくり」

と下がった

それを見送ると、早希は置かれた和風ハンバーグを見た

大根おろしが掛けられたハンバーグは、見事な焼き色をしている

なぜ、ハンバーグを注文したのか

早希の考えだが、ハンバーグはオムレットと並ぶ洋食の基本にして、料理人の腕が如実に現れる料理だと思っている

挽き肉の割合から、捏ね方、焼き方

それらが調和して、完成する

なおハンバーグだが、発祥は意外と日本だったりする

(焼き色は、完璧……)

まだ未熟だが、料理人の早希からしたら、明久の焼いたハンバーグの焼き色は完璧だった

適度な焦げ目で、食欲を増進させてくる

(問題は、味だけど……)

早希はそう思いながら、フォークとナイフを使って切り分けた

切り分けたハンバーグの断面から、肉汁が溢れてくる

(凄い……焼きすぎず、生焼けでもない……)

そのハンバーグは、かなり厚い

だと言うのに、生焼けになっていない

そして早希は、特製らしいソースを使っただと思われる大根おろしを

少し付けて、口に運び驚いた

(何処に紫蘇が有るのかと思ったら、細かく刻まれて、ハンバーグに混ぜてある！ それに、肉汁から仄かに和風出汁が感じられる……！)

お肉自体の味付けは、最低限にしてあるんだ！)

明久の創意工夫に、早希は驚いていた

和風ハンバーグで紫蘇を入れるとしたら、大根おろしに切って混ぜ

るか、ハンバーグの表面だろう

しかし明久は、意表を突くハンバーグに混ぜるという方法でしてきた

口の中で噛む度に、紫蘇と肉の風味が広がり混じり合う

予想外の調理法

しかも、紫蘇の風味を損なわずに焼くという技量まで見せた

それらと、大根おろしのタレが見事に、口の中でハーモニーを奏でていた

(学校に居た時から、凄い技量だと思ってた……けど、今も凄い！)

明久の技量に、早希は素直に尊敬の念を抱いた

恐らく、そのアイディアも日本を一周している間に考えたのかもしれない

だが、それを実現するには多大な努力と苦労が伺える

しかし、それを苦にしながらも、諦めずに実現

お客に提供している

それは一重に、美味しい料理を食べてほしいから

それこそ、早希が目指す料理人の姿だった

(やはり、尊敬出来ます……)

早希はそう思うと、料理を食べることに意識を集中させた

出された料理を、美味しい内に食べなければ、勿体無いと思ったからだ

そして、食べ終わると

「御馳走様でした……」

と呟いた

そこに、コーヒーを持った明久が来て

「はい、食後のコーヒー」

と提供した

早希は、それに砂糖とミルクを入れて

「美味しかったです……」

と素直に称賛し、コーヒーを一口飲んだ

それを聞いた明久は、微笑んで

「ありがとうございます」

と頭を下げた

そして、早希に

「面接結果は、店長伝いに連絡されるはずだからね」

と早希に言った

「はい」

「まあ、君なら間違いなく採用だから。頑張ろうね」

早希が頷くと、明久はそう言いながら、右手を差し出した

それを見た早希は、一度明久を見てから

「よ、よろしくお願いします……」

と握手に応じた

こうして、ねこやに新しいウェイトレス兼料理人見習いが加わった
なお帰る時、オムライスを食べていたあるリザードマンに驚くことになるのだった

16皿目 オムライス

青尻尾一族の勇者、ガガンポ

彼は、青尻尾一族の勇者の義務を果たしに行く準備をしていた勇者の義務

それは、七日に一度出てくるドアの向こう

つまりは、異世界食堂に行き、ある料理を持ち帰ることそれが勇者の義務になった理由は、今から約二十年程前

青尻尾一族が流浪の民だった頃、今の村の中心地にそのドアが現れた

そのドアを最初に潜ったのが、当時の青尻尾一族の勇者だった

そして青尻尾一族にて勇者を決める方法は、一年に一度、村の若者のオス達が戦い合い、最強を決めるのだ

「ガガンポよ……勇者の義務、頼んだぞ」

「は、長よー」

村の子供達から金貨、銀貨、銅貨が入った袋と、木製のお皿を受け取ると、ガガンポはドアを潜った

「いらつしゃいませー！ 洋食のねこやにようこそー！」

入ったガガンポを出迎えたのは、アレツタだ

クロは、ハーフエルフの女性の対応をしている

「ム、キタ」

ガガンポはそう言うと、持っていた木製の皿を手渡して

「オムライス、大盛り。ソレト、オムレツヲ3ツ」と注文した

皿を受け取ったアレツタは

「はい、分かりました！ お持ち帰り用のオムレツ三個は、帰る際に渡します！」

と言って、奥に言った

それを見送ったガガンポは、近くの椅子に座った

そして、店内を見渡した

今日はどうやら、あまり客はいないらしい
何時もより、かなり静かだった

そして、待つこと少し

「お待たせしました！ オムライスの大盛りです！」

とアレツタが、オムライスを持ってきた

それを見たガガンポは、両手を合わせて

「イタダキマス」

と言った

ガガンポは礼儀を重んじており、店長から食べる際に言う言葉を聞いて、実践している

曰く

『戦士ナラバ、礼儀ヲ尽クスモノ』

との事だ

閑話休題

ガガンポはスプーンを持つと、スプーン一杯にオムライスを乗せてから、口に運んだ

(美味い……どうすれば、このような焼き方が出来るのか……)

ガガンポが知る卵料理は、どうにも味が薄い

しかしオムライスは、卵もだが中に詰まっているオレンジ色のご飯
チキンライスも、素材を活かしつつ、素晴らしい味が口に広がる

何度も食べているが、初めて食べた時の事を思い出した

ふと気付けば、既に半分以上食べていた

それに気付いたガガンポは、近くに来たクロに

「オムライス、オカワリ」

と注文した

(承りました)

クロは頷くと、奥に消えた

そして、一つ目のオムライスを食べ終わる直前に

(お待たせしました、オムライスの大盛りです)

と新しいオムライスを持ってきた

「ム、アリガトウ」

ガガンポはそう言うと、一皿目の最後の一口を口に運んだ

(一口食べる度に、口の中に様々な味が広がる……卵、肉、野菜……それらが纏めあげられて、調和している……)

空になった一皿目を、クロが持つていく間、ガガンポは口の中の味を反芻

確りと味わっていた

そうして、二皿目に取り掛かった

そして、二皿目を食べ終わった

そこに

「お待たせしました。お持ち帰り用の、パーティーオムレツ3種です」
明久、クロ、アレツタの三人が、一皿ずつオムレツが乗せられた皿を持つてきた

それを見たガガンポは、腰の袋を取って

「オカンジヨウ」

と言った

それを聞いた明久は、自分が持っていた皿を置いて

「えつと……はい、貰いました」

と袋の中から、銅貨を数枚取った

なおガガンポ達青尻尾一族にとって、金の使い道は無く利用する機会はない、このねこやのみだ

では、どうやって獲得しているのか

それは、彼等が住む場所には、時おり旅をしている冒険者等が来るその冒険者や商人が、魔物に襲われて命を落としたり、荷物を放り投げて逃げる場合が多々ある

その者達が落とした硬貨を見つけては、回収

洗って、保存しているのだ

会計が終わると、ガガンポは袋を腰に戻し、両手と尻尾で一皿ずつ持って

「マタナ」

と言って、器用にドアを開けた

「はい！ また七日後にお越しください！」

明久はそう言うと、深々と頭を下げた

そして、ドアを潜ると

「おお！ ガガンポが帰ってきたぞ！」

「お帰り!!」

と村の者達が、総出で出迎えた

「戻ったぞ。料理も、この通りだ」

ガガンポはそう言って、オムレツを近くの机に置いた

そこに、長老が来て

「では、切り分けるかの」

と言って、ラップを切ってからオムレツを切り分け始めた

そして、青尻尾一族の全員が食べるのを、ガガンポは少し離れた場

所から見ている

勇者は、オムライスを食べられる代わりに、オムレツが食べられないのだ

それを少し残念に思うが、ガガンポは

（まだ勇者を譲るつもりはない……次の儀式も勝って勇者になり、また一年間オムライスを味わおう）

と心に決めて、尻尾で地面を叩いたのだった

記録の地平線

「うう……今日は、一段と寒いな……」

と言ったのは、鎧を着た大柄な男性だった

その男性の名前は、直継

陽気な凄腕守護戦士だガーディアン

すると、隣を歩いていた小柄な少女忍者が

「今日は、北からの強い風が吹いている……もしかしたら、雪が降るか
もしれないな」

と言った

彼女の名前は、アカツキ

見た目から分からないかもしれないが、一応20代である

「早く帰って、ご飯を食べたいね」

そう言ったのは、右手に杖を持った三白眼の青年

シロエだった

通称、腹黒眼鏡とも呼ばれる参謀役である

そんな三人の話を聞いて、猫の獣人

にやんた班長が

「にやあ……今日は、何を作りますかにや?」

と呟いた

そんな話をしている間に、彼等の家が見えてきたのだが

「……ん?」

とシロエが、首を傾げた

そんなシロエに気付いて

「どうした、シロ?」

「主君?」

「シロエち?」

と三人が視線を向けた

すると、シロエは

「なんか……妙な魔力の流れが……」

と言いながら、家のドアを開けて、中に入った

すると、同じ家に住む仲間達が一ヶ所に集まっているのが見える
するとシロエは、その仲間達の一人の少女に視線を向けて

「ミノリ、何かあった？」

と問い掛けた

すると、問い掛けられた巫女少女にして、ある意味シロエの弟子
ミノリは、振り向いて

「シロエさん、あれを見てください」

とホールの真ん中に屹立している、巨木の根元を指し示した
そこには、一つの黒い木製のドアが有った

「これは……」

「ドア、だな……」

それを見たアカツキと直継は、呆然と呟いた
すると、侍少年

ミノリの双子の弟、トウヤが

「それが、俺達がクエストから帰ったら有ったんだ」

と言った

それを聞いたシロエは、ゆっくりとドアに歩みより

「……凄い魔力だ……何らかの魔道具みたいだ」

と言った

すると、にやんた班長が

「にやあ……この名前は、知ってますにや」

とドアに掛けられている札に、手を添えた

すると、吟遊詩人の少女

五十鈴いすずが

「知ってるんですか、にやんたさん？」

と問い掛けた

すると、シロエと同じようにドアを見ていた金髪の魔法使いの青年
ルンデル・ハウス・コードが

「こっちの字は読めないが、ねこや……と読めるね」
と呟いた

すると、にやんた班長が

「洋食のねこやですにや……久しぶりに、このドアを見ましたにや」と感嘆していた

料理好きなにやんた班長らしく、どうやら知っているようだ

「そういえば、にやんた班長って、料理関連の本を出す会社で働いてましたよね」

と言ったのは、シロエである

それを聞いたにやんた班長は、頷いてから

「この料理は、大変美味しいですよ。我が輩が保証しますにや」と言った

それを聞いたシロエは、頷いてから

「ふむ……なんで有るのか分からないけど……入ってみようか」

と提案し、全員が頷いたのを見てから、ドアノブに手を掛けた

17皿目 キーマカレー

(いらつしやいませ。洋食のねこやに、ようこそ)

店に入ったシロエ達全員の頭の中に、声が聞こえた

「今のは……」

とアカツキが呟いた直後に、全員の前にアレツタが現れて

「いらつしやいませー!」

と快活な笑みを浮かべた

すると、シロエが

「あの、ここは……」

と言葉を漏らした

すると、アレツタが

「ここは、洋食のねこやと言いまして、別名は異世界食堂ですよ!」

と告げた

それを聞いたミノリが

「異世界食堂……」

と呟いた

すると、トウヤが

「異世界って……どういことだ……?」

と首を傾げた

その時

「なにかあった?」

とキッチンから、明久が出てきた

その明久を見て、にやんだ班長が

(この青年は、確か……)

と顎に手を当てて、黙考していた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ゲームに閉じ込められる、大災害……」

「はい……日本だけで、推定三万人が閉じ込められました!」

フロアの一角で、明久はシロエからシロエ達の状況を聞いた

シロエ達が居るのは、ある老舗MMORPGの世界らしい

「んー……ニユースでは、そんな話は聞かないですから……やはり、別の地球なんでしょうね……」

「なるほど……確かに、異世界ですね」

明久の話を聞いて、シロエはそう結論付けた

しかし、頭の中では

(やっぱり、あのドアが異世界に繋がってる……つまり、あのドアの仕事組を解明すれば……)

と考えていた

その時、不意にキュルル……と音が聞こえた

それを聞いた明久は

「何か食べますか？ 大抵のものなら、提供出来ますよ？」

と笑顔で言った

それを聞いたシロエは、少し驚いた表情で

「え、でも……お金は……」

と言い淀んだ

シロエ達が使うお金は、そのゲーム世界で使うお金だ

一応、現実たるこの異世界食堂で使えるとは、思っていなかった

すると、明久が

「まあ、現実と行き来出来るようになったら、払ってもらいますよ。それまでは、ツケでどうですか？」

と提案した

どうやら、シロエがゲーム世界と現実世界の往来する方法を探していることに、気付いたようだ

明久の提案を聞いて、暫く黙考すると

「わかりました……ありがたく、その案に乗らせてもらいます」

と頭を下げた

それを聞いた明久は、アレツタに

「アレツタちゃん、奥の休憩部屋に置いてある黄色の箱から何冊か茶色のメニューを持ってきて。クロさんは、人数分のお冷やを」

と指示を出した

そして明久は、キッチンへと入っていった
それを見送った後、先にクロが来て

(どうぞ)

と人数分の水を、置いていった

その後、アレツタが

「お待たせしました。メニューです」

とメニューを数冊、机の上に置いていった

それを持ったメンバーは、メニューを見ながら

「どれがいいかなあ」

「迷うなあ」

と話していた

そんな中で、にやんた班長は

(我が輩が伺った時より、メニューが増えてますにや……やはり、彼の
恩恵ですかにや?)

と考えていた

すると、シロエが

「あの、すみません」

とクロに視線を向けた

(なんででしょうか?)

クロが顔を向けると、シロエは

「このメニューに無いのも、頼めるんでしょうか?」

とクロに問い掛けた

すると、クロは

(少々お待ちください)

と言って、キッチンに入ってしまった

少しすると、明久が出てきて

「何をご注文で? 物によっては、お断りすることになりますが……」
と告げた

すると、シロエが

「えっと……キーマカレーなんです……大丈夫ですか?」
と問い掛けた

それを聞いて、明久は

「ああ……運がいいですね、お客さん……試作品になりますが、ありますよ」

と言った

そして続けて

「それで良ければ、お出しすることが出来ます。あ、その場合はお代は頂きません」

と言って、頭を下げた

それを聞いたシロエは

「では、お願いします」

と言った

それを聞いて、明久は

「承りました」

と頷いた

他のメンバーは、それぞれ好きな料理を注文

そして、暫くして

「お待たせしました！ キーマカレーです！」

シロエの前に、そのカレーが置かれた

キーマカレー

細かく刻まれた具材によって作られた、カレーである

そもそもキーマというのは、タイの言葉で細かくという意味らしい
なぜ、キーマカレーを注文したのか

それは、シロエが幼い頃によく行っていたカレー屋で食べていたカレーの一種類だったからだ

その店の名前は、生憎と覚えていない

一度死んだことで、記憶の一部を失ってしまったからだ

だが、味は覚えているつもりである

そしてシロエは、キーマカレーを一口食べた

口の中に広がるのは、細かく刻まれた具材の風味

それらと香辛料が合わさり、非常に深い味わいが口の中に広がっていく

(久しぶりに食べたな、キーマカレー……)

そもそも、キーマカレーは日本では余り食べられないカレーだ

日本で一般的なのは、アルフォンスが食べているカレーだ

だが、シロエにとっては慣れ親しんだ味

だから気が付けば、我無捨羅に口に運んでいた

そもそも、シロエはカレーが好きなのだ

そういう意味では、アルフォンスと気が合うのかもしれない

そしてシロエは、食べ終わると水を飲みながら

(今度、にやんた班長に作ってもらおうかな……)

と考えていた

にやんた班長が、彼のギルドの料理長なのだ

にやんた班長の腕前ならば、遜色無いキーマカレーを作ってくれる

だろう

とシロエが思っていると、明久が近寄り

「どうでしたか？」

と問い掛けた

すると、シロエは

「はい、美味しかったです。また食べたいですよ」

と答えた

それを聞いた明久は

「それは良かった。だったら、メニュー入りは決まりですね」

と頷いた

その後シロエは、もう一杯キーマカレーを食べて退店

そして、消えていくドアを見ながら

(あのドアの仕組み、研究してみよう……そうすれば、往來の方法が確

立しそうだ)

と頷いた

そうして、近くに居るメンバーに

「また来週、行こう」

と宣言したのだった

18 皿目 牛丼

「では、またな。店主に早く治るように、言っておいてくれ」
「はい、ありがとうございます」

赤の女王に頭を下げて、明久は赤の女王を見送った
そして、退店すると

「よし、お疲れ様」

とクロとアレツタを労った

（お疲れ様でした）

「お疲れ様でした」

すると二人も、労いの言葉を口にした

そして、明久は

「それじゃあ、夜食を食べようか」

と二人と一緒に、奥の休憩フロアに入った

そして、明久は

「クロさんは、チキンカレーね」

とクロの前に、チキンカレーを置いた

表情は変わらないが、嬉しいのだろう

耳がピコピコと動いている

それを微笑ましく思いながらも、明久はアレツタの前に一つのどんぶりを置いた

「今日の夜食は……牛丼だよ」

「牛丼……？」

アレツタは首を傾げながら、どんぶりの蓋を開けた

すると見えたのは、茶色の食べ物だった

「これが、牛丼……」

「うん。牛肉とオラニエを甘辛く煮た料理だよ。食べ方は、豪快に掻き込む」

明久はそう言うと、今自分で言った通りに牛丼を掻き込むように食べ始めた

それを見たアレツタは、何時もの言葉（省略版）を言ってから、一口食べた

次の瞬間、アレツタは驚いた

口の中に、力強い牛肉の味が広がった

「ふわあ……」

その味に、アレツタは思わず吐息を漏らした

（甘辛い味に煮られながら、牛肉の風味が損なわれてない……！ それに、オラニエも！）

柔らかく煮られた牛肉とオラニエタマネギ

その二つとタレが染みたご飯

それが、一体となって美味しかった

だからか、アレツタは気づけば牛丼を掻き込んでいた

そして、一杯食べ終わると

「うん。ようやく、何時もの笑顔だね」

と明久が言った

それを聞いたアレツタは、キョトンとした

すると明久は

「今日のアレツタちゃん。朝からずっと、何処か心ここに有らずって感じで、気落ちしてたみたいだったからね」

と言った

それを聞いたアレツタは、どんぶりを置くと

「……その……仕事は、なかなか見つからないんです……」

と語りだした

アレツタは半魔族であり、半魔族は忌避されていた

だからアレツタのような半魔族は、隠れ里に住んでいた

しかし、アレツタの両親は病気で死んでしまった

それを期にアレツタは、大きな街に入り過ごそうと思った

それは、街に憧れていたから

だが、現実は厳しかった

仕事はなかなか見つからず、両親が残してくれたお金は最早残り僅か

そんな矢先に、アレツタはねこやのドアを見つけ、今はウェイターとして働いている

それにより、ある程度の余裕は出来てきた

しかし、無駄使いは出来ない

だからアレツタは、仕事を探し続けた

しかし、今のところ全て空振り

その理由の過半数が、半魔族だから

仕事斡旋所で教えてもらった先に行っても、拒否されるか、安い賃

金で過酷な労働ばかりだった

流石に長く続き、アレツタも精神的の参っていたのである

「なるほどね……」

「すいません……仕事に影響するなんて……」

明久が頷くと、アレツタは申し訳なさそうに頭を下げた

すると、明久は

「仕方ないよ……それは、気落ちするさ……」

と頭を撫でた

そして、アレツタに

「でも、大丈夫……アレツタちゃんなら、きっと見つけれられるさ……その

笑顔を、忘れなければね」

と微笑みを浮かべながら、告げた

この後、アレツタはもう一杯牛丼を食べた後に帰宅

そして翌日、仕事斡旋所に行き、ある一ヶ所を教えてもらった

そこは、町外れの一軒家

「今度こそ……」

アレツタはそい意気込むと、ドアをノックして

「あの、すいません！ 斡旋所から紹介されてきました!!」

と言った

すると、ドアが開いて

「待ってたわ！ 困ってたのよ!!」

と中から出てきたのは、ねこやの常連の一人

サラだった

「あ、え……貴女……」

「メンチカツの……」

二人は最初、呆然と見つめあった

そんな時、サラがアレツタを抱き締めて

「採用!!」

と言った

こうして、アレツタは新しい仕事を見つけたのだった

新たな始まり

「いやあ、先週は助かった」

「いえいえ、お客様があまり来なかったので、大丈夫でしたよ」

二人はそう言いながら、エレベーターに乗った

そして、ねこやの階に止まり

「さて、予定通りなら、先に来てる筈だが……」

「ああ、彼女ですか？」

と二人が、ホールに出た

すると、ウエイトレス姿の早希が居て

「今日から、お世話になります」

と頭を下げた

すると、二人は

「よろしくな、早希ちゃん」

「これからは、仲間だね」

と言った

その直後、ドアが開き

「おはようございます！」

とアレツタが現れた

そして、ドアが閉まった直後にまたドアが開き

(おはようございます)

とクロが入ってきた

「おう、おはようさん」

「おはよう、クロさん」

「クロさん、おはようございます！」

と店長、明久、アレツタの三人が挨拶した

そして店長と明久は

「さてと、二人に紹介するか」

「今日から、一緒に働くことになった」

と早希に視線を向けた

すると、早希は

「山方早希です。よろしくお願いします」

と無難に、挨拶した

そこから全員で、掃除をしていると

「アレツタちゃん、表情よくなつたね?」

と明久が、アレツタに問い掛けた

すると、アレツタは

「はい! 新しい仕事、見つかりました!」

と笑顔で言った

「お、それは良かったな。何処だ?」

アレツタの話を聞いた店長が、そう問い掛けると

「はい。メンチカツさん……サラ様の家のハウスキーパーです!」

と言った

サラの家

ゴールド家は、長い歴史を誇る大陸に誇る大商家である

サラはその家の長女なのだが、ある情熱に突き動かされて、実家を飛び出して、別荘の一つに住んでいるのだ

その別荘に住んでいるサラだが、家事が苦手で、掃除や洗濯が出来ないでいた

そのためにサラは、斡旋所にハウスキーパーの募集を頼んだのだ

その募集に、アレツタが来た

正に、サラにとっては運命だっただろう

サラは半魔族に対する差別感は無く、アレツタに対する印象は良かった

それに何より、アレツタは働き者である

賃金も良好で何より、その別荘に住めることになった

廃墟の教会より、遥かにマシな条件である

「なるほどねえ……」

「良かったな、頑張れよ」

「はいー」

アレツタの話を聞いた店長と明久は、そう言ってアレツタの頭を撫

でた

そして、アレツタとクロを見た早希は

「本当に……異世界に繋がってるんだ……」

とドアを見た

それは、つい先日のこと

早希の祖母から、話を聞いたのだ

異世界食堂

今から、約三十年前に始まった店

先代店長とそのウェイターの二人で、始めた小さな店

最初はまったく客が来なかったが、ドアが増えていき、風の噂を聞き付けてか、少しずつ異世界からの客は増えた

今の店長はまだ独身で、跡取りはどうするのかは未定

だが、将来有望な料理人が来た

しかし、先は分からない

「うん、頑張ろう……慣れることから」

早希はそう呟きながら、机を拭いた

そして、掃除が終わるとドアが開き

「いらっしやいませ、洋食のねこやにようこそ！」

入ってきた客を、全員で出迎えた

19 皿目 マルゲリータピザ

「ダメだ！ これも失敗だ！」

と少年

シリウスは、レシピを書いた羊皮紙をグシャグシャにした

若き経営者、シリウス・アルフェイドは祖父から受け継いだアルフェイド商会を繁盛させようと、ねこやレシピの再現を試みていた
だが、上手くいっていなかった

その大きな理由は

「なんで、僕には料理の才能が無かったんだ……」

正確には、高い料理の才能が無いだ

大商会の若き経営者となったシリウスだが、ある程度ならば料理も作れる

しかし、それほど高い料理技能を有していなかった

祖父たるトマスは、かなりの料理技能を有していたので、一人でもねこやのレシピをある程度再現出来た

しかし、そのトマス程の料理技能を有していないシリウスは、再現に苦慮していた

「早く、新しいレシピを出す必要が有るのに……！」

新しいレシピの再現の為に、シリウスはここ数日は自室に込もっていた

別に義務では無いのだが、シリウスは早く出したかった

商会の各支部の支部長の中には、シリウスを軽く見ている者も居る
その支部長を従わせる意味も込めて、新しいレシピを出したかった
そこに

「ぼっちゃん！ 大丈夫ですか!？」

「お前、何処から入ってきてる!？」

窓から、褐色肌の料理人が入ってきた

なお、シリウスの自室は二階にある

壁の凹凸を登ってきたようだ

その若い料理人は、アルフェイド商会お抱え料理人の一人であり、シリウスの幼馴染みの一人

レウス・アルイーダだ

「ぼっちゃん、この三日まともに食事すら摂ってないじゃないですか！」

「ああ……そんなに経ってたか……」

レウスに言われて、シリウスは頭を掻いた

どうやら、日数感覚がおかしくなっていたようだ

そしてシリウスは指折り数えると

(あ、明日は……)

とあることに気づいた

そして、レウスを見た

レウスは若いのが、今のお抱え料理人達の中では、頭一つ抜けた料理の才能を有している

そして何より、口も堅い

(……よし)

シリウスは自分を見て首を傾げるレウスに

「レウス。明日だが、朝早くに第一倉庫に来てくれ」

と言った

そして、翌日

「ぼっちゃん、本当にいいんですか？ 自分なんかが、大事な場所に……」

「お前だから、連れていくんだ」

シリウスはそう言うと、ある空の木箱を退かした

その先に見えたのは、倉庫からは予想出来ない木製のドア

ねこやのドアだった

「このドアは……」

「旨い料理を出す店……異世界食堂の入り口だ」

シリウスはそう言って、ドアを開けた
すると

「いらっしやいませ！ 洋食のねこやにようこそー！」

とアレツタやクロ、早希が出迎えた

「ん、貴女は……」

「新しく給士になりました、早希と言います」

シリウスが視線を向けると、早希はそう言った

そして二人を席に案内すると、アレツタが

「こちら、メニューになります」

とメニューを渡そうとした

だが、シリウスは首を左右に振って

「いや、すまないが決まってるんだ……マルゲリータピザをくれ」

と注文した

それを聞いたアレツタはキッチンに行き、入れ替わりに早希が

「お冷です。おかわりは自由ですので、お気軽に声をお掛けください」

と言って、下がった

すると、水を一口飲んだレウスが

「なるほど……薄く柑橘が搾ってあるんですね……」

と即座に、看破した

レウスが若くしてお抱え料理人なってる所以は、料理の才能と舌の

繊細さだった

すると、シリウスは

「うん、流石だ。レウス。やはり、お前を連れてきて正解だった」

と頷いた

そしてシリウスは、レウスに

「いいか、レウス……この料理を再現すること……それが、アルフエ

イド商会の商機に繋がる……」

と言った

それを聞いたレウスは

「そこまで、ですか……」

と呟いた

その言葉を聞いたシリウスは、軽く回りを見ながら

「レウスなら分かるだろ？……この調度品が、どうなのか」

と言った

それを聞いたレウスは、ソースの容器を持ち上げて

「はい……これもですが、この灯りや、あの小さい箱？　みたいなもの……どれも、見たことがあります……」

と言った

レウスが言った箱というのは、ピアノの上に置いてあるラジオのこ
とだ

「ああ……洋食のねこや……またの名前を、異世界食堂……ここは、僕達からしたら、異世界にあるんだ……」

とシリウスが言った

そこに

「お待たせしました、マルゲリータピザです」

と早希が、料理を持ってきた

そして、二枚の小皿とタバスコを置き

「こちらは、お好みでお使いください。では、ごゆっくり」

と言って、下がった

それを見たシリウスは

「じゃあ、食べようか。これは、熱いうちに食べるのが旨いんだ」

と言って、一枚掴み上げた

それを見たレウスは、シリウスのマネをして一枚掴もうとしたが

「熱っ！」

熱さに驚き、思わず取り落とした

だが、今度は掴み上げて

「おお……これは、チーズか？　凄い伸びる……」

と呟いてから、一口食べた

そして、目を見開き

「この赤いソースは、マルメットか……」

と呟いた

それを聞いて、シリウスは

「やはり、気づいたか」

と言った

すると、レウスは

「このソース……茹でたマルメットの皮を剥いて、それをすりつぶし、幾つかの香辛料……ハーブとコショウ……か？ それを混ぜてる……」

と呟いた

たった一口食べようだけで、レウスはシリウスが苦勞して割り出したソースの味に気づいた

(流石だ、レウス！)

シリウスは心中でレウスを称賛しながら、マルゲリータピザを見て「この料理は、我がアルフェイド商会が独占してるマルメットと大部分を握ってる小麦を使っている……」

と言った

すると、レウスは頷いて

「はい……この生地は、小麦に塩と……お湯でしょうか？ 水では、この柔らかさは苦勞します」

と分析していた

そして、具の一つ

ベーコンを食べて

「この肉も……燻製してあるんですね……しかも、野菜もわざと、生で乗せて焼いている……それが、このシャキシャキ感に繋がってるんですね……」

と呟いた

そこまで聞いたシリウスは、更に一口食べて

「この料理の素晴らしさは、ベースがシンプルだということだ……薄いパン生地に、マルメットのソース」

「その上に乗せる具を変えれば、色々な種類の料理が出来ます！」

シリウスの言葉を継ぐ形で、レウスはそう言った

それは、シリウスの考えと全く同じだった

「更に言えば、このソースも、麺に応用出来る筈だ」

と言った

それを聞いたレウスは、思わずと言った様子で

「た、確かにそうです！」

と納得していた

そこから二人は、更に分析するためにマルゲリータピザを食べた
「このチーズ……少し、酸味を感じる……発酵に秘密があるのか……」
「端の部分……厚いだけじゃなく、フワフワしている……これは、どうすれば……」

そして議論を重ねていくうちに、一枚食べ尽くした
すると、シリウスは

「……よし、味を比べたい……レウス、一緒にミートソーススパゲッティを食べるぞ」

とレウスに提案した
すると、レウスは

「はい！……ここまで来たら、最後までお付き合いします！」
と意気込んだ

その後二人は、クロが運んできたミートソーススパゲッティを食べた

そして、二人は帰宅

早速、再現に取り掛かった

その数日後、引退していたトマスを唸らせる料理
ピザを高いレベルで、再現

そのレシピを、各支部に伝わらせた

これを期に、シリウスはアルフェイド商会での立場を磐石にする
(これが、僕のやり方です。お爺様！)

アルフェイド商会を長年栄えさせる、二人が産まれたのだった

20 皿目 フライドチキン

「ふう……」

と一息吐きながら、タツゴロウは愛刀を鞘に納めた
そして、腕を回しながら

「私も、年を取ったな……」

と呟いた

今しがた彼は、旅の途中で寄った村の村長からの依頼で、近くの街
に通じる洞窟に住み着いた魔物を討伐したところだった

タツゴロウの前に別の冒険者に頼んだそうだが、帰ってこなかった
から、偶然来たタツゴロウに依頼してきたそうだ

相手は力と耐久に優れていたために、討伐するのに多少手こずって
しまった

だが、タツゴロウ自身に負傷はない

いくら力自慢だろうが、大振りの攻撃に当たる程ボケてはいない
しかし、やはり年なのだろう

戦ってる間は気にならなかったが、終わった途端に体の節々が痛み
だす

「さて、この後はどうするか……」

とタツゴロウは呟いた

村に戻れば、村人達が祝いの宴を開くだろう

魔物が洞窟に陣取ってしまったために、街から必要な物品が得られ
なくなっていたらしい

食糧は狩りや山菜、河魚等でどうにかなっていたようだ

「む、そういえば……この近くに扉があったな……」

ふとタツゴロウは、今居る場所の近く

とは言え歩いて一日あるが、にねこやの扉があることを思い出した
扉が出るのは、二日後

今日は村でゆつくりと休み、明日出れば、十分に間に合う

「……考えてみれば、一月振りか」

前回ねこやに行ったのは、約一ヶ月前になる

その後タツゴロウは、気ままに旅をしていた

その間、土曜日でも近くに扉が無かったり、近くでも日程が合わなかったりと、運が悪く、涙を飲んでいた

「……我ながら、現金なものだ」

ねこやに行けると思ったら、体の痛みが引いた

その現金さに、思わず苦笑してしまった

「さて……倒した証拠を持っていかないと……何処がいいか……」

体長5mに迫る巨人の遺体を見上げて、タツゴロウは思わずそう呟いた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして二日後

「ふむ……誰も、使っていないな」

ねこやの扉のルールは、幾つかある

例えば、一つの扉を使えるのは一日に一回だけ

つまり、先に誰か他の人が使っていたら、使えない

だからタツゴロウは、先に誰か使っていないか、地面を見た

そして、ドアノブを掴んで開いた

「いらつしやいませ！ 洋食のねこやにようこそ！」

とタツゴロウを出迎えたのは、早希だ

アレツタは、別の客

ハイインリヒにエビフライを出している

「君は……」

「あ、新しく給士になった早希と言います」

タツゴロウが問い掛けると、早希はそう言いながら頭を下げた

それを聞いたタツゴロウは、椅子に腰かけて

「すまんが、フライドチキンとウイスキーを頼む」

と注文した

「はい、わかりました」

注文を聞いた早希は、キッチンに消えた

何時もならば、お気に入りの照り焼きチキンを頼むが、今日は二日

前に魔物を討伐したからか、どうも気が昂ってしまい、より風味の強い肉を食べたい気分だった

そして頼んだフライドチキンだが、強くスパイスが効いており、更に油で揚げたのであるので、どうも胃もたれする料理だ

そんなフライドチキンに合う酒が、清酒ではなく、ウイスキーだ

こちらもまた、独特の風味がする酒で、以前に飲んだドワーフの火酒に近いが、火酒より飲みやすい酒だ

すると、近くに座っていたライオネルが

「随分と、気が昂っているな」

とタツゴロウに声を掛けてきた

その言葉に、タツゴロウは

「いやなにな……二日ばかり前に、強い魔物と戦ってな……どうにも、気が昂っているのだ」

と答えた

するとライオネルは

「なるほどな……気持ちには分かる」

と頷いた

今や最強の剣闘師と名高いライオネルだが、時々手強い相手と戦うこともあり、その後は気が昂ってしまう

それを思い出したようだ

そこに

「お待たせしました、ウイスキーです」

と早希が、ウイスキーを持ってきた

そして、それと入れ替わるように

(フライドチキンです、お待たせしました)

とクロが、フライドチキンが盛られた皿を持ってきた

そのクロを見送ったタツゴロウは

「……あのエルフ……ただのエルフではないな……」
と呟いた

だが、すぐにフライドチキンに視線を戻し

「では、いただく」

と一言言ってから、フライドチキンを手を取った
骨ごと揚げたフライドチキンは、まだ熱い

だが、タツゴロウはそのまま衣に包まれた鶏肉にかぶり付いた
鶏肉の弾力のある肉を噛み千切ると、口の中に油と一緒にスパイス
の風味が広がる

照り焼きチキンとは違い、かなり脂っこい

しかし、今はそれが美味しかった

一つを食べ終わると、コップに注がれたウイスキーを一気に飲み干
した

それにより、酒の風味が口の中に広がり、喉を焼いた

このウイスキーは、かなりアルコールが強く、一気に体が火照る
それが収まらない内に、新しいフライドチキンにかぶり付いた

普段は礼節を弁えるタツゴロウだが、やはり気が昂っている影響で
食べ方もどこか荒々しい

まるで肉食の獣のように、骨から鶏肉を噛み千切って、咀嚼してい
く

まあ、明日は胃もたれに襲われるだろうが、いい薬も入手している
なんとかなるだろう

タツゴロウはそう結論着けて、ウイスキーを飲み干した

そして、フト

(一度国に戻ったら、素質のある奴にこの店のことを教えてやろう)
と決めた

そうこうしている内に、皿のフライドチキンが残り僅かになり

「すまんが、もう一皿フライドチキンを頼む」

と近くを通った早希に頼んだ

今日は、何時もより食べるつもりだ

臨時収入があつたから、懐に余裕もあるのだから

21 皿目 納豆スパゲツテイ

「……………こら辺の筈だけど……………」

彼女

ファルダニアはそう言いながら、周囲を見回した

今彼女が居るのは、父親から教えられたエルフの隠里がある森だ

その隠里には、その父親の親友が住んでいて、今のファルダニアと同じように料理の研究をしているらしい

その時ファルダニアは、ある一本の巨木に手を触れて

「ん……………見つけたわ」

と呟いた

そのエルフの隠里だが、他の種族や魔物に入られないために、様々な魔法が施されていた

その内の一つに、結界による空間遮断があった

「父さんは念話して、向こうから開けてもらえって言ってたけど……………この位なら……………」

ファルダニアはそう言っつて、自分一人が入れる位のサイズの間隙を開け始めた

その時、隠里のある一つの家にて

「ん……………誰か、結界に干渉しているな……………しかし、力業ではない……………あ

あ、手紙の子か……………200年程なのに、大した技量だ……………これなら、ガーディアン守護神が出ることもないだろう」

と一人のエルフの男性が呟き、また研究に意識を戻した

その頃ファルダニアは、結界をすり抜けて隠里に入った

「……………かなりの規模ね……………最初は気づかなかったけど……………守護神も居たわ……………」

守護神というのは、古代エルフが作り出した隠里を守護する存在だ

隠里を守る最終装置

もし、様々な魔法を突破し、結界を強引に開いた場合は、その守護神が排除するために動く

その能力は非常に高く、軍隊ですらまともに太刀打ち出来ない
まさに、守護神なのである

「えっと、すみません。この里に、料理研究をしている人が居るって
……」

とファルダニアは、一人の女性に問い掛けた
するとその女性は、手をポンと打ち

「彼の家なら、最近変わった匂いがしてるから、すぐに分かるわ」
とある方向を指差した

そして、十数分後

「この匂い……なにか、嗅いだ覚えが……」

ファルダニアはそう呟くと、ドアをノックした
すると、少ししてから

「はい……ああ、君か。待っていたよ」

と一人の男性が出迎えた

彼の名前は、クリステイアン

ファルダニアの父親の親友で、ファルダニアと同じく料理研究家だ
「お久しぶりです、クリステイアンさん。100年振りでしょうか」

「そうだね。いや、美人になったものだ」

クリステイアンはそう言いながら、ファルダニアを出迎えた

そしてファルダニアは、中に入ると

「それにしてもこの匂い……何処かで嗅いだような……」

と言った

それを聞いたクリステイアンは

（なるほど……物怖じしない性格だな……）

と思った

「ファルダニアは、チーズを知っているかな？」

「チーズって、牛や羊の乳を暗い所に保存して、カビさせて作った物？

美味しそうに食べてるのは、見たことあるけど……」

クリステイアンの問い掛けに、ファルダニアはそう答えた

すると、クリステイアンは

「ああ……それを人間は、発酵と呼ぶんだ。これは人間が飲む酒もそ

うらしいが、一部の食べ物は発酵させて作るらしい……私はその発酵を、エルフ豆で行っているんだ」

と説明した

エルフ豆というのは、エルフならばほぼ誰もが知っている不思議な豆である

枯れた土地でも栽培出来て、その枯れた土地に活力を与える不思議な豆だ

若い内に採取すれば緑色で、熟成すれば土色に近い黄色に育つ豆だ
煮て食べれば、少し甘い味わいがする

「エルフ豆は分かるわ……けど、発酵……」

「実は……そのエルフ豆を発酵させた物を、食べたことがあるんだ」

ファルダニアの呟きに、クリステイアンは確信した表情でそう返答した

（実物は度々食べてるんだ……後は、あの味を再現するだけだ）

「食べたって、この里にはそういう物が？」

クリステイアンの言葉を聞いて、ファルダニアは驚いた表情を浮かべた

しかし、クリステイアンは

「いや、ここには無い……ああ、いや、有るとも言えるかな？」

と首を傾げた

「どういうこと？」

「……今から10年程前、この里の中に、異世界に繋がる扉が現れ始めたんだ」

クリステイアンのその言葉に、ファルダニアは

「それって!？」

と驚きの表情を浮かべた

それを見たクリステイアンは、頷き

「その様子では、知っているようだね……異世界食堂を」と言った

そして、十数分後

「いらっしやいませ！ 洋食のねこやにようこそー！」

「ん、新しい子のようだね?」

「あ、はい。新しく給士となりました。早希と言います」

クリスティアンが問い掛けると、早希はそう答えた
すると、キッチンから店長が出てきて

「これまた……珍しい組み合わせですね、クリスティアンさん」
と呟いた

すると、クリスティアンは

「彼女は、私の親友の娘だね。何時ものを頼むよ」

と注文した

「はい、承りました」

店長はそう言っ、キッチンに消えて

「では、お席に座ってください。今、お冷をお持ちします」
と早希が言った

そして、席に座ると

「かなり頻繁に来てるのね……」

「ああ……今から食べる料理に使われてる食材……納豆と言うんだ
が、それがエルフ豆によく似た食材なんだ」

ファルダニアの問い掛けに、クリスティアンがそう答えた

その数分後

(お待たせしました。納豆スパゲッティ、卵抜きです)

とクロが、料理を置いた

そのクロを見て、ファルダニアは

「……なに、今の子……エルフに見えるけど、エルフじゃないわよね
……」

と呟いた

すると、クリスティアンが

「ああ……私の推測だが、赤の女王と同等の存在だろう」
と語った

そして、クリスティアンはフォークを握り

「これが、納豆だ」

と納豆を一粒、フォークで刺して掲げた

それを見たファルダニアは

「確かに……エルフ豆に似てる……」

と呟いた

しかし、内心では

(この店……一体、どれ程のレパトリーが……)

と驚いていた

ファルダニアとしては、エルフに提供出来るのはトウフステーキだけだと思っていたのだ

「この納豆は独特の味と匂いがするから、私位しか注文している人を見たことがないが、美味しいよ」

「分かったわ……いただきます」

ファルダニアは頷くと、納豆スパゲッティを一口食べた
確かに、一口食べただけで独特の風味が口の中に広がる

最初は見た目の奇抜さから、敬遠してしまうだろうが

(美味しい！……けど、この味って……)

ファルダニアはある考えを確認するために、更に食べた

それを見たクリステイアンは

(ふむ……彼の言った通りだね……料理に対して、かなり食欲……食べながら、考えているね……)

とファルダニアを観察していた

もちろん、クリステイアンも食事しながら研究していた

納豆の触感や味を、頭に叩き込んでいた

もう幾度となく行っている発酵の研究

それを、モノにするために

そして、食べ終わると

「皿をお下げします」

と早希が近寄ってきた

すると、ファルダニアが

「ねえ、ライスと納豆を一緒に出してもらおうことって……出来るのかしらっ」

と問い掛けた

それを聞いた早希は

「少々お待ちください、確認してきます」

と言って、キッチンに入った

「店長、明久さん、お客様から質問で……ご飯に納豆を掛けたのを貰えないか、と」

「ウチは一応、洋食屋なんだがな……」

「まあ、出せるなら出しましょうよ、店長」

早希から質問内容を聞いて、店長は溜め息混じりに

明久は肩を竦めながら言った

それを聞いた店長は頷き

「出せますよ」

とカウンターから、顔を出した

「なに!？」

店長の言葉が予想外だったクリスティアンは驚き、ファルダニアは

「じゃあ、貰えるかしら?」

と問い掛けた

すると、クリスティアンも

「私も、ライスと納豆を」

と追加した

「はいよ、すぐにお出ししますよ」

そして、少しすると

「お待たせしました。ライスと納豆です」

と二人に、ご飯と納豆が提供された

「ありがとう……」

ファルダニアは受けとると、一口食べて

「やっぱり! 納豆はライスとよく合うわ!」

と声を上げた

そしてそれは、クリスティアンも感じていたことだった

(なんと!?! 納豆スパゲッティも、確かに調和していたが、こちらはまるで親友のような調和だ! 惜しむらくは、これを親友の娘が見つけたこと……私も、発想力が足りなかった……ということか……)

クリステイアンは素直に、ファルダニアの発想力を称賛したのだ
た

そして、退店間際に

「お客様、こちらを」

と明久が、ファルダニアに一つの包みを差し出した

「これは？」

「サーブスで作りました、オニギリセットです。旅をしているので
しょう？ 道中で、食べてください」

ファルダニアが問い掛けると、明久はそう言った

それを聞いたファルダニアは、少し迷うと

「ありがとう、貰っておくわ」

とカバンにしまった

そして、退店

クリステイアンの家に入り

「ああいう食材もあるのね……参考になったわ……」

と頷いていた

そこに、クリステイアンが

「これを」

と一つの壺を差し出した

「それは？」

「これも、エルフ豆を発酵させて作った物の一つ……味噌というんだ」

ファルダニアが問い掛けると、クリステイアンはそう言って壺の蓋

を開けた

中には、土色の粘土のような物が入っていた

「この匂いー」

「そう。これも、あの異世界食堂で使っている物と同じものだ……」

持っていていきなさい」

クリステイアンがそう言うと、ファルダニアはその壺をカバンに仕

舞い

「では、また何時か来ます」

とクリステイアンに一言言って、その里を去った

この後ファルダニアは、ある一人のハーフェルフの少女と出会い、二人で料理の研究を続けることになる

22 皿目 プリン・アラモード

東大陸において、帝国と大陸を二分する大国

公国には、ある一人の有名な王女が居た

その名は、ヴェクトリア

彼女は、ハーフエルフだった

しかし、直近にエルフの親は居ない

それは、隔世遺伝と呼ばれる現象だった

何代も前の先祖の遺伝子が、何らかの要因で強く現れるのだ

しかし、隔世遺伝とは言えども彼女はハーフエルフ

そして王女と言えども、ハーフエルフには王位継承権は与えられな
い

その理由が、今ではなく嘗ての帝国にあった

今から約60年程昔、帝国は一度亡んだ

その理由となったのが、旧帝国最後の王だった

旧帝国最後の王は、ハーフエルフだった

その旧王は、常人よりも遥かに永い時の間政務に付いた

その統治は優秀で、旧王は国民に慕われた

しかしある日、その旧王は自分の命が尽きることを察した

故に旧王は、当時最も信頼していた同じハーフエルフの宰相にある
指示を下した

それは、古代エルフが編み出した大禁呪の復活

それによる不死を願ったのだ

だが、それがいけなかった

考えるべきだったのだ

なぜ、古代エルフ達は編み出したその術を、大禁呪にしたのか

その大禁呪を使えば、使用者と対象者は理ことわりから外れた存在

死者リツチ王になるのだ

死者王となった二人は、理性を失い暴走を始めた

そして最悪なことに、旧王と宰相はそれぞれ、剣と魔法の高い使い

手でもあった

その二人を止めるために、旧帝国軍は全軍で交戦を開始したが、奮戦虚しく全滅

せめてもの救いは、後の新帝国の開祖にして王

ヴィルヘイムを含めた数多くの民間人を、逃がせたことだっただろう

そして数十年後、場所は変わったが帝国は復活を果たした

そしてヴィルヘイムは、ダンシヤクを帝国中に広めた後に引退した公国ではそれを教訓として、ハーフェルフが政治に深く関わることを禁止した

第二の旧帝国にならないために

だがヴィクトリアは、そのことを別段気にしなかった

ヴィクトリアは、自分の感性が普通の人間たる他の親族と違うことを自覚していたから

(まだかしら……)

そんな彼女は、与えられた西の離れの塔の研究室で、床に書かれた魔法陣を見ていた

ヴィクトリアだが、エルフの血故か魔法に高い適性を示した

魔法の修行を始めて約三ヶ月で、宮廷魔法使いの腕を越えた

その後ヴィクトリアは、約三年で師匠たる四英雄の一人にして、異世界食堂の常連

アルトリウスに一人立ちすることを許された

その後ヴィクトリアは、塔で魔法の研究をしながら、ある魔法陣を作り出した

それが、異世界食堂のドアを呼び出す魔法陣だ

その魔法陣を編み出したのは、アルトリウスだった

そしてヴィクトリアは、そのアルトリウスに連れられて異世界食堂を知ったのだ

「ようやくね……」

現れた扉を見て、ヴィクトリアは腰を上げた

そしてヴィクトリアは、扉を開けた

「いらつしやいませ！ 洋食のねこやにようこそ！」

「……新しい子？」

「あ、はい。新しく給士となりました早希と言います」

ヴィクトリアが首を傾げると、早希は名乗った

それを聞いたヴィクトリアは、近くの席に腰掛けながら

「そう……頑張つてね」

と応援した

「ありがとうございます」

早希はお礼を言いながら、メニューを渡そうとした

だが、ヴィクトリアは首を左右に振って

「プリン・アラモードをお願いするわ」

と注文した

「はい、承りました」

注文を受けた早希は、そう言つてキッチンに消えた

そして、数分後

「お待たせしました、プリン・アラモードです！ どうぞ、ごゆっくり」

とアレツタが、料理を持ってきた

底が高く広い透明の器に、震える黄色い食べ物

プリンを中心に、様々なフルーツや生クリームがふんだんに使われている

もし同じ物を公国や帝国で作ろうとした場合、一体どれ程の金額になるのか、ヴィクトリアにも予想出来ない

ヴィクトリアが知る限り、最近異世界食堂が発祥だと思われる食べ物の色々と出てきている

アルフェイド商会が出したピザや、ドワーフの国で作られ始めたウイスキー等が、その一例だろう

「……さて」

脇に逸れた思考を戻し、ヴィクトリアはスプーンを持って、まず生クリームを口に運んだ

まず感じたのは、柔らかさ

そしてほぼ同時に、仄かな甘さが口の中に広がった

帝国や公国では、お菓子は甘ければ甘いほど良いと考えられていて、かなりしつこい甘さで、金額も高くなる

しかし、異世界食堂は違った

控え目な甘さだが、それがフルーツや主役たるプリンと調和する使用されるフルーツも、時季により変わる

今は柑橘とイチゴ、生成り色の果物のようだ

柑橘は酸っぱく、生クリームで甘くなった口の中を爽やかにしてくれる

生成り色の果物は、まったりと甘い、しつこくない

そしてイチゴは、一つ一つで味が僅かに異なる

甘かったり、酸っぱかったりと、味に変化があつて、飽きない

そしていよいよ、主役

プリンに差し掛かった

プリンにスプーンを刺すと、僅かな抵抗の直後に掬えた

プリンはかなり柔らかく、簡単にスプーンで掬える

そしてそのプリンを、口に運んだ

すると、プリンに使われている卵の風味と甘さ

そして、キャラメルソースとやらのほろ苦くも甘い味が、一気に口

の中に広がる

ヴィクトリアは、このプリンに夢中だった

初めて異世界食堂に来たのは、今から数年前

まだアルトリウスに師事していた時だった

ある日アルトリウスは、ヴィクトリアを連れて異世界に向かった

その理由が、メニュー作りの為だった

異世界食堂のメニュー表

それは、約30年の間に一部常連客と共に作り上げた物なのだ

ヴィクトリアが担当したのは、デザート類

店長が代替わりした際、新しくデザート類が追加された

しかし、常連客の殆どが甘いことに苦手意識が強かった

その際にアルトリウスが、ヴィクトリアを連れてきて、デザート類のメニュー作りを手伝わせたのだ

その一番最初に食べたのが、プリン・アラモードだった

(私が書いたのは、一枚だけの筈だけれど……)

ヴィクトリアはそう思いながら、早希やアレツタが持っているメニューを見た

ヴィクトリアが書いたのは、一枚ずつ

しかし、ここは異世界食堂

同じ物を作り出す技術が有っても、不思議ではない

ヴィクトリアはそう結論着けると、プリン・アラモードを食べ終わった

そこに、明久が現れて

「どうぞ、ヴィクトリアさん。何時ものです。分かっているとは思いますが、お早めに食べてください」

とヴィクトリアの前に、一つの紙箱を置いた

それを見たヴィクトリアは、確認のために蓋を開けた

中に入っていたのは、ヴィクトリアが愛して止まぬプリンだ

4個入っている

「ありがとうね」

ヴィクトリアはそう言うと、胸元からお金を取り出して、明久に手渡した

その枚数を確認すると、明久は

「確かに……またのお越しをお待ちしています」

と頭を下げた

その後ヴィクトリアは、扉を潜って帰宅

部屋のある小さい卓の上の豪華な装飾が施された、宝石箱を開けたすると中から、冷気を示す白い空気が漏れた

それは、ヴィクトリアが魔法を使って作り出した、自家製の冷蔵庫だ

ヴィクトリアはその中に、プリンを大事に仕舞った

「さて……研究を再開しましょうか」

それは、公国に深く関わる研究だが、同時に、自身のための研究より、プリンを仕舞える箱を作る

その為に、
ヴィクトリアは研究を続ける

リリカルマジカル

「んんー……今日はどうしようかなあ……」

と言ったのは、サイドポニーにした茶髪に白を基調にした制服を着た女性

高町なのはだった

彼女はある巨大組織にて、教導官の役割を担っていて、名物教官として有名だ

そんな彼女だが、何時もだったらお弁当を用意しているのだが、今日は食材が足らずに、愛娘の分しか用意出来なかったから、昼に外に出ようとしていた

そこに

「なのはー!」

「なのはちゃん!」

と古馴染みの声が聞こえた

声が聞こえた方向を見ると、黒と青を基調にした同じ形状の制服を着た二人の女性

八神はやたとフェイト・T・ハラオウンが居た

なのはを入れた三人は、十年以上の付き合いで、今は三人共に忙しい立場上、簡単には会えない

実際、2ヶ月振りに再会した

「はやてちゃん! フェイトちゃん!」

「久しぶり、元気だった?」

「こんな偶然、あるもんやなあ!」

2ヶ月振りの再会に、三人は破顔した

「私、これからお昼なんだよね。二人は?」

「私もだよ」

「ウチもや」

なのはの問い掛けに、二人はそう答えた

その後、三人は何処でお昼を食べるか歩きながら決めることにした

しかし、今はお昼時

彼女達が働く組織の食堂だけでなく、何処の飲食店も長蛇の列だと予想出来る

それを見つつ、どうしようか悩んでいた

そこに

「ん？」

とフェイトが、ある物を見つけた

それは、近未来的な組織の中に有って、違和感を感じるドアだった

「なんだろう、あのドア……」

見つけられたのは、本当にたまたまだった

ふと視界の端に違和感を感じて、そちらを見たら有ったのだ

「このドア……凄いや魔法だね……」

「せやね……ロストログアに近いんやろうな……」

とフェイトとはやての二人は、そのドアを観察していた

しかしなのはは、そのドアに着いている看板に視線が向いていた

「なのは？」

「どうしたん？」

と二人が問い掛けると、なのはは

「この名前……前に、お母さんから聞いてた名前と同じなんだ……」

と言った

なのはの母親は、彼女達の地元では名の知れたパティシエだ

その母親が知っているということは、有名な店だと予想出来る

すると代表してか、なのはがドアの取っ手を掴み

「開けるよっ」

と二人に問い掛けた

その問い掛けに、二人は即応出来るように構えた

それを見たなのはは、ゆっくりとドアを開けた

すると

「いらっしやいませー。洋食のねこやにようこそー」

とアレツタが出迎えた

三人はアレツタだけでなく、店内に居る客達を見て驚いていた

蜥蜴人や獅子人とも言うべき、半獣人

そして、非常に高い魔力を感じるエルフラしき人達

何がどうなっているのか、三人にはさっぱり分からなかった

「ここは……」

「一体……」

と三人が言葉を失っていると、早希が近寄ってきて

「お客様、どうかしましたか？」

と三人に問い掛けた

すると、なのはが

「ここは、一体……」

と問い掛けた

その問い掛けに、早希は

「えっと、洋食のねこや。または、異世界食堂……と呼ばれています」

とだけ、答えた

そこに、明久がカウンターから顔だけ出して

「どうしたの？」

と問い掛けた

新たな世界に、扉は現れた

23 皿目 ハヤシライス

「次元世界に、その次元世界を管理する時空管理局……」

「はい。私はそこで、教導隊に所属しています、高町なのは一尉です」

「同じく、執務官のフェイト・T・ハラオウンです」

「海上警備部隊隊長の八神はやてです」

三人が名乗ると、明久は

「これはどうも。僕はねこやで副料理人を勤めています、吉井明久です」と頭を下げた

そこで一拍置くと、明久は

「それで、なんでしたか……ロスト……ロギア？」と首を傾げた

ロストロギアというのは、なのは達曰く

かつて繁栄し、何らかの理由で滅んでしまった高度技術文明の失われた技術によって作られた、オーパーツ

効果は様々で、中には世界を滅ぼしてしまうことすらある物も存在する

「はい……あれはどうやら、異空間を繋げる類いのようですが……」

明久の言葉を聞いたフェイトは、ドアを視界の端で見た

「まあ、そうですね……海鳴っていったら……確か、神奈川の港町でしたよね？」

「はい」

なのは達の街の名前は、明久も知っていた

横須賀ほどではないが、神奈川にある少し大きめの港町だ

「だけど……ミッドチルダや魔法か……魔法はお客さんがたまに使いますが、ミッドチルダは知らないかなあ……」

明久はそう言いながら、トンカツを食べているアルトリウスを見たたまにやってくる礼儀知らずや、我が儘な客を追い出した時のことを思い出したようだ

「……まあ、基本的に時空管理局は地球は管理外としてますから……」

明久の言葉に、なのははそう言った

しかし、時折不思議な事件に巻き込まれるのが地球である

明久も、たまに変な事件だなあ。とテレビを見て思うところがある

(なのはちゃん、フエイトちゃん。気づいとるか？　ここの客……)

(うん……桁外れな実力者が多い……)

(あの老魔法使いもそうだし、あの侍……それに、あの黒い給仕服のエルフ……かな？　なんて、凄い魔力を感じる……)

そしてなのは達は、今居る客やクロが、とんでもなく強いと察した
彼女達も名の知られた実力者だが、そんな客やクロ達を相手にして、無傷で勝てる気がしなかった

(どないする？　どうやらあのドアは、基本的に異世界にランダムに現れるだけみたいや)

(様子見かな……それほど、危険だと思わないし)

(うん……お客さんも、料理を食べに来てるだけみたいだし……基本的には放置かな？　ただ、他の局員……特に、タカ派の人達に見つかったら面倒だし……隠蔽魔法で隠しておこう)

と三人は、明久と話ながら念話で会議した

「分かりました。基本的に、私達はあのドアのことは上層部には報告
もしません」

「ありがとうございます。良かった……営業が続けられるよ」

はやての言葉に、明久は安堵の息を漏らした

ふと気づけば、聞こえていたらしい店長も安堵の息を漏らしている

すると、明久は

「さてと……何か食べますか？」

と三人に問い掛けた

「あのドア、時間は合ってるんです……だから、お昼……まだですよね？」

と明久が問い掛けると、三人はまだ昼食を食べてないことを思い出した

「早希さん、通常のメニューを持ってきてください」

「分かりました」

明久の言葉を聞いて、早希は奥に消えた

そして、少しすると

「どうぞ」

とメニューを三人に手渡した

「洋食って言ってますが、基本的に色々あります。食材によりませんが、メニューに無いのもお出しできます」

それを聞いた三人は、顔を見合わせた

確かに空腹で、まだ午後の仕事が残っている

それを考えると、食べないと体力が持たない

そして三人は、メニューを開いた

彼女達三人も料理は作るが、やはりレパトリーは本職には及ばない

様々なメニューがあつた

メニューを見ている間、明久は一度キッチンに戻り、水を三人分持ってきた

「お決まりになりましたら、ウェイターにお申し付けください」

明久は恭しく一礼すると、キッチンに入った

「なににしよう……」

「こんなにあると、悩むわあ」

フェイトとはやては悩んでいるようだが、なのははあるメニューに目が行った

そして、数分後

(注文は決まりましたか?)

とクロが問い掛けた

いきなりのテレパシーに驚いたが、フェイトとはやてはなんとか注文

そして、なのはは

「ハヤシライスを、お願いします」

と注文した

そして、十数分後

「お待たせしました、ハヤシライスです」

となのはの前に、カレーライスによく似た料理
ハヤシライスが置かれた

早希は付け合わせの小サラダを置いてから、幾つかのドレッシング
を置いて

「こちらのドレッシングは、お好みで使ってください。それでは」
と言って、下がった

「おお、美味しそうやなあ」
「本当に」

はやての言葉に、フェイトは同意するように頷いた
フェイトの前には、海老フライ
はやての前には、ミートソーススパゲッティがある

「うん……久しぶりだなあ」

ハヤシライス

それは、なのはにとつて思い出深い料理だ

昔高町家は、一時期大変だった

父親が護衛の仕事で重傷を負い、母親はその時期に夢だった自分の
店を開店させた

兄と姉は武術の鍛練をしながら、母親の店の手伝いをしていた
それを見たなのはは、幼いながらも迷惑を掛けられないと思い、我
が儘を言わず、一人で過ごした

一人で遊び、一人で勉強していた

家族が異変に気づいたのは、父親の意識が戻り、退院した後だった
我が儘も言わず、一人で過ごしていたなのは

その姿は、まさに理想の親思いの子供の姿だろう
しかし、普通は違う

子供というのは、構ってほしいものだ

愛情一杯に、接してほしいのだ

でなければ、自分が要らない子供だと思ってしまうから
事実なのはは、愛情を知らずに小学生まで育ててしまった

そんな折に、母親を含めた家族は後悔した

なぜ、気づいてあげられなかったのかと

忙しかったなど、ただの言い訳

末の家族を放置していたなど、家族失格だ
だからある日、家族一同はなのはに謝った
今まで放置して、ごめんと

兄と姉はよく構うようになり、父親は護衛の仕事を引退
家に居るようになり、それまで出来てしまったなのはどの溝を埋め
るように、買い物等に連れていくようになった

そして母親は、なのはに自分が作ったデザートを中心に食べさした
り、教えるようになった

そんな中で、何かを達成したりしたら出すようになったのが、ハヤ
シライスだった

「本当に……懐かしい……」

最近は一人立ちし、地球からミッドチルダに移住したために自分で
作る機会は減った

「あむ……ん、美味しい」

やはり本職なだけあって、ブイヤベースから本格だった
様々な食材の旨味が凝縮されており、更に調和している

コクが見事に濃縮されており、料理人の腕が分かる

店長だけでなく、明久の腕もかなりのものだ

しかし記憶補整なのか、母親が作ってくれたハヤシライスのほうが
美味しいと思ってしまう

「な、なのは？」

「だ、大丈夫なんか？」

そんな時、フェイトとはやての二人が狼狽した様子で問い掛けてき
た

「ふえ？…なんで？」

訳が分からず、なのはは首を傾げた
すると、フェイトが

「だって、なのは……泣いてるよ？」

と言った

その時ようやく、なのはは涙を流していることに気づいた

するとなのはは

「にやはは……大丈夫だよ、二人共……少し、懐かしいことを思い出しただけだから」

と笑顔を浮かべた

その笑顔は不自然なものではなく、自然な笑顔だった

それをカウンター越しに見た明久は

「ふむ……憑き物が落ちた感じかな？」

と呟いた

その後なのはは、もう一杯ハヤシライスをお代わり

その後、たまたま日本円を持っていたフェイトがお代を精算した

「あ、これをお持ちください」

「これは？」

そして三人が帰ろうとした時、明久が紙箱を差し出した

「サンドイッチです。どうやらお忙しい仕事みたいです、片手で食べられる物を用意しました」

フェイトの問い掛けに、明久は微笑みながらそう告げた

「けど、お代は……」

「今回はサーブしますから、お気になさらず。もし良ければ、以後も

ご贔屓に願います」

明久はそう言いながら、頭を下げた

それを聞いた三人は、顔を見合わせてから

「分かりました」

「今度は、家族と来るな」

「では、また」

と言って、ドアを潜った

そして消えるドアを見ながら

「一週間毎に現れるドアか……」

「しかも、増えるようやな」

「だね。見つけたら、魔法で隠すようにしないとね」

と呟いた

そしてなのはは、紙箱を見て

「紙箱を見て

「……近い内に休暇貰って、ヴィヴィオと一緒に実家に行こうつと」
と呟いたのだった

24 皿目 コーヒーフロート

「……本当に、ドアが有る……」

「だから言っただろ」

と呟いたのは、ラクダに跨がる兄妹

砂の国の王子のシャリーフ

とその妹たるラナーだ

砂の国

西大陸南部に位置する国であり、魔法が広く普及している国である
砂の国は国土の広さならば、世界一の広さを誇る

しかし国力は、西大陸ではそれなりの力を持つ国の一つ程度しかない

その理由が、砂の国の国土の大半を砂の海

砂漠が覆っており、食料は海に面した街からの魚介類や他国からの
輸入に頼っている国だ

そして街は、先に挙げたように海沿いか、砂漠の中にぽつぽつと存
在するオアシス周辺に密集して形成されている

国土の大半を砂漠に覆われた土地

そんな土地柄故に、魔法の発達と普及は必然的だった

砂の国で魔法が広まった理由は、約千年前にまで遡る

その時砂の国では、命に関わる大疫病が蔓延した

そこに、旅をしていたエルフが手を差し伸べた

そのエルフのお陰で、疫病は鎮静化し、更に独自の発展を遂げ、今
となつては世界的な魔法国となっている

「それで、ここに兄様の想い人が来ている……と？」

「う、うむ……」

ラナーの遠慮無い言葉に、シャリーフはラクダの紐を近くの木に縛
りながら頷いた

なおシャリーフだが、ねこやに通うようになって既に五年目の常連
の一人だ

そしてラナーは、つい最近他国への留学から帰ってきたばかりだ
そんな妹の帰国祝いに、シャリーフはねこやに連れていくことにし
たのだ

「しかし、このドア……凄い魔力だ」

「ああ……私も、この規模の魔力は王宮の秘宝庫でしか見たことがな
い」

魔道具国たる砂の国の王族からしても、ねこやのドアは凄まじい魔
力を感じた

「さて、私としても久し振りだ……」

シャリーフはそう言って、ドアを開けた

最近シャリーフは、兄や父親と一緒に政務に追われていたので、久
し振りにねこやに来たのだ

「いらつしやいませ、洋食のねこやにようこそー！」

「む、新しい給仕か」

「はい、そうです。早希と申します」

シャリーフの言葉に、早希は名乗りながら頭を下げた

その後、早希は席に案内するとメニューを手渡そうとした

だが、それをシャリーフは止めて

「コーヒーフロートを二つ頼む。カッファは、甘めで」

と注文した

カッファというのは、砂の国での言葉でコーヒーを意味している

砂の国の数少ない産物

それが、コーヒー豆だ

そしてシャリーフのお陰で、約一年前から砂の国ではアイスコー
ヒーが広く普及している

それまでコーヒーは、冷えると不味いと認識されており、熱いのし
か無かった

だが、ねこやに来たシャリーフは、冷たいコーヒーが美味しいこと
に驚愕

その後、四年間に及ぶ研究でアイスコーヒーの再現に成功
更に、専用の魔道具の開発と普及にも成功したのである

それは別として、席に座ったシャリーフは店内を見回して、軽く肩を落とした

シャリーフの意中の人

アーデルハイトの姿が無かったからだ

まだ来店してないのか、それとも既に帰った後なのか

どちらかは分からなかったが、アーデルハイトは居なかった

そんなシャリーフを見て、ラナーは溜め息混じりに

「そもそも、兄様がさっさと告白していれば、そんな思いをせずに済んだんだ」

と言った

なお、ラナーが男口調なのは、親兄妹が男ばかりだったからだ

女は、ラナーと母親の二人だけ

そしてラナーは、シャリーフを含めた兄達と遊んでいたので、男口調になってしまったのだ

最近では、そんなラナーに女らしい言葉を話させようと母親が苦心しているのだが、ラナーは知らない

「そうは言うがな、ラナーよ。相手は、東大陸一の大国、帝国の第一皇女なんだぞ？ 私も祖国の次期王位継承者だが、そう簡単には……」

シャリーフがそう言うと、ラナーは呆れた様子で

「そんなんだから兄様は、ヘタレ王子と呼ばれるんだ」

と容赦なく指摘した

「グフツ!？」

ラナーの容赦ない言葉に、シャリーフは顔面を机に打ち付けた

その直後

「あの……何が?」

とアレツタが問い掛けてきた

するとラナーは、手をヒラヒラとさせながら

「ああ、気にしないでいいよ。容赦ない現実に、うちひしがれてるだけだから」

と言った

容赦ないのは、ラナーの言葉である

「そ、そうですか……こちら、ご注文のコーヒーフロートです。お待ちせしました」

アレツタはそう言つて、コーヒーフロート二つを、それぞれ二人の前に置いた

すると、ラナーが

「この匂い……確かに、カップアだ」

と呟いた

そこに、起き上がったシャリーフが

「この冷たいカップアを飲んだから、私は研究を始めたんだ……四年も掛かってしまったがな」

と言つて、スプーンでコーヒーの上に浮いていたアイスクリームを少し掬つた

そして、それをラナーの前に掲げて

「ラナー。これはな、牛の乳を冷やして固めたアイスという菓子だ。今は、これの再現も試みようと思っている」

と言つた

「それはいいけど、牛が……」

生憎と、砂の国では牛が居る場所は非常に限られている

そこから運ぶのも考えると、かなり手間だ

しかし、シャリーフは

「手間を考えていたら、研究など出来ない！」

と力強く言つた

その熱意を見たラナーは、内心で

(その熱意を、意中の姫に向ければいいのに)

と思つた

すると、シャリーフが

「まず、先にカップアを一口飲んでみる」

とラナーに言つた

それを聞いたラナーは、スプーンでアイスを押さえながら、一口飲んだ

そして、少し驚いた表情で

「……仄かに、甘い……」

と呟いた

その言葉に、シャリーフは頷いて

「なんでも、育った環境でカップア豆に違いが出るようだ。今、その研究もしている」

と言った

研究熱心な砂の国の三男皇子、シャリーフ

本来は上に二人の兄が居るが、一人は自ら王位を継ぐつもりはないとして、王位継承権を放棄

二人目は、自他共に認める程に王位に相応しく無いと、王位継承権が与えられなかった

故に、必然的に残されたシャリーフが継ぐことになった

「そして次に、アイスを一口食べてから飲む」

シャリーフはそう言って、率先してその飲み方を実践した

それに僅かに遅れて、ラナーも実践した

最初に、アイスの冷たく仄かに甘い風味が口に広がる

その風味が消えない内に、ラナーはコーヒーを飲んだ

すると、口の中にコーヒーの苦い風味が広がった

「この味は……」

「私が再現した味だ……最後は、アイスをカップアに混ぜて飲む」

シャリーフはそう言って、アイスをコーヒーの中に沈めて少しかき混ぜた

すると、黒かったコーヒーの色が茶色に変わっていく

その色が変わったコーヒーを、シャリーフは飲んだ

ラナーも遅れて飲むと、驚いた

「コーヒー本来の苦味が控えめになり、僅かに甘さを感じる

「……一杯で、三回も味が変わるなんて……」

とラナーが驚いていると、シャリーフは

「この異世界食堂は、料理という分野に於いては我々の二歩三歩先を進んでいる……この再現が、新たな収入源になると、私は睨んだんだ……そのために父様を説得し、研究のための設備と費用を引き出した

んだ」

と語って、半溶けのアイスを一口食べた

その時だった、ドアが開いたので、シャリーフは反射的にドアに視線を向けて、固まった

現れたのは、アーデルハイトだった

その彼女を見て、ラナーは

「行ってこい、兄様……声を掛けてこい」

と固まっているシャリーフの背中を、思い切り叩いた

叩かれたシャリーフは、右手と右足を同時に前に出しながら、アーデルハイトに近づいていった

それを見たラナーは

「本当にヘタレだな……先は長そうだ」

と溜め息を吐いた

なお、カウンター向こうから見ていた明久が

「うーん……若いねえ」

と呟いた

そんな明久を、店長が

「明久だって、充分若いだろうが」

と言って、軽く手刀を叩き込んだのだった

25 皿目 豚のしょうが焼き

その少年狩人

ハリスは、山を駆けていた

ハリスは最近彼の村作物を荒らすイノシシを、狩りに来ていた

「……落ち着け……」

そしてハリスは、自分に言い聞かせながら弓に矢をつがえた

今ハリスが使っているのは、狩りの師匠であり死んだ父親から受け継いだ物だ

そんなハリスの視線の先には、一体のイノシシが横倒しになって倒れていて、胴体には既に二本程矢が刺さっている

狩りというのは、最後まで気を抜いてはいけない

父親がよく言っていたことだ

瀕死の獲物に気を抜いて近づき、最後の気力での一撃で死んでしま
う

というのは、枚挙に暇がない

だからハリスは、最後の確認にと矢を放った

ハリスが放った矢は、イノシシの腹部に刺さった

だが、イノシシは動かない

すると安全だと悟ったらしく、足下に居た犬

愛犬のタロが、一鳴きした

ハリスは、そんなタロの頭を撫でて

「よおし、よく頑張ったな！」

と褒めた

タロが居なければ、ハリスはイノシシの突進を受けていただろうか
らだ

そしてハリスは、弓を背負うと倒れているイノシシに歩みより

「にしても、かなり大きいな……」

と呟いた

鼻先から尾部までの大きさは、ハリスより大きい

よく狩れたものだ、とハリスは思う

やはり致命傷になったのは、頭に深々と刺さっている矢だろう
この矢は、よく放てたと思っっている

タロを振り切り、ハリスに向かってきたイノシシ

ハリスは避けられるギリギリまでイノシシを引き付けて、矢を放つ
た

少しでも失敗していたら、ハリスは死んでいただろう

その後は、イノシシの臭いをタロが追跡

今に至る

「さてと……解体するか」

イノシシの大きさが大ききなので、流石に持って帰るのは無理だ

だから、最優先で持って帰るのは毛皮と牙だ

これ程の大ききならば、行商人も高く買ってくれるはずである

ハリスはなんとかイノシシを木に吊るし、血抜きしながら解体を始
めた

そして、数十分後

「よし……これだけあれば、村も少しは持つはずだ」

とハリスは、自分が解体した量に、満足そうに頷いた

その時、タロが不意に唸り始めた

「タロ……つつ」

タロに視線を向けたハリスは、違和感を感じて弓を構えた

違和感を感じた方角にあったのは、一つの洞窟

しかもその洞窟の中には、不釣り合いな物があつた

「これって……ドア？」

ハリスはそのドア

ねこやのドアを見て、首を傾げた

大きな町ですら、中々見ない高級感感じるドア

一先ずハリスは、その周囲に危険が無いか確認

「……開けてみよう」

そう呟いて、ドアを開けたら

「いらっしやいませ、洋食のねこやにようこそー」

山の中に居たはずなのに、何故か店に居た

ハリスが混乱している

「えっと、大丈夫ですか？」

とアレツタが問い掛けてきた

その言葉で、ハリスは我に帰り

「こ、ここは一体……」

とアレツタに問い掛けた

「ここは洋食のねこや。別名が異世界食堂と言います。分かりやすく

言えば、レストランです」

「レストラン……山の中に？」

アレツタの言葉に、ハリスは頭上に疑問符を乱舞させた

そこに

「んー……本当は、犬はお断りしてるけど……躰がキッチンとされてる
みたいで……」

と明久が、ハリスの足下でお座りしているタロを見た

やはり食べ物を提供しているので、基本的に動物の連れ込みは断つ
ているのだ

すると、ハリスは

「あ、タロはキッチンと躰てあります。僕の言うことは聞きますから
……」

と説明した

すると、店長が来て

「まあ、来ちゃったのは仕方ない。頼みますから、大人しくさせててく
ださいね？」

とハリスに頼んだ

そしてハリスを席に案内すると

「あの……これを使って、料理を作れませんか？ お金を持っていな
いので……」

と言って、先ほど解体したばかりのイノシシの肉を見せた

それを見た明久は、思わず唖った

本来、ねこやは食材の持ち込みは断っている

感染症や食中毒のリスクを負わないためにだ

そのために、今入荷している食材は先代店長が自ら選び、搬入を近場の八百屋や食材店に頼んでいる

先代からの付き合いなので、一部の人は特別営業を知っている人も居る

さて、どうすらか……

と明久が首を傾げていると、店長が

「仕方ない……特別に、作るか」

と言った

そしてハリスに

「ちなみに、これは何の肉だい？」

と問い掛けた

すると、ハリスは

「イノシシです」

と答えた

それを聞いた店長は、少し悩むと

「メニューはこちらにお任せで、よろしいですか？」

とハリスに問い掛けた

その問い掛けに、ハリスは無言で頷いた

それを見た店長と明久は、頷いて

「では、少々お待ちください」

と言つて、キッチンに入つていった

それから、十数分後

「お待たせしました、豚のしょうが焼きです」

とハリスの前に、香ばしい匂いのする料理が置かれた

「君には、こっちなね」

と早希は、タロの前にも皿を置いた

そちらは、犬にも配慮して作ったものである

「おお……」

「ライスはお代わり自由ですので、お代わりはお申し付けください」

ハリスが感嘆の声を漏らしている間に、早希はそう言つて下がった

タロを見ると、尻尾をブンブンと振りながらハリスの言葉を待っている

「食べてよし」

ハリスがそう言った直後、タロは肉にかぶりついた

そしてハリスも、箸で肉を持ち上げた

「いい匂い……この匂いは、ジンジャーかな？」

芳ばしく香る匂いに、ハリスはそう呟いてから一口食べた

その瞬間、口の中に生姜の匂いが一気に広がった

イノシシは独特の風味がする食材だが、その風味は感じない

強い生姜の風味と甘辛いタレの味が、口一杯に広がる

その味に思わず、ハリスはライスが盛られた皿を手にとって、ライスを掻き込んだ

（美味しい！ 今まで食べたこと無い!!）

その味に、ハリスは箸が止まらなかった

時々肉で千切りにしてあるキャベツを包み、一緒に食べると、口中でシャキシヤキとした食感とキャベツの仄かな甘みが広がり、生姜の味を抑えてくれる

今まで何回か食べたイノシシが、まさかこんなに美味しくなることは、思っていなかった

その後ハリスは、ライスを二杯お代わりして、豚のしょうが焼きを食べた

生姜の効能で、体に活力が溢れる

三日間の野宿とイノシシを追い掛けた疲労を、感じないほどだ

「うちそうさまでした……」

とハリスが両手を合わせると、明久が

「はい、これ」

と紙の箱を差し出した

「これは……」

「さっきの豚のしょうが焼きを、サンドイッチにした物です。その様子じゃ、野宿なんでしょう？ 夜食にどうぞ」

ハリスの問い掛けに、明久はそう言った

サンドイッチなのは、片手で食べられるように配慮したのだろう
「ありがとうございます……いただきます……いただきます」

「いえ……ここは、七日に一度開きますから、またお越しく下さい」
ハリスが感謝の言葉を言うと、明久はそう言った

その後ハリスは、タロと共に退店

消えていくドアを見ながら

「異世界食堂……か……また来たいな……よし、稼がないと！」
と歩き出した

村に、イノシシを狩ったことを知らせるために

サイコロ、コロコロ

ある世界にては、全てはサイコロで決められていた
生きるも死ぬも

奇跡が起きるか、不幸が起きるのか

神々が振るつたサイコロの出目により、その世界に生きる人々の運命は決められていた

しかし、何事にも例外は存在する

西の辺境の街に、ある一人の冒険者の男が居た

通称、ゴブリンスレイヤー

西方では、最優の冒険者と呼ばれる冒険者だ

最優たる理由は、その名前の由来となる魔物

ゴブリンを優先的に討つからだ

故に、ゴブリンスレイヤー

魔物としては最弱だが、数が増えやすく、それ故に防衛能力が無い
小さな農村や開拓村にとっては災害に等しい存在だ

しかし、そんなゴブリン討伐依頼が出されても、好き好んで受ける

冒険者は少ない

その理由が、報酬が安いからだ

ゴブリン討伐はよく出されるが、報酬が安いために率先して受けた
がらないのだ

そんなゴブリン討伐を率先して受けるゴブリンスレイヤーは、村々
にとっては有難い存在だ

なぜ、ゴブリン討伐の依頼を率先して受けるのか

その理由は、今は語らないでおく

そんなゴブリンスレイヤーは、少し前まで単独でゴブリン討伐に赴
いていたが、あるゴブリン討伐の時から一人ではなくなった

しかも最近では、更に人数が増えた

「……珍しいな」

「あ、やっほー」

ゴブリン討伐から帰ったゴブリンスレイヤーは、冒険者組合ギルドに報告しようとした

その矢先に、彼が下宿している牧場に居る幼馴染みの少女牛飼娘が居た

短く切った赤い髪に、快活そうな笑顔が特徴だ

「うん。ちょうど搬入に来てたんだ」

ゴブリンスレイヤーの言葉に、牛飼娘はそう言った

どうやら、牧場で作ったチーズや牛乳を納めにきたようだ

「……すまん、離れていて」

「いいよー。ご指名の依頼だったんでしょ?」

実はゴブリンスレイヤーは、離れた水の都から名指しの依頼を受けて、離れていたのだ

そしてゴブリンスレイヤーは

「……報告書だ」

と受付に出した

すると、笑みを浮かべて立っていた受付嬢が

「お疲れ様でした、ゴブリンスレイヤーさん。どうでしたか?」

とゴブリンスレイヤーに問い掛けた

その問い掛けに、ゴブリンスレイヤーは

「……多少イレギュラーは有ったが、問題は無かった」

と報告した

その直後、ゴブリンスレイヤーの後ろに居た神官少女が

「何言ってるんですか!? 危うく死ぬところだったじゃないですか

!」

と怒った

それを聞いた受付嬢と牛飼娘が

「ええ!」

「だ、大丈夫だったの!」

とゴブリンスレイヤーに問い掛けた

すると、手甲と脚甲を着けた格闘娘と魔法使い娘が

「本当に、間一髪でした」

「剣舞者が介入してなかったら、間違いなく致命傷^{クリティカル}入ってたわね」と言った

そこに、腰に二本の刀を差した剣舞者が

「……間に合ったただけだ」

と端的に言った

しかし、僧侶蜥蜴人が

「いや、貴殿の見事な踏み込みと剣捌きがあったからこそ、誰一人欠けることなく帰還出来たのだ」

と両手を合わせながら言った

それに同意するように、上妖精族が

「格闘娘と合わせて、今回の立役者よ。あれだけの数のゴブリンと戦って、前衛が瓦解しなかったの」

と疲れた様で言った

最後に、鉱人術士

「本当じゃわい。今回ばかりは、肝が冷えたわ」

と言った

「しかも、胸糞悪い物まで出てきて……あんなのを考えた奴、火矢で撃ってやりたいわ……」

魔法使い娘は吐き捨てるように、そう呟いた

どうやら、相当な戦いがあったようだ

その後、ゴブリンスレイヤー一党プラス受付嬢と牛飼娘は歩いていった

ゴブリンスレイヤー達は今回の依頼で使った消耗品の発注

受付嬢と牛飼娘は、帰る前の買い物だ

そして、護衛次いでに受付嬢を冒険者組合の寮に送っていた時だった

「……ん」

とゴブリンスレイヤーが、ある方向を見て

「受付嬢……あそこに、あんな扉は有ったか？」

と問い掛けながら、ある方向を指差した

問われた受付嬢だけでなく、全員はゴブリンスレイヤーが指差した

方向を見た

その先には、街を囲う巨大か壁が有るだけのはずだったが

「……いえ、無かったはずです……」

その一ヶ所に、ネコの絵が描かれた木製の扉が有った

すると剣舞者が

「……凄まじい魔力だな……何らかの魔道具のようだが……」

と軽く表面を触りながら言った

するとゴブリンスレイヤーは

「……念のために調べる……」

と言って、腰の剣帯に手を伸ばしつつ、ドアの取っ手を掴んだ

そして、神官少女が3、2、1と指折りカウントしてから、ゴブリ

ンスレイヤーはドアを開けた

その後

「いらっしやいませ！・洋食のねこやにようこそー！」

と明るい声で、歓迎された

26 皿目 チーズフォンデュ

「……冒険者……」

「はい」

受付嬢の説明を聞いて、明久は受付嬢の後ろに居る一同を見た
受付嬢の説明通り、全員の首もとにタグがある

(こつちで言う、ドッグタグってやつか……)

神官娘、魔法使い娘、格闘家娘の三人は黒曜のタグを着けていて、剣
舞者が鋼鉄、他の全員は銀のタグを着けている

「アレツタちゃん。アレツタちゃんの世界にも、冒険者って居るの？」
「はい。最も有名なのは、魔族との戦争を終わらせた四英雄でしょう
か？」

明久の問い掛けに、アレツタはそう答えた

明久は知らないが、その内の二人は異世界食堂の常連客である

「しかし、まさか異世界に繋がるドアなんて……」

「まあ、僕や店長も原理は把握してないですよ……まあ、どうやら人
がよく居る場所の近くに出る。というのは分かってるんですが」

受付嬢が驚いていると、明久はそう言いながらドアを見た
そして

「では、何か食べますか？」

と問い掛けた

それを聞いて、ゴブリンスレイヤーが何か言おうとした

すると、牛飼娘が思い出したように

「あ、今日叔父さんね、牧場仲間と街で飲んで帰るって言ってたよ
とゴブリンスレイヤーに言った

叔父さんというのは、彼女の叔父であり、牧場の主である男性だ
今や、牛飼娘の唯一の親族になる

「……そうか……」

牛飼娘の話聞いて、ゴブリンスレイヤーは短くそう言った
それを聞きつつ、明久は

「それで、何か食べられない食材はありますか？」

と問い掛けた

やはり、宗教等で食べられない物が有るだろうと、予想したからだ
「儂らは、基本的に何でも食べるわい。のう、鱗の」

「然り。拙僧は好き嫌いはいせぬ。ただ、チーズを使った料理を所望する」

最初にそう言ったのは、鉱人術師と蜥蜴僧侶だった

もはや、料理に興味津々のようだ

「……何か、食べたいのはあるか？」

「んー……私は大丈夫かなあ？ 君は？」

「……俺も、大丈夫だ」

ゴブリンスレイヤーは、幼馴染みである牛飼娘に問い掛けるもそう返され、当たり前障りの無い程度にそう答えた

ゴブリンスレイヤーはある料理が好きだが、場を乱すような発言は控えようと思ったようだ

すると、三人娘が

「私も、基本的には好き嫌いはい無いですね……」

「私もだ」

「私もね」

と言った

そして、上妖精と剣舞者が

「んー、アタシは肉はちよつとねえ」

「俺は、好き嫌いはい無い」

と言った

すると、鉱人術師が

「耳長の。お前さんは、肉を食え！ そんなんだから、何時まで経っても、金床のままなんじゃろうが」

「うっさい、ドワーフ！ 樽のあんたに言われたくないわよっ！」

鉱人術師の言葉に、上妖精は反論した

それはどうやら、何時ものやり取りらしく、殆どのメンバーは苦笑いを浮かべながらも放置している

そして最後に、受付嬢が

「私も、特に好き嫌いは無いですね」

と微笑みながら答えた

それを聞いた明久は、少し悩んだ

(ゴブリンスレイヤーさんは食べたいものが有るみたいだけど、それはあの牛飼娘さんが作るのがいいっばいし……エルフも食べられるのか……)

「あの、エルフさんに質問ですが」

「ん？ なにかしら？」

明久が呼び掛けると、上妖精は首を傾げた

「チーズは、大丈夫ですか？」

「ええ、私は平気よ。中には、食べないって同族も居るけど」

明久の問い掛けに、上妖精はそう答えた

それを聞いた明久は、少し考えてから

「それでは、こちらにお任せで宜しいですね？」

と一同に問い掛けた

そして、全員が頷いたのを見た明久は

「承りました。少々お待ちください」

と言って、キッチンに消えた

そして、早希にボンベ式のコンロを机に置かせた

どうやらそれは初めて見たらしく、一同は興味深く見ている

そして、数十分後

「大変お待たせしました。チーズフォンデュです」

とまず、コンロの上にチーズがたっぷりに入った鍋を置き、更には野菜や肉、魚を一口サイズに切って串に刺してあるのを幾つかの皿に分けて置いた

「ほおっ！」

「こりゃ、初めて見たわい！」

蜥蜴僧侶は眼を輝かせ、鉱人術師は驚き

「こんなチーズを使う料理が有るんだ！」

「……ほお」

牛飼娘とゴブリンスレイヤーは、素直に驚いている

そして

「美味しそうです！」

「本当」

「面白いわね……」

三人娘は、三者三様の反応

剣舞者は無表情故に分からないが、受付嬢が

「この匂い……チーズだけでなく、葡萄酒ですか？」

と明久に問い掛けた

「はい。固まるのと焦げ付きを防ぐために、葡萄酒を混ぜてあります」

受付嬢の問い掛けに、明久はそう答えた

すると、上妖精が

「もしかして、この串の食材にチーズを付けて、食べるのかしら？」

と問い掛けてきた

「はい、その通りです。お好みの食材を付けて、食べてください」

明久がそう言うのと、最初に蜥蜴僧侶が豚肉の串をチーズの中に浸した

そして、一口で食べると

「甘露!! 甘露!!」

と歓喜の声を上げた

それを皮切りに、全員は各々好きな食材をチーズの中に通して、食べ始めた

それを、カウンター越しに見ていた明久と店長は

「ゴブリンスレイヤーだっけか……兜被ったままなのに、器用に食べるな……」

「ですねえ……」

と言葉を漏らした

何故ならば、その言葉の通り、ゴブリンスレイヤーは兜を外さずに、器用に隙間から食材を食べているからだ

一同がそれを指摘しないので、どうやら何時ものことのようにだ

その後、鉦人術師と蜥蜴僧侶が酒と一緒によく食べ、食材の追加注文をした

そして食べ終わると、全員が銀貨を出して勘定を済ませた

そこに、店長が

「この店は、七日に一度開いてますので、またいらしてください」

と言って、退店する全員を見送った

そして、消えるドアを見ながら受付嬢が

「異世界食堂ですか……今度は……」

と頬を染めながら、寮に戻っていったのだった

27 皿目 クッキー

「それじゃあ、30分……あの時計の長い針が、真上を向くまで休憩ね」

「はいー」

休憩フロアに入ったアレツタは、時計を見た。

今は客が少ないために、昼過ぎの休憩である。

「今日は、お客さまが多いなあ……サラ様は、大丈夫かな？」

アレツタの主となったサラだが、今は解読した地図から見つけたらしい宝を回収しに行っている。

そしてアレツタは、机の上にある金属製の入れ物。

蓋を開けると、中には様々な種類の焼き菓子。

クッキーが入っていた。

「今日は、どれにしようかな……」

アレツタはそう言いながら、缶の中から五つほど選んで取り出した。

そのクッキーを食べながら、アレツタはボンヤリと過ごしていた。

五枚のクッキーと明久が作ったココアが、アレツタの休憩時の細やかな幸せだ。

ココアは初めて飲んだ時からの、アレツタのお気に入り飲み物になる。

初めて飲んだ時は、苦さと甘さに驚いたものの、すぐに好物になった。

異世界の産物の1つらしく、アレツタ達の世界では見たことない。

そしてアレツタは、ねこやに來てからのことを思い出した。

まずアレツタは、帽子を被らなくなった。

昔は半魔族なのを隠していたが、それも自分だと胸を張って生きることにしたからだ。

そうやって、サラの所で働けることになったのだから。

「あ、クッキー無くなっちゃった……」

気付けば、五つのクッキーは無くなっていた。それに気付いたアレツタは、缶を見たが

「ううん、我慢しなきゃ……」
と首を振った。

そのクッキーは、ねこやのあるねこやビルの洋菓子店《フライングパイプ》という店で作られており、店長からは

『休憩時間に、好きなだけ食っていいぞ』
と言われていた。

どうやらフライングパイプの店長とは古い知り合いらしく、試食用と渡されているようで、それを休憩フロアに置いてあるらしい。

それをアレツタは、休み時間ごとに五個だけ食べるように決めていた。でなければ、際限なく食べてしまいそうだからだ。

幾らタダで食べられるとはいえども、缶一つを丸々食べてしまう度胸は、アレツタには無かった。

そしてアレツタは、時計を見た。
長い針は、もうすぐで真上になる。

それを見たアレツタは、残っていたココアを飲み干し
「よしっ、仕事に戻ろう！」

と気合いを入れて、強引にクッキーへの未練を終わらせた。そして、カップを食器洗浄器に入れてから

「アレツタ、仕事に戻ります！」
と店長と明久に告げた。

それを聞いた明久が
「ん、もう少しゆっくりしてて良かったのに……」

チラリと、時計を見ながらそう呟いた。
すると、店長が

「アレツタちゃん、はじめだからな……このパフェを何時ものお嬢さんに持って行ってくれ」

とアレツタに、指示した。
それを聞いたアレツタは、手を洗ってから

「はい、分かりました！」

と頷き、トレイにフルーツパフェに乗せた。

そしてフロアに出ると、シャリーフとアーデルハイドが談笑している。(とはいえ、シャリーフはガツチガチだが)

それを微笑ましく思いながら

「お待たせしました、フルーツパフェです!」

とアーデルハイドの所に、持っていった。

それから、数時間後。

「お疲れ様でした」

「お疲れ様」

「お疲れさん」

「お疲れ様です」

(お疲れ様……)

仕事が終わると、全員集まってフロアの掃除だ。

そして、終わると

「あ、アレツタちゃん」

と店長が呼び掛けた。

「はい、なんですか?」

アレツタが振り向くと、店長は

「はい、これ」

とビニール袋を掲げた。

「……これって!」

中を見たアレツタは、中にあのクッキーの箱が入っていることに気付いた。

すると、店長と明久が

「アレツタちゃん、あのクッキー少しずつ食べてるみたいだからな」

「就職祝い、だよ」

と言った。

「就職祝い?」

とアレツタが首を傾げていると、早希が

「あ、就職したんですね! おめでとございませす!」
と祝福した。

すると、明久が

「アレツタちゃんの世界だと違うみたいだけど、僕達の世界だと、就職した人にはお祝いするんだ」

と教えた。それを聞いたアレツタは

「で、でも、こんな高いのを二つもだなんて！」

と狼狽した。アレツタの感覚では、クツキー缶一つで金貨一枚だと予想していた。

アレツタの言葉を聞いて、店長と明久は

「まあ、確かに高いっちゃあ高いが……」

「そこまでは、高くない……かな？」

と唸っていた。

アレツタが働き始めてから、暫く。二人は、アレツタのことを色々と把握してきていた。

例えば、アレツタが休憩ごとにクツキーを少しずつ食べてることとか。休憩時間の時にココアを頼むなどだ。

平日に、一番大きい缶のクツキーを、三日で食べきる他のバイトスタッフに見習ってほしい謙虚さだ。

なお、フライングパイプは直売しかやっておらず、幼なじみ曰く『こっちは、大量生産はしないから、量より質で勝負！』

とのことで、デパート等で売っている他の物と比べて、少しお高い値段だが、そこは幼なじみなのと、知り合いということ、ある程度安くしてくれる。

「本当に、いいんですか？」

「ああ、もちろんだ。気に入ってくれたなら、買ってくれとは言ったが、それは俺達からの贈り物だ」

「遠慮しないで」

アレツタの問い掛けに、店長と明久は微笑みながらそう告げた。

そうしてアレツタは、着替えてから帰宅した。

そして、そのクツキーはサラの家でサラと休憩時に一緒にお茶する時に出すことにした。

それから、しばらくして

「姉さん！ 居る!？」

とドアを開けながら、サラの家に一人の若い女性が現れた。

その女性は、サラによく似た顔立ちだ。だからアレツタは、即座に気付いた。

「申し訳ありません、今はサラ様はお出かけになっています……シア様」

その女性は、サラの妹のシアだと。

サラの実家のゴールド家は、東大陸でも名の知れた大商家なのだが、時折熱病、トレジャーハンターに夢見る者が表れるのだ。

それは、サラやシアの曾祖父、ウイリアムだけでなく、伯父やサラとシアの兄と居る。

ウイリアムは実家で老衰で亡くなったが、伯父は魔物との戦闘で死亡。

兄たるウイリアム・ゴールド・ジュニアは、行方不明になっている。

ゴールド家としては、長女でありもはや数少ない直系の人間たるサラには、生きていてほしい。だから時折、妹たるシアにサラが生きているか確認させているのだ。

「初めまして、シア様。私は、サラ様にハウスキーパーとして雇われています、アレツタと言います」

「……シア・ゴールドよ……」

シアが短く名乗ると、アレツタはシアを椅子に座らせて「少々お待ちくださいませ。今、お茶をお出ししますので」

と言つて、台所に入った。そんなアレツタを見ながら、シアは

「……姉さん、いつの間に、半魔族の娘なんて、雇ったのかしら……」と呟いた。

シアは、家の教育もあり、半魔族に対する差別は無かった。真に差別するのは、人を騙したり、躊躇わずに傷つける者だと思っている。そしてシアからして、アレツタは真面目に働いているのだと分かった。

目には綺麗な光を見たからだ。

大商家なだけあり、今まで様々な人々を見てきた。

そんな中には、人を騙すことを楽しむような輩が多数居たが、アレツタ程純粹な目をしていたのは、数少なかつた。

そして、数分後

「お待たせしました……ハック茶とクツキーです」

とアレツタが、お茶とクツキーを出した。

ハック茶というのは、アレツタ達の世界で一般的に普及しているお茶である。

しかし、シアは

「クツキー？」

とアレツタに視線を向けた。

「はい。簡単に言えば、焼き菓子です」

シアの問い掛けに、アレツタは微笑みを浮かべながらそう答えた。

(菓子というからには、甘いんでしょうけど……)

シアの前に出されたのは、4つ。

1つ目は、表面に砂糖がまぶされた葉っぱの形をしている。二つ目は、薄く黄色い生地に焦げ茶色の何かが挟まれており、三つ目は鮮やかな橙色の物が中心にあり、最後は葡萄のような果物がある、羽の生えた犬の形をしている。

その全てが、シアの知っている焼き菓子より繊細で美しい出来映えだ。

(問題は、味だけど……)

シアはそう思いながら、葉っぱの形のクツキーを口にして、驚愕した。

「美味しいー！」

シアが知っている焼き菓子は、極端に甘いかボソボソしている物だ。

しかし、今食べたのは、仄かに甘く、生地 of 風味と調和している。二つ目は、甘い茶色い物。チョコが挟まれていて、そのチョコと見事に調和している。

生地とチョコが、互いを引き立てていた。

(これ、凄いい菓子なんだわ！)

そう思いながらシアは、三つ目を食べた。

三つ目は、橙色の入ったクツキー。ミケーレマーマレードの砂糖煮を使ったクツキーだった。

甘酸っぱいミケーレを砂糖で煮込むことにより、爽やかさと甘さが同時に楽しめ、更にはクツキーにもミケーレの皮の砂糖漬けが練り込まれていて、ミケーレの風味が楽しめる逸品だった。

最後の一枚は、犬の形に整えられた一枚だ。

それには、干し葡萄。それも、強いお酒に漬けられた干し葡萄が使われていた。

その全てを食べ終えて、シアはハツク茶を飲み干した。

甘みのない爽やかな風味が、喉を潤す。

そしてシアは

「これ、何処で入手したの!？」

と傍に控えていたアレツタに、問い掛けた。

シアが知る限り、その味を作るのは王宮お抱えの料理人か、それを越えるとされる料理人を抱えているアルフェイド商会位だった。

「え、えっと……その……」

「まあ、言いたくないわよね……分かるわ」

アレツタが言い淀んだのは、シアが異世界食堂のことを知らないからで、シアも言えない理由があるのだと察した。

もし客が知れば、大量に押し掛けるが、それを嫌う職人が居るからだ。

だからか、シアは

「だから、質問を変えるわ……同じ物……入手出来る?」

と問い掛けた。その問い掛けに、アレツタは一度台所に行ってから「買えると思いますが、高いと思います……このような入れ物に入っていましたから」

と缶を見せた。

中は既に空で、軽い。

だがシアは、同じような入れ物を見たことがない。

「成る程……これなら、確かに高いでしょうね……」

シアは羽の生えた犬が描かれている金属製の箱を見ながら、その箱一杯に先程のクツキーが入っていると想定し、頭の中でソロバンを弾いて、深々と溜め息を吐いた。

シアが知る焼き菓子とは、総じて高い。

箱の細工や絵を含めると、シアが知る同じサイズの木箱の値段より、二倍三倍すると出たからだ。

そして、シアは

「よし」

と頷きながら、自然な動作で懐から財布を取り出してから金貨を一枚取り出した。

「これで、同じ物を、買える時でいいから、買ってきてくれるかしら？」

「こ、これ、金貨!？」

まさか金貨を出されるとは思わず、アレツタは驚いた。

「それ、私の1ヶ月分のお小遣いなんだから、無くさないでね？ 私の見立てでは、銀貨40枚に匹敵するはずだけど、その金貨は銀貨100枚分の価値があるから、買えるはずよ」

「わ、わかりました……」

シアは思わず、アレツタの両手を握りながら頼み、アレツタは重圧に頷くことしか出来なかった。

その時、ドアが開き

「たっだいまー……騙されたわー……あの地図、偽物だったわあ……って、シア？ 何やってるの？」

とすっぽりと頭から抜けていた、サラが帰ってきた。

シアにとつては、それほどの驚愕だったのだ。

だがシアは、後日さらに驚愕することになる。

アレツタが買ってきたのは、フライングパイプで買える一番大きい缶一杯にクツキーが入っていて、値段が銀貨二枚だったのだから。

かくして、意図せずにフライングパイプに新たな客が増えたのだ。た。

28 皿目 チーズケーキ

「やれやれ……やつと、最後の一匹……だな」

と呟いたのは、水晶製のゴーグルを装着した一人の女傭兵、夜駆けのヒルダだった。

彼女は今しがた、帝国のある開拓村からの依頼で、ゴブリン30匹を殲滅したところである。

「あいつらの寝床の洞窟は……後で見るか」

ゴブリンの寝床たる洞窟には、宝が放置されている。

とはいえ、その殆どが銅貨一枚にもならないガラクタなのだが、時たまアタリが混じっているから、バカに出来ない。

その確認を後回しにして、ヒルダは自分の拠点に戻ることにした。拠点とは言っても、二本の木の間に大きめのテントを張り、焚き火しやすいように石で囲ってあるだけの拠点だが、三日も過ごしてきた場所だ。

幾ら夜駆けという二つ名を与えられようが、やはり疲れたら寝たいのは道理。

三日掛けたとは言っても、一人で30匹のゴブリンを倒したのだから、かなり、疲れている。

はつきり言えば、何か食べたいところだが、森の中で下手に料理を作れば、要らない騒動を起こす原因になってしまうから、自重した。

その時

「……なんだ、あれは……」

ヒルダは、その拠点の目印にしている大岩、その窪みに嵌まるように森には不釣り合いなドアを見つけた。

「昨日で、こんなドア無かったが……」

ヒルダはそう呟きながら、まずは安全かを確認した。

ヒルダは長い間冒険者として活動してきており、時たま依頼内容がブッキングしたり、中にはヒルダの名声を貶めようとする輩が、罨を仕掛けてきたりすることがある。

それかと思つたからだ、それは全くの杞憂だった。

「……しかし、このドアはなんだ？」

ヒルダはそう呟きながら取っ手を握り、ドアを開けた。すると、一気に視界が明るくなり

「いらつしやいませー！ 洋食のねこやにようこそー！」

と若い少女の声が聞こえた。

最初は暗闇に慣れた目に、明かりが眩しくて見えなかったが、見えたのは金髪に両側頭部にヤギを彷彿させる角がある少女。アレツタだった。

「お前……半魔族か？」

そのアレツタに、ヒルダは思わずそう問い掛けた。

すると、アレツタは身構えながら

「は、はい……そうですが……」

アレツタは、ヒルダが半魔族嫌いかと思つた。

しかしヒルダは、ゴーグルを外し、次に頭から膝付近まで覆っていたマントのフードを外して

「ああ、いや。すまない……私も、半魔族なんだ」と告げた。

それを肯定するように、ヒルダの目の瞳孔は縦長で、頭には三角の耳が二つ有つた。見えないが、恐らくは細長い尻尾もあるだろう。

ヒルダは、猫系の血が濃く出た半魔族なのである。

「驚いたよ、まさか同胞がこのような店で働いているとはな……」

アレツタは知らなかったが、半魔族の大半がヒルダのように冒険者や傭兵。もしくは、奴隷として生きていた。

それを知っていたから、ヒルダはねこやで働いているアレツタに驚いていたのだ。

「その、このねこやの店長や明久さんは、私みたいな半魔族でも雇ってくれたんです。だから、こうして働けてるんです」

実際問題、アレツタがねこやで働けているのは運が良かったからだ。

もし、アレツタが寝泊まりに選んだのが廃教会で無かったら？

もし、消える直前に起きなかったら？

もし、店長が違っていて、明久が居なかったら？

そういった幾つもの要素をすり抜けて、今アレツタは働いている。

「……そういえば、この店は……料理屋、みたいだが……」

「あ、はい。ここ、洋食のねこやは別名で異世界食堂とも呼ばれてます」

ヒルダの疑問に、アレツタはそう教えた。

それを聞いたヒルダは、周囲を見回して

「なっ……ソードマスターのタツゴロウに大賢者のアルトリウスだと……!?!」

同じ冒険者にして、伝説的な人物達が料理を食べていることに驚いた。

そしてヒルダは知らないが、タツゴロウとアルトリウスの二人は、ねこやの古い常連客である。

「さて、お客様。東大陸語は、読めますか?」

そしてアレツタは、咳払いしてからヒルダにそう問い掛けた。すると、ヒルダは

「ああ。問題ない」

と答え、それを聞いたアレツタはメニューを手渡した。

「それに書かれているのなら、問題なく出せます。では、注文が決まりましたら、お呼びください」

アレツタはそう言って、静かに下がった。

アレツタを見送ると、ヒルダはメニューを開き

「ほう……色々とあるんだな……知らない料理が殆どだ……」
と呟いた。

ヒルダは一人で様々な地方に行き、その地方での村等で依頼を引き受けて遂行する冒険者だ。

それ故に、それなりに様々な料理を見てきたが、ねこやの料理は見たこと無いのが殆どだった。

そして、あるページを開いた時

「なっ……スイーツだ?!? それも、この値段で!?!」
と驚いた。

ヒルダが見たのは、スイーツのページで、値段に驚愕した。

異世界では砂糖やハチミツといった甘い物は貴重品で、それを使ったスイーツは大抵が凄く高い。

最低で、銀貨10枚して最高で（ヒルダの知る限り）金貨数枚する。それに比べ、ねこやで出しているスイーツは安くて銅貨一枚から高くて銀貨三枚。

破格と言える値段だった。

その中でヒルダは、あるものが気になった。

「チーズ……ケーキ……？ チーズとは、あれか……牛や羊の乳を発酵させたやつだったか……」

ヒルダの知るチーズは、あくまで酒のつまみか料理に使っていて、スイーツに使っていない。

どんな味がするのかが気になり

「すまないが、チーズケーキを頼む」

と頼んだ。

そして、少しして

「お待たせしました。チーズケーキです」

ヒルダの前に、薄い黄色のケーキ。チーズケーキが置かれた。

「これが……チーズケーキ……」

チーズケーキを初めて見たヒルダは、色々な角度からチーズケーキを見た。

「この色は……確かに、チーズに近いな……」

ヒルダの知るチーズは、少し濃い黄色。それに対して、チーズケーキは薄い黄色だ。

「どんな味がするのか、想像出来んな……」

ヒルダはそう呟くと、フォークで先端を一口サイズに切った。

そして、ゆっくりと口に入れて

「ん、これは……」

と驚いた。

口の中に入れると、土台のサクサクとした食感と独特な柔らかさの食感に意識が向いたが、すぐに味が口の中に広がった。

チーズ特有の酸味の中に、仄かな甘さを感じる。
その直後に、強い酸味が口の中をさっぱりさせる。

「これは、柑橘か……柑橘を使うことで、甘さをくどくさせていないのか……！」

ヒルダが一度食べたスイーツは、確かに美味しかったものの、かなり甘さがくどく、そう何度も食べたいとは思わなかった。
しかしチーズケーキは、何時までも食べていたくなる。

「凄い……こんなスイーツがあったのか！」

ヒルダはそう呟くと、チーズケーキを更に切ってから口に運んだ。
一個では足らず、ヒルダは三個食べた。

それでも、ヒルダの知るスイーツより安いことから、驚きだった。

「こんな料理があったのか……世界は広いな……」

ヒルダがそう呟くと、アレツタが近寄り

「どうぞ」

と紙箱を出した。

「これは……サンドイッチか？」

「はい！ 店長からのサービスだそうです。燻製サーモンと燻製チキンを使ったサンドイッチだそうです、夜食としてだそうです」

ヒルダが首を傾げると、アレツタはそう教えた。

それを聞いたヒルダは、確かに店長達が差別的でないことを悟った。

「感謝する……」

そう言ってヒルダは、チーズケーキの分のお金を出した。

そして、退店した。

「七日に一度開く、異世界食堂か……ふ、楽しみが増えたな……他のドアも探してみよう」

消えるドアを見ながらヒルダは、そう呟いたのだった。

29 皿目 ビーフステーキ

「くっ……しっ……いいにも、程がある……！」

「ロメロ……！」

ある森の中を、一組の男女が駆けていた。

その二人は必死な様子で駆けていて、時折後方を確認している。

「このままでは、捕まるか……！」

と黒いコートを着た男性は、焦りが滲む表情で後ろを見た。

木々の隙間から、凄まじい数の松明が見える。

その時、白いドレスを着た女性が

「ロメロ！ あそこ！」

とある方向転換指差した。その先には、ある神を奉納する祠があるのだが、その裏に小さい洞窟が見えた。

入り口は、ギリギリで一人が通れる大きさだろう。

二人は祠に触らないように、なんとかその洞窟に隠れた。

狭いのは入り口のみで、中はそれなりの広さがあった。

二人、ロメロとジュリエッタは簡単に見つからないようにと、なるべく奥に座った。

その時、洞窟の入り口が明るくなり始めた。

どうやら、太陽が出てきたようだ。

「……どのみち、暫く出られないな……！」

「でも、このままじゃあ、見つかってしまうわ……！」

ロメロの言葉を聞いたジュリエッタは、何か考えるように周囲に視線を巡らせた。

(私だけならば、まだ諦めもつく……だが、ジュリエッタを死なせる訳にはいかない……)

とロメロが考えていると、ジュリエッタが

「ロメロ！ あれを見て！」

とある方向を指差した。

ジュリエッタが指差した方向を見てみれば、そこには一つのドアが

有った。

「なんだ、あのドアは……さつきまでは、無かったはず……」

ロメロは太陽光に当たらないように、ゆっくりとそのドアに近寄った。

その時、外から

「この辺りに居るはずだ！ 探せえ!!」

「奴は、見つけたら即始末しろ!!」

と怒鳴り声が聞こえた。

それを聞いたジュリエッタが

「ロメロ、時間がないわ……」

と急かしてきた。

確かに、迷っている時間は無いだろう。捕まれば、高位の吸血鬼たるロメロは討伐され、ハーフの吸血鬼になったジュリエッタはどうなるか分からない。

二人の出会いは、本当に偶然だった。

ジュリエッタが望まぬ政略結婚に使われそうになっていたある日の夜、ジュリエッタの部屋にロメロが現れた。

その時ロメロは、直前に光の高司祭と遭遇し交戦。なんとか、離脱した時だった。

ロメロはがむしゃらに逃げたために、蝙蝠変化で何処まで逃げたのかわからなかった。逃げた先は、ジュリエッタの部屋だった。

最初は怖がったジュリエッタだったが、ロメロが危害を加えるつもりはなく、偶々逃げてきただけと謝罪。そして、また別の場所に行くとした。

だが、ロメロは直前の交戦による消耗もあり、蝙蝠変化すら出来なくなっていた。

それに気付いたジュリエッタは、ロメロに自身の血を僅かに吸わせたのだ。

そこから、二人の付き合いは始まった。

ジュリエッタはロメロを匿いながら、血を僅かずつ与え続け治療を、ロメロはそんなジュリエッタに彼女が知らなかった外の世界の事

を話した。

そんな二人は、気付けば互いに惹かれあっていた。

身分処か、種族すら違う二人。

そんな時、等々ジュリエッタに婚約者が宛がわれることになった。勿論、ジュリエッタは反対した。

しかし、父親は結婚を強行しようとした。

その時、ある程度まで力を取り戻したロメロが、ある作戦を提示した。

それは、ロメロが結婚式直前にジュリエッタを誘拐するという内容だった。

なお、事前にジュリエッタはロメロに自身とロメロの血を交換することを提案した。

それが、人間がハーフの吸血鬼になる方法だった。

そして作戦を発動させ、逃げていたのだ。

しかし館には、父親が呼び寄せた光の司祭が居たのは誤算だった。その司祭の祈祷により、ロメロの能力が大幅に制限されてしまい、上手く蝙蝠変化による逃走が出来なくなってしまう、今に至る。

「こうなったら、賭けるしかない……」

ロメロはそう意気込むと、ジュリエッタの手を握りながら、ドアを開けた。

すると、視界に光が満ちた。最初は畏かと勘ぐった二人だったが、肌が焼かれるような感覚がない。

「おっと!？」

「随分と、早いお客様だ……」

ロメロとジュリエッタを出迎えたのは、コックの服装の二人の男性。店長と明久だった。

実は二人も、上から降りてきて店の電気を着けたばかりで、それと同時に入ってきた二人に、思わず驚いてしまった。

勿論だが、アレツタ、クロ、早希の姿はまだない。

「……は……」

「洋食のねこやという料理屋です。通称で、異世界食堂と言われてま

す」

ジユリエツタが内装を見回していると、明久がそう教えた。すると、店長が

「何やら顔色が悪いようですが……大丈夫ですか？」

と二人に問い掛けた。

すると、ロメロが

「ああ、大丈夫だ。顔色はこうだが、私達の体調は良好だ」

と答えた。実際、確かに寝不足ではあるが、二人の体調は問題ないレベルだった。

すると、ジユリエツタが

「ロメロ、何か頼みましょう……料理屋さんみたいだし、注文すれば、私達はお客になるんだし……」

とロメロに耳打ちした。

それを聞いたロメロは、頷いてから

「すまないが、この店で一番高い料理を出してくれるか？ お金なら、この通りある」

と懐から、金貨の詰まった袋を出した。

それを聞いた明久と店長は、顔を見合わせて

「まあ、構いませんが……」

「ただまあ、まだ準備が完了してない部分がありますから、多少お時間を頂きますが……大丈夫ですか？」

と問い掛けた。その問い掛けに、ロメロは

「構わない。頼む……それと、葡萄酒もあれば出してほしい」と追加した。

それを聞いた二人は

「承りました」

「少々お待ちください」

と告げて、キッチンに下がった。

その後、料理を待っている間にクロ、アレツタ、早希の三人が来て、働き始めたのだが

「……あのエルフ……」

「あれは恐らく、黒の女王陛下だ……」

と二人は、クロの正体に気が付いた。

吸血鬼というのは、黒の眷族になる。吸血鬼の二人だから、気付けたことだ。

その時、早希が

「お待たせしました、ビーフステーキです」

と二人の前に、ビーフステーキを出した。勿論、ガレオ抜きになる。

「牛の肉を焼いただけの料理が、一番高い料理か……」

「だけど、少し違うみたい……」

二人が知る肉焼き料理は、肉が非常に固いものだ。

しかし、今出されたビーフステーキは違っていると、ジュリエッタは気付いた。

その理由が、ビーフステーキの切った際の手応えだった。

ナイフはスツと大した抵抗もなく、肉を切った。

すると、ロメロが

「これは……そうか、食べるための牛というやつか」

と気付いた。

二人も、噂には聞いている。食べるためだけに育てる牛があると。

「……ん」

「これは……美味しい……」

ビーフステーキを一口食べた二人は、染み出してきた肉汁に驚いた。

大量の肉汁はしつこくなく、濃厚な味わいだ。

しかし、オラニエを使ったソースが肉の味を引き立てつつ、サツパリさせている。

「この葡萄酒も、美味しいな……」

「本当……よほど、いい葡萄酒なのね……」

二人は葡萄酒とビーフステーキの味に、満足そうに頷いていた。

その後、二人は様々な料理を注文。赤の女王が来る直前に退店した。

「異世界食堂……か……いい店に出会えた」

「そうね……ただ、途中で来たあの光の高司祭達には、驚いたけれどね」

二人はそう会話しながら、洞窟から出た。

既に太陽は沈み、月の優しい光が二人を照らしている。

周りに人の気配はなく、二人は安堵した。

そして、二人は顔を見合わせて

「それじゃあ、行こうか……ジュリエッタ」

「ええ、ロメロ……」

と頷きあい、蝙蝠変化で夜空に消えていったのだった。

スライムの国

「んっー……終わったあ……」

と背伸びしたのは、肩辺りまで伸ばした水色の髪が特徴の中性的な人物だった。

その人物の前には、見事な木製の机がある。

どうやら、執務室のようだ。

「お疲れ様でした、リムル様」

その人物、リムル・テンペストを労ったのはスーツを着た巨乳に紫色の髪に額から生えた角が特徴の鬼人の美女のシオンである。

そのシオンは、リムルが処理した大量の書類を抱えて退室した。それと入れ替わるように、今度は着物を着た薄桃色の髪にシオンと同じように額から角が生えている鬼人の美少女たるシユナが入ってきて

「リムル様、ご休憩にしませんか？」

と首を傾げた。すると、リムルは

「あー……そうだな。長時間座って、疲れたし」

と言って、その身をスライムにした。

実は、リムルの正体はスライムなのだ。

ジユラ・テンペスト連邦の代表、リムル・テンペスト。

なぜ、最弱の魔物の筈のリムルが一国の主となっているのか。

色々あったのだが、簡潔に纏めると様々な魔物や襲撃してくる敵を繰り返し迎撃し、吸収・進化を繰り返してきた結果になる。

それにより、リムルはスライムなのに人と魔物が共存し繁栄している国の主となっているのだ。

「でしたら、私が作った御菓子という物をどうぞ！」

そこにシオンが、両手でトレイを持って戻ってきた。のだが、その手に持っているトレイの上のお皿の上には、何とも形容し難いモノが乗っていた。

具体的に言えば、紫色の煙を噴き出す青紫色のモノが皿の上に有った。

それを見たりムルは、思わず

「シオン……それは？」

と問い掛けた。

すると、シオンは

「はい！ 街の菓子職人から聞きました、御菓子なる物です！」

と自信満々と言った表情で、告げた。

しかし、リムルだけでなくシユナも嫌な予感がしてならなかった。

シオンだが、彼女は過去に料理（本人談）を作り、仲間を一人卒倒させたという経歴がある。

つまりは、毒料理を作ってしまったのだ。

その時、シオンの元上役だったベニマルというシユナの兄の鬼人に味見役（もとい、毒見役とも言う）を押し付けた任せただが、少し前にそのベニマルから

『リムル様……最近俺、毒耐性スキルを覚えたんですよ……』

と哀愁と悲壮感溢れる報告を聞き、リムルは内心で罪悪感を抱いたのを覚えている。

耐性系のスキルは、幾度もそれを経験することで得られるスキルで、そこから分かるのは、ベニマルが何度もシオンの毒料理を食べたということだ。

そしてリムルは、自身の直感からスプーンで掬ったそれを、観葉植物の植わっていた鉢植えに落とした。

その直後、観葉植物が枯れた。

「シオン……」

「あ、あれ……？」

シユナが呆れた視線を向けると、シオンは可笑しいなあという様子で首を傾げた。

すると、リムルは

「シオン……暫くは、作らなくていいから……」
と命じた。

「……はい……」

シオンも何か思うところがあつたのか、リムルの命令に素直に頷い

た。

その時、シユナが

「リムル様、あれを！」

とある方向を指差した。

その先は暖炉と壁があるだけの筈だったが、気付けば一つのドアがあった。

猫の彫刻が見事な、黒い木製のドアが

「お下がりでください、リムル様」

とシオンが壁に立て掛けていた大剣を掴んで、リムルの前に立ちはだかった。

しかし、リムルは

「いや、大丈夫だ」

と言って、人の姿になってドアの前に立った。

リムルは実は、以前は人間として日本に住んでいた。その時の名前は明かさないが。そして彼は、日本に住んでいた時、実は何回か来店していたことがあるのだ。

「懐かしいな……」

リムルはそう言いながら、ドアの取っ手を掴んで、開けた。

「いらっしやいませ、洋食のねこやにようこそ!!」

そんなリムル達を、明るい声が出迎えた。

30 皿目 シーフードドリア

「魔物と人間が共存する国……」

「まあ、俺がその国。ジュラ・テンペスト連邦の主なんですが」

明久にそう説明しながら、リムルは人間の姿からスライムの姿になった。それを見た早希が

「ねえ、アレツタちゃんの世界にもスライムって居るの?」

「居ますけど、狂暴な魔物なんです。内部に取り込んだ獲物を、溶かすみたいで……」

「うわ……」

アレツタの話聞いて、早希は体を震わせた。

確かに、そんなことにはなりたくないだろう。

「まあ、俺はそんなことをしないから。大丈夫だよ」

リムルはそう言いながら、人間の姿に変身した。

そして

「シオン、シユナ。ここで飯にするぞ」

「リムル様の判断なら、従いますが……」

「ここで、ですか?」

リムルの言葉に、二人は首を傾げた。

恐らくだが、味に疑問を覚えているのかもしれない。だが、リムルが

「大丈夫。この味は、保障するさ」

と二人に伝えた。

それを聞いた店長は

(ウチのことを知ってるのか?)

と片眉を上げた。

そしてリムル達は、アレツタに促されて机に座った。そこに、早希がメニューを人数分持っていたのだが、それをリムルは

「ああ、二人分だけいい。俺は決まってるから」と告げた。

それを聞いた早希は、少し驚いた表情を浮かべつつも、リムルに言われた通り、シオンとシユナの二人の前にメニユーを置いた。

そして数分後、シオンとシユナの二人は料理が決まったらしく、メニユーを閉じた。それを確認したリムルは、片手を上げてたまたま近くに来たクロを呼んだ。

(御注文は、お決まりですか?)

三人は頭の中に響いた声に一瞬驚くが、すぐに気を取り直し

「私は、トンカツとやらをください」

「私は、このカレーライスとやらを」

とシオンとシユナは、それぞれ注文した。

そして、最後にリムルが

「俺は、シーフードドリア。付け合わせのサラダなんだが、シーザーサラダで頼む」

と細かく注文した。

(畏まりました)

注文を聞いたクロは、頷いた後にメニユーを回収して離れた。

それを三人は

「あの方……とてつもない魔力です……」

「A……いえ、Sすら越えてる……」

「体感的には、ミリムに近い強さだな……」

と漏らした。

そして、十数分後

「お待たせしました、シーフードドリアとシーザーサラダです」

とアレツタが、リムルの前に料理を置いた。

料理が届けられた順番としては、リムルが一番最後なのだが、シオンとシユナの二人はまだ料理を食べていなかった。

「つたく、俺を待たなくてよかったんだぞ?」

「いえ、リムル様」

「リムル様を待たずに食べれる訳がありません」

リムルの苦言に、シオンとシユナの二人は笑みを浮かべながらそう答えた。

そして、三人は

『いただきます』

と揃って食べ始めた。

そしてリムルが、最初の一口を口に運び

「うん、美味しい……」

と呟くと、シオンとシユナも食べ始めた。

(懐かしいなあ……会社で働いてた時は、昼休みとかに来たな……)

リムルは懐かしみながら、一口ずつ食べていた。

元人間だったリムルは、ねこやビルの近くにあったある会社で働いていて、昼休みの時はよく後輩と一緒に食べに来ていたのだ。

しかし、訳あって今居る世界に転生。

それ以来、食べていなかったのが、今食べているシーフードドリアだった。

耐熱性の器の底にご飯を敷き詰めて、その上にねこや特製のデミグラスソースとホワイトソースを掛けて、その上にイカや魚の切り身、タコを乗せてから、チーズをまぶして焼いてある料理だ。

人間だった頃は一人暮らしだったために、どうにも簡単なご飯しか食べておらず、ねこやでのお昼が数少ない楽しみだと言っても過言ではなかった。

(また、食べられるとはなあ……)

とリムルが食べていると、それをたまたま見た店長が

(ん?)

リムルの姿に、別の人間の姿が重なった。

大柄な体格に、少し無愛想ながらも後輩の面倒見が良かった一人の男性。

(まさか……な)

と店長は首を傾げながらも、新たな料理を作るのに意識を戻した。

そして、食べ終わると

「いいか、シオン。料理つてのは、これを言うんだ。見た目と味の両立……それこそが、料理だ」

「はい、勉強になります……」

とりムルは、シオンに教えていた。

その光景に明久は、何故か悪寒が走った。

「明久さん？　どうかしたんですか？」

身震いした明久を見て、早希が問い掛けると

「大丈夫、高校時代を思い出したただけだから」

と明久は答えて、調理に意識を戻した。

そして、三人は立ち上がると

「すみません、お代なんですけど……」

とりムルが、金貨を取り出した。

それを見た明久が

「えっと、金貨と銀貨、銅貨のレートは、どうなってますかね？」

とりムルに問い掛けた。

それにリムルが答えると

「うん、同じですね」

とおつりを返した。そして

「ここは、七日に一度開いてますので、またお越しください」

と頭を下げた。

退店したリムルは、消えていくドアを見ながら

「また行けるようになるとはな……」

と呟いたのだった。

再会する戦友

「よっ、アルトリウス！ 老けたなあ！」

「……アレク……久し振りに会った第一声がそれか」

その日、アルトリウスの研究室に珍しい客人が現れた。嘗て、アルトリウスと共に魔神を倒した四英雄の一人、ハーフェルフの剣士。剣神、アレクサンドルだ。

朝一で弟子が、慌ててアルトリウスを呼びに来たから誰かと思えば、嘗ての戦友だった。

「しかし、お主がワシに会いに来るとはな……何用だ？」

「なに、連れて行ってほしい所があるんだ……」

アルトリウスが問い掛けると、アレクサンドルはそう言いながらソファアーに腰掛けた。

そして、笑みを浮かべながら

「風の噂で聞いた、異世界食堂……そこに連れて行ってほしいんだ」と告げた。

それを聞いたアルトリウスは、少し間を置いてから

「扉は明日出るんだが……夕方に行くぞ」と告げた。

「夕方？ 別に、朝でも大丈夫だが……」

「お主……自分が色んな奴に恨みを買っていることを理解しているか？」

アルトリウスの言葉に、アレクサンドルは思わず、うつと言葉を漏らした。

魔神討伐後、アレクサンドルはフラフラと世界各地を旅しながら冒険者として活動してきた。

その中で、様々な討伐や捕獲依頼を受けてきており、そういった意味では色んな地方の魔族や半魔族から恨みを買っていた。

そしてハーフェルフ故に、容姿端麗な姿をしており、女性からも人気だったのだが、所謂女性トラブルも度々起こしてしまっていたの

だ。

「要らんトラブルを起こしたくないからな……夕方に行くぞ」
「分かった」

アルトリウスの言葉に、アレクサンドルは頷いたのだが、アルトリウスは

（頼むから、本当にトラブルを起こさんでくれ……出入り禁止にはなりたくないでな）

と思った。そして、翌日の夕方。

「ほれ、このドアがそうじゃ……異世界食堂の入り口じゃ」

「これが……」

二人の見ている先には、床に書かれた魔法陣の中心に黒いドアがあった。

「行くぞ……」

「おう」

アルトリウスが先頭になり、ドアを開けた。

すると、アルトリウスには耳慣れたカウベルが鳴り

「いらっしやいませ！ 洋食のねこやにようこそ！」

「あ、トンカツさん！」

と早希とアレツタが出迎えた。

そこに、店長が出てきて

「ああ、アルトリウスさん。珍しいですね、夕方に来るなんて……おや、本当に珍しい。もうお一人連れてくるなんて」

と驚いていた。

古馴染みの常連となると、大体は朝か昼までには来店するのが殆どで、もし夕方までに来なかった場合、その日は来ないのだ。

「すまん、店長。こいつが来たいと言うからな。メニューは」

「あ、決まってるんだ……オイラは、コロッケを頼むよ」

アルトリウスが顔を向けると、アレクサンドルはそう言いながら席に座った。

「……ここが異世界食堂か……つつ!?」

アレクサンドルは珍しそうに周囲を見回していたが、クロを見て顔

を青ざめた。

「なに、アイツ……ヤバイ……無理、絶対勝てない……」

「やはり、分かったか……あれはな、赤の女王と同類の存在だ……色から察するに、黒の女王かの……」

アレクサンドルの呟きを聞いたアルトリウスは、アレクサンドルにそう教えながら、クロが持ってきたビールを一口飲んだ。

そして、次に店長を見て

「それに、あの店長だが……ヨミの孫だ」

「なに!？」

アルトリウスの言葉に、アレクサンドルは驚きながら店長を見た。そして、アルトリウスに

「ヨミは、生きているのか!？」

と問い掛けた。

ヨミというのは、アレクサンドル、アルトリウスと共に魔神を倒した四英雄の一人だが、魔神の最後の足掻きで死んだと思っていた最強の冒険者だ。

「ああ……魔神の最後の足掻きで、異世界に飛ばされていたらしい……ワシも、30年前に再会して驚いたよ……幸せそうだった……」

アルトリウスがいうヨミ、現在の名は山方曆^{やまがたこよみ}。

店長は、その孫なのだ。

「しかし、魔力は全く感じないな……」

「それに関しては、旦那の血を濃く継いだようだ……だがヨミはな、『平和な世界で魔力や何やらは不用……だから、料理の腕を継いでくれて良かった……そうすれば、ダイキと同じように笑顔を作ってくれる』……とな……」

それは、かつて再会した曆から聞いた話だった。

アルトリウスは一度、元の世界に帰りたいか? と問い掛けて、そう返されていた。

つまり、今の生活に幸せを感じているのだと分かった。

かつては、戦うことしか知らなかった曆。

否、魔神とそれに連なる存在を殺す為に産み出されたヨミ。それ

が、異世界に渡って人並みの幸せを得た。それが、アルトリウスには嬉しかった。

かつての戦友が、異世界でようやく人並みの幸せを得たのだから。

31 皿目 コロッケ

「お待たせしました、コロッケです。そちらのソースを掛けても、美味しいですよ。では、ごゆつくり」

早希はそう説明した後、一度頭を下げてから離れた。

そしてアレクサンドルは、皿の上に盛られているコロッケを見て

「これが、この店のコロッケか……確かに、帝国で食べたのとは全然違うな……」

と呟いた。

今や、帝国の代表的料理となっているコロッケ。そしてその材料となつているダンシヤク。その両方を帝国に広めたのは建国の王と呼ばれる、ヴィルヘイムだ。

そのヴィルヘイムは、今から約30年程前のある日に、ダンシヤクの実を入手し、まず帝国直轄の農家にどういった環境下で栽培出来るのかを調査。

そしてダンシヤクが、どんな痩せた土地でも育つと分かると、それを帝国全土に広めた。

それと同時に、そのダンシヤクを使った料理たるコロッケを広めた。

しかし、見た目から全く違う。

帝国で食べられるコロッケは円形に対して、ねこやで出されるコロッケは楕円形だ。

「さて、味はどんなだ……」

アレクサンドルはそう言つて、まずコロッケを半分に切つてから口に運んだ。

「ん！ 味も全然違うー！」

アレクサンドルが知つている帝国のコロッケは、ダンシヤクの実そのままの味と言つても過言ではない。

それに比べて、ねこやのコロッケは確かにダンシヤクの実の味もするが、同時に肉の味と数種類の香辛料の味も口の中に広がる。

「これは、旨い！」

その味に興奮したアレクサンドルは、軽く一個目を食べ終わると、二個目を半分に切ってから

「つと、そう言えば……このソースとやらを使えば、更に美味しくなるって言ってたな……」

と早希の言葉を思い出し、早希が置いていったソースをコロツケに掛けた。

「ソースとやらの見た目は、何とも言い難いが……」

そう呟きながらアレクサンドルは、ソースを掛けたコロツケを様々な角度から見てから、一口食べた。

その後

「んんっ!? これは、全然違う!!」

と興奮と驚愕の声を上げた。

ソースの見た目に騙されたアレクサンドルだったが、口の中に濃厚な味が広がったことでソースに対する評価を改めた。

（そうか！ この色は、様々な素材が溶け合った結果なのか！ これは、コロツケに欠かせないものだ！）

そう結論着けたアレクサンドルは、目の前でビールを飲んでいたアルトリウスに

「なあ、アルトリウス。このソースとやら、作れないか？」

と問い掛けた。するとアルトリウスは、少しソースを見てから

「無理だろうな……ワシらの世界とでは、様々な分野で生産力が違う……同じ物を作るのに、膨大な素材と年単位の時間。金が掛かる」と結論着けた。

実を言えば、昔ヴィルヘイムも同じことを考えたことがあり、一度は王宮抱えの魔法使い達と研究しようとした。しかし、今しがたアルトリウスが出したのと同じ結論が出て、挫折した。

当時の帝国は、ダンシヤクによりようやく貧困層にも食糧が回るようになった位で、ソースを作るには膨大な素材が必要になるので、また国民に辛い生活を強いることになる。

それは本末転倒であり、国民を第一に考えるようになっていたヴィ

ルヘイムは、ソース造りを断念したのだ。

「そうか……まあ、ここで食べられるから、良しとしよう！」

そう結論着けたアレクサンドルは、またコロツケを食べることに意識を向けた。

その後、アレクサンドルはもう一皿コロツケを注文。野菜も食べ終わると

「はあ、旨かったー！」

と満足そうにした。

そして、小声で

「しかし、あのヨミの孫がこんなに料理が上手いなんてな……」

「確かにの」

アレクサンドルの言葉に、アルトリウスは思わず同意してしまった。

しかし、仕方ないだろう。大戦期、四英雄の一人で最強がヨミだったが、家事能力は壊滅的だった。

しかし、それもまた仕方ないことだった。何故ならば、ヨミは戦うために産み出された存在で、戦いしか知らなかったのだから。

「さて、帰るか」

とアレクサンドルが腰を上げた時、目の前にビニール袋に入れられた紙の箱が置かれた。

「これは……」

「サービスで、コロツケサンドです。どうやら、旅の剣士みたいですから」

アレクサンドルが視線を向けると、店長がそう教えた。

アレクサンドルが気づくと、アルトリウスには明久が同じ箱を渡している。そちらは、カツサンドだ。

そして、アレクサンドルは知らなかったが、ヴィルヘイムは帰りによくコロツケサンドを持って帰っていたのだ。

「そうか……では、有り難く貰うよ」

「ええ、どうぞ」

それを受け取ったアレクサンドルは、アルトリウスと共に退店し

た。

それから、数日後

「よう、バカ息子……お前が薦めてた異世界食堂のコロッケ……食べ
てきたぞ……旨かったぞ」

アレクサンドルはそう言つて、花束をあるお墓に軽く投げよう
置いた。

そのお墓は、帝国建国の王。ヴィルヘイムのお墓だ。

そして何よりも、アレクサンドルの息子のお墓だった。

今から約100年前、アレクサンドルは当時一人で旅をしていたの
だが、旧帝国の一人の姫と心を通わせ、肉体関係を持った。

その後、アレクサンドルはまた一人旅をしていて、その時に、その
姫が一人の子供を産んだと知った。

まだ結婚していないのに、子供を産んだということは、それは自分
の子供だと悟つたアレクサンドルは、一度旧帝国首都に向かった。

しかし、アレクサンドルが到着した時旧帝国首都は、阿鼻叫喚の地
獄となつていた。

アレクサンドルと同じハーフェルフの王と宰相が、死者王と化して
暴れていたのだ。

その最中、アレクサンドルは旧帝国兵士と協力して姫とヴィルヘイ
ムを逃がすことにした。

命を賭ければ倒せたかもしれないが、それでは二人を助けられない
と悟つたアレクサンドルは、旧帝国兵士達と一緒に後退戦闘を繰り返
し、旧帝国兵士の全滅と引き換えに二人を脱出させることに成功し
た。

その後姫は、死者王から放たれていた瘴気により病に倒れ、ヴィル
ヘイムは今の帝国を若くして建国。

国土拡大のために戦争を繰り返した。

その時期アレクサンドルは、既に四英雄として魔神の討伐に向か
い、その道中で旧帝国首都の死者王を討伐した。

だが旧帝国首都は、膨大な瘴気により人間が住めなくなつていて、
後に魔族達の国となる。

そしてアレクサンドルは、魔神を倒した後に姫が病気で死んだことを知った。

その後は、世界各地を旅していた。

そして、今から約15年程前にヴィルヘイムと再会。異世界食堂の事を聞いたのだ。

「済まなかった、ターシャ……あの時は、それが最善だと……っ！」

ヴィルヘイムの墓に黙祷を捧げた後、アレクサンドルはもう一つのお墓に手を置いて涙を流した。

そのお墓が、亡くなった姫のお墓だった。

そしてアレクサンドルは、涙を拭いて立ち上がり

「またな、ターシャ……また来るよ……」

と言つて、離れようとした。

その時、話し声が聞こえたので、反射的に木の枝に飛び乗った。

そこに現れたのは、今現在療養中のアーデルハイド姫だったのだが、その容姿を見たアレクサンドルは驚いた。

何故ならば、アーデルハイドの姿がかつて心を通わせた姫に瓜二つだったからだ。

「あら？ お祖父様のお墓に花束が……」

というアーデルハイドの言葉を聞いたアレクサンドルは、アーデルハイドがヴィルヘイムの孫娘と気付いた。

「……時は巡るか……そりゃ、アルトリウスもじいさんになってたしな……」

アレクサンドルはそう呟きながら、木の枝の上を跳躍しながらその場を離れた。

アーデルハイドの健康を願いながら。

32 皿目 サンドイッチ

この異世界食堂には、常連と呼べる客が数多く居る。

彼等は自分が見つけて確保している扉を使って、7日に一度、異世界食堂に来る。

そうして、異世界の料理を堪能することが生活の一部になっているような客だ。

様々な場所に現れる扉で、客を選ばず。だからか、非常に個性豊かな人物達が訪れる。

特に、常連客は個性的な人物が多い。

世界各地から集まった個性的揃いの常連達は、お互いに余り干渉しないように心掛けている。

世界にその名を馳せた有名人、天敵、仲の悪い相手が居てもお互いに見てみぬ振りが暗黙の了解になっている。

何しろ、来ているのは異世界食堂。自分達の常識は通用しないし、通用すると思っではいけない。

更に言えば、下手なことをして店主達から《入店拒否》されたら、目も当てられない。

そんなわけで、お互いを尊重するし初めてきた客がそういったことをしてきたりしたら、止めに入る。(過去に実例アリ)

しかし、そんな常連達でも譲れないことがある。

それが、料理だ。長年通っていたり、頻繁に来る客は好物の一品が必ず有り、それが異世界食堂で一番美味しいと確信している。

もし、どの料理が一番美味しいかという言葉が出たら、そこから口論に発展することも多々ある。

そして、今日はたまたまその日だったようで

「だーかーらー！ サンドイッチにしても一番美味しいのは、メンチカツだって！」

「いいや、エビカツサンドこそが！」

発端は、たまたま同じ席に座ったサラとハインリヒの二人だった。

二人共に同じ揚げ物系ということで、本当に気紛れレベルで互に一口ずつメンチカツとエビフライを交換し、食べた。

そこから、どちらがサンドイッチに合うかということになったのだ。

しかも、そこに

「カツサンドも忘れてはならんぞ」

とアルトリウスも参戦。赤い顔から察するに、少し酔っているのかもしれない。

更には

「僕としては、ナポリタンドッグもおすすめしたいですね！」

若き経営者、シリウスが参戦。彼としては、商会が独占している商品が関わっているから、というところだろう。幼馴染みの料理人のシリウスは、厨房が見える位置の席で中を見ている。どうやら、店主や明久の料理を見て勉強したいらしい。

「あ、あの……フルーツサンドは、どうでしょうか？」

そこで意外にも、アーデルハイド姫が参戦してきた。

まさかアーデルハイド姫が参戦するとは思っていなかったシャリーフは、回りの人達の視線に萎縮していて、妹のラナーは溜め息を吐いている。

「お主は参戦せんのか、テリヤキの」

「確かにテリヤキチキンは、サンドイッチにしても合うが、やはりライスこそ……」

「つまり、負けるのが怖いか」

「その話、乗ってやる」

アルトリウスの挑発に、タツゴロウが参戦。やはり、アルトリウスは若干酔っているのかもしれない。

「先輩は、いかないんですか？」

「んー……僕は、なんでも大丈夫だから」

マシユの問い掛けに、立夏は無難に返答。巻き込まれるのを恐れたか。

しかし、それが正しい。

「なのはママは？」

「ママは、なんでも大丈夫だよ？」

金髪少女、ヴィヴィオの問い掛けに、なのはは母親として答えている。大人としてでか、事を荒立てる気は無いようだ。

「ゴブリンスレイヤーさんは、好きなサンドイッチはあるんですか？」

「……食に関しては、よくわからん」

ゴブリンスレイヤーの短い返答に、受付嬢は僅かに唇を尖らせた。彼に関しては、食もだが女心を理解する努力をするべきだろう。

「リムル様は、どのようなサンドイッチがお好きなんですか？」

「ん？ 俺は、シンプルに玉子サンドだな」

シユナの問い掛けに、リムルは素直に答えていた。シオンの姿が無いことから、たまたまなのか二人で来たようだ。

そして議論していた一同が

「こうなったら、実際に食べて決めようじゃないの！」

「それが、一番手っ取り早いようだな！」

「店主よ!!」

と一斉に、厨房の入口にまで来ていた店主に視線を向けた。店主は、もしさらに過激化するようならば最終手段^{料理出しませんよ宣言}で止めようとしたのだ。

そして、店主は

「あいよ！ 明久！」

「オーダー承りました!!」

店主の言葉を聞いた明久は、素早く食パンを取り出した。

そして、数十分後

「お待たせしました！」

「サンドイッチです！」

三つの大皿に、大量のサンドイッチが乗せられた状態で机の上に置かれた。

面倒だったからか、聞こえてきたサンドイッチは全て作ってある。

そして、試食の結果だが……それは読者の皆様にお任せします。

33 皿目 パウンドケーキ

「よ、来たぜ」

「あ、お疲れ様です」

エレベーターから現れた男性を出迎えたのは、ビーフシチューの仕込みをしていた明久だった。

そんな明久を見て、男性。

ねこやビル一階のケーキシヨップ、フライングパイの店長は

「あん？ あいつはどうした？」

と明久に問い掛けてきた。

フライングパイ店長が言うあいつというのは、店長のことだ。

「今は、ちよつと買い物に行ってます。今日は大食いのお客さんが来たので」

「ああ、旅小人か。なら、仕方ないか」

フライングパイ店長は納得すると、ゴンドラで運んできたケーキやお菓子類を冷蔵庫に入れていく。

「今日もありがとうございます」

「なんの。どうせ、うちは土日も仕込みやつてるからな。手間は変わらない」

明久が感謝の言葉を言うと、フライングパイ店長はカツカツカと笑いながら冷蔵庫に仕舞っていった。

彼は今の店長の幼馴染みで、昔からねこやを知っていた。彼が子供の頃、彼の両親は共働きで帰りは何時も遅かった。そんな彼は、両親が冷蔵庫に用意しておいたお金で何時もねこやに来ては料理を食べべていて、先代店長の山方大樹もそんな彼を孫のように接していた。

そして、ある専門学校に通っていた時、彼はバイク事故で下半身不随になりかけたことがあった。

そんな時に、大樹が何処異世界から怪しげな色合いの飲み薬を入手し、助けられたことがあった。

その際にねこやの秘密を知った。

その縁もあり、専門学校を卒業後にねこやビル一階にフライングパイパーを開店。異世界食堂に協力しているのだ。

平日だけでなく、土曜日にも商品の卸売りをしているのだ。

「うし、これで終わり……つと、忘れない内に……こいつを渡しとくわ」

フライングパイパー店長はそう言うのと、一つの箱を明久に手渡した。

「これは？」

「ん？ ウチのポイントサービスは知ってるだろ？」

「あ、100ピースケーキを買うと、1ホールですね」

フライングパイパー店長の説明を聞いて、明久は納得した様子で箱を見た。

フライングパイパーではポイントサービスを導入しており、ケーキを100ピース買うと1ホールサービスされるのだ。

なお、20個だと1ピースのサービスとなる。

ご近所の甘いもの好きなOLに人気御用達のサービスで、中々に好評である。

「ん……100個つてもしかして、あの人で？」

「お、知ってるみたいだな。ここ1年位、毎週ウチのパウンドケーキを2個ずつ食って可愛い子が居るんだろ？」

フライングパイパー店長のその言葉に、明久の脳裏に20代前半と思われる女性がよく来てはパウンドケーキを頼む。

「分かりました。来たら、渡しておきますね」

「おう、頼んだ」

明久の言葉に、フライングパイパーの店長は朗らかにそう言った。

そして、それから数時間後

「ああ……また、この日が……」

修練場の片隅に現れたねこやのドアを見て、光の高司祭たるセレスティーンは暗い表情を浮かべた。

そこは、高司祭のために作られた修練場で、そこに入ることを許されているのは、20歳で高司祭になったセレスティーンのみ。

そしてねこやの秘密を知ってるのは、隠居した先代高司祭とセレス

ティーヌだけ。

そうしてセレスティーヌは、ゆつくりとドアを開けた。

(ああ、なんてことでしょう……一年の享受は、終わったのに……)

セレスティーヌはそう思いながら、早希に案内されて席に座った。

《一年の享受》というのは、光の高司祭が受ける試練の一つだ。

一年間は好きなことをしたり、好きな物を食べて、その後はそれら
を一切禁じるという。

光の神殿は何より節制を尊び、禁欲の生活を送ることを旨としているのだ。

「あの……今日のパウンドケーキは……」

「今日は、ラムレーズンと聞いてます」

早希のその説明に、セレスティーヌの鼓動は高鳴った。

(ら、らむれーずん！)

ラムレーズンは、小さい葡萄を甘味が強い酒に漬けた味で、セレス
ティーヌの一番好きな味だ。

しかし、食べたのは一年間で三回だけ。今回を合わせて、ようやく
四回目になる。そのラムレーズンの味を思い出し、セレスティーヌの
口の中に唾が溢れた。

「では……パウンドケーキを2つと紅茶をお願いします……」

「分かりました。少々お待ちください」

早希が離れると、セレスティーヌは内心で頭を抱えた。

(私のバカ！ いえ、そもそも、同じ味だったらまだ飽きが来たのに
……!!)

自身を罵倒した後、セレスティーヌは責任転嫁を計ったものの、や
はり自分が悪いという結論になって机に顔を打ち付けた。

そこに、アレツタが近寄り

「あの、どうしました？」

とセレスティーヌに問い掛けた。

「自分自身の意思の弱さに、嘆いてるだけです……」

セレスティーヌはそう言うと、体をゆつくりと起こした。

「は、はあ……こちらが、パウンドケーキです。では、ごゆつくり」

アレツタは皿を置いた後に、頭を下げてから下がった。

そして、セレスティーヌの目前に茶色い四角形のパウンドケーキが2つ乗った皿が置かれてあった。

その味を思い出すだけで、口の中に溜まった唾を飲み込んでから「い、いただきます……」

と会釈してから、パウンドケーキを一つ持って口に運んだ。

一口かじるだけで、ホロホロと崩れる生地。しかしボソボソしてる訳でもなく、しつとりしている。

しかも生地に茶葉を混ぜているようで、お茶の風味が口の中に広がる。

そんな中で、ラムレーズンが一際強く自己主張してくる。濃厚な甘さが口いっぱいに広がり、手が止まらなくなる。

(ああ……この味が、私を魅了する……)

光の高司祭としては、本当はもう食べてはいけない。だが、その節制の訓告を忘れそうになるほどに、食べたいのだ。

そしてセレスティーヌは、あつという間に2つのパウンドケーキを食べ終えた。

それを残念に思いつつ、そろそろ戻って、ドアの辺りを封鎖する手立てを考えないと。

と考えていた時、店長がやってきて

「どうぞ」

と細長い紙の箱を、セレスティーヌの前に置いた。

「……これは？」

「100個注文記念のパウンドケーキのホールです。中はラムレーズンだそうです」

セレスティーヌの問い掛けに、店長はそう教えた。

それを聞いたセレスティーヌは、思わず目を見開いた。

(あのパウンドケーキを、この長さで!? しかも、ラムレーズン!?)

セレスティーヌとしたら、誘惑以外の何者でもない。

本当なら断るべきだ。しかし、記念品を無下にも出来ない。

セレスティーヌは激しい葛藤の末に

「い、いただきます……」

とその箱を貰い、退店。消えつつあるドアを見ながら

「先代様の言葉の意味がわかりますわ……まさしく、魔性の店です……」

セレスティーンはそう言いながら、手の中にある箱を見下ろしたのだった。

世界樹の世界から

「え、食堂が使えない？」

「はい……今イリーナさんが、調べてるんですが……火が起こせないんです……」

少女、世界樹の精霊であるユーの問い掛けに、ダークエルフのソフィーは、困ったという表情を浮かべながらそう答えた。

すると、キッチンの方から小柄な少女。ドワリンドのイリーナが現れて

「原因は分かりましたが、直すには時間が掛かりそうであります。朝食には、間に合わないかと思われます」

と告げた。

機械が得意なイリーナでも、時間が掛かるということは直ぐには直せないだろう。しかし、もうすぐ昼食の時間だ。二人の話を聞いて、冥王は

「さて、困ったな」

と腕組みした。

そうしている間にも、続々と生徒でもありアイリスたる少女達が食堂に続く廊下を集まってきた。

その時だった。冥王が作ったメイド変態従者でありアイリスのベアトリー

チエが

「ご主人様、あちらを」

と壁を指差した。言われた冥王も、壁を見た。そこには、見慣れぬドアがあった。

黒猫が彫られてある、黒いドアだった。

それを見た騎士のアシュリー・アルヴァステイが、冥王の前に立つて

「主、お下がりにください」

と剣の柄に手を添えた。気付けば、他の面々もそれぞれ簡易ながら戦闘態勢を取った。

それを、冥王は片手で制して

「大丈夫。確かに膨大な魔力は感じるけど、害意は感じない……」
と告げた。

その時、侍のコトが

「んん？　これ、私の故郷の言葉じゃん」

と思わず首を傾げた。

「コト。それ、本当？」

「うん。見たの久しぶり過ぎて、思い出すのに時間掛かったよ」

ヴァンピールのヴァレリアの問い掛けに、コトは答えながらドアに書かれてある文字を読んでいる。

今や冥界に居るコトだが、嘗ては極東の島国で生まれ育ち、その後は訳あつて世界中を旅していた。

それ故に、故郷の言葉を見るのは久しぶりだったのだ。

「それで、なんて書いてあるんだ？」

「んーと……洋食のねこや……だね」

冥界の問い掛けに、コトはそう教えた。

「つまりは、レストラン……ということかな？」

「……ベア」

「ハイハイ」

眼鏡を掛けた少女のクレアが首を傾げると、冥王はベアトリーチエを呼び、冥王の意図を察したベアトリーチエはスツと財布を取り出して、冥王に差し出した。

財布を受け取った冥王は、財布の中身を確認し

「よし……今日は、ここで昼食にしようか」

と提案した。

すると、訓練帰りだからか、海賊のような服を着たギゼリックが

「つまりは、冥王の奢りって訳かい？　太っ腹だねえ」

と快活に笑いながら言った。

それに対して、冥王は

「俺は仮にも、学園長でもあるからな。学生が困ってるなら、それを助ける義務がある」

と返答し、ドアの取っ手に手を掛けた。

「開けるぞ」

冥王は一言そう言って、ドアを開けた。

すると、カウベルの音が鳴り響き

「いらっしやいませ、洋食のねこやにようこそー！」

とアレツタが、冥王御一行を出迎えたのだった。

34皿目 パエリア

「世界樹を救うため……」

「はい。私は違いますが、アイリスは頑張ってます」

ユーと冥王の話を聞いた店長は、二人の背後に居るアイリス達を見た。

様々な見た目と年齢が居る。

そして何より、全員が美女美少女だ。

(ハーレムかな?)

「明久さん、変なこと考えてませんか?」

「……ソナコトナイヨ」

「カタコトな時点で怪しいです」

明久の返答に、早希は溜め息混じりに言うしかなかった。

「それで今日は、実は学園の食堂のキッチンが壊れてしまいました……」

「直すには、時間が掛かると……」

ユーの言葉を引き継ぐように店長が言うと、冥王は頷いた。育ち盛りの少女が居ることも考えると、昼食を食べないのは辛いだろう。

「それじゃあ、料理はこちらにお任せ……で、構いませんね?」

店長の言葉に冥王とユーは頷き、それを見た店長は

「明久! 明久の得意料理を出してやれ!」

と言った。

「分かりました!」

「……明久さんの、得意料理?」

店長の指示を受けて、明久はその得意料理の調理を始めた。
バランス良く食べられる料理。

「パエリアだよ」

そして、数十分後。

「大変お待たせしました。パエリアです」
と各机に、一つずつ鍋ごと置いた。

専用の浅い鍋の底に敷き詰められているご飯は黄色に染まり、その上には魚介類、野菜、肉がバランス良く乗せられていて、香ばしい匂いが鼻腔を刺激し、空腹をより刺激してくる。

「お皿にお取りになって、お召し上がりください。では、ごゆっくり」アレツタがそう言って下がると、人一倍幼い印象のファムが

「めーおー様！ 食べていいですか!？」

と冥王に問い掛けた。

その目は、キラキラと輝いている。すると、隣に座っていた巨乳画伯のエルミナが

「はーい、よそつてあげますねー」

とよそおうとした。だが先に、ラデイスが

「やめろ、このロリコン画伯。変なモンを盛ろうとするな」と制止した。

「いやですよお。普通によそおうとしたのにい」

「じゃあ、その手の小瓶はなんだ」

ラデイスが指摘したのは、エルミナの袖口に隠れている小瓶。エルミナはそれをササツと奥に仕舞い込み

「……ただの栄養材ですよ?」

「その間はなんだ、おい」

ラデイスの突っ込みに、エルミナは目を泳がせた。

「事案はやめてください」

ユーの突っ込みが、切実だった。

確かに、事案はやめてほしい。なお、ファムの分はソフィーがよそつた。

そして、冥王が最初の一口を食べて

「ん、美味いー!」

と驚いた声を上げると、各々が食べ始めた。

口の中に広がる様々な味が凝縮された、濃厚な味。それと調和している肉や野菜、魚介類。

だが濃厚な中にあるさっぱりとした、不思議な風味。それが、味を飽きさせない。

「おいしいです！ お肉も、お野菜も！」

「良かったですね、ファミン殿」

ファミンがモグモグと食べていると、それをイリーナがフォローに回っている。気付けば、席替えしたようだ。

「むむ……これは、初めて食べました……しかし、この味は……」

ソフィーは慎重に一口ずつ食べながら、どうやら味の探求をしているようだ。そして、それにクレアが

「お？ これで、新しい料理が食堂に増えるかな？」

と期待した表情で、ソフィーを見ながら一口食べた。

どうやら、ソフィーが料理番のようだ。

その目は鋭く、僅かな味の変化すら見逃すつもりは無いようだ。

「ご主人様、私にも料理を作る許可を」

「魔女の釜を作らせる趣味は無いから」

そして冥王は、隣に座っていたベアトリーチエの進言に、真顔で答えた。どうやら、料理が下手というレベルではないらしい。

話から察するに、魔女の釜を彷彿させるらしい。それを思い出したらしいユーが

「あれは勘弁してください」

と頭を下げた。何があったのかは、聞かない方が華か。

それが聞こえた明久は、ブルリと体を震わせた。その脳裏には、かつての同級生の姿が。

しかし、やはり年頃の少女が多いからか賑やかである。

その様相は、まさに女子学園のようだ。

「いやあ……これが、噂に聞く女子校の雰囲気かね？」

「叔父さん……」

その光景を見ながら呟いた店長の言葉に、早希は白い目を向けていた。なお明久は、失言をしないように無言で新たに注文されたオムライスの大盛りを作っている最中である。注文したのは、ファミンとアシユリーだ。

ファミンは幼い見た目からは予想出来ない大食いだった。

そうして、全員が食べ終わり

「では、お勘定ですが……」

「はいよ……」

「やっぱり、24人分は凄い金額ですね……」

冥王が払った金額を見て、ユーはそう呟いた。

具体的には、金貨二枚と銀貨三枚になる。

そうして、ベアトリーチエがドアを開けて一人ずつ退店していき、最後まで居た冥王に

「ここは、一週間に一度開きますので、またいらしてください」

と明久と店長は頭を下げた。

そうして、冥王一行は退店。イリーナはキッチンの修理に向かい、ソフィーは真剣な表情で何やらメモに書き始めた。

そして冥王は、消えていくドアを見ながら

「まあ……たまには、贅沢させてやるか」

と頭を掻いたのだった。

そうして彼女達は、世界樹を復活させるための旅を続ける。

アレツタの一日前

「んー……っはあ……」

その日アレツタは、休憩室で目を覚ました。

なぜ、休憩室で寝ていたのか。その理由は、ある日のことだった。

『え？ 何時も夜遅くに一人で、離れてるサラさんの別荘に帰ってるの？』

『はい。あ、通るのは人が多い道ですから、大丈夫ですよ』

『それでも、夜道の一人歩きは危ないよ！ 叔父さん、明久さん！』

『それは初めて聞いた』

『よし、アレツタちゃん。閉店後は、ここで寝ていいからね』

となったのだ。

実を言えば、早希も最近では明久達と同じ階の一室を借りて住み始めたのだ。その理由は、曰く

『家賃、ここの方が安いから』

とのことだったが、その時に明久を見ていたのを、店長は見逃していない。

そしてアレツタは、休憩室の机を端に移動させて、そこに布団を敷いて眠ることになったのだ。

目を覚ましたアレツタは、顔を洗って意識をしゃっきりさせた。

その時、エレベーターのドアが開いて

「あ、起きたね」

と明久と店長、早希が現れた。

これから、朝食である。

「さて、今朝の朝食は……」

「早希ちゃん、GO」

「私ですか!?!」

三人は賑やかに、キッチンの方に向かっていった。その間にアレツタは、休憩室に敷いてあった布団を畳み、机を元の位置に戻し、机の上を拭いた。

その数分後、三人が料理を運んできて

「早希ちゃん特製、朝食だよー」

「ふ、二人には負けるとは思いますが……」

「ありがとうございます」

そして四人は、机に座って

『いただきます!』

と一緒に、朝食を食べた。早希が作ったのは和食で、焼いた秋刀魚がおいしかった。

その後は朝食のお皿やお茶碗を洗ったり、前日の残りの洗い物を、早希と一緒に片付けていた。

「早希さんのご飯、凄く美味しかったです!」

「ありがとうね、アレツタちゃん」

アレツタの言葉に、早希は嬉しそうに微笑んだ。明久と店長は、冷蔵庫の中を見て、発注書を書いている。

そしてアレツタは、忘れ物が無いか確認し

「それでは、私は帰りますね!」

「うん、またね」

「六日後にね」

「気を付けてね」

四人の言葉に頭を下げながら、アレツタはねこやを後にした。燦々と輝く太陽が眩しくて、アレツタは思わず手をかざした。

「うん、いい天気……洗濯物がよく乾きそう」

アレツタはそう言っ、もう1つの働き先のサラの別荘に向かった。サラの生活力は低く、放っておけばすぐにゴミが溜まってしまっただの。

「ただいま戻りました……たあ!?!」

別荘に入ったアレツタは、目の前の光景に驚いた。何故ならば、サラの部屋のドアが開いて、物が溢れてきていたからだ。

「サラ様!?!」

「助けてー……」

アレツタが部屋に向かって声を上げると、物の中からサラの声が辛

うじて聞こえてきた。

「わあああ!?! 大丈夫ですか!?!」

慌てたアレツタは、サラの発掘を開始。数分後、物の下からサラを
発見した。

「いやあ……久しぶりに物置開けたら、中から溢れてきちゃって……」

とサラが指差したのは、サラの部屋と直結している物置へのドア。
確かに、そこから物が溢れている。

「適当に放り込んでたからね……やっちゃったわ……」

サラはそう言いながら、頭を掻いている。それを聞いたアレツタ
は、深々と溜め息を吐いて

「サラ様、今日は一緒に物置を片付けますよ!」

と言って、準備の為に掃除道具を取りに行った。

これが、アレツタの一日の始まり。

アレツタの一日 後

「ふう……大分、片付きましたかね……」

「みたいね……」

アレツタの呟きに、サラは同意するように頷いた。

片付け始めて、早数時間。部屋の外にまで溢れてきていた荷物は無くなり、サラの部屋の隅に纏めてある。

廊下にまで溢れた物の片付け（というより、集積）はサラがやり、件の物置部屋の中はアレツタが片付けた。

サラが適当に放り込んだと言った通り、雑多に物が散乱していて、当初は足の踏み場すらなかったが、数時間の悪戦苦闘の末に、なんとかなった。

「サラ様……もう少し、整理整頓しましょう……」

「素直に、ごめん」

アレツタの苦言に、サラは頭を下げた。

今回は、サラが適当に物を放り込んでいたのが原因だから、仕方ないだろう。

「では、少し遅くなりましたが……お昼にしましょうか」

「賛成、お腹空いたわ」

アレツタの提案に、サラは素直に賛同した。朝からずっと片付けしっていて、今は普段のお昼より遅い時間（大体午後2時）だ。

お腹が空くのも、仕方ないことだ。

サラの住む別荘には、他の一般家庭には無い食材を長期保存出来る魔法の箱がある。

それは、サラの実家がある国の王女から高く買い取ったものを回した物で、アレツタも重宝している。

それがあることにより、食材を腐らせることも無くなった。

アレツタはその箱を開けて、中を確認した。

サラとアレツタは二人共、料理はそれほど得意ではない。しかしアレツタは、サラの家政婦をするようになってからは、少しずつだが料

理が出来るようになってきていた。

「ん……ダンシヤクしかありませんね……」

箱の中には、生憎とダンシヤクじゃがしかなかった。

近くの棚には、サラがよくかじる保存用ベーコンと塩、香辛料。そして、チーズがある。

「……あ」

それを見たアレツタは、以前に明久から教わった一つの料理を思い出した。それなら、今の食材とアレツタの腕でも作れる料理だ。

「……よしっ」

そうと決めたアレツタは、まず手を洗った。

明久と店長は料理をする前に、必ずと言って手を洗っていた。聞いたら、食中毒を未然に防ぐためだと言っていた。

そして、数十分後

「サラ様、お待たせしました」

とアレツタは、その料理を机に置いた。

「これって……」

「本当は、じゃがバターって料理なんですけど、少し違います……言うなら、じゃがチーズ……でしよっか？」

サラの問い掛けに、アレツタは首を傾げながら答えた。

それは去る日、明久に教わった料理だった。サラは日夜お宝捜しに奔走しており、アレツタが寝ている間も地図の暗号を解いたりしている。しかもその間に小腹が空くと、保存用ベーコンを千切っては食べられているが殆どだ。それを知ったアレツタは、一度明久と店長に相談。その時に教えてもらったのが、じゃがバターだったのだ。

しかし、ダンシヤクと塩、香辛料はあったものの、バターは無かった。だからアレツタは機転を効かせて、チーズを使って作ったのが、じゃがチーズであった。

「すいません、食材があまり無かったもので、これだけですが……」

「それは、私が昨日買ってなかったから仕方ないけど……あ」

そこまで言ったサラは、アレツタの手にうつすらと傷痕があることに気付いた。

実はアレツタは、じゃがバターの調理の練習を、ねこやで何回かしていたのだ。もちろん、店長か明久、早希が見ている時に限ってだ。その時に何回か怪我をしており、その度にクロが魔法で治してくれた。(クロはかなり難しそうな表情をしていたが……)

それを察したのか、サラは涙を流しそうになるが堪えて

「よし、食べましょう！」

と机に座って、フォークを掴んだ。

そして

『いただきます！』

二人で、一緒に食べ始めた。

アレツタは内心

(うう、大丈夫かな。美味しく出来てるかなあ)

と心配しながら、サラが食べるのを見ていた。

「あ……はふはふっ」

サラは熱さから直ぐには口に入れられなかったが、目を見開いた。

口の中に広がるのは、確かにダンシヤクの味。しかし、同時にほんの少しの塩味。それだけでなく、香辛料の風味にチーズの濃厚な風味も口の中に広がった。

「これ……！ ダンシヤクって、こんなに美味しくなるの!？」

サラが知っているダンシヤクの料理は、どうにも味気ないのが多かった。

しかし、アレツタが作ってくれたダンシヤク料理は今まで食べた中で上位に入る美味しさだった。

「美味しいわ、アレツタ！」

「よ、良かったです！ まだまだありますから、食べてください！」

サラの言葉に嬉しくなったのか、アレツタは笑みを浮かべて促した。

そうして、食べ終わり

「ふう……ありがとうございます、アレツタ……本当、貴女を雇って正解だったわ……」

「ありがとうございます、サラ様……」

サラの称賛を受けて、アレツタは顔を赤くした。褒められることに慣れていなかったのが大きいだろう。

「さてと……片付け再開しましょうか！」

「はいー！」

片付けも終わると、二人は片付けを再開。夕方まで掛けて、物置まで片付けを完了。物置部屋が手狭になっていることに気付いたサラは

「んー……新しく物置小屋作ろうかしら」

と呟いていた。

サラの財力ならば、簡単に出来ることだから恐ろしい。

一段落したのを確認したアレツタは、夕食の買い出しに出掛けた。

そして夕食を共にし、二人の片付けの一日は終わった。

35 皿目 クリームソーダ

「ふう……今日も暑い……」

彼女、ラナーはそう言いながら、ラクダに繋がる紐を近くの木に縛った。

今日彼女は、一人で異世界食堂の入り口に来ていた。

兄のシャリーフは今現在、帝国と外交のために奔走している最中だ。

帝国との外交は、兄に任せるしかない。砂の国の発展と兄の恋路のためにも。

「さてと……」

紐を結び終えたラナーは、ゆっくりとドアを開けた。

(いらっしやいませ)

そんなラナーを一番に出迎えたのは、クロだった。クロはラナーを見ながら、軽く一礼し

(空いているお席に座って、お待ちください。すぐにメニューをお持ちいたします)

と念話で言ってきた。

言われた通りにラナーは、空いている席。アーデルハイドの隣に座り

「久方ぶりです、アーデルハイド様」

とアーデルハイドに挨拶した。

すると、アーデルハイドは微笑みを浮かべて

「お久し振りです、ラナー様。一月振りですね」と言ってきた。

この一ヶ月、ラナーは国内の魔法技術発展のために奮闘し続けてきたために、一ヶ月振りの来店だった。

「メニューです。決まりましたら、お呼びください」

早希がメニューを手渡し、離れた。

とはいえ、注文する商品は決まっている。しかし

「ん、どれにしよう……」

ラナーが注文しようとしているのは、クリームソーダだ。しかし、飲み物に使う炭酸が色々あり悩んでいた。

(前は確か、シンプルにサイダーだったか……うーむ、悩む……)

サイダーの他に、メロンソーダ、コカ・コーラ、ジンジャーエール、グレープソーダ、オレンジソーダと、様々にある。

(……よし、タンサンはメロンソーダにしよう……上に乗せるのは……)

クリームソーダの上に乗せるのも、また複数ある。

ノーマルなミルク、チョコレート、オレンジ、メロン、ソフトクリームと用意してある。

「すみません、クリームソーダで、メロンソーダとソフトクリームの組み合わせをお願いします」

「はい、わかりました！」

注文を受けて、アレツタが奥へと入っていった。店長か明久に注文を言いに向かったのだ。

それを見送り

「既に話は聞いてると思いますが、兄君はそちらの帝国との国交をより緊密にするために努力しています」

「はい。最近会いました、叔父から聞きました。そちらの国から、魔法技術と幾らかの魔道具の技術を提供してもらい、此方からはダンシヤクの栽培法と……その、そちらのお兄さんと私の婚約……と」

ラナーが両国の話題を切り出すと、アーデルハイドはそう語りながら、最後は頬を朱に染めた。

(兄さん、ようやく切り出せたか……長かったな)

アーデルハイドの様子から、ようやくシャリーフが好意を告げられたと察した。

しかも、アーデルハイドの様子から見ても、まんざらではないらしい。

「少し研究熱心で、恥ずかしがりやな兄君ですが、よろしくお願いします」

「いい、いえ！　こちらこそ……確かに帝国の王女ですが、私は末席の一人……政略結婚も考えていましたが……」

「まあ、それが普通ですね」

アーデルハイドの話に、ラナーは納得したように頷いた。

政略結婚は、王公貴族ならば離すことが出来ないことである。

実際問題、ラナーにも国外から様々な婚約が申し込まれてきているが、現国王たる父親が見事に断っている。

ラナーだが、その魔法技術は王一族の中では突出しており、魔法技術で発展してきた砂の国からしたら、正しく代えがたい人材なのだ。

それを知ってからかラナーは最近、自ら相手を見つけるべきだろうか。と考えて、最近は意識して女性らしいしゃべり方をしている。

そこに

「お待たせしました。メロンソーダとソフトクリームのクリームソーダです」

と明久が、ラナーの前にクリームソーダを置いた。

「ありがとうございます」

「どうぞ、ごゆっくり」

明久は一礼すると、すぐに奥へと消えた。

それを見送った後、ラナーは置かれたクリームソーダを見た。

大きなコップに注がれたメロンソーダの上に、螺旋を描きながら乗っているソフトクリーム。

「相変わらず、綺麗……」

クリームソーダを見たラナーは、そう呟いた。

メロンソーダもそうだが、ソフトクリームがラナーには宝石のように見えたのだ。

薄く緑色の染まる炭酸に、その上に乗っている純白のソフトクリーム。

その二つが調和し、ラナーを魅了してくる。

実は最近、ラナーとシャリーフの技術が合わさり、アイスクリームの再現に成功した。

そうして次に、ソフトクリームの再現をしようとしたが、どうも上

手くいかなかった。

柔らかさと冷たさを両立させたアイスクリーム。

色々と試行錯誤してみたが、今は無理と分かっているので、ソフトクリームはねこやで楽しむことに決めた。

(さて、最初はクリームから……)

ラナーは自ら決めた順番に従い、最初はソフトクリームを口に含んだ。

そうして口に広がる、濃厚なミルクの味。

(まだ、諦めてないから……)

ラナーは何時かソフトクリームの再現を誓い、また一口ソフトクリームを口に運んだ。

すると、アーデルハイドが

「そういえば、砂の国でアイスクリームを再現したと伺いましたが……」

「はい。兄君と私の研究結果です。恐らく、帝国にも作り方は伝えられるかと」

アーデルハイドの問い掛けにラナーが答えると、アーデルハイドは嬉しそうに笑みを浮かべた。

アーデルハイドはソフトクリームを含めた冷たい菓子が好きなので、アイスクリームが再現されたことが嬉しいのだ。

それを見ながらラナーは、続いてメロンソーダを飲んだ。口の中に広がるシュワシュワとした炭酸の不思議な感覚と、果物の風味がする甘味。

(どうやって、作ってるんだろうか……気になる)

ラナーはそう思いながら、更にメロンソーダを飲んだ。

そして、パフェを食べていたアーデルハイドに

「では、私はこれにて……」

「はい、また」

そしてラナーは机の上に、お金を置いた。

そして、去り際に

「またお会いしましょう、未来の義姉様」

と言って、アーデルハイドの顔を真っ赤にさせた。

36 皿目 豚汁

「おはようございます！」

(おはようございます)

「おはようございます」

「おう、おはようさん」

「おはようございます」

その日、アレツタとクロはほぼ同時に出勤してきた。

それを確認した店長が

「それじゃあ、朝食を食べるぞ。今日は、ちよいと特別だ」

と言った。そしてアレツタとクロが見たのは、何時もの味噌汁より具だくさんの汁だった。

「あれ、この味噌汁……」

「まあ、食べてみて」

明久に促されて、アレツタとクロはその味噌汁を一口食べた。

まず、見た目通りに口の中に入ってくる何時もより豊富な具。そして、味噌とバター風味。

「これ……バターが使われてるんですね？」

「うん、その通り」

「豚汁って呼ばれる味噌汁でな。何時もより栄養もある」

アレツタの問い掛けに、明久と店長はそう告げた。

するとアレツタは、頷いた後に

「だけど、なぜ豚汁を？」

と首を傾げた。

それを聞いた店長と明久は、カレンダーを見て

「今日は」

「肉の日、だからね」

と二人で言った。実はねこやでは、毎月29日は肉の日として、何時もサーブスで出す味噌汁を豚汁にしているのだ。

そして、開店すると

「よし！ やはり今日は肉の日だったか！」

「最早、経験だな」

確信した表情で、常連たるタツゴロウやアルトリウスが来店。それに続くように

「お!? 今日は肉の日か！ これは運が良い！」

ライオネルが来店。

「なんと!? 肉の日とな!？」

「豚汁って、何かしら？ まあ、美味しいだろうけど」

ハインリヒとサラが来店。朝から、大勢の客に溢れ帰った。

「うむ、久し振りの豚汁は旨いな！」

「まったくだ。豚汁、お代わり！」

「おい！ 俺もだ！」

「私もお願い！」

「はーい！ ただいま！」

注文を受けてアレツタは、キッチンに向かった。

「店長！ 豚汁のお代わりです！ 四つ！」

「あいよ！」

アレツタの注文に応じて、店長は豚汁を器によそってお盆に乗せた。

その後も

「店長！ 豚汁のお代わりです！」

「はい、持ってって！」

早希が告げたと同時に、明久がよそつたのをお盆に乗せた。というように、矢継ぎ早に豚汁のお代わりが続いた。そして気付けば

「あ、もうこんだけか……」

寸胴鍋一杯に作った豚汁は、残り僅かになった。

店長の言葉を聞いた明久は、作り終わった料理をお盆に乗せると「僕が仕込んだのがあります！」

と弱火で煮込んでいた寸胴鍋を指差した。中を見た店長は

「よし、ナイス先読みだ」

と明久を誉めて、注文が入った料理を作り始めた。

そうして、一段落着いたら

「はあ……凄い勢いで、豚汁が出ましたね……」

とアレツタが、疲れた様子で椅子に座った。

確かに、お昼を少し過ぎた時点で寸胴鍋二つ目に入った。凄まじい勢いだろう。

すると、アレツタが

「あれ……？ 豚汁って、何時もの味噌汁の代わりなんですよね？」
と明久に問い掛けた。

「うん、そうだよ？」

「だったら、その……売り上げは大丈夫なんですか？」

明久の言葉を聞いて、アレツタは思わずそう問い掛けた。確かに、豚汁に使われている材料のことを考えれば、当然の帰結だろう。

だが

「豚汁は言わば、俺達からの恩返しとお礼なんだ」

「何時も食べに来てくれて、ありがとうございます……ってね」

と店長と明久は告げた。

「恩返しとお礼……」

「うん……長い間、何時も食べに来てくれるからこそ、僕達はね^おこや^店を続けられる」

「そのお礼と恩返しのために、ねこやは毎月29日を肉の日にして、味噌汁から豚汁にしているのさ。先代からの拘りでな」

アレツタの呟きを聞いて、明久と店長はそう教えた。

ねこやだけでなく、料理店と言うのはお客が来ないと成り立たない。
い。

お客が来て、料理を頼んでくれる。それでようやく、商売として成り立つ。

そして何より、お客が美味しそうに料理を食べてくれる。それが、料理人にとっては何よりの報酬になる。

しかし、先代店長はそれだけでは満足出来なかった。だが、先代店長は料理の値引きといったことをする気は無かった。

そこで思い付いたのが、毎月29日の肉の日だった。

「そうやって、日々来てくれるお客様に恩返しとお礼をする。それが、料理人のやり方ってな」

「そういうこと」

と二人が言い終わると、賄いを作ってきた早希が休憩室に入ってきて

「はい、今日の賄いです」

と各員の前に、料理を置いた。

毎月29日、ねこやは豚汁を御用意して待っています。

ロボットマニア率いる騎士団

「っん……はあ……」

その部屋の主たる美少年。エルネスティ・エチエバルリアは、引いていた設計図から目を離すと凝り固まっていた背筋を伸ばした。

そのタイミングで、ドアが開き

「エルくん！ お昼にしよう！」

と一人の可愛らしい少女。アデルトルート・オルターが入室してきた。すると、エルネスティ。愛称エルが

「そうですね、アデイ。いい時間みたいですし」

と同意しながら、窓から外を見た。

この二人は、フレメヴィーラ王国にてその名と規模をあっという間に広げた新進気鋭の騎士団。銀鳳騎士団ぎんおうの団長とその補佐官にして、若いというよりも幼いが、夫婦である。

そしてエルだが、実は彼は今は銀髪の美少年の姿だが、中身は30代半ばのおっさんである。

そこ、事案言うな。今の肉体年齢は間違いなく十代前半なので、問題ない。

以前の彼は、地球は日本のあるゲーム会社に勤める凄腕プログラマーであった。

そんな彼の趣味は、ロボットであった。あらゆるロボットアニメの視聴やゲームをプレイし、暇な時には買ったプラモデルを組み立てては部屋に飾っていた。

しかしある日、彼は帰宅中に居眠り運転のトラックに轢かれて死亡。

気付けば、この世界に生まれ変わっていた。

時代と世界観的には、中世の欧州といった雰囲気の世界に。ただ違ったのは、魔法だった。

才能によるが、魔法が使える世界だった。しかし、彼にとってはどうでもいいことだった。

彼にとって、ロボットの存在こそが至上だった。
生まれ変わった時は

(せめて、ロボットの世界に産まれたかった)

と思っただ程だった。

そんなある日、彼とこの世界の母親と祖父が乗った馬車が、巨大な魔獣に襲われた。馬車は破壊され、護衛に居た騎士は太刀打ち出来なかった。

また死んでしまうのか、と思っただ時、巨大な人影が現れた。

それは、この世界で造られた人型兵器。幻晶騎士シルエットナイトだった。

その幻晶騎士に乗っていたのは、この世界の父親だが、彼にとってはどうしても良かった。

彼にとつて興味を引かれたのは、その幻晶騎士だった。それは正しく、ロボットだった。その後彼は、その幻晶騎士を使う為には魔法が重要で、魔法を使うために体力と魔力を着ける為に訓練した。その最中で、幼馴染みになるアーキッドとアデルトルート・オルター双子に出会った。

その後は、三人で幻晶騎士の操縦者。

ナイトランナー騎操士になるために、学校に通い、数々の偉業を成し遂げて、ある訓練中に起きた事件から、在学しながらも騎士団の長になり、次々と新型機を世に産み出した。

そんな彼は、今はある新型武装の設計図を引いていたのだ。期限が短いためにかなり無茶をしている自覚があり、最近はお飯も不規則になっかけている。

だが、妻たるアデルトルートから催促されたら、無下には出来ない。「でも、今日はどうしようか？ 新しくきた鍛冶の人達で、食堂は凄く混んでるよ？」

「あー……確かに、そうですねえ」

アデルトルートの話聞いて、エルネステイは少し悩み始めた。鍛冶師というのは、幻晶騎士を作る職人のことで、常に新型を作り続ける銀鳳騎士団への所属を希望してきたらしく、その人物達を受け入れている。

そのために、拡張予定の食堂では少し手狭だった。

「んー……ん？」

少し悩んでいたエルネステイは、少し首を傾げた拍子に違和感を感じて、ある方向を見た。

「エルくん、どうしたの……あれ、何あのドア？」

エルネステイに僅かに遅れて、アデルトルートもその方向。部屋に据え付けられている暖炉のある壁の方向を見た。

今は季節柄故に使ってない暖炉の隣に、木製の黒いドアが有った。それも、エルネステイからしたら懐かしい文字。日本語と共に。

「むむ……ちよつと、調べたほうが……」

「いえ、大丈夫ですよ、アデイ。このドアからは確かに、膨大な魔力を感じますが、害意は感じません……」

ドアを調べるために銃杖を取り出したアデイを静止し、エルネステイは改めてそのドアを見た。

洋食のねこや、と書かれた看板を黒猫が咬えている。

「ふむ……入ってみましようか、アデイ」

「本当に大丈夫なのー？」

不安がるアデルトルートを引きずる形で、エルネステイはドアを開けた。その直後、カウベルの音が響き

「いらっしやいませ、洋食のねこやにようこそー！」

と長い黒髪の少女が、二人を出迎えた。

37 皿目 青椒肉絲

「魔法を使った人型兵器か……」

「はい。僕はその幻晶騎士の騎操士にして騎士団の団長兼設計をしています。エルネステイ・エチエバルリアと言います」

「私はその副官で奥さんのアデルトルート・オルターです！」

店長の問い掛けに二人が続けて答えると、明久が思わずといった様子で

「……随分と、若い夫婦で……」

と呟いた。まあ、見た目は二人とも、完全に十代前半だからしょうがない。

しかし、彼等の世界では何ら珍しいことではない。彼等の世界では、魔物や戦争で何時死ぬか分からない。

その為に、早期の結婚が求められているのだ。

「まあ、僕達が結婚する時は国を挙げてになりましたがね」

「本当に凄かったよねえ！」

エルネステイの言葉で思い出したのか、アデルトルートは興奮していた。

それを決めた先代国王達からしたら、少しは大人しくなることを期待してのことだったのだが、それを本人は知らない。

「うーむ……」

「叔父……店長？」

「いや、なにな……ロボットを動かすのは、ロマンだな……と」

早希の問い掛けに、店長は小声でそう言った。それは、明久にも分かる。明久も昔は、様々なゲームをプレイしたが、その中でもロボットに関するゲームは多数プレイした。

それはさておき

「それでは、何か食べますか？ 大抵の料理はお出し出来ますよ？」

明久がそう言うと、エルネステイはフムと腕組みした。

彼は趣味に関する事とならかなり知識を誇るが、それ以外となる

とあまり自信が無い。それは、家事も含まれている。

つまりは、料理に関する知識もそれほどであり、普段は騎士団の食堂で適当に頼んでいるのだ。

その時

「それじゃあ……野菜を多く使った料理をお願いしますー！」

とアデルトルートが、エルネステイの代わりに注文した。

「アデイ？」

「エル君、食堂の人から相談されてたんだよ？ エル君の栄養が心配だって」

アデイの言葉に、エルは僅かに視線をそらした。

多少だが、自覚があったらしい。

「では、野菜を多く使った料理……つまり、私達にお任せ……で、よろしいですね？」

店長のその問い掛けに、エルネステイとアデルトルートの二人は無言で頷いた。

それを聞いた明久と店長はキッチンに向かい、アレツタが

「お冷やです」

とエルネステイ達の前に、水の入ったコップを置いた。

そうして、十数分後。

「お待ちせしました、青椒肉絲チンジャオオロスです」

と二人の前に、皿を置いた。

「これは……」

「見た目は凄いいけど……いい匂い……」

そして二人は顔を見合わせると

『いただきます』

と同時に言ってから、青椒肉絲を一口食べた。すると、アデルトルートの目が見開かれて

「何これ!? 凄く美味しいー！」

「そうですね……素材もですが、このソースが非常に素晴らしいです……何らかの素材の味が凝縮されているようです」

と興奮した様子で、語った。

洋食のねこやという名前だが、何も出すのは洋食だけではない。これは先代店長の考えで、元々日本に無かった料理も洋食に当たるというものだ。だから、カツ丼や照り焼きチキン。ロースカツという料理が出されるのだ。

他にも、親子丼、牛丼、中華料理も出すのだ。

中華料理に関しては、店長が子供の頃から行き着けの店で一時期修業していたことで会得したのだ。

そこは今も経営していて、店長にとっては第二の家のような場所だ。

「野菜がシャキシャキしてるのに、凄く美味しいね！」

「そうですね、アデイ」

仲睦まじい二人を見て、早希が

「結婚……かあ……」

と呟いてから、早希は料理を作っている明久へと視線を向けた。そして少しすると、顔を赤くして目を反らした。

それを見ていた店長は、小声で

「命短し、恋せよ乙女……だったか？」

と言ってから、調理に戻った。

そして、十数分後

「ごちそうさまでした」

「凄く美味しかったです！」

二人はそう言って、反射的に懐に手を入れた。

が

「あ、エル君！ 私達、財布持ってきてない！」

「……そのようですね……これは、失態です」

アデルトルートの指摘に、エルネスティは額に手を当てた。そこに、店長と明久が

「それでしたら、次に来た時で構いませんよ」

「あのドアは、七日に一度開きますから」

と説明した。それを聞いた二人は、顔を見合わせてから

「すいません」

「次来た時、一緒に払いますね」

と頭を下げて、退店した。そして退店した二人は、消えていくドアを見ながら

「異世界食堂かあ……また来たいね、エル君！」

「そうですね。次は、財布を持っていきましよう」

と会話して、自分達の仕事に戻ったのだった。

38 皿目 アップルパイ

冬に差し迫ったある秋の日、エルフの森の山を二人の子供が少し大きな籠を背負って走っていた。

人間の子供ではなく、獣と人の特徴が入り交じった種族だ。

その二人の名前は、リチとトト。ある獣人の集落に住む双子の姉妹である。

双子は今、冬越えのために食料を集めているところだ。二人が住む集落は嫌戦的な者達ばかりで、狩りすら必要最低限しかない。しかし、今年はどうにも狩りが上手くいかず、森の実りを集めないと冬を越せないということが分かったために、まだ幼い姉妹だったリチとトトも駆り出された。

「ねえ、リチ……むこうから、なにかくる……たぶん、くま」

「かくれよう、トト。いまそうぐうしたら、アザルをとられる」

トトはそう言いながら、近くの巨木の根元の洞を指差した。そこに、二人は隠れた。入り口は狭いために熊は入ってこれないだろう。しかし、二人はどうしようと考えながら洞の中を見回した。

そして、それを見つけた。

「トト、へんなのがある」

「うん、きのうまではなかった」

二人が見つけたのは、黒いドアだった。

二人はここ数日、今居る場所で実りを回収し続けていた。それにより、今居る場所近辺の地形や木の本数まで把握している。しかし、今二人の目前にあるドアのことは知らない。

「どうする？ くま、ちかいよう？」

「このうらがわにかくれよう」

リチはそう言いながら、ドアノブに手を伸ばした。すると、ドアノブが動くことに、リチは気付いた。

「あれ、うづくくよ？」

「うづくく？」

「うん。こうやって」

トトの問い掛けに、リチは手首をグルリと捻ってドアノブを動かした。それを見ようとトトがリチの背中に乗つかると、それで押されて、ドアが開いた。

「わわっ」

「うわわっ」

バランスを崩して前に転びながら、二人はドアを潜った。

「いらっしやいませ！ 洋食のねこやにようこ……そ？」

そんな二人を最初に出迎えたのは、アレツタだったが、アレツタは首を傾げた。

まず、二人が幼い子供だったこと。そして何より、二人の種族を知らなかったからだ。種族的には、アレツタと同じ半魔族になる。

「あれ？ こんど？」

「よーしよくのねこや？ って、なに？」

リチとトトの二人は、突然違う場所に出たのが不思議らしく、周囲をキョロキョロと見回した。

流石に幼い双子にどう接すればいいのか分からず、アレツタだけでなく早希も固まった。そこに、たまたま料理を提供するためにフロアに出ていた店長と明久が近寄り

「ここはね、めしを出すところなんだ」

「君たちが知らない料理が、いっぱい有るよ」と説明した。

「めしって……ごはん？」

「ここで、たべられるの？」

「ああ、そうだよ」

「その林檎……じゃなかった。アザルを使ったアップルパイもあるよ」

「アップルパイってなに？」

「甘いお菓子ってところだな」

店長の説明を聞いて、二人は目を輝かせながら

「あまいの!?!」

「たべたい！」

と尻尾を振った。そんな双子を見て、店長と明久は微笑ましく思いながら

「わかった。アップルパイを持ってくるな」

「だから、その椅子にお行儀よく座って、待っててね」

と双子を、近くの席に座らせた。

双子が椅子に座ったのを見た店長は、早希とアレツタに

「あのドアな。たまに子供だけを呼ぶことがあるんだ。まあその時は、今みたいに普通に案内してくれ」

と教えた。

その後、双子に水を出した。そして

「お待たせしました。アップルパイです！」

とアレツタが、アップルパイを乗せたお皿を双子の前に置いた。

「これが、アップルパイ？」

「あかくもしろくもないよ？」

「これはね、甘く煮たアザルを使ったケーキなんだ。この黄色いのが、そうだよ」

まるで親戚の子供に話し掛けるように、早希はリチとトトにそう教え、それを聞いた二人は興味深い様子だ。

しばらく見た後、双子は

『いただきます』

とアップルパイを一口食べた。

そして、驚いた。

「おいしい！」

「うん、おいしい！」

口に含んだ時、最初に感じたのはサクサクとした食感。しかしすぐに、ほのかな酸味を含んだ甘さが口の中いっぱいに広がった。

リチとトトは即座に、その味に魅了されて夢中で食べ、その光景を、たまたま先に来ていた他の客達は微笑みながら見ていた。

「おいしいかったね、リチ！」

「そうだね、トト！」

初めて食べた味に、二人はすっかり魅了され、尻尾をユラユラと揺らしていた。そこに、店長が来て

「美味しかったかい？」

と問い掛けた。双子が満面の笑みで頷くと、店長は

「今回はサービスにしとくから、次からはこのお金を持ってきてくれるかな？ そうすれば、もつと食べることが出来るからな」

と言いながら、銀貨を双子に見せた。

双子は少しの間銀貨を見ると、あつと声を挙げて

「これ、みたことある！」

「うん、しってる！」

とはしゃいだ。お金を知っているようだ。それを聞いた店長は

「じゃあ、持ってきてくれな。そうすれば、もつと美味しい料理も食べることが出来るからな」

と言って、双子の頭を撫でた。その後、双子に異世界食堂は7日に一度開くことを教えて、一同は見送った。

戻った双子は、熊が居ないことを匂いと音で確認してから、洞の外に出た。

そして

「そういえばおかねだけど、いろがちがったけどだいじょうぶかな？ あのひとがみせてくれたのはしろだったけど、しってるのはきいろだったよ？」

「うーん……まあ、ちがうのはいろだけで、まったくおなじだったから、だいじょうぶだよ！」

と言いながら、アザルが入った籠を背負い直して、集落に向かった。

この双子が言っているのは、双子が住む集落の近くの洞窟で見つけたお金で、かなりの量がある。しかし、集落ではお金という知識が無かったので、それがお金と分からず、ずつと放置されていた。

そして、無知だったが故に、それが遙か過去にあるエルフが使っていた研究所跡だと知らず、そこにはまた使えるようにと莫大な財産が隠されていたのだ。

しかも、全て金貨で、最も希少かつ価値が高い古代エルフ金貨。そ

れ一枚で、普通の金貨10枚分に匹敵するという金貨。

彼女達がそれを知るのは、7日後に行つて、たまたま居合わせたトマスが見てからになる。

その後、ある集落では7日に一度。アップルパイが集落に住む人達全員に振る舞われるようになったというのは、余談である。

39 皿目 ツナマヨコーンパン

「……ん、よし！ 上手く出来た！」

そう意気込んだのは、オーブンから焼きたてのパンの乗った鉄板を出した少年。

木村将太である。彼はオーブンから出したパンを、手早く入れ物に詰めていく。その中、一つのパンを持って

「……焼きムラ、焦げ……無し！」

と確認してから、それだけは別に紙の袋に入れた。そして、数を数えてから

「父ちゃん！ ねこやに行ってくるね！」

と告げてから、エレベーターに向かった。

ベーカーリーきむら

ねこやビルの二階に店舗を構えるパン屋で、街で知らぬ人は居ないと言われている、ねこやと提携を結んでおり、ねこやで提供されるパンは全てそこで作られている。

将太はその一人息子で、将来は店を継ごうと小学生の頃からパン作りの修行を始め、少しずつだが任されるようになってきた若きパン職人だ。

(今日も居るかな、あの子……！)

将太は台車をゴロゴロと押しながらエレベーターに乗ると、ねこやのある地下一階に向かった。

本来なら、ねこやは休みの筈の土曜日。

そこに数カ月前に新しく雇われた、外国人らしい少女。整った目鼻に、少し変わった髪飾りをしているが、綺麗な金髪が特徴の少女。アレッタ。

「こんにちはー！ ベーカーリーきむらです！」

エレベーターから降りると、将太は奥に向かって声を上げた。少しすると、奥から

『明久、対応頼んだ』

『はい、分かりました』

と声が聞こえて、明久が現れた。

「おはよう、将太くん」

「あ、はい。おはようございますー！」

明久が出てきたことを残念に思いながら、将太は礼儀として挨拶した。

礼儀に関しては、両親から厳しく叩き込まれた将太は、ありし日のことを思い出して頭頂部を擦った。

「どうしたの？」

「いえ、なんでもありません」

明久が問い掛けると、将太は素早く答えた。

そして明久は、一つの箱の蓋を開けて

「ん、今日もいい出来だね……流石」

とパンの出来を確認した。パンの出来を確認した明久は、将太が出した紙にねこやのスタンプを捺して

「ただ、まだ仕込みが出来てないからね……アレツタちゃん！ 手伝ってあげて！」

と奥に声を掛けた。すると

「はい、分かりました！」

と直ぐにアレツタが現れた。

いきなりアレツタが姿を現したことで、将太が固まっていると

「パンの納入を手伝ってあげて」

「はい！ 将太さん、着いてきてくださいー！」

「は、はいー！」

アレツタの先導に、将太は緊張しながら着いていった。

「んー……青春……？」

「明久さん？ どうしました？」

「いやいや、なんでも……」

お皿を持って現れた早希が問い掛けると、明久はそそくさと厨房に戻った。

その間、アレツタと将太は

「それじゃあ、直ぐに使う分は直接貰いますね」

「は、はい！ 分かりました！」

アレツタは別途用意したゴンドラに、コッペパンや食パン、バターロールを乗せていく。実はこの時、まだ焼きたてパンからはいい匂いがしていて、それがアレツタの食欲を刺激。

朝食がまだだったアレツタのお腹が、小さく鳴っていたのだが、将太は緊張から気付かなかった。

そしてアレツタは、内心で

(うわあああああ……今の、聞こえたかなあ……恥ずかしいよおお……)

と頭を抱えて、身悶えていた。

アレツタは確認の意味を含めて、将太の方に視線を向けた。この時将太は、半ば無我の境地でパンを次々と仕舞っていた。それが終わると、将太は一つ残った紙袋を掴み

「あ、あの！ アレツタさん！」

とアレツタの方に向いた。

「は、はい！ なんででしょうか？」

いきなり呼ばれたことに驚きながらも、アレツタは体を将太の方に向けた。すると将太は、持っていた紙袋を差し出ししながら

「こ、これ！ 俺が作りました！ 親父にも、店に出しても問題ないって許可は貰いました！ どうぞ、食べてください！」

と告げて、頭を下げた。

「え、えっと……」

とりあえずといった様子でアレツタは、その紙袋を受け取った。すると将太は、台車の取っ手を掴んで

「で、では……失礼しましたああああ!!」

と叫びながら、エレベーターの方に駆け出した。

「あ、しよ、将太さん!」

アレツタが慌てて呼び止めるが、将太はその勢いそのままエレベーターに突っ込み、姿を消した。

「え、えっと……」

「何事だ？」

そこに通り掛かったのは、トイレから戻ってきたらしい店長だった。

「あの、実は……」

困っていたアレツタは、経緯を店長に話した。

すると店長は

「なるほどな……食べてやったらいいんじゃないか？」

とアレツタに告げた。

するとアレツタは、困惑した様子で

「で、でも……お店で出す食べ物を、食べてもいいんですか？」

と問い掛けた。

「いいんだよ。それ、将太くんから直接貰ったんだろ？ だったら、食ってやれって。ベーカリーきむらの惣菜パンって、近所じゃ知らない人は居ないほど美味しいんだ。しかも、お店で出しても問題ないって許可貰ったんだろ？ なら、食ってやれって」

「は、はい……」

店長に言われて、アレツタは紙袋の中からそのパンを取り出した。

ツナマヨコーンパンである。

「おお、これを任されるようになったのか。上達したんだな、将太くん」

店長はそう言うと、仕込みへと戻っていった。

ツナマヨコーンパンはベーカリーきむらでは人気商品の一つで、それを任されるようになったということは、将太の腕が上達したことの証拠である。

「そ、それじゃあ……」

一足早い朝食に気が引ける思いだが、アレツタはツナマヨコーンパンを一口食べた。すると、口の中に様々な味が広がった。

ツナの魚の風味とマヨネーズの濃い卵の風味。そしてコーンのしゃきしゃきとしながらも仄かな甘み。それらが一気に口の中に広がり、それらをパンの塩気が上手く纏めている。

「あ、美味しい……」

その美味しさに、アレツタは思わず感想を溢し、パンを食べ始めた。食べる度に、新たな旨味が口の中に広がっていく。しかも、それを作ったのが自分と大して変わらない少年の将太なのだから、アレツタとしては驚きだった。

「ん、美味しかった……」

そう呟きながらアレツタは、紙袋を丁寧に畳んだ。そこから、アレツタの性格が伺える。

そこに、パンを取りに来たらしい早希が

「ん、どうしたの？」

と問い掛けてきた。一瞬驚いたアレツタだったが、すぐに詳細を説明。すると早希は

「……青春だなあ」

と先ほどの明久と、同じように呟いた。

その言葉の意味が分からず、アレツタが首を傾げていると

「ううん、なんでもないよ……」

と早希は首を振った。実は、この時内心で

(将太くん……頑張れ)

と早希は、将太にエールを送り、その将太はくしゃみをして、父親に殴られたとか。

そして早希は、アレツタに

「その感想は、ちゃんと将太くんに言ってあげてね」

と告げて、ゴンドラを押し去ったのだった。

そしてアレツタは、ツナマヨコーンパンが入っていた紙袋を見ながら

「次は……お昼頃かな？」

と将太が来るかもしれない時間を思い出していた。

40 皿目 クレープ

「陛下！」

「分かっています……我等の領内の出来事に、私が気づかない訳がありません」

文字通り飛んできた部下の言葉を遮る形で、玉座に座っていた人物。

フェアリーの女王、ティアナ・シルバリオ16世は険しい表情を浮かべながらそう返した。

フェアリー、掌に乗るサイズの小さな体と背中にある蝶を彷彿させる翅による飛行が特徴的で、更には卓越した魔力と魔術を使う種族で、東大陸の人の手が一切入っていない常花の国と呼ばれる小さな国に住んでいる。

その国は千年という長い間栄えた国であり、約100年前に起きた邪神戦争の時には、人間の連合騎士軍と魔族軍が前線基地建設のための土地にと、常花の国に侵攻した。だがフェアリーは、双方の軍に多大な被害を与えた。一回の侵攻の度に、数百以上の騎士と魔族が次々と死んでいき、少しすればそこは双方から禁止区域として指定され、以後は誰も入らなくなった。

その後は百年間、平和に過ごしていた。

しかし、今から数年前から近くに奇妙な魔力を感じるようになっていき、とうとうティアナが居る王城の前にそれが現れた。

彼女達から見れば、巨大な扉。ねこやの扉である。

「陛下、如何いたしましたでしょうか……」

「……調べましょう。もし何者かによる侵攻ならば、この扉を破壊します」

部下からの問い掛けに、ティアナはキツと扉を見詰めながらそう返答。そして魔術により、ゴーレムを作った。

草花を編んで作られたゴーレム。見た目通り非力だが、扉を開ける

位は造作もない。

そして開けられた扉、余りにゆっくりと開けられたからか、カウベルも鳴らず、フェアリー達が入ってきたことに気づいた人物はほぼ居なかった。

「ここは……」

呆然と呟いたのは、部下の誰か。しかし、その気持ちはティアナにも分かるものだった。

そこでは、人と魔族、半魔族、問わずに料理を食べているからだ。

「ふむ……あの人物に聞いてみよう」

ティアナがそう言って近づいたのは、プリン・ア・ラ・モードを食べていたハーフェルフの王女。ヴィクトリアだった。

「その者。見たところ、腕のある魔術師と推察する。我は花の国の女王。ティアナ・シルバリオ16世。もし良ければ、ここがどういう場所か教えてはいただけぬだろうか？」

「私は、サマナーク公国王女。ヴィクトリア・サマナーク。花の国の女王に出会えて、光栄に思う……そしてここは通称、異世界食堂。異世界のねこやにあの扉を通じて繋がり、食事をする場所」

最初はティアナ達に驚いたヴィクトリアだったが、すぐに名乗ってから、異世界食堂のことを説明。

なお、ヴィクトリアが驚くのも無理ないのだ。フェアリーはいささか閉鎖的な種族で、極希に外に旅に出る者が居る程度。ハーフェルフとして長く生きているヴィクトリアでも、初めて出会ったからだ。

「なるほど……調理された食べ物を供する場所か……そういうえば、旅から戻ったものに聞いたな」

ヴィクトリアからの説明を聞いたティアナは、腕組みしながらそう呟いた。

そこに、料理を持った明久が現れて

「っと、お客様！ すいません、気づかなくて」

とティアナ達に気づいた。

「洋食のねこやにようこそ、お客様」

明久の声に気づいたらしく、早希がメニューを持って現れた。

すると、ヴィクトリアが

「彼女達には、クレープのフルーツミックス。ホットケーキのように、小さく刻んでくれるとありがたい」

と頼んできた。

フェアリーだが、好んで食べるのは花の蜜や花畑になる果実。それを考えると、甘いのは確定する。そうなるが一番確実なのはパフェだが、底が深いので駄目。次にプリンだが、カラメルソースが苦いために、苦味が苦手なフェアリーには受け入れられないだろう。

そうなると、フルーツが最適になる。しかし、人間サイズのフルーツでは食べられない。

だから、細かく切ったフルーツを使うクレープのフルーツミックスが最適なのだ。

「承りました。少々お待ちください」

注文を受けた明久は、早希と一緒に下がった。

そして、数分後。

「お待たせしました、クレープのフルーツミックスです」

とフェアリー達の前に、細かく切ったクレープの皿が置かれた。切る際にフルーツが無い箇所が無いように、細心の注意を払って切っている。

「では、ごゆっくり」

早希はそう言って、下がっていく。

(ほう、これがクレープか……人間は面白い物を考えるな)

ティアナは更に盛られているクレープを見ると、近寄り

「では、我が食べる」

「そんな！ 毒があるかもしれないですよ!?!」

「だからこそ、だ。私の魔術の前に、あらゆる毒は意味を為さない」

歴代でも随一と呼ばれる魔力の量と魔術の腕を誇るティアナは、そう言うってからクレープを1つ取ってから口に運んだ。

実際は、料理人たるプライドで毒なんて入れる訳がないのだが。

(む? 味がしないが……)

そう思いながらティアナは、更に一口。生クリームの部分を食べ

た。すると、目を見開き

(素晴らしい！ 濃厚な味だが甘さがしつこくない！)

それに、この果実は……甘い果実を更に甘い水に漬け込んだ物か!?)

ティアナが知る限りでは最高に甘い果実を、更に甘くした果実を包み込んだクレープ。先に食べたのは、橙色の果実だったが

「まさか……」

その推測を確かめるためにティアナは、今度は真っ赤な果実を包み込んだクレープを手に取り、食べて

(やはり！ 一つ一つが、全く違う工夫で甘くされている！ なんと
いう技巧だ！)

赤い果実は貴重な砂糖で甘くトロトロになるまで煮詰められており、時々来る酸っぱさで口の中の甘さが洗われる。

そんな味、ティアナは初めて食べた。

(ああ……これは、まさに毒よ……魅了の毒……)

ティアナは既に、クレープに魅了されていた。そこに、部下の一人
が

「へ、陛下……如何でしょうか……?」

と問い掛けてきた。

「ああ、問題ない……食べてよいぞ」

ティアナがそう言うと、部下達は一つずつクレープを取り、食べ始めた。そうすると、眼を輝かせながらクレープを食べている。それを横目に見ながら、ティアナは一緒の机でプリンを食べていたヴィクトリアに

「……ヴィクトリア王女よ、感謝する。これは礼だ。とっておくがよい」

と腰の袋から、常花の国の秘宝たる花の種を差し出した。

「これは、我が国で取れた花の種……お前ならば、その意味は分かるろう?」

「……いいの?」

一見、何処にでも有るように見える花の種。しかしその花は、遙か

昔に常花の国以外では全滅したとされており、それを煎じて飲めば一歳若返り、更には強力な魔術や薬品の触媒にも使える品。

その種から溢れる膨大な魔力に、ヴィクトリアはその種が本物と分かった。もし市場に流通すれば、正に天文学的な金額が付けられる品で、サマナーク公国の宝物庫にも一粒だけが、厳重な警備で保管されている。

「ああ、構わぬ。人間達にとっては貴重と聞くと、我にとっては相応に手に入る代物だな」

「……分かった。ならこちらは、以後貴女方の料理の代金を支払うことを確約する」

僅か数粒だが、貰った物を考えれば、それでも足りないだろう。ヴィクトリアも人間離れした年数を生きるが、それでも貰った物を超える金額を払えるとは思えなかった。

「重ね重ね、感謝する」

人間との交流が殆ど無い常花の国では、貨幣が無い。支払いを危惧していたティアナだったが、はからずも解決したことに安堵した。

それから7日に一度行くのは決まったのだが、常花の国に住む数千に及ぶフェアリーが押し掛けては、流石に迷惑だろうと、一回に行くのは、二百人まで。それも、厳選な抽選で選ばれた者のみとなった。

そしてティアナを悩ませることになったのは、7日毎に開かれる通称ねこや会議で、どれを注文するかという会議になるのだが、この時は知るよしも無かったのだった。

41 皿目 タンメン

「さて……今日のまかないはどうするか……」

「旅小人のお客さんが何人か来たから、食材が粗方無いですね……」

お昼を小一時間程過ぎたねこやのキッチンで、店長と明久は揃って腕組みしていた。

少し前に旅小人が数人程来店し、怒涛に注文。小柄な体の何処に消えるのか、と思うほどの量の料理を完食していった。それにより、冷蔵庫は見事にすっからかん。アレツタとクロには倉庫に行ってもらって残りの食材を運んでもらうことにして、早希には食材の買い付けを頼んだ。その間店長と明久は、お昼の賄いをどうしようか考えていた。

すっからかんになった冷蔵庫に残っている食材は、野菜が幾つか。キッチンには、二人前分のごはんとチキンカレー。

しかし、チキンカレーはクロが食べることに決まっている。

明久は何かないかと、キッチンの様々な棚を開けては食材を探した。

「あ、店長！」

そして明久は、それを見つけた。

それは、生麺。幸い、消費期限はまだ先となっている。しかも、スープの素も付属していた。

「うし、決まりだな」

「はい、タンメンですね」

二人は頷くと、すぐさま調理を始めた。とはいっても、数分もすれば野菜の下ごしらえは終わる。そこからは、役割分担だ。明久が野菜を炒めて、店長が麺を煮る。

「たまにですけど、こういうの食べたくなくなりますよねえ」

「だな」

本当にたまにだが、ラーメンが無性に食べたくなる。そういう時のために、インスタントが幾つか買って置いてあり、今回明久が見つけた。

たのは、その最後の一つだった。

「ただいま戻りました」

「おかえりー」

「食材はどうした？」

「量が量だから、後で配達してくれるそうです」

店長の問い掛けに、早希はそう答えた。確かに、一人で運ぶには余りにも量が多い。配達してもらった方が、何かと確実だろう。

「今日のまかないは……タンメン、ですか？」

「そ、たまたま残ってた野菜と、生麺を見つけてね」

「もう少しで出来るから、器の用意を頼む」

「わかりました」

店長の言葉を聞いて、早希はカレー用のお皿とラーメン用のどんぶりを取りに行った。そこに、エレベーターが開き

「店長！ お野菜とベーコンを見つけました！」

（量は、この位です）

とアレツタとクロが、台車を押して出てきた。

「おう、お疲れ」

「そこに置いておいて、後で確認するから」

アレツタとクロにそう答えると、二人は煮た麺と炒めた野菜をどんぶりに盛っていく。

そうして

「ほい、昼のまかないだ！」

「お待たせ」

と二人は、計四人分のどんぶりとチキンカレーを休憩室に運んだ。

「クロさんは、チキンカレー……で、僕たちは」

「タンメンだ」

タンメン、たつぷりの野菜を使ったラーメンだ。

「では、いただきます」

アレツタは何時もの祈りを捧げた後、まずは野菜を口に運んだ。野菜はシャキシャキ感を残し、味付けは塩と胡椒が中心となり、塩味のスープと見事にマッチしている。

次に麺を啜ると、塩味のスープが見事に絡み、どんどん食べたくなる。

(やっぱり、店長と明久さんは凄いなあ)

アレツタは心中で二人を称賛しながら、野菜を口に運ぶ。素材からして、アレツタの世界より上。そこに、更に上の技術力を有する料理人たる二人の腕が組合わさり、アレツタの想像の上に行く料理を作り提供している。異世界食堂そで働かせてもらっているのは、何とも奇妙に思えたが、それよりももっと働きたいと思った。

そうして、クロは何時も通りにチキンカレーをお代わりし、四人はタンメンを食べ終わった。すると、早希が

「では、私がお皿やお鍋、フライパンを洗いますね」

と言いながら、器を回収。アレツタとクロは、素早く布巾で机を拭いた。まだまだ、閉店まで頑張ろうと、意気込みながら。

42皿目 カキフライ

「えつと……これで、大丈夫のはず……」

「だよな……一応、パソコンにあつたのを、そのまま出力したからな……」

明久と店長が見ているのは、一枚の張り紙。明久と店長には読めないが、ある世界の言語でこう書かれている。

《カキフライ、始めました》

カキフライ。それはねこやに於いては、先代から続く冬季限定人気メニューである。月曜日に張り出してからは、注文が殺到している。特に、古馴染みの客はよく注文する。

「あのドワーフ達は、確実に注文するな」

「多目に用意しましょう」

二人はそう会話すると、キッチンに入ってしまった。それから、約一時間後。

「いらつしやいませ！ 洋食のねこやにようこそ！ あ、ハインリヒさん」

「おお、アレツタ嬢。注文は……」

出迎えたアレツタに注文を言おうとしたが

「おう！ 来たぞ！」

「おおつと、邪魔じやい！ どけい！」

とハインリヒの背後から、騒がしい声。振り向けば、二人のドワーフが居た。

「お前達か……」

「おう、騎士か！ 退いてくれるかの？」

ギレムに言われて、ハインリヒは二人に道を譲るために半身になった。その際に、ギレムはハインリヒに隠れて見えなかった張り紙に気づいて

「おお!? 今日からカキフライが食えるんか!!」

と興奮し始めた。

(カキフライ? フライと言うからには、エビフライと同じあげた料理なのだろうか……)

「ギレムよ、カキフライとはなんじゃ?」

「冬の間に出される料理での、これもまた美味いんじゃ! 酒によく合うんじゃ!」

ガルドの問い掛けに、ギレムはそう言いながら椅子に座って

「嬢ちゃん! 何時ものシーフードフライの盛り合わせとビールの大ジョッキ、それとカキフライを頼むわい!」

「はい! 分かりました!」

(ほう、冬にしか出されない料理か……)

ギレムの説明を聞きながらハインリヒは、椅子に座った。最初はエビフライを頼もうと思っていたハインリヒだったが、少し悩んでから「すまぬが、私もカキフライとやらを頼む」

「はい、分かりました」

注文を聞いて、早希はキッチンに入ってしまった。

(カキフライ……どのような料理なのだろうか……)

初めて食べるカキフライを、ハインリヒは期待しながら待つこと数分後

「お待たせしました、カキフライです」

とハインリヒの前に、お皿が置かれた。

「ほお、これがカキフライっちゅうやつか……」

「おうよ! 独特の風味がたまらんのじゃ!!」

どうやらギレム達にも出されたらしく、ガルドは何やら興味深く見ている、ギレムはフォークで突き刺すとタルタルソースを着けていた。

ハインリヒもフォークで刺すと

(ふむ……一口で食べられる大きさだな……)

最初の一個目は、なにも着けないで口に運んだ。

(むっ!?! こ、これは!?)

「っほおー! これは美味いわい!」

「そうじゃろ、そうじゃろ! 少し苦味はあるが、それがまた美味いん

じゃ！」

ガルドの言った通り、ほんの少し苦味がある。しかし、濃厚でクリーミーな味が口の中に広がっていく。

次にハインリヒは、タルタルソースを着けて食べた。

（やはり、フライはタルタルソースとよく合う！）

タルタルソースを着けたカキフライを食べたハインリヒは、そう確信した。タルタルソースにより、フライのサクサクとした衣がいくらか柔らかくなり、更にはその衣にタルタルソースの味が絡まり、口の中でカキの独特な味と複雑に絡まる。

（素晴らしい！ まさか、エビフライ以外にこのような料理に出会えるとは!!）

ハインリヒは新たな料理に出会えたことに感謝しつつ、更にカキフライを食べた。カキフライを一皿食べた後は、何時ものエビフライを注文。食べ終わり

（カキフライか……惜しむらくは冬にしか食べられないということだが……しかし、むしろそれが楽しみになる……一年間、必ずや生きよう）

最近、ハインリヒが指揮官の砦の近くに、魔物の群の巣があることが判明し、度々襲撃してくる。今はなんとか撃退しているが、近い内に増援がその砦に入ってくるようになっていく。

そして、その魔物の巣を撃滅する。それが何時になるかは不明だが、必ず為し遂げる。ハインリヒはそう気合いを入れて、退店した。

また必ず、カキフライを食べるために。

43 皿目 ホワイトシチュー

「そうよ！ 豆腐よ！」

と声を上げながら入店してきたのは、エルフのファルダニアだった。

「わわっ!？」

「ファルダニアさん!? どうしたんですか!？」

アレツタは驚き、早希が呼び掛けるがファルダニアは

「私が寄ったお店で、乳も肉も卵も使わないシチューがあつたのよ！」

その味が、豆腐に凄く似ていたのよ!!」

と言いながら、クロが差し出したメニューを奪うようにして取り、机に置いて見始めた。

「豆の風味がするシチュー……ああ」

明久は何か気付いたらしく指を鳴らし、店長は

「ああ、それは恐らく……」

と先代店長^大から聞いた話を思い出した。

それは、今から約20年程前になる。

「ここに来るのも、今日が最後ね……」

と言いながら、一人の冒険者の女性がねこやのドアを開けた。彼女はハーフェルフ、それも取り替え子^{チェンジリング}ではなく、人間の父親とエルフの母親の間に産まれた、純粋なハーフェルフだ。

「いらっしやい、メリルさん。待ってたよ」

出迎えた先代店長は、そう言いながらメリルを席に座らせた。

「悪いな、メリルさん。帰るの遅らせちゃって」

「いえ、それは構わないのだけど……」

今は一人のメリルだが、少し前まで仲間達とパーティーを組んで冒険していた。その仲間達とは10年近い付き合いで、冒険の最中に発見したねこやには、何か起きる度に一緒に来ていた。

大きな冒険が成功し、全員無事に生還した時。仲間の一人が死んだ時、新しい仲間を迎えた時。そして、パーティーが解散すると決まっ

た時。

解散に至った理由は、リーダーとサブリーダーの結婚だった。

二人は十年の間、互いに補佐しあっている間に惹かれあつたらしい。ハーフェルフのメリルにとっては瞬きに等しい期間だが、人間にとっては長い十年だ。

それを聞いた仲間達で、結婚を祝福するパーティー兼解散前の最後の食事となった。

解散した後は、全員それぞれの道を歩むことにした。

結婚する二人は、旅行を兼ねて世界各地を巡る冒険になるらしく、一人は別のパーティーに入れてもらうことに。そしてメリルは、故郷に帰って宿屋兼料理屋の母親の手伝いをすることに決めた。

それを聞いた先代店長は

「悪いんだが、帰るの七日間待ってくんねえか？ お前さんに食わせたい料理があるんだ」

と言って、メリルに留まるように頼んだ。最初はすぐに帰るつもりだったが、頼まれたので七日間だけ残った。

そして、七日後

「いらっしやい、待ってたよ。さ、座ってくんな」

「あの……私に出したい料理とは……」

メリルが問い掛けると、先代店長はキッチンから一台のカートで鍋を運んできたのだが

「こいつだ」

と言って、皿によそった。それは、ホワイトシチューだ。

「ホワイトシチュー……」

ホワイトシチューは、メリルがよく好んで食べていた料理だ。メリルはハーフェルフだが、エルフの母親の影響かエルフと同じように肉や牛乳、卵を食べることに忌避感を覚えていた。

だがそんな彼女でも食べられたのが、ねこやのホワイトシチューだった。それを考えると、食べられなくなるというのは、少し辛いところだった。

「あれ、この匂い……何時もと、少し違う……」

それは、本当に些細な違和感だった。パーティーでは料理当番をしていたからかもしれない。

「まさに、お前さんの為に作った料理だ」

先代店長はそう言っ、ホワイトシチューを皿によそった。そして、最初に気付いたのは

「……お肉が、ない……」

ホワイトシチューでも余り食べられなかった肉が入っておらず、代わりに野菜が多めに入っている。

「ほれ、冷めないうちに食べてくんな」

「あ、はい……」

先代店長の言葉に同意したメリルは、スプーンを持って一口食べて、驚いた。

「このホワイトシチュー……お肉だけじゃなく、乳と卵も使っていない!?」

もう何回も食べたからこそ、違いに気付いた。何時も食べていたホワイトシチューと、近い風味だが、全く違ったのだ。しかも、何処か懐かしさを感じる味だった。

それを確かめるために、メリルは更にそのホワイトシチューを食べた。肉の代わりに入っている肉厚なマッシュルームを食べるが、それよりもシチューの味に意識を集中させた。

そして、懐かしい味に思い至った。

「この味……エルフ豆……?」

それは、冒険者になるために故郷を離れる前のことだ。母親が実家兼料理屋兼宿屋の中庭で、エルフ豆を栽培し、家族に料理を振る舞っていたのだ。その味に、非常に似ていた。

「お、気付いたか。お前さん達からお代として貰ったお金で、お前さん達の世界の食材を買って作ってみたんだ。俺達の世界には、精進料理つつう肉や卵を使わない料理があつてな。こいつは、そちらのエルフ豆つてやつを使って作ったホワイトシチューなんだ。豆乳つつう素材だな」

「豆を使った乳!」

それを聞いたメリルは、思わず立ち上がった。これならば、宿屋兼料理屋の新しい看板料理になるし、何よりもエルフの母親でも食べられると。

しかし先代店長は、右手を掲げて

「悪いが、ヒントはここまでだ。料理人なら、自分でこいつを作ってみな。料理人にとって、レシピは最高の秘密……だろ？」

と言った。

「はい！ 必ず、再現してみせます！」

メリルは胸元で拳を握り締めながら、そう宣言。小さいが鍋一杯のホワイトシチューを全て食べて退店し、故郷に帰った。

そして、ファルダニアの言葉を聞く限りでは、どうやら再現出来たらしい。

それを悟った店長は、今居るフロアーからは見えないが、先代店長の写真が掲げてある位置に視線を向けて

「良かったな、じいさん……気掛かりが一つ無くなって」

と言いながら、ファルダニアの注文を聞きにいった。

44皿目 カレーパン

それは、ある日のお昼のことだった。

「試供品？」

「ああ、ベーカリーきむらの新作の試供品でな。発案は将太くんだぞうだ」

そう言いながら店長は、休憩フロアの机の上に少し大きめの皿を置いた。その上にあつたのは、揚げたてと分かる一つの食べ物。

「これは……カレーパン？」

「ああ、それも、チキンカレーのカレーパンだぞうだ」

チキンカレーのカレーパンと聞いて、クロの耳がピコピコと動いた。どうやら、興味津々らしい。

「元々、ベーカリーきむらにはカレーパンはあるんだが、ある日に将太くんが思い付いたらしいんだ。チキンカレーを使ったカレーパンを作ったら、どうなるんだろうってな。後はまあ、俺と向こうで擦り合わせて出来たのが、これだ」

店長はそう説明しながら、皿に盛られたカレーパンを指差した。つまり、ねこやとベーカリーきむらの合作ということなのだろう。

「一応、これが完成予定品になる。食べてみてくれ」

「はい、分かりました」

店長に言われて、四人はそのカレーパンを手を取った。見た目は、普通のカレーパンと同じ楕円形になっていて、表面はカリカリに揚げられている。

最初に中身を見たのは、アレツタだった。

「わあ……」

中を見たアレツタは、感嘆の声を漏らした。その間に、クロは既にカレーパンを黙々と食べており、耳がピコピコと動いていることから、美味しいらしいことが分かる。

「何時もより、少し固形気味なんですな」

「ああ、でないと、パン生地に染みちまうからな」

早希の言葉に、店長は頷きながらそう答えた。確かに、割ったパンの中のカレーのルーは、かなり固まっている。

「それに、チキンも小さめなんですね……ああ、食べやすいようですか」

「その通り。苦労したよ、そのサイズに決めるまでな」

明久の言葉を聞いた店長は、試作を繰り返していた時を思い出したのか、腕組みしながら何回も頷いている。どうやら、チキンのサイズを苦労したらしい。

「それに、回りのパンも……少し、甘さが強いような……」

「お、アレツタちゃん。よく気付いたな。チキンカレーの辛さに合わせて、少し砂糖を加えたらしい。おかげで、チキンカレーの辛さに負けないパンにしたんだと。ベーカリーきむらの親父さんも、苦労したみたいだぞ」

確かに、チキンカレーは普通のカレーよりも辛い。普通のパンじゃ、辛さに負けてしまうかもしれないなかった。しかし、今度は甘過ぎたらせつかくのチキンカレーの辛さが死んでしまう。確かに、それを考えると非常に難しかっただろう。

「んー……店長、これにチーズも合いそうですね」

「と言うと思つてな、もう1パターン作つてあるんだよ」

明久の言葉に、店長はもう1皿カレーパンが盛られた皿を置いた。見ただ目で分かりやすくするためか、こちらは四角形に作られてある。「食ってみな」

(これ……チーズが濃厚で、カレーの辛さを程よく抑えてる……)

いの一番にそのカレーパンを食べたのは、クロだった。どうやらお気に召したらしく、眼を輝かせている。

「そりやよかった。チーズの量に苦労したもんさ。多すぎると、重くなるし、チーズにカレーが負けるからな」

クロの念話が嬉しかったのか、店長は笑みを浮かべた。確かに、チーズで辛さを抑えるのも大事だが、抑え過ぎるのも問題点だろう。それらを考えると、一体何回試作を繰り返してきたのか。その苦労は想像出来なかった。

だが、四人はその二種類のカレーパンを食べて

「最初のは、少し辛いかもしれないけど、充分美味しかったです」

「うん。パンの甘さと合って、凄く美味しかった」

最初に感想を言ったのは、アレツタと早希だった。二人の言葉を、店長はサラサラとメモに書いている。

そこに

「この、チーズ入りも凄く美味しかったです。チーズも有るから、結構お腹に来ますね」

(チキンカレーの美味しさが、充分に伝わる)

次に、明久とクロの感想。それもまた、店長はメモに書いていく。

四人からは、概ね好評価だった。

それを書き終わると、店長は

「OK、ありがとうな。これなら、製品として出せるだろうな」

と述べて、そのメモをポケットに仕舞った。

そして店長も、カレーパンを食べ始めた。これから約1ヶ月後、ベーカリーきむらに新しい商品が並び、大ヒット商品となつて、将太のお小遣い上がることになるのは、全くの余談だ。

一年の始まり

「新年明けましておめでとうございます」

「明けましておめでとう」

年が明けて、本来はまだ休みの期間中のねこや。そこに、ねこやの一同は集まっていた。

とは言うものの、ドアはこちらの世間一般では休み期間中だろうが関係なく、七日毎に開くので明久と店長からしたら、最早慣れている。

「さて、何時もより早くに来てもらったのには、理由がある」

「それが、これだよ……おせち料理だ」

「おせち……料理？」

実は七日前、次に来る日は何時もより少し早目に来てほしい、とアレッタやクロには言っていたのだ。

明久があるテーブルに掛けられていた大きな布を取ると、その下から重箱が出てきた。

「おせち料理って言うのはね、私達の世界で年が明けてから七日間だけ食べられる料理だね。いろんな願掛けがされてるの」

「願掛け……」

「そ。例えば、一年間元気で過ごせますように、とかね」
「なるほど……」

アレッタとクロが首を傾げると、明久がそう説明した。そうして、5人は座り

『いただきます』

と丸い箸を使って、食べ始めた。

「この丸い箸にも、意味があるんですか？」

「そうだよ、確か……カドが立たないように……だったかな？」

アレッタの問い掛けに、早希は少し思いつくように答えた。

（このお雑煮という料理、様々な味が染みだして、美味しい……このお餅というやつは、ライスの風味がする……）

「うん、お雑煮って言うのは、様々な素材を雑多に煮たって言うところ

から来てるって聞くね。それでお餅は、もち米を捏ねて作ってあるんだ。だから、お米の味がするんだよ」

クロの感想を聞いて、店長がそう教えた。

「この黄色いの……凄いいいです」

「あ、栗きんとんだね。栗を煮てから磨り潰して裏ごしし、甘く味付けしたものだよ」

アレツタが食べたのは栗きんとんのようで、明久が簡単にその説明をした。

(この黒い豆も美味しい……)

「それを美味しく煮るの、差し水のタイミングが大切なんだよねえ」

「クロだけに黒豆……」

「お、叔父さん……?」

明久は煮てる時の事を思い出していて、早希は店長のオヤジギャグに困惑していた。そして重箱を食べ終わると、店長と明久が少し大きめのお鍋を持ってきて、蓋を開けた。

中には、幾つかの野菜を一緒に煮たお粥が

「本当はまだ先なんだがな」

「七草粥って言ってね、一年間の健康を祈って食べるんだ」

店長と明久はそう説明しながら、五人分を器によそっていく。そして、行き渡ったのを確認して

「よし、食べようか」

「熱いから、気をつけてね」

二人の言葉を聞いて、三人はお粥を食べ始めた。お粥自体に味付けがされてないため、醤油や塩で軽く味付けして食べた。

食べ終わると

「それじゃあ、今年も頑張っていくぞー!」

『はい!!』

店長の掛け声に、元気よく返答した。

こうして、異世界食堂の新しい一年間が始まった。

45 皿目 お汁粉

「ふむ……一年経ったのか……」

そのエルフは、ある森の中で一年振りに目を覚ました。

その名前は、セレナ。長い時を生きるエルフの中でも破格の年月を生きるエルフにして、賢者の称号を与えられた唯一のエルフだ。

太陽と月の影響により、揺らぎ続ける魔力の流れ。それを感じて、一年経ったことを察した。

セレナが森に漂う精気を魔力に変換し、それを取り込むことで若返り、老いとそれに連なる死を永遠に抑え続ける秘術を開発した。

遙か太古の七色の竜や異世界に逃げたという魔王ならば、まるで息をするかのように無意識下で行使する秘術。それを唯一開発し行使出来るのが、セレナだった。

セレナがその秘術を開発したのは、今から遙か昔のエルフにしては若輩の100歳の時だった。

当時のエルフ達は、積極的に魔術の研究をしており、5柱の竜達や深海の底や高き空の果て、果てにはエルフが居ない異世界にすら進出しようとしていた時代があった。

当時のエルフ達は、自分達が世界を支配していると思いがり、今では禁術とされる術も開発した。

そんな時代に、セレナは産まれて、天才ともてはやされた。

セレナは80歳位の時から、ある秘術。儀式により己の肉体を捨てて、魂だけになって生きる秘術を信じていなかった。

エルフは、脆弱だが肉体を持って産まれてきた種族であり、魂だけで生きるというのが、何の代償も無いとは信じていなかった。

そして、セレナのその懸念は大当たりだった。

魂だけになったエルフ達は、100年と持たずに発狂し、死を振り撒く魔^{リツ}霊^チ王に成り果てたのだ。

本来は肉体からの刺激があつて、精神の均衡を保てるのに、魂だけになって精神の均衡が保てるわけがない。そう分かったセレナは、肉

体を持ったまま不老不死になれる研究を開始したのが、100歳だった。

そこからは、長い時を掛けて開発を続けた。

理論の完成に約500年、自分の肉体と森の環境の維持のための魔術の完成に約300年。新しい秘術の完成までに、計800年という長い歲月。エルフにとつても、生涯を掛けた秘術により、セレナは約3000年という気の遠くなるような年月を生きてきた。

「永遠とは、孤独なものだな……」

セレナはそう呟きながら、ある場所に向かって歩き始めた。それを見つけたのは、本当に偶然だった。

セレナは一年の殆どの時間を、肉体は寝かせて頭は動かして新たな魔術の研究を続けてきていた。

しかし、森に異変が起きれば直ぐに目覚めて対処するようにしていた。

その時は、森で火事が起きてセレナが魔術の根幹に使っていた長老とも言ふべき木に危機が迫ったのだ。

その火事自体は、セレナが行使した雨を降らす魔術で鎮火されたものの、長老木も多少焼けてしまったのだ。

セレナはその長老木の世話をゴーレムに任せて、魔術の再設定をするために歩いていった。

その時、見つけたのだ。黒いドア。異世界食堂こと、ねこやのドアを。

「楽しみだな、オシルコ」

セレナはそう言いながら、ドアを開けた。

「いらっしやいませ！ 洋食のねこやにようこそー！」

「席は空いているか？」

混んでいる店内を見て、セレナはそう早希に問い掛けた。すると早希は、一度店内を見渡して

「すみません、少々お待ちくださいー！」

と言って、確認に向かった。そこに、料理を両手に持った明久が現れて

「おや、一年振りですね。セレナさん」

「ああ、お前か……息災なようで何よりだ」

一年振りに来店したセレナの姿に、明久は懐かしさを感じながら挨拶した。

「すみません、今日はかなり混んでまして……」

「いや、盛況なのは良いことだろう……」

明久がセレナに謝罪すると、セレナは微笑みを浮かべながらそう告げた。

確かに、料理店としては盛況なのは万々歳である。

そこに、早希が現れて

「すみません、相席で大丈夫でしょうか？」

とセレナに問い掛けた。

「ああ、構わない」

「では、こちらです」

セレナの言葉を聞いた早希は、セレナをある席に案内した。一人のエルフ、クリステイアンが座る席に。

「ご注文が……」

「あ、すまんが、注文は決まっている。オシルコを頼む」

「分かりました」

セレナの注文を受けて、早希は離れていった。すると、クリステイアンが

「一年振りです、セレナ様」

と挨拶してきた。

「久しいな、遠い同胞よ……今日は、変わったのを食べているかな？
ナットウスパゲッティではないな？」

「はい、知り合いの娘が見つけたナットウとライスからヒントを得ました。ナットウモチです。中々美味ですよ。向こうの世界では、わりとポピュラーらしいです」

セレナは一年前に来た時はクリステイアンがナットウスパゲッティを食べていたのを覚えていたが、今日のクリステイアンはナットウを着けた白い塊。

ナットウモチを食べていることに気づいたから問い掛けたのだ。

「それも、この期限限定……ということか？」

「はい、他にオハギというのも有るようです。次にそれを頼もうかと思っております」

セレナとクリステイアンが話していると、明久が現れて

「お待たせしました、お汁粉です。どうぞ、ごゆつくり」

とセレナの前に、濃い紫色の飲み物が入った器を置いた。

セレナがそのお汁粉に出会ったのは、本当に偶然が重なった結果なのだ。偶々目覚めた日が、ねこや側からしたら年明けだったこと、そこに先代店長が時期限定の食べ物を出そうと考えていて、当時偶々来ていた現店長に食べさせようと、お汁粉を作った。

そこに、偶々目覚めたセレナが来店し、お汁粉が気になり注文し、食べて気に入ったのだ。

それ以来、ねこやの正月期限定メニューにお汁粉が加わることになったのだ。

「ふむ……この甘さ……良いな……」

最初に一口食べた時、セレナは衝撃を受けたのを今でも覚えていいる。気の遠くなるような時を生きてきたセレナだったが、お汁粉は初めて食べた。

まず、甘いこと。そして何より、見たこと無い料理だったからだ。

甘味料は当時から貴重品で、長い歳月を生きてきたセレナも片手で数えられる回数しか食べたことが無かった。

しかも、かなり高い。それが、ねこやでは手頃な値段で食べられる。

セレナが気に入るには、充分過ぎた。それ以来、一年に一度必ず来るようになった。

「それで、お主はまだ食の探求を？」

「はい。これも、その一環です」

セレナの問い掛けに、クリステイアンは今度は深緑の布のような物。海苔が巻かれたお餅を食べた。醤油を着けているようだが、時々パリという音が聞こえる。

「ふむ……今度、海の方に行ってみるのも一興か……」

「相変わらずで何よりよ……」

セレナはクリステイアンが相変わらずで安心感を覚えながら、更に一口と口に運んだ。

濃い甘さが口の中に広がるが、スツと消えていく。くどくない甘さが、心地よい。

（ああ……長生きしてみるものだ……まさか、このような料理に出会えるとはな……）

3000年という長い歳月の間に、セレナと同期を生きたエルフ達は全員死に絶えたか、死霊王に成り果ててしまった。調べた処、半数は討伐されたようだが、まだ半数近くがダンジョンの奥地や人が住めなくなつた魔境に居る。恐らく、何時かは討伐されるだろう。

（だから、あの秘術は止めろと言つたんだ……）

一体、その中の何体が知り合いなのか。セレナは確認する気は無い。確認する勇気が無いとも言えるが。

「さて、次はそのオハギとやらを頼むかな」

「おや、宜しいので？」

クリステイアンが問い掛けると、セレナは笑みを浮かべて

「なに……一年に一度なのだ……好きなように食べるさ」

と答えて、近くを通つたアレツタを呼んで、更に注文するのであった。

46皿目 アーモンドチョコ

「よ、持ってきたぜ」

「おう」

「待ってましたよ」

2月14日。明久達からしたら、バレンタインと呼ばれるイベントは、フライングパイプーからしたら正に掻き入れ時である。だから売り切れにならないようにと、かなり多めに作る。そして、当然のように余るので、ねこやに卸すのだ。

「店長、今年も取り置きするんですか？」

「ああ……もう10年になるが……待ちたいさ」

明久の問い掛けに、店長は少し諦めた表情を浮かべながらもチョコの入った箱を一つ取り置き用の棚に置いた。

バレンタインの祝日というイベントを、ねこやで始めるようになったのは、今から十数年前。その初期から、一人の青年がチョコの取り置きを頼むようになっていた。なんでも、知人の頼みらしい。しかし、今から10年前から来なくなってしまった。

その意味は、大体は察しがつく。普通ならば、もう諦めるべきだろう。しかし店長は、信じて待つことにした。

そして、数時間後。

「ほらほら、師匠！ 頑張るっすよ！」

「本当に、この先にネコヤのドアが有るのか!？」

一組の男女が、激しい吹雪の中で険しい山を登っていた。

「父さんの日記には、この辺りの洞窟の奥に有るって書いてあったっすけど……お、あの洞窟じゃないっすか？」

「……可能性は高いな」

軽い口調の女性の言葉に、師匠と呼ばれる男性。ウィリアム・ゴード・ジュニアはその洞窟に向かった。今彼が居るのは、東大陸でも西大陸でもない第三の大陸。南大陸だ。南大陸に渡るには、竜神海と呼ばれる広大かつ渦潮が多くある海を渡らなければならず、容易には

渡れない。

ならばなぜ、彼はそこに居るのか。そもそも、彼は誰なのか。彼は、東大陸においては、大商会と知られるゴールド商会の直系の一人で、創業者の一人であり、名の知れたトレジャーハンター。ウィリアム・ゴールドの直系にあたる人物で、名前もウィリアム・ゴールドの再来という意味と願掛けの両方で、ウィリアム・ゴールド・ジュニアとなったのだ。

そんな彼が、なぜ南大陸に居るのか。

それは、今から10年前に遡る。今から10年前、彼は祖父たるウィリアム・ゴールドからある一冊の手帳を手渡された。その手帳には、ウィリアム・ゴールドが今まで行った古代の遺跡に関する情報がある程度記載されていた。

その手帳を受け取ったジュニアは、それをウィリアム・ゴールドからの試練と受けとめ、その手帳に記載されている様々な遺跡に向かい、調査。事細かな情報を記載、または見つけたお宝を持ち帰る旅に出た。

そんな中で彼も、トレジャーハンターになり、ある一つの遺跡にたどり着いた。それは、古代エルフの遺跡。古代エルフが魔法の研究をしていた、研究所の一つだった。そこを調べていた時、ジュニアはある物を見つけた。

それは、巨大な門だった。ジュニアはその門が何なのかを調べようと、迂闊にも近づいてしまった。遺跡自体が大分倒壊していたから、まさか生きていた魔道具施設があるとは思っていなかったのだ。しかも、対の魔道具施設。ジュニアも噂でしか聞いたことのない魔道具施設、転移門だった。

そして気付けばジュニアは、南大陸に居た。何とか帰ろうと何回も転移門を調べたが、うんともすんとも言わない。壊れたのか一方通行になっていたのかは分からないが、ジュニアはその転移門を諦め、南大陸で生きながら東大陸に帰る方法を探すことにした。

それから、早10年。最初は分からなかった南大陸語を学習しつつ、彼は生活を開始。

未だに南大陸は未解明な部分が多分にあり、そもそも東や西大陸から渡れた人物が殆んど居ない。

その南大陸を調査している間、何とジュニアは結婚し子供まで産まれた。今一緒に居るのは、その妻の妹になる。

(やはり、若さか……)

もう30後半に差し掛かろうかという歳のジュニアに対して、義妹は10代後半。しかも、南大陸ではさして珍しくもない半魔族の義妹は、寒さを気にした様子もなく岩場を登り、ある洞窟に入ると岩場を登るのに四苦八苦していたジュニアに、手を差し伸べて

「師匠、有りました！ 黒いドアつす!!」

と洞窟の奥にある、ねこやのドアを指差した。

「間違いない……ねこやのドアだ……」

ジュニアはそのドアを見て、懐かしい気持ちで沸いた。今から10年前。南大陸に飛ばされる直前、ジュニアは幾つかのねこやのドアを見つけていて、時々は来店していた。そして最後の日、バレンタインの祝日に妹達のお土産用にとチョコを頼み、そして取り置きを頼んでいたのだ。しかし、もう10年も来れていなかった。

「ああ……ようやくだ」

ジュニアはそう呟きながら、ドアを開けた。

「おお……日記に書かれてた通りつす……中は暖かいし、明るい……」

義妹は風景が変わったことに驚きつつ、周囲を見回した。ふとその時、ジュニアが静かなことに気付き、視線を向けると、ジュニアが一人の女性を見て固まっていた。

(確かに美人さんつすねえ……まさか、一目惚れ!?)

すわっ、不貞は防がなければ! と義妹が決意を固めた時

「サラ……まさか、サラか!?!」

「お、お兄ちゃん!?! 嘘つ!?! 10年前に死んだはず!?!」

「……え、どういうことつすか?」

「なに?」

予想外の事態に、義妹だけでなくその場に居た客や明久達も固まってしまった。

それから、数分後

「つまり、師匠の妹さんっすか」

「正確には、従妹だがな」

「けど、本当に……よく生きてて……」

サラはジュニアが生きていることが嬉しくて、涙を流していた。そこに

「ご注文のアーモンドチョコとホットミルクです」

とアレツタが現れた。すると、サラは

「ああ、そうだ。お兄ちゃん、紹介するわ。私の住む別荘に住み込みでハウスキーパーをやってもらってる」

「あ、アレツタと申します！」

「ああ、ウイリアム・ゴールド・ジュニアだ。よろしくな」

自己紹介した二人は、軽く握手した。南大陸に長く住んでいるウイリアムからしたら、半魔族は慣れた存在なので、何の気兼ねなく握手のために手を差し伸べた。

そしてジュニアは、目の前に置かれた皿に乗っているアーモンドチョコを見て

「さて……食べるか。サラも食べてみなさい」

と促して、アーモンドチョコを一粒持った。サイズは、本当に小さい。親指と同じ位の濃い茶色の物体。

「しかし、これが本当に甘いのか……?」

ジュニアが記憶しているのは、今住んでる街で薬として出回っているカラオの苦さだ。一応10年前に南大陸に飛ばされた直後、食糧を得るまで食べていたが、その時は生きること必死だったので、味を気にする暇などなかったのだ。

「父さんの遺した日記には、確かに甘いって書いてあったっすよ？」

妻と義妹の父親は、高位の赤の神官だった。しかし、今から約数年前に過激派の光の神官戦士団が街に攻めこんで来たのを、僅か数人の神官戦士で殲滅した。しかし、その際に負った負傷が理由で亡くなった。

そして少し前に、義妹が父親の部屋の整理をしていた時に、日記を

発見。その中から、赤の女王が来る店としてねこやの事が書かれてあったのだ。しかも、年に一度。

バレンタインの祝日には、チョコが売られているとも書かれてあった。

それを頼りに、師匠たるジュニアと一緒にねこやのドアを探しにきたのだ。

「……では」

意を決して、ジュニアはアーモンドチョコを一口で半分ほど食べた。最初は甘いことに驚いたが

(この風味……間違いない、カラオだ！)

甘さの中に、カラオ^{カカオ}独特の風味があることに気付き、ジュニアは驚愕した。すると、義妹は

「その表情、見たかったっす」

と笑みを浮かべながら、ジュニアに続いてアーモンドチョコを食べながら、ホットミルクを飲んだ。そして、ジュニアに

「アタシとしては、今の食べ方をオススメするっすよ師匠」

と勧めてきた。義妹は何だかんだ食にはこだわりがある性格なので、間違いはないだろうとジュニアは義妹と同じ食べ方をした。残っていたアーモンドチョコを放り込み、直ぐにホットミルクを一口飲んだ。

すると、先に口に入れていたアーモンドチョコが仄かに融けて口の中でホットミルクと混ざり、味が変わった。濃厚な牛の乳の味の中にカラオの風味が、見事に調和する。

「……なるほど、美味しいな」

「ニヒヒ」

ジュニアの言葉に、義妹は笑みを浮かべた。その後、サラと一緒にアーモンドチョコを食べて、チョコを二箱頼むと

「そうだ、サラ……これを」

と懐から、一冊の手帳を取り出した。

「これは……」

「爺ちゃんから貰って、俺がずっと使っていた手帳だ。やる」

ジュニアのその言葉に、サラは目を見開き

「それって、大事な情報じゃない?」

と驚愕した。トレジャーハンターにとって、何より大事なものは情報だ。そのため、情報を書き記した手帳や日記は隠したりするのが普通だ。

「構わん……そつちに書いてあるのは、殆んどが東と西大陸の遺跡に関するものばかりだ……今の現状では、そつちに帰る方法が無いからな……どうしようもない……それに、俺が生きているという証拠にもなるだろう?」

「……そうね、貰っておくわ」

とサラは、ジュニアから貰った手帳を懐に仕舞った。そこに、店長が現れて

「はい、アーモンドチョコ二箱です……10年間、待ってましたよ。ジュニアさん」

とジュニアの前に、チョコの入った箱を二箱置いた。

「待たせてしまったようで、すまない」

ジュニアは感謝の言葉を言いながら、箱の入ったビニールを持った。そこに

「これをどうぞ」

と明久が、大きなマジックポッドを二つ置いた。

「これは……」

「ポトフです。奥さんとお子さんが居ると聞きましたので、サービスです。そちらのポッドは、次回来た時にでも返却してくださいね」

ジュニアが明久に視線を向けると、明久は微笑みを浮かべながらそう説明した。それを聞いたジュニアは、少しの間ポッドを見てから

「ありがたく、貰う」

とポッドを持った。そしてジュニアは、最後にサラを見て

「サラ、いい加減相手を見つけてるよ」

「余計なお世話よっ!!」

サラにとっては余計な一言を告げて、ねこやを去った。そして、洞窟で身なりを整えてから

「さて、帰りも頼むぞ。弟子よ……お前の感覚が頼りだ」
「お任せつす、師匠！」

と二人で、吹雪の中を街に向かって戻っていった。

神々の住まう地から

「神様、今日の晩御飯は何にしましょうか」

「ベル様、今日はそれなりに稼いでるとはいえ、無駄遣いは厳禁ですよ!？」

「まあいいじゃねえか、リリ助。ベルが無事に深層から帰還したんだ。今日位はパツとな」

「まあ、今日は本拠地の食材の買い置きもありませんし……外食するしかありませんが……」

「う、ごめんよ……皆が無事に帰ってくるか、気が気でなかったから……」

白髪赤目の少年、ベル・クラネルの問い掛けを聞いて、小柄な少女、リリルカ・アーデは何やら慌てた様子で苦言を言うが、大柄で短い赤髪が特徴のヴェルフ・クロツゾは笑顔で快活に笑う。そして何やら思いついたように、黒髪の少女。ヤマト・命が言うのと黒髪ツインテールに巨乳のヘスティアが僅かに俯いた。

彼等が居るのは、オラリオ。神々が集まり住まう土地であり、その神々が人間や亜人を眷族にしてファミリアを結成し、ダンジョンを攻略しに行ったり、農業を営んだりしている地だ。

そしてヘスティアも、そんな神の一人だ。ただし、地上に降りてからかなり長い年月を知り合いの神の所でグータラと過ごした結果、その神の所から追い出され、何とかファミリアを結成しようとして頑張り続けた結果、初めて眷族になったのがベル・クラネルだった。

その後は様々なトラブルを乗り越えて、今の人数にまで増えた。

先に挙げたベル、リリルカ、ヴェルフ、命の他に、金髪に狐の尻尾が特徴のサンジョウノ・春姫が居る。規模としては小規模のファミリアだが、中々の修羅場を潜り抜けたメンバーだ。

「やけど、どござし……ん？」

最初にそれに気付いたのは、ベルだった。知り合いの店豊穡の女神に行こうかなとも考えていたが、そこは割かしお高めの店でもあり、金庫番のり

リルカが許してくれるか分からないなあ、と考えていたら、そのドアを見つけた。今や自分達の本拠地となった敷地の一ヶ所。そこは本来、資材を仕舞う倉庫の筈で確かにドアは有るが、質素なドアだった筈だ。しかし、ベルが見つけたドアは、高級そうな黒いドアだった。

「ベル様、どうし……なんですか、アレ？」

「初めて見るドアだな……」

「ですね……自分も初めて見ます」

「これは……猫ですね……」

「なんて書いてあるんだ……？ 共通語とも、神聖語とも違うな……」

ベルの視線を追って気付いた一同は近づき、一様に首を傾げた。しかし、そのドアから凄まじい魔力が満ちていることは分かった。さて、どうするか。と全員が悩んでいると

「よし、開けよう」

とベルが、ドアノブを掴んで開けた。すると、目の前が一気に明るくなって、カウベルが聞こえて

「いらっしやいませ、洋食のねこやにようこそ！」

と一同を、長い黒髪の少女が出迎えた。

47 皿目 回鍋肉

「神様が、人と一緒に住んでる……つまり、お客さんが、神様……と？」
「そうさ！ ボクは、ヘスティアさ！」

店長の問い掛けに、中学生のような身長に豊かな双丘を備えた黒髪ツインテールの少女。ギリシャ神話の炉の女神。ヘスティアは何処か自慢気に答えた。

その後ろに居る少年少女は、ヘスティアの血を分け与えられた眷族で、ファミリアと呼ぶらしい。

「僕がそのヘスティアファミリアの団長を務めます。ベル・クラネルです」

「私は、リリルカ・アーデです」

「自分はヤマト・命です」

「俺は、ヴェルフ・クロツゾだ」

「私は、サンジヨウノ・春姫と申します」

最初に白髪赤目の少年が名乗ると、次に小柄な茶髪の少女。次に、侍のような雰囲気のパニーテールにした黒髪の少女。ショートカットにした赤い髪に黒い着流しを着た青年。最後に狐の耳と尻尾が特徴の少女が名乗った。

これが、ヘスティアファミリアの全員らしい。

「はあ……まさか、神様に会う日が来るとわ……」

「ですね……」

店長と明久が驚く中、早希はヘスティアと自分の一部を見比べて、深々と溜め息を吐いた。一応フォローすると、人種的に見るとむしろ出ている方である。

「さて、ご注文は何になさいますか？ メニューに無いのも、ある程度は出せますよ」

どうやら言語は英語と同じらしいので、通常のメニューを手渡した。すると、リリルカが

「安くてボリュームの多い料理をお願いします！」

と勢いよく告げた。

「おい、リリ助……今日くらい……」

「ダメです！　ヘスティア様の莫大な借金が、まだ丸々残ってるんですよ!?　特に今回の遠征、赤字なんですよ!?　少しでもムダ遣いは避けるべきです!!」

ヴェルフが文句を言おうとしたが、それを遮ってリリルカが机をバンバンと叩いてからビシッとヘスティアを指差した。その指摘に、ヘスティアが申し訳なさそうな表情を浮かべながら頬を搔いて、僅かに視線を逸らした。

一体、どれ程の借金を背負っているのだろうか。

それを聞いた明久と店長は、少し考えてから

「では、こちらにお任せ。という形でよろしいですか?」

「そうすれば、幾らかはお安く出来ますよ?」

と告げた。その言葉に、リリルカがブンブンと勢いよく頷いた。それを聞いて、明久と店長はキッチンに戻り、早希達も通常業務に戻った。その時、ヘスティアがクロを見て

(あの子……何者?　尋常じゃない存在感だ……)

と思っていた。それから、少しして

「お待ちせしました、ホイコーロ回鍋肉の大皿です」

と全員が座る席の机の真ん中に、大きなお皿で料理が置かれた。

「本来は一人前ずつをお出しするんですが、それを大皿に纏めました」

早希が説明した後、クロとアレツタがそれぞれライスと玉子スープを置いた。そうして三人が下がると、ベルが回鍋肉を見て

「これが、回鍋肉……」

と少し驚いていた。恐らく、その見た目からだろう。しかし、春姫が鼻をスンスンとしてから

「しかし、いい匂いはします……この匂いは、魚介系……ですね」

と口にした。それを聞いてか、ヘスティアが一口分取って

「よし、食べてみよう」

と口に運んだ。そうして、モグモグと噛んだ後に、飲み込んだ。その直後、目をカッと見開いて

「凄い美味しい！ 初めて食べるよ、こんな料理は!?!」

と驚きの声を挙げた。そこから、全員が箸を伸ばして食べ始めた。

「確かに美味しいです!」

「使ってる材料は、私達の世界と何ら変わらない物なのに!!」

「この深い味わい……箸が止まりません!」

と口々に言いながら、野菜や肉を次々と頬張っていく。そして同時に、ライスも減っていく。そこに、早希がやってきて

「ライスのお代わりは、どうしますか?」

とちようど最後の一口を食べた、ベルに問い掛けた。するとベルは、すぐに

「お願いします!」

とお代わりを頼んだ。お代わりは無料と事前に教えられているので、遠慮する必要はないのだ。その後、ベルを皮切りに一同も次々とライスをお代わり。全員が二杯目のライスを食べ終わった頃には、大皿に盛り付けてあった山盛りの回鍋肉は無くなっていた。

「ああ……美味しいかった……」

「ですね、神様」

ヘスティアの心からの言葉に、ベルは深く同意した。そうして、全員が満足そうにしていると、リリルカが財布を取り出して

「あ、そういうえば……」

と疑問らしい声を漏らした。全員が視線を向けると、リリルカが「……異世界ならば、お金の単位が違う筈です」

と呟くように言った時、店長が現れて

「何かありました?」

と首を傾げた。そうしてリリルカがお金のことを問い掛けると、店長はリリルカにお金の単位を聞いた。

「そちらじゃあ、ヴァリスって単位で統一されてて、金貨だけ? あ、金貨に1から10000って彫ってあるのか……なら、その数字に合わせて払ってもらうってことでいいか」

と頭を掻きながら言った。それを聞いたリリルカは、驚愕で目を見開いて

「いいんですか!？」

と問い掛けた。

「まあ、統一されてるし、それ以外に払いようが無いからな。構いませんよ」

「ありがとうございます！ では、お代ですけど……」

「3500ヴァリスになります」

「予想より安い!？」

余りに安かった為に、リルルカが驚きの声を挙げた。何時もならば、外食した場合は優に5000は越えていたからだ。

「ど、どうぞ」

「毎度」

リルルカは財布の中から、三枚の1000と彫られた金貨と500と彫られた金貨を取り出し、店長に手渡した。そこに、明久が現れて「こちら、サービスのお握りです。後程どうぞ」

と人数分の紙の箱を差し出した。

「当店は、七日に一度開きますので。またお越しく下さいませ」

「お待ちしております」

明久と店長の言葉を聞きながら、ヘステイアファミリア一同は退店。消えていくドアを見ながら

「本当、下界は不思議が一杯だね……」

「まあ、流石に毎回は来れないでしょうが、また来ましょう」
そして、ヘステイアファミリアはホームに入っていった。

交1 皿目 オニオングラタンスープ

「今日も、無事閉店ですね」

「トラブル込みで、無事だね。Oちゃん」

そう会話しているのは、双子と思える程に瓜二つの二人の女性。しかし、彼女達は人間ではなく、戦術人形と呼ばれる人間サイズのロボットである。

鉄血工造製ハイエンド人形。代理人である。二人とも代理人だが、識別のためにここ、喫茶鉄血に来る客やスタッフはDとOと呼んでいる。それぞれ、ダミー、オリジナルを意味している。とは言え、仕事等で十分に見分けられるが、今は割愛する。

「さて……店内の清掃は、サボった二人に任せるとして」

代理人はそう言って、モップを持ってこれまたハイエンド人形の二人。マヌスクリプトとゲッコーの二人をキッと、鋭く睨んだ。睨まれた二人は、首から

《私は仕事中に女性客を口説きました》

《私は仕事中に無駄話をしました》

と書かれた札を下げている。

良い子の皆は、決して仕事はサボらないように。作者との約束だ。

それはさておき
閑話休題

代理人は、Dを伴ってスタッフ用休憩室に入った。たまにだが、ここに物が残っていることがあるからだ。

そして二人は、異質な物を見つけた。

「D?」

「私も知らない」

二人の視線の先にあったのは、一つの黒いドアだった。猫の彫刻がある黒いドア。看板には、洋食のねこやと日本語で書かれてある。

「……開けてみましょう」

「本当に!?!」

異世界の人達との邂逅
今まで不思議現象に遭遇してきた代理人だが、まさか自分がこんな

ると思わなかった。そして不安そうに見詰めているDと一緒に、ドアを開けた。すると、カウベルが鳴り

「いらっしやいませ！ 洋食のねこやにようこそ！」

と金髪の少女、アレツタに出迎えられた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「……未来……ですか」

「貴方達からしたら、そうなりますね。私は、鉄血工造製ハイエンド戦術人形の代理人です。こちらは、私のダミー人形の」

「代理人・ダミーです！ Dって呼んでください！」

店長が目を点にしていると、代理人とDは軽く自己紹介した。すると、明久が

「はあ……未来じゃあ、完全に人間にしか見えないロボットが作れるんだ……凄いなあ……」

と素直に、感嘆していた。明久が知っているロボットは、高さが腰辺りまでで、脚部がタイヤになっているもので、応答は定型文でしか出来ない。

しかし目の前に居る代理人達は、言われなければ戦術人形とは分からないだろう程に、人間にしか見えなかった。唯一かなり色白なのが気になるが、そう言う種族も居ることを知っているために、それほど気にならない。

「いやあ……技術の進歩って凄いんだな……人間にしか見えん……もしかして、料理も食べられるの？」

「ええ。可能な限り、人間に近い形に造られています」

店長の問い掛けに、代理人は頷きながら答えた。

「凄い……」

まさか料理も食べられるとは思ってなかったらしく、早希が驚いた表情で言葉を漏らした。すると、店長と明久は顔を見合せて

「でしたら、何か食べますか？」

「料理屋に来たのに、何も食べさせないで帰らせたとあったら、じいさんにごやされる」

と代理人とDに問い掛けた。

「しかし」

「私達、お金が」

と二人が迷っていると

「でしたら、次来た時で構いませんよ」

「ツケにしときます」

明久と店長のその言葉に、代理人とDは顔を見合せた。そして

「でしたら……」

「お願いします」

と頭を下げた。

「では、ご注文は何になりますか？」

「メニューに無いものも、ある程度なら出せますよ」

店長と明久がそう言うのと、代理人は

（この後の事を考えれば、あまり本格的に食べるのはいただけないです
すね……）

と考え始めた。代理人達は自分の店、喫茶鉄血の閉店作業中に来ていて、それが終わったら夕飯になる。それを考えると、ガッツリと本格的に食べるのは躊躇われる。

では、何を頼むか。そう考えていた時、代理人の（電）脳裏に、あの料理が浮かんだ。

「では……オニオングラタンスープを二つお願いします」

「分かりました」

「少々お待ちください」

代理人から注文を聞いた明久と店長は、キッチンに入っていた。すると、Dが

「Oちゃん。私、その料理知らない」

「私も、データで知っているのみです。上手くいけば、食べたデータから再現出来るかもしれませんよ」

代理人が明久と店長に、敢えて話していない事項として第三次世界大戦があり、人の住める地域が減少。それに伴って食糧生産も落ちていて、更に言えばIT関連にも大打撃を受けて、一部のデータは失われている。

そして、十数分後

「お待たせしました。オニオングラタンスープです」

と早希が、二人の前に器を置いた。

そして、パンの乗せられたお皿を置いて

「こちらのパンを浸して食べるのも美味しいですよ。それと、パンのお代わりは自由ですので、お気軽に声をお掛けください」

と説明し、離れた。

「これが、オニオングラタンスープ……」

器の上面には、きつね色になっているチーズ。それをスプーンで割ると、その先に茶色いスープが見えた。割ったチーズも一緒に混ぜり、香ばしい匂いが二人の嗅覚をくすぐった。

「では」

最初に代理人が、スプーンでスープを口に運んだ。すると、口の中に豊かな風味が広がった。

「これは……」

「うわっ、美味しいっ」

Dは素直に感想を口にするが、代理人はその味の秘訣に気づいた。飴色になるまで炒められた玉葱とコンソメスープ。この二つが軸で、そこにチーズの風味が混ざっている。料理としては、かなりシンプルな部類だろう。しかし、だからこそ料理人の腕が如実に出る。

店長はまだしも、明久はまだかなり若かった。だというのに、その腕が分かる。正に、プロの料理人。

そして代理人は、早希が言ったようにパンを千切って浸してみた。すると、みるみるとパンがスープを吸収して重くなる。それを口にすると、一気に口の中にスープの味とパンの味が広がる。

「……なるほど」

代理人は満足そうに頷くと、食べることに意識を集中させた。そして、食べ終わると

「Oちゃん、美味しかったねー！」

「ええ」

Dが目をキラキラと輝かせていた。そこに、明久が現れて

「こちらをどうぞ」

と紙の箱を差し出した。

「これは……」

「サービスのサンドイッチです。お疲れのご様子でしたので」

代理人が受け取ると、明久はそう説明した。先にも説明したが、代理人達は戦術人形。人間より遥かに頑丈だ。それに伴い、様々な面で耐久も高い。

しかし、気付いてないだけでメンタル的に疲れていて、明久がそれに気付いたのかもしれない。

「……ありがたく、貰います」

代理人が受け取ると、明久が

「当店は、七日に一度開いておりますので、またお越しく下さい」

と言いながら、頭を下げた。退店すると、ドアはゆっくりと消えていく。それを見ながらDが

「本当に、異世界というか……過去なんだ」

と驚いていた。その時、ドタドタと騒がしい足音がして

「居た！ 代理人、D！」

「二人とも、何処に行ってたんだ!？」

「探しましたよ!？」

と喫茶鉄血のスタッフ達が、休憩室に駆け込んできた。どうやら、二人のIFFが消えたことで慌てて探していたらしい。

すると二人は、顔を見合せと

「信じられないかもしれませんが」

「異世界に、行ってたんだ」

と告げた。

48 皿目 デミグラスハンバーグ

西大陸の東側の端に、海の国と呼ばれる一つの国がある。その国は、沿岸部にある首都と、人や獣人、魔族が住む無数の小さな島々からなっている国だ。

小さな島々というのは、人が住んでる島も有れば、人が住んでいない無人島。更には、人が住むには適さない島。そして、魔獣が支配する島もある。

その島の一つに、一人の少年が漁師として住む島があった。

その少年の名前は、ロウケイ。先に述べたように、漁師として生活している少年だ。そのロウケイは、一人の少女に先導されてある島に到着した。

その少女の名前は、アルテ。なんでも、南方から来た人魚らしい。そのアルテと出会った切っ掛けは、今から数日前のことだった。ロウケイが漁をしている最中に、急激に天候が悪化。急いで戻るも間に合わず、嵐に巻き込まれて海に落下。あわや溺れ死ぬかと思っていた矢先に、アルテが素早くロウケイを助けたのだ。その後、アルテのおかげで一命をとりとめただけでなく、船まで回収してもらったロウケイは、お礼をすることにし、何をしてほしいか聞いた。

ロウケイはアルテの美貌と優しさに惚れていたが、要求されたのは、銀貨10枚という色々と台無しなものだった。どうして銀貨だったのか気になったロウケイは、どうして銀貨を要求したのか問い掛けた。

すると、アルテは

『知ってるお店への支払い』

と言った。それを聞いて、ロウケイは驚いた。

人魚だけでなく、人間社会で生きる魔族、半魔族以外は、お金に価値を見いださないからだ。そこからロウケイは、アルテが行くだろうお店が気になり、案内を頼んだ。

その場所が、無人島だった。

「……？」

「そう……この先の森の中……少し、待っていて」

アルテはそう言うと、目を瞑り、両手を組んだ。すると、アルテの下半身が人間の足になった。

「なっ!？」

「……青の神に祈れば、この位は出来る……まだ、翼は無理だけど」

そう言ったアルテは、立ち上がって足の調子を確認した後、ロウケイの案内を始めた。その数分後、大きめの木の根元に、その扉はあった。

「この扉は……」

「異世界食堂……美味しい料理……デミグラスハンバーグが食べられるお店」

アルテはそう言うと、ロウケイを伴って扉を開けた。

「いらっしやいませ! 洋食のねこやにようこそ!」

「おや、アルテさん。お久しぶりですね……おや、お連れも一緒とは」
そんな二人を出迎えたのは、早希と明久だった。早希は両手に空のお皿を持ったまま、奥に消えた。そしてアルテは、手近な机に座ると「デミグラスハンバーグを二つお願い。ライスで」

と明久に注文した。

「承りました。少々お待ちください」

注文を受けた明久は、早希と入れ替わる形で厨房に消えた。早希は二人の前に水の注がれたコップを置き、離れた。それを見送ったロウケイは、物珍し気に異世界食堂の店内を見回した。

見たことの無い店内の調度品に、明かり。そして何より、店内に居る様々な種族や見た目の客達。

(異世界食堂……凄いところだ)

全員に平等に接する店員にも、驚く他なかった。漁で獲った魚を時々大きな街に卸しに行く、たまにバカにされたり買取りの値段で足下を見られたりしたことがあるロウケイだったが、明久や早希は丁寧に接してきた。そして、十数分後。

「お待たせしました。デミグラスハンバーグです。ライスはお代わり

自由です。どうぞ、ごゆっくり」

運んできたアレツタは、鉄板に乗せられたデミグラスハンバーグとお皿に盛られたライスを置いてから下がった。

見たことの無い料理に、ロウケイは興味津々と言った様子で、デミグラスハンバーグを見た。漁師のロウケイは、やはり魚を焼いた料理か干物が食事の中心だ。たまに狩人が獲った鹿か猪の肉も食べるが、本当にたまにである。しかも、ただ焼いただけだ。ハンバーグといった料理すら知らなかった。

「食べましよう」

「お、おう」

アルテに促されて、ロウケイはフォークとナイフを持った。そして、見よう見まねでアルテと同じようにハンバーグを切ってみた。すると、切り口から脂。肉汁が溢れた。

「うわ……」

溢れる肉汁に、思わず声が漏れた。それを見ながらロウケイは、ハンバーグを口に運んだ。その瞬間、口の中に広がる肉の濃厚な味。そして、濃厚なデミグラスソースの味が混じり合い、ロウケイは驚きで目を見開いた。

「旨っ！」

そこからは、ロウケイは無我夢中でハンバーグを食べた。付け合わせのダンシヤクと特殊な形に切られたカリュートも、ハンバーグの引き立て役として美味だった。そしてライス。ロウケイはライスをフォークでかきこんでいた。

噛む度に仄かな甘さを感じるライス。初めて食べる料理に、ロウケイは驚くしかなかった。

「どうだった？」

「凄く旨かった……」

アルテの短い問い掛けに、ロウケイはそう答える他無かった。それしか、言葉が浮かばなかったのだ。

「お代」

「あ、はい」

アルテが立ち上がると、偶々近くに居た早希がアルテから銀貨を受け取った。そして、初めて訪れたロウケイに

「当店は、七日に一度開いておりますので、またお越しくださいませ」と告げてきた。それを聞いてから退店したロウケイが見たのは、徐々に消えていく扉。それを見ていると、アルテが

「また、来たい？」

とロウケイに問い掛けた。ロウケイが無言で頷くと、アルテが「だったら、また七日後に会いましょう……それまでに、お金も工面しない」と

と呟いた。それを聞いたロウケイは、アルテの手を掴んだ。それにアルテが振り向くと、ロウケイは

「その……一緒に……」

と呟くように誘った。確かに、ドアの都合上一緒に来るしかないのだが、ロウケイはそれ以外の意味でも誘っていた。アルテは、少し間を置いてから

「……ん、分かった」

と頷きながら微笑み、その微笑みを見たロウケイは顔を赤くしたのだった。

49 皿目 シュークリーム

「……空いた口が塞がらないとは、このことだな、兄上……なにしてるんだ……暗殺者と戦うだなんて」

「仕方ないだろう、アーデルハイト姫の居る離宮には兵士なんて居なかったんだ」

「でも、シャリーフ様が居たおかげで、私は助かりました……」

ラナーは、兄のシャリーフとその恋人となったアーデルハイトの話聞いて、愕然とした。それは、今から三日程前に、アーデルハイトの離宮に暗殺者が侵入し、アーデルハイトを殺そうとした。しかしそこに、見舞いに来ていたシャリーフが駆けつけ、持っていた魔道具で戦闘の末に捕縛した。

アーデルハイトの住む離宮は、元々が避暑地（表向き。本当は、前皇帝がねこやのドアを確保するために建てた）なので、兵隊は常駐していない。

前皇帝が亡くなってからは、皇族の避暑地という扱いで管理しており、そこにアーデルハイトは貧民殺しが治まるまで逗留することになっている。

そしてシャリーフは、今は帝国において魔道具の開発のための指導に就いており、言わば客将扱いとなっている。そしてその日は、新しく開発した魔道具を見せるためと見舞いのために離宮に来ていた。

そして到着して直ぐに、シャリーフは異常に気付いた。何時もなら、出迎えに来るメイドが姿を見せない。だからシャリーフは、非常用にと持っていた戦闘用の魔道具を片手に走り出した。

そして、アーデルハイトの部屋のドアを蹴破って中に入ると、暗殺者がナイフ片手にアーデルハイトに馬乗りになっていた。それを見たシャリーフは、戦闘用魔道具を起動させ、その暗殺者を吹き飛ばした。

最初の一撃は、アーデルハイトの安全性を考えて最小出力で運用した。その甲斐あり、アーデルハイトは無事。シャリーフは一気にアー

デルハイドに駆け寄ると、素早く背後に隠した。そして、態勢を立て直した暗殺者と一戦を交えることになった。

シャリーフは祖国たる砂の国でも、盗賊や蛮族、他国からの侵攻といった事態に、最前線で指揮を執ったことがあり、その経験から戦闘もある程度はこなせる。

だからシャリーフは、暗殺者が落としたナイフを逆手に持ち、暗殺者を迎え撃った。

何度も刃を交え、アーデルハイドに降りかかろうとした刃を迎撃し、シャリーフは一瞬の隙を突いて、暗殺者を無力化し捕縛。

見事、アーデルハイトを守りきったのだ。

異常に気付いた兵士が来たのは、シャリーフが暗殺者を無力化した約二時間後のことだった。

なお、メイド達は全員無事が確認された。そして今回の事が理由で、シャリーフの開発した戦闘用魔道具の有用さが立証され、軍部でも導入案が検討されているという。

「つまり、その顔の傷はその勲章と……よく奮闘しましたね、強力な毒があったかもしれないのに」

シャリーフを称賛したのは、話を聞いていたヴィクトリアだ。最近、今居るメンツで談笑しながら食事している。特にシャリーフは、ラナーから砂の国の現状を聞く場としている。

「ははは……アーデルハイト姫を守らないとっと考えたなら自然と……」

シャリーフは苦笑いを浮かべながら、頬の傷跡を触れた。暗殺者は何回もアーデルハイトを狙い、投剣を投擲しており、殆んどは弾いたが一本が頬をかすっていた。

幸いにも手足が痺れる程度の毒だったから、シャリーフは死にはしなかったが、暗殺者を捕縛した後は、兵士達が来るまでアーデルハイトの隣で立っているのがやっとだった。

その後は、兵士と一緒に来た魔法使いにより治療を受けた。

「では、そんなシャリーフさんの奮闘を記念しまして、サービスです」
そう言って現れたのは、明久だった。明久は全員の前にひとつずつ

あるデザートに乗った皿を置いた。

「これは……」

「シュークリームです。どうぞ、ごゆっくり」

明久は一礼すると、ゆっくりとその場から離れた。

「久しぶりに見たわね、シュークリーム」

そう語ったのは、ヴィクトリアだった。ヴィクトリアはデザート類のメニューを作る際に、一度食べた以来にシュークリームを見た。

「シュークリーム……何やら、固そうですね……」

「いえ、むしろ柔らかいわ」

ラナーが様々な角度からシュークリームを見てみると、ヴィクトリアはそう言いながらシュークリームを持ち上げて、二つに割った。

ヴィクトリアが言った通り、シュークリームは簡単に割れ、中からカスタードクリームが出てきた。

「はむ……んっ、甘いですー!」

「これは、確かに……アイスクリームとは、また違った風味だ」

シュークリームを食べて、アーデルハイトとシャリーフはそう声を挙げた。

少しサクサクとした生地、中に詰められたカスタードクリームがよく合い、口の中に濃厚な風味が広がる。

「ここには、本当に様々なデザートが有るのですね」

「確かに……また新しい味に会えました」

アーデルハイトの言葉に、ラナーは同意しながらまた一口とシュークリームを頬張った。

そうしてまた、談笑に花が咲いていく。

歌って戦う少女達

「お腹空いたよー、未来ー」

そう力無く言ったのは、机にうつ伏せになったショートカットの茶髪が特徴の少女。立花響だ。たちはなひびき

「気持ちは分かるけど、今の時間じゃあ、この食堂はやってないし、例え上陸してもスーパーもやってないから、ご飯も作れないよ?」

そして、そんな響を嗜めたのは、響の真正面に座っていた黒髪が特徴の少女。小日向未来こひなたみくである。二人が居るのは、国際機関SONGの移動拠点たる潜水艦の会議室である。SONGというのは略称で本来はもつと長いのだが、今は割愛する。簡単に言えば、通常では対処仕切れない超常の事態や異常事態に対処するための機関である。

「そこに居るのは、小日向と立花か」

「バカは……ああ、空腹か。分かりやすい」

そこに現れたのは、長い青髪が特徴の少女の風鳴翼と、銀髪が特徴の少女・雪音クリスである。かぎなりつばき

「皆さん、お疲れ様です」

「すまん、あんな時間に招集してしまつて」

更に現れたのは、ショートカットにした金髪に小柄な少女のエルフナインと赤髪の大柄な男性。風鳴弦十郎である。そして風鳴弦十郎が、このSONGの最高責任者だ。

「いえ、非常時に動くのが、防人の務めなれば」

「まあ、それが仕事だしな」

「助けを求める人が居るなら、何処にでも行きますよ!」

「私達に出来ることを、やるだけです」

弦十郎の言葉に、翼、クリス、響、未来はそれぞれ答えた。しかし、すぐに響は机にうつ伏せになり

「あうー……やっぱり、お腹空いたよー……」

と漏らした。

「すまん、まだ食堂が開いてないから……」

響の言葉に、弦十郎は申し訳なきようにそう答えた。只今の時間は、日本時間にして午前6時40分。響達は朝とも呼べない時間の午前3時頃に呼び出され、大規模火山噴火が起きたある島への救助活動に向かったのだ。

彼女達の活躍の甲斐あり、被害は最小限に留められ、無事に避難は完了。後はその国に任せて、帰還したのがつい十数分前なのだ。

「それに、マリア君たちが別件で離れていたから救助が間に合うかが懸念だったが、よくやってくれた」

実を言えば、他にも仲間が三人居るのだ。マリア・カデンツァヴナ・イヴ、暁切歌、月読調の三人だ。しかしその三人は、数日前からある遺跡調査団の護衛として同行していて、今は不在だったのだ。予定では、あと三日ほどで帰ってくるようになっていた。

「そのマリアさん達は、どうなんですか？」

「ああ、三人共に大丈夫だそうさ。予定通り、後二日程で帰還するようだ」

未来の問い掛けに、弦十郎は朗らかにそう答えて、懐から出した端末を未来に見せた。確かに、任務継続中、問題なし。今のところ予定通り。と書いてある。

それに安堵した直後、響の豪快な腹の音だけでなく、未来の慎ましやかな腹の音まで、弦十郎の耳に入った。

もちろん、未来本人は顔を赤くして俯いている。やはり、恥ずかしいようだ。

(うーむ……食堂が開く迄、最短で約一時間……流星に、育ち盛りの少女達を空腹のまま居させるのはな……只でさえ、深夜に出動させたんだからな……今度から、カップ麺でも常備するべきか……しかしあれは、栄養が偏り易い……)

弦十郎はどうするべきかと考えながら、腕を組んだ。その直後、弦十郎の背後に一人のスーツ姿の男性。緒川慎二が現れて

「司令、あちらを」

とある方向を指差した。潜水艦故に限られたスペース。彼が指差した先は、普通に壁の筈だったが、見てみれば一つの黒いドアが有っ

た。木製で大きく黒猫が彫られた看板があり、日本語で

《洋食のねこや》

と書かれてある。

「これは……」

「なんだ？ さつきまでは無かったろ、こんなドア」

素早く、翼とクリスが警戒してかそのドアの前に立った。すると、弦十郎が

「このドアは……」

とゆつくりと歩み寄った。

「司令、知っているのですか？」

「……昔、仕事の時にな……」

今や国際機関の最高責任者という立場の弦十郎だが、以前は公安に務めていて、その関係で色々な所を巡ったりもした。その中で、子供達に料理をよく振る舞う料理屋があると聞いた。その名前が確か

(洋食のねこや……だったか)

弦十郎がゆつくりとドアを開けると

「おや、お早いお客さまだ」

「いらっしやいませ、洋食のねこやにようこそ」

と一行を、二人の男が出迎えた。

50 皿目 カツカレー

「……超常現象対策機関のSONG……ですか」

「はい。我々は、聖遺物や通常からは考えられない異常事態に対処するために組織された機関です。その中には、並行世界もあります」
名刺を受け取った店長が視線を向けると、弦十郎はそう言いながらドアを見た。

弦十郎がそのドア、洋食のねこやを知ることになったのは、今から約10年程前になる。その頃弦十郎は、今とは違い、日本の警察の公安に所属していた。

その頃、先輩の一人からある噂を聞いた。その噂というのは、あるレストランが、行き場の無い子供達に食事を与え、更には働かせて社会復帰させている。という。

弦十郎がそれを調べていて見つけたのが、ねこやだった。

「並行世界かあ……確かに、ノイズとかアルカ・ノイズとか聞いたこと無いな……」

「私も聞いたことありません……世界蛇ってヨルムンガンドとかですよね？ それに、錬金術って本やアニメ位でしか聞いたことありません」

明久の話を聞いて、少し早目に来ていた早希がそう言った。

確かに、明久も同じだ。

しかし、弦十郎達の居る世界ではそれらが実在するという。

「世界が違うだけなのに、色々と違うんだなあ……もしかして、その彼女達のペンダントもそれですか？」

明久が視線を向けた先に居る少女達、響達の胸元にある紅いペンダントを見た。

「そうだ。あれは、シンフォギア……聖遺物の欠片を使って造った兵器で、唯一異端技術と戦える存在……歌を鍵に起動し、力を増幅させて戦う……」

「歌って戦う……本当にアニメみたいだなあ……」

弦十郎の説明を聞いて、早希は思わずそう呟いた。確かに、アニメのような話だ。

「しかし、随分と早い時間からお仕事をなさってるんですね」

「今回は、緊急事態だった故……日本時間で午前3時頃に日本を発つた……」

明久の言葉を聞いて、翼がそう告げた。明久はそんな翼に、侍を彷彿させた。そして、脳裏に常連のタツゴロウの姿が浮かんだ。

(タツゴロウさん……二週間位来てないけど大丈夫だよね……)

彼等の世界では、何時命が喪われても可笑しくはない。だが、出来ることなら何時までも来てほしい。明久はそう思った。

その時、不意にグキュルルという音が聞こえて

「あうう……お腹空いた……」

と響が呟いた。

「何か食べますか？ こちらがメニューになりますが、メニューに無いのもある程度なら出せますよ」

店長はそう言いながら、早希が手渡したメニューを机の上に置いた。

「それはありがたいですが、よろしいので？」

「構いませんよ。空腹で来たお客様を帰すなんて真似、出来ませんか
らね」

店長のその言葉を聞いた弦十郎は、装者達を手招きし

「好きな物を頼め。ここは、俺が持つ」

「師匠、ありがとうございます！」

弦十郎の言葉にイノイチに飛び付いたのは、先ほど盛大にお腹を鳴らした響だった。それを合図に、全員が席に着いてメニューを広げた。

その後、クリスはデミグラスハンバーグ。翼はグラタン。未来はミートソースパゲッティ。響はカツ丼の大盛。慎二はエビフライ。そして弦十郎は、カツカレーの大盛だった。

「承りました」

「少々お待ちを」

注文を受けて、明久と店長はキッチンへ。早希は先ほど来たアレツタとクロを着替えに行かせた。

その後、続々と異世界から御客が入店してきた。その客達を見て「なるほどな……確かに、異世界食堂だな……」

と弦十郎は、思わず納得した。そんな中、翼は久し振りに来たタツゴロウを見て

「ほう……彼は、かなりの剣客のようだな……」

と鋭い視線を向けた。

「え、分かるのかよ、先輩」

「ああ……あの立ち居振舞い……彼は、間違いなく一流……ううむ、何時か手合わせしてほしい……」

クリスの問い掛けに、翼はそう答えたが、直ぐに

「しかし、ここは食事処……防人として、恥ずかしい真似は出来ない」と自戒した様子で、腕組みした。それから数分後に、続々と料理が運ばれてきて、全員の前に置かれ、食べ始めた。

「美味しいっ！」

「響、分かったから落ち着いて。喉に詰まるから」

「うぐっ」

「ほら、言ったのに……」

カツ丼を掻き込んだ響は、未来の忠告の直後に喉に詰まらせて、未来から受け取った水を一気に飲み

「雪音……お前は、もう少し綺麗に食べられないのか……?」

「うぐ……これでも、前よりはマシにはなっただよ……」

「確かにな……前よりは、飛び散ってはいないからなっ……!」

翼はクリスの食べ方を指摘し、クリスは翼に反論する。言っただけなんだが、翼は掃除が凄く苦手で、慎二が定期的（約一週間周期）に掃除しに行くが、たった一週間で部屋が汚部屋と化す。（おっと、誰か来たようd……）

「この味……変わらん……」

「司令、知っていますか?」

「なに、少しな……」

慎二の問い掛けに、弦十郎はカツカレーを見ながら目を細めた。行き場の無い子供達に食事を与え、そして働かせているレストランという情報が気になった当時の弦十郎は、そのレストランを捜し、客として何回か行って調べた。

当時の店主、大樹は少々口は悪かったものの、人当たりが良く、路頭で迷っていた子供達によく声を掛けては店に連れていき、食事を与えてはその子供達が自立出来るようになるまで働かせていた。

弦十郎はそれが善意からだとは判断すると、離れたのだ。

以後大樹は、彼が引退するまで同じことを繰り返し、幾人もの子供達を更正させて、見送った。

実は大樹の葬式の時、大人数の青年や大人達が線香を手向けに訪れていた。

そして、店長と明久は知らないが、実は一部の人間の間では

《ねこやに迷惑を掛けるのは、許さない》

という暗黙の了解があったりする。

閑話休題

弦十郎は、スプーンで一切れのカツを半分程に切ると、そのカツとカレーライスを一纏めにした状態でスプーンで掬い、口に運んだ。

(柔らかく下ごしらえされたカツ……サクサクの衣にカレーが絡んで、えもいえぬ味わいが口の中で広がる……見事な調和だ……あの頃と変わらぬ味わい……彼等が進んでいる証拠だ……)

弦十郎はそう思いながら、更に一口食べる。

(時々混じる福神漬けで、味に変化が加わり、飽きぬどころかスプーンが止まらない……)

気づけば次々と口にスプーンを運んでおり、着々と大盛のカツカレーが無くなっていく。そうして、数分後

「ふう……美味かった……」

弦十郎達は、見事完食。

満足そうにしていると、店長と明久が現れて

「いちいちをどうぞ」

「お忙しいお仕事みたいですから、サービスでサンドイッチの詰め合

わせです」

と言いながら、紙の箱が入ったビニール袋を幾つか置いた。

「ありがたく頂戴します」

弦十郎はそれらを受け取ると、一度慎二に預けてから財布を取りだし、清算した。すると、店長と明久が

「あのドアは、一週間に一度開きます」

「またのご来店を、お待ちしております」

と一同を見送った。

退店した一同は、消えていくドアを見ながら

「また来たいです、師匠！」

「確かに、あそこは美味しかった……」

「だな」

「うん」

「まあ、たまにならば、行くとしようか」

と会話し、業務に戻ったのだった。

51 皿目 キノコスパ

そこは、地図にも乗っていない小さな町。

その外れ、森の中にて薬師を営む一人の少女。アリサは、ようやく現れた黒いドアを前に、ふんわりと微笑みを浮かべ

「ああ、よかった……」

と呟いた。そのドアが現れるのは、決まって薬草を育ててる中庭の一角。唐突に現れたので、同じように現れなくなるのではないかと危惧していたが、杞憂に終わった。アリサは調査に失敗した薬の残骸も一緒に片付けてから、そのドアを潜った。アリサがドアを閉めた直後に、ドアが開き

「あ、アリサ！ 今来たつすか？」

「うん、メイメイ。今来たの」

頭に白い山羊の角があり、褐色の肌に黒い髪が特徴の半魔族の少女。メイメイが現れた。

二人は、忙しそうに店内を駆けているウエイトレス達を見ながら、近くの席に座った。

そこに、二人分の水を持った明久が現れ

「ご注文は、何時もので？」

と問い掛けた。この数年、二人が注文する物は決まっている。

「はい、ワフーキノコスパをお願いします」

「うん。私には、キノコクリームスパ！ あ、お箸着けてね」

「承りました」

注文を受けた明久は、近くの机から空の容器を回収してからキッチンに消えた。アリサとメイメイは、そんな明久を見送ってから

「ねえねえ、この七日間どうだった？」

「んー、何時も通りだったかな？ 薬草を育てて、その薬草から薬を作って、町の人達に売って……うん、何時も通りだね」

メイメイの問い掛けに、アリサは顎に手を添えて思い出しながら答えた。アリサにとって、この異世界食堂は居心地が良かった。友達の

メイメイは半魔族だが、東大陸では未だに根強く魔族への差別意識が強い。

だから、森に捨てられていた赤ちゃんだったアリサを拾い育てた師匠は、全身を包帯でグルグル巻きにして、半魔族の証拠だった全身の鱗を見せないようにしていた。

その師匠と一緒に、今居る異世界食堂に来るようになり、そこでなら気構えせずに済むと気付いた。

だから、アリサはメイメイと談笑しながら視線だけで回りを見た。

初めてこの異世界食堂に来た時は、衝撃的だった。

半魔族だけでなく魔族までもが来店し、あまつさえ人間と一緒に楽しそうに食事をしている。

本来だったら、有り得ない光景。しかし、この異世界食堂ではそれが普通。

だからこそ、アリサはここでメイメイと出会った。

陽気な性格で、初めての友達の子メイメイと。

町の人達は商売相手という認識が強く、しかも年上ばかり。だからどうにも、友達を作ろうという気持ちにはならなかった。

そこに

「和風キノコスパとキノコクリームスパです、お待ちせしました」

とアレツタが、二人が注文した料理を持ってきた。そうして、アリサの前に和風キノコスパ、メイメイの前にキノコクリームスパを置いてから、箸を置いて

「それでは、ごゆっくり」

と言って、下がっていった。アレツタを見送りながらアリサは、アレツタが働き始めた時を思い出した。

まさか、半魔族がレストランで働くとは、アリサにも予想していなかったのだ。

「さて、食べますか」

「そうね」

メイメイの提案に従い、アリサは和風キノコスパを食べ始めた。アリサが和風キノコスパを食べる切っ掛けになったのは、自分からした

ら慣れ親しんだキノコを使った料理だからだ。

森で薬師として過ごしていると、食べる食材も非常に限られる。

肉も食べるが、町には狩人が二人しか居ないので、狩る数が限られ、その殆どが町に回されて、自分の所に回るのは稀だ。

だから森の中で自生している薬草やキノコを採取し、川に設置した罟で捕まえた、魚を食べる。

だから、メニューの中から慣れ親しんだ食材のキノコを使った料理の、和風キノコスパを選んだ。

メイメイも似たり寄ったりで、山の方で住んでいるらしく、慣れ親しんだキノコの料理たるキノコクリームスパを選択。

それが、二人の馴れ初めになる。同じ席で似た料理、しかも歳も近い。最初は、どちらから喋りかけたか。

気付けば意気投合し、仲良くなった。

そうして二人は、約束した。異世界食堂に来たら、一緒に食事しよう。その時に、自分の近況を話そうね、と。

だから、先に来た方はもう一人を待つという暗黙の了解も出来ていた。

そうしてアリスは、和風キノコスパをフォークで巻いてから一口食べて

(うん……やっぱり美味しい)

口の中に広がるキノコ独特の風味と醤油と呼ばれる調味料の風味が、アリスは好きだった。今でも思い出すのは、初めて食べた時の衝撃。

食べ慣れている筈のキノコが、調理法でこんなに変わるのかと思っ

た。アリスがよく食べていたのは、キノコとハーブを使ったスープだった。

だからまさか、炒めると美味しくなるとは思わなかった。

「ねえ、アリス。半分こ、忘れないでねー」

「分かってるよ、メイメイ」

メイメイの言葉に、アリスは頷いた。メイメイは、箸を器用に使っ

てキノコクリームスパを食べている。

アリサは過去に一回使ってみたが、上手く使えなかった記憶がある。

(よく使えるなあ)

メイメイはどうやら使い慣れているらしく、苦もなく箸を使って食べている。その様子からアリサは、メイメイが東大陸の東端の方の出身だと判断した。

アリサも東大陸だが、メイメイとは真反対の西端。

やはり、そこまでとなると、文化も大分違うのだろう。

そうして、和風キノコスパを半分ほど食べたなら、メイメイと目を合わせて

『半分』

と、お互いの料理を交換した。これの始まりは、初めて食べた時に、メイメイがアリサの和風キノコスパに興味を持ったからだ。実を言えばアリサも興味があつたから、渡りに船だった。

丁度半分ほど食べていたので、交換。そこから、今の半分こが始まった。

それ以来の、二人の間の約束。

「んー！ この味、ワフォーキノコも美味しいね！」

「キノコクリームスパもね」

キノコクリームスパは、和風と違って口の中に乳の風味が濃く広がる。しかも、キノコの風味もきちんとある。

(あの料理人さん達、凄いなあ……)

アリサは素直に、料理人たる店長と明久を称賛した。

自分には到底作れないだろう料理を、二人は作れている。はっきり言つて、憧れの念すら抱く。

そうして気付けば、二人は料理を食べ終わっていた。二人はお金を机の上に置いて

「それじゃあ、また七日後にね」

「うん！ また七日後に！」

二人はそう約束すると、同時に扉を潜った。一瞬眩しさを感じ、気

付けば中庭に立っていた。隣に視線を向けても、メイメイの姿は無い。

それを残念に思いながらも、アリスはまた七日後に異世界食堂に行くためのお金を稼ぐために、薬の調合をすることにした。

52 皿目 大学芋

「……む？」

その日、セレナは一年経った訳ではないのに目覚めた。最初はその理由が分からなかったが、直ぐに察した。

「この感じ……火事か……」

皮膚がひりつくように痛い。火事だと分かったセレナは、魔法でその場所を見つけると、ゴーレムを伴いその場所に向かった。

「これは……落雷か」

そこでは、一本の太い木が縦に引き裂かれるようにして燃えていた。土台、人間には出来ない（魔法は別）ことで、今日はどうやら朝から雨が降っているようだ。魔物なら可能だろうが、この森には魔物が簡単には入れないように結界が張られていて、もし入られてもゴーレムが居る。

とりあえずセレナは、魔法で消火してからゴーレムに後処理を命じた。

（さて、落雷対策も考えねば……）

ゴーレムが無造作に木を引っこ抜いたのを見たセレナは、何時もの場所に戻って眠ろうとした。だが

「……そうか、今日はドヨウだったか」

セレナの振り向いた先、ある大きな木の根元にねこやのドアが現れていた。

「……ふむ……行くか」

お正月ではないため、お汁粉は無いだろうと予想しながらも、セレナはドアを潜った。

「おや……珍しいですね、セレナさん。お正月でもないのに……」

そんなセレナを出迎えたのは、明久だった。視線だけで見ると、客入りも疎らだ。

「店長殿の姿が無いようだが……」

「店長でしたら、少し前に用事で出掛けました」

セレナの問い掛けに、明久はそう答えた。今から約一時間程前に自治会から電話があり、出掛けた。なんでも、ねこやビルも一応商店街の端にあるので、定期的に集まっていると云っていた。

「生憎ですが、お汁粉は無いです……」

「構わない。代わりに、何か甘いものを頼む」

「承りました。少々お待ちください」

セレナの注文を受けて、明久は厨房に入った。その間にセレナは、手近な空いてる席に座り、出された水を飲んだ。

そうして、数分後

「お待たせしました、大学芋です」

セレナの前に、一つの皿が置かれた。

「これは……」

それは、セレナからしたら、不思議なモノだった。三角形に切られた食材に黄金色に近い色のドロツとした液体が掛けられていた食べ物だったからだ。

「では、ごゆっくり」

一礼してから去る早希を見送り、セレナは大学芋を見た。

（ダイガクイモ……と言ったか？ ダンシヤクを使ったものか？ しかし、ダンシヤクはあまり甘いのは向かない味だったと思うが……）

セレナでも、^{ジャガイモ}ダンシヤクのことには知っている。今や帝国を代表する食材で、一度だけ食べたことがある。

（あれは確かに、美味しかったが……あれはどっちかと言うと塩味が有る方に向いていたが……）

セレナはそう思いながら、フォークで大学芋を割った。最初は堅かったが、割ってみると

「む、この芋のほうが黄色が濃いな……それに、この匂いは……」

中の芋は、セレナが知るダンシヤクより黄色く、更に甘い匂いがした。そうしてセレナは、フォークで刺してから口に運んだ。

「ん！ これは、確かに甘い！ 外のは、ハチミツか！」

甘いハチミツは、セレナ達の世界では非常に高級で、貴族しか買え

ない代物だ。それを、贅沢に使っている。

「芋自体もほのかに甘い……なるほど、このような料理が有るのだな」
新たな発見だ、とセレナは思った。お汁粉以外にも、自分が食べられる甘い料理が有るのだな、と。

「ふむ……異世界食堂……素晴らしいな……」

セレナはそう結論付けると、残っている大学芋を一口サイズに割って食べていく。

口の中に広がる甘さはしつこくなく、幾つでも食べられそうだ。

(なるほど……貴族連中が、よくハチミツを買うわけだ)

そう納得しながら、セレナは大学芋を完食。退店した。そうして、ゴーレム達の作業の進捗具合を確認しながら、セレナは

「さて、新しく考えた落雷対策の魔法を使うか」

と呟いてから、対落雷魔法を発動。効果を確認するためにわざと一発落雷を誘導し、効果を確認し終わると

「……たまには起きて、行ってみるか」

と呟いてから、何時もの場所に戻っていったのだった。

53 皿目 スイートポテト

「よう、今日もせいがでるな」

「おう」

「あ、おはようございます」

「おはようございます！ 店長さん！」

冷蔵庫に搬入された素材を入れてみると、フライングパイの店長がゴンドラを押してやってきた。そのゴンドラの上には、様々な種類のケーキや洋菓子が乗っている。フライングパイの店長は、それらを空いたスペースに入れていくと

「そういえば、これ出来たぞ」

と一つの小さな洋菓子を、偶々置いてあつた皿に乗せた。

「これは、なんですか？」

「スイートポテトだ。食うか？」

「え、いいんですか？」

フライングパイ店長の言葉に、アレツタが驚いていると

「おうよ！ 店長の奢りだ！」

と豪快に笑った。それを聞いた店長は、エツという表情でフライングパイ店長を見てから

「……一つだけな」

とだけ答えた。

「で、では……あむ」

アレツタはフライングパイ店長からスイートポテトを受け取ると、口に運んだ。次の瞬間、目を見開き

「甘くて美味しいです！ しつとり滑らかで！」

「だろ？ フライングパイのは芋から拘ウつてるからな！」

アレツタの言葉で気をよくしたのか、フライングパイ店長は、更に笑う。

スイートポテト、洋食のねこやでは秋から年末までの期間限定で販売されるもので、一部の常連からは一年通して出してくれ。とよく頼

まれる物だ。今から約6年前から販売開始して以来、人気商品で売り切れることも時々ある程だ。

「今年も、これをよく頼む人来るんじゃないかねえの？」

「多分、今日辺り来るだろう」

フライングパイプー店長からの問い掛けに、店長は長年の感覚から答えた。

場所は変わり、南大陸のある場所。

「……今日辺りか」

自宅の執務室で聖典を読んでいた男性は、思い出したように呟いてから立ち上がった。彼は、金の神に仕える高位の神官、アントニオだ。アントニオは自身の部屋から出ると、居間に居た妻子に

「少し修行に出てくる。夜までには戻る」

と告げると、家を出て修行場所に向かった。長年修行場所として通っていたのは、普通の人間では登るのが不可能だろう断崖絶壁だった。垂直に聳え立つ、高い山肌。遙か先は雲に隠れており、更に言えば空気も薄い。

恐らくは、魔族や半魔族でも登るのはかなりの修練を積まないと登れないだろう。

アントニオは上着を脱ぐと、それを腰に巻いてから手を組み祈り始めた。そうして、数十秒後

「ふっー」

と気合いの声を漏らすと、背中に金色の一对の翼が現れた。アントニオはその翼の調子確かめるために、何回か羽ばたかせた。そして、自分の思い通りに動くのを確認すると、キツと遙か上空を睨み付けて

「……はっ!!」

と気合いと共に、一気に上昇を開始した。空気を切り裂き進むアントニオ。最早慣れたもので、ドンドンと高度を上げていく。暫く飛んでいると、目的地が見えた。

切り立った断崖絶壁の頂上、その一ヶ所が丁度一人が立てる分だけ突き出していて、そこにそのドアはあった。

約6年前から出るようになった、黒いドア。洋食のねこやのドアだ。数年前に出会ったあるトレジャーハンター曰く、世界中に増えているドアらしく、南大陸ではまだまだ珍しいらしい。

アントニオはそこに着地すると、翼を消してから上着を着て

「有るといいが……」

と呟きながら、入店した。

「いらっしやいませ！・洋食のねこやにようこそ！」

「む……」

アントニオは出迎えたアレツタを見て、固まった。アレツタの両側頭部にある半魔族の証たる羊を彷彿させる角。アレツタが働き始めたのは、去年の冬の始まり辺りだったが、その時期アントニオは住んでる村でのトラブルや神官として忙しかったので、泣く泣く来店出来なかったのだ。

高位の神官としたら、何らかの対処を考えないといけないが、ここは異世界食堂。あらゆる面で色々違うし、更に言えば店長達は中立的立ち位置で差別等もしない。

ならば、それに従うのが道理である。

アントニオは近くの席に座り

「すまんが、スイートポテトを五個とミルクを」

「はい、わかりました！」

アントニオの注文を受けたアレツタは、キッチンに向かい、アントニオは店内を見回した。以前と変わらぬ顔ぶれも居れば、新しい顔も何人が居る。

そしてアントニオは、異世界食堂に満ちる気配を感じて

「……相も変わらず、赤の神は来ているようだな」

と呟き、そして見つけた。

「まさか……黒の神……なのか？」

アントニオが見ていたのは、ウエイトレスとして働いているクロだった。

「それにしては、誰も……」

アントニオは店内をグルリと見回して、誰も異常を訴えている人物

が居ないことに首を傾げた。

アントニオが信奉する金の神たる金龍は雷と空を司り、異世界食堂によく来る赤の神は炎と火山という風にそれぞれが司り象徴するのがある。

そして、クロこと黒の神が司るのは死と月であり、更に言えばクロからは常に死の魔力が漏れているのだ。

昔はそれが理由で一つの街が一夜で壊滅したということすらあった。

だが、異世界食堂に居る客や店員は誰も不調そうではない。

(一体、どういうことだ……)

とアントニオが考えていると、早希が現れ

「お待たせしました、スイートポテトとミルクです」

とアントニオの前に、スイートポテトが乗せられた皿とミルクが注がれたカップを置いた。

「では、ぐゅっくり」

アントニオはスイートポテトが運ばれたことで、思考を中断。スイートポテトに視線を向けた。

「ふむ……」

アントニオは一つを手に取り、確認してから口に運んだ。その直後から、口に広がる濃厚な甘みと風味。

(間違いなく、この風味はサツマイモだ……)

クマールはアントニオが住む南大陸では一般的な野菜の一つで、南大陸では全域で作られている。

(だが、味が全然違う……これは、何が理由なのか……土か？ それとも、栽培法か……)

実はアントニオの家でも、妻が庭で野菜を栽培しており、その一つがクマールが作られている。しかし、その味が全然違った。

食べるとパサパサしていて、味も薄い。

以前から時々農家と相談し色々やってきましたが、中々に良くならな
い。

(まだまだ、頑張りが必要か……)

次はどうしようか、と考えながらもアントニオはミルクを飲んだ。

(このミルクも、私を知るのと違う……流石は、異世界食堂か……)

アントニオがよく飲むミルクは、山羊のもので少々味が淡泊だ。だが異世界食堂で提供される牛乳^{ミルク}は、味が濃厚だ。

(こちらにも、酪農家と色々と相談せねば……いや、今はスイートポテトを楽しむことに集中しよう)

アントニオはその博識さから、農家や酪農家から相談されることが多々あり、少しずつ地元の畜産や農家の質を向上させてきている。

しかしアントニオは、その思考を隅に追いやるとスイートポテトを堪能することにした。

その後アントニオは、五個目を食べ終わると再度スイートポテトとミルクを注文。

それを食べ終わると帰宅し、新たな本を注文するために羊皮紙に書き出すのだった。

54 皿目 炊き込みご飯

「今年も、これの季節か……」

「ですね……いい脂がノってそうですよ」

そう語りながら二人が見ているのは、昔馴染みの魚屋が卸してくれた旬の秋鮭だった。最近では外国産や養殖物が出回ってきたが、やはり天然物には叶わない。脂のノリや甘味が美味しいのだ。

「さて……どうするか……」

と店長が腕組みしていると、明久が思い出したように

「そういえば、店長。いいお米も入ったじゃないですか」

「……となると、アレか」

「アレですね」

二人は短く会話すると、頷きあってから調理を始めた。鮭を解体し、身を解し、茸を一口サイズに切ったら、磨いでおいた米を入れた容器に鮭の身と茸を入れたら出汁と醤油。水を入れて、炊き始めた。

アレツタ達が来たのは、それから少しした後だった。

「おはようございますー！」

「おはようございます」

（おはようございます）

と三者三様の挨拶。そして最初に気づいたのは、見習いとは言えども料理人の早希だった。

「この匂い……炊き込みご飯ですか？」

「炊き込み……ご飯……？」

早希の告げた料理名を聞いて、アレツタは首を傾げた。すると明久が

「まあ、食べてからのお楽しみってね……」

と楽しそうに告げた。

「というわけでだ、向こうで待っていてくれ」

そう言われた三人は、着替えてから休憩フロアで待った。それから、十数分後。

「はい、お待たせ」

「これが、今日の朝食だよ」

そう言つて店長と明久が持つてきたのは、茶色いご飯と卵料理が乗せられたお盆を持つてきた。

「これが……炊き込みご飯ですか？」

「そう。具材は、鮭と椎茸だよ」

アレツタが不思議そうに炊き込みご飯を見てみると、席に座りながら明久が軽く説明した。

「そんじゃ、いただきます」

店長の言葉の後に、各々で言つてから食べ始めた。

（これ……深い味がする。美味しい）

「お、クロさんにも好評で何よりだよ」

普段はチキンカレーしか食べないクロだが、味に対する評価はかなり正確だ。そのクロが評したということは、味は大丈夫だろう。すると、遅れて早希とアレツタが

「この鮭も、脂がノっているのに、全然くどくないです……身も簡単に解れて……美味しいです」

「ふわあ……美味しい魚つて、しょっぱくしなくても、美味しいんですね……それに、生臭くない……」

と言つた。アレツタが昔住んでいた隠里は、険しい山に作られていて、そのような立地では日々の食事は山菜か狩りで捕獲したイノシシが主食で、魚はごく稀に迷った行商人から買うか、時おり近くの町に降りて山菜やイノシシの皮や牙を売つて得た資金で買うのだが、そこまで長距離運ぶ前提となるとその殆んどが塩漬けされたものである。最近では魔法が掛けられた箱で簡単には腐らないようにされて運ばれることもあるが、そちらはかなり高額で、買えるのは貴族位になる。

だから、アレツタが知つているのはかなり強く塩漬けされた魚だけで、しかも売れ残りの生臭いものばかりになる。

「あー、塩漬けされたのはねえ……塩を水で洗い流してもしょっぱいからねえ……ああいうのは、サラダに使うか、薄い味付けの料理の味の付けたしに使うか……まあ、腕が問われるね」

アレツタの話聞いた明久は、塩漬けされた魚を思い出して、少し遠い目をしていた。

「それに、この椎茸も良い出汁が出てますね……」

「椎茸は、軽く切れ込みを入れるのがポイントだ。そうすれば、良い出汁だけでなく、椎茸の食感も楽しめる」

「なるほど……」

早希は店長からの教えを心のメモ帳に書くと、最後の一口を口に運び

「お代わりをよそいに行くけど、アレツタちゃんはお代わりは？」

「あ、お願いします！」

アレツタからお茶碗を受け取り、炊飯器を開けた。その炊飯器を見て、アレツタが

「あんな便利な道具まで有るんですね……アレに入れば、ご飯が美味しく炊けるなんて……」

と少し驚いていた。アレツタ達の世界には、電気炊飯器など無い。ご飯を炊く時は、大きな石窯にお鍋を乗せて、常に火加減を見ながら炊く必要があるのだ。

「まあな。しかも、最近は更に便利になってきてなあ……最新のだと、あれ一つでシチューや煮物。中にはパンが焼けるのもあるからな」

「本当、料理人泣かせになってきましたよね……」

明久と店長は、以前に商店街の福引きの景品に出された多目的炊飯器を思い出した。それを見た時は、凄く驚いた記憶がある。

「あ、卵焼きも今回の炊き込みご飯に合うように作ったから、食べてみて」

「はい！……あ、だし巻き卵ですね！ 凄く美味しいです！」

明久に言われ、アレツタはだし巻き卵を食べて目を輝かせた。アレツタとしては甘い卵の方が好きだが、時々食べるだし巻き卵も好きだった。

優しい出汁の風味が口の中に広がり、それが店長と明久の性格を表しているように感じたからだ。

それから、数十分後。

「……いや、まさか……五合が無くなるとわ……」

「あはは……朝から結構食べましたね……」

店長と明久は、空になった電気炊飯器を見ていた。

流石に多いから残って、夜ご飯かな。と思っていた炊き込みご飯が、一時間もしない間に無くなっていった。

明久と店長も結構食べたとは自覚していたが、まさか無くなるとは予想していなかった。

「まあ、その分頑張るか」

「ですね。今日も一日頑張りましょう！」

その炊飯器を仕舞い、二人は仕込んでいた料理を見るためにキッチンに向かった。

55 皿目 モンブランプリン

その日、公国は揺れた。ある辺境の砦。はっきり言うと、異世界食堂の常連になったハインリヒの砦から、モスマンの大量発生並びに大規模侵攻が知らされた。

モスマンは、強力な毒を持つ魔物で、世界中でもトップランクの位置付けで要討伐対象に認定されている。

特にハインリヒは、異世界食堂を知る切っ掛けになったモスマンの大量発生の際に、実際にモスマンの怖さは知っている。

だからハインリヒは、砦に常駐していた部下の騎士達には絶対に近接戦闘をしないように指示を出し、弓矢による攻撃に限定。更に魔法を使える者に対して、風を起こす魔法を使うように指示し、鱗粉攻撃を来させないようにした。

しかし、余りにもその数が多く、ハインリヒの砦に居る戦力だけでは撃滅は不可能と判断。

故にハインリヒは、かつての自分と同じように部下の一人を走らせた。

一番若く、まだ将来性がある若者を。

「最悪の場合……死ぬのは、私達のような老兵ばかりで十分だ……最後に、彼女にこれを渡したかったがな……」

そう言いながらハインリヒは、机の上に置かれた紙の箱を見た。

動きがあつたのは、それから数時間後だった。

公国は、報せを受け取ると即座に動いた。実を言えば、ハインリヒはある港町でそれなりに有名な家の出で、慕う者が多数居た。

そう言った者達で、即座に部隊を編制。そこに、凄腕の二人の魔法使いが同行し、転移魔法を使い、ハインリヒの砦に直接移動したのだ。そこからは、あつという間だった。

その凄腕魔法使い二名により、モスマンの群れの大半が撃滅され、残りは砦と援軍の騎士達により撃滅された。

中には毒に感染した者も居たが、魔法で治療を施された。

まさに、電光石火。予想外の速度で、モスマンは討伐され、後は巢を見つけて燃やすだけになった。

そして、駆けつけた二人の凄腕魔法使い。

一人は、宮廷魔法使い、ロレッタ・フェイストン。

若い女性ながら、宮廷魔法使いに名を連ねており、その実力は折り紙つき。

しかし、もう一人が問題だった。

ロレッタの前で、極力その姿を隠しているもう一人の凄腕魔法使い。全身をエルフ製の強力な防御性能を有するローブで包み込み、耳を隠すために大きめの帽子を目深に被っている。

その正体は、王族に名を連ねるヴィクトリアである。

今は偽名で、プリンと名乗っている。実はロレッタとヴィクトリアは幼なじみで、乳兄弟と言える間柄である。

そしてロレッタは、今回の戦闘に関しては納得していなかった。

それは、今回の戦闘の功績の大部分が、ロレッタに与えられること。(それでいいの？ ヴィクトリア……)

そうは思うが、ヴィクトリアの発案だからと言われたら納得するしかないのが現実だった。

実は公国という国は、旧帝国の崩壊後に逃げ延びた人々が興した国なのである。

そういった過去から、ハーフエルフは憎しみの対象になっているのだ。

ヴィクトリア・サマナーク、れつきとした人間の両親から産まれた^{チェンジリング}取り換え子

明久達の世界で言えば、隔世遺伝になるだろうか？

かつての旧帝国では、ハーフエルフは珍しくもなく、更に言えばエルフ自体も何人も居た。

恐らくだが、どちらかの遠い祖先にエルフが居たのだろう。そして旧帝国は、当時最高権限者だった皇帝と宰相が死霊王になったことで壊滅し、公国を興すまで逃げ延びた人々は苦勞し、惨めな思いをした。それが、今のハーフエルフに対する憎悪の根源になっている。だか

ら王族も、ヴィクトリアに政治に関しては極力関わらせないようにし、城の端の塔を丸々与えて、好きなように魔法の研究をさせているのだ。

その結果、ヴィクトリアは新たな魔法だけでなく、魔道具も新たに開発。少しずつではあるが、公国に広まってきている。

そんなヴィクトリアとロレッタが再会したのは、約20年振りになる。

その20年の間に、ロレッタは結婚し、子供まで産まれた。ヴィクトリアの見た目は20年前と一切変わらず、若いまま。見た目からだと、まだ子供にすら見える。

そこがどうにも、嫌な考えに繋がりがよくなる。

(はあ……私も、年を取ったってことかしら……)

ロレッタは気付かれないようにため息を吐いてから、ヴィクトリアに目を向けて

「ヴィ……プリンさん、戦闘は終わったようよ」

と告げた。

「ヴィクトリアでいいわ……貴女は、昔からそう呼んでくれてたでしょ？ それに、今この場には私達しか居ないわ」

今二人が居るのは、戦域が見渡せるようにと尖塔の物見部屋に居る。そこからモスマンを倒すために、広域凍結魔法を発動させたのだ。

「そうだけど、他の誰かに聞かれたら……」

「大丈夫……この基地司令とは顔見知り……そういった対策はしてくれる」

「顔見知り？」

言っではなんだが、ヴィクトリアは中々塔から出てこない。新たな発明に関する報告は、使い魔に持たせた報告書で済まし、魔道具の場合は使い魔によって報せて、現物を回収させている。

そんなヴィクトリアが、城の外部に顔見知りが居るといのが信じられなかった。

そこに、ドアが開き

「いや、助かりました。ロレッツタ殿、ヴィクトリア様」

とハインリヒが現れた。ハインリヒがヴィクトリアの名前を言った時、ロレッツタは思わず

「ちよっ!?!」

と言葉を漏らしてしまった。すると、ハインリヒは

「ご安心を。今近くには、兵は一人も居ません。人払いと、モスマンの巢の搜索に回しました」

と伝えた。それを聞いたヴィクトリアは、帽子を脱ぎ

「感謝します、ハインリヒ殿。間に合って何よりだ……」

「は、予想外に早く来て、こちら驚きました。まさか、転移魔法とは……話には聞いておりましたが……」

転移魔法

実はアルトリウスが考案して使っていた魔法だが、余りにも複雑な魔法で、アルトリウス以外では使えなかった。それをなんとか簡易化し、使えるようにしたのがヴィクトリアだった。

(確かに、それを見れたのは私にとっても嬉しかったわ……見たかったし)

「しかし、まさかヴィクトリア様が直接来るとは……」

「ここは、公国にとっても大事な要衝……国境線かつ対魔物の最前線……しかも、危険な魔物たるモスマンの大群となったら、対処出きるのはたかが知れる……引退し教育に回ってる師匠は除外……となると、私しか居なかっただけ……ロレッツタは、今の宮廷魔法使いな中で私に対する偏見も無いから選ばれた……」

「なるほど……」

ヴィクトリアの説明に、ハインリヒは納得した表情で頷いた。その後、砦の被害等をヴィクトリアに報告すると、ハインリヒは

「ヴィクトリア様……こちらを差し上げます」

と紙の箱をヴィクトリアに差し出した。

「これは……」

「ねこやにて入手しました、季節品にございます……どうぞ、お召し上がりください」

ヴィクトリアが受け取ると、ハインリヒはそう伝えながら頭を下げた。その際に、ロレッタはハインリヒの顔が赤いことに気付いた。

(あらあら……ヴィクトリアも隅に置けないわね……)

その後、一泊することになった部屋でロレッタとヴィクトリアは紙の箱からそれを取り出した。

「なにこれ……」

「下のはプリンみたいだけど……上のクリームは多分、モンブラン……」

「モンブラン？　　というか、まさか……貴女のプリンって名前って……これから？」

ロレッタが呆れていると、ヴィクトリアがロレッタに透明なスプーンを差し出した。

(これは、匙？　透明だから水晶や硝子かと思っただけど……それなら、もっと冷たいはず……)

魔法使いの性なのか、プラスチック製のスプーンを見たロレッタは興味深そうに見てから

「ヴィクトリア、これはなんの素材で出来てるの？」

「確か……前に師匠が店主に聞いたら、プラスチックって言ってた……」

(知らない素材だわ……聞いたこともない……)

とロレッタがスプーンを監察している間に、ヴィクトリアは食べ始めた。その表情から、美味しいことが分かる。ロレッタも仕方ないと腹を括り、スプーンでまず上のクリームを掬って、口に運んだ。

「この風味……これは、マローネ^栗ね……」

クリームの甘さの中に感じる、独特の風味にロレッタは使われてる材料に気付いた。しかし、問題(ロレッタからしたら)はその下のプリンだった。

黄色と焦げ茶色の食べ物。黄色はまだ分かるが、焦げ茶色のほうはどうにも食べる気が湧かない。しかし、ヴィクトリアは問題なく食べている。

だからロレッタも、意を決してプリンを口に運んだ。

(あ、美味しい……甘いのに、くどくない……)

ロレッタが知っている甘味は、かなり甘さがしつこいものだ。しかし、今食べているプリンは確かに甘い甘さがそれほどしつこくない。更には、焦げ茶色のタレ。カラメルソースがほんのり苦いが甘く、それが甘さを際立たせる。

(なるほど……ヴィクトリアが気に入るわけね……この子、昔から子供っぽい所は変わってないのね……)

ロレッタは20年振りに再会したヴィクトリアが、見た目だけでなく、内面が然程変わっていないことを察して、目を細めた。

そうして、モンブランプリンを食べ終わると、ロレッタは

「ねえ、ヴィクトリア……」

「なに？」

「彼のこと、どう思ってるの？」

ロレッタのその質問に、ヴィクトリアは固まった。顔は隠しているが、その長い耳が赤くなっている。

それを見たロレッタは、くすりと笑い

「なるほどね」

と言葉を漏らしたのだった。

56 皿目 ポトフ

その日、雨の中を一組の父娘が誰が建てたのか分からぬ小屋に駆け込み、一息吐いた。

「よし、ここなら大丈夫そうだ……エリー、もう大丈夫だよ」

「ほんとう？ もう、大丈夫？」

父たるアーノルドの話聞いて、背負っていた娘。エリーは寒さで体を震わせながら問い掛けてきた。アーノルドはエリーをゆつくりと下ろし

「ああ、大丈夫だ。ここなら、雨と魔物の心配は無さそうだ……今のうちに、乾いてる服に着替えよう」

アーノルドはそう言つて、長年使ってきた丈夫な革靴から娘と自分の乾いてる服を取り出した。

こうなったのは、今から数時間前になる。昼頃から雨が降り始め、当初は水に強い魔物の革で作った雨合羽で十分に行動出来ていた。しかし、少しずつ強くなり始め、しかも運が悪いことに魔物に追い掛けられ始めた。その時からアーノルドは、山登りに不安があつた娘のエリーを背負い、山道を走っていた。

最早暗くなり諦めかけていた時、アーノルドの視界に一軒の大きな洋館が見えた。

それを見たアーノルドは、これ幸いにとその洋館に入った。もし人が居たら、一晩だけ泊めてもらおうと決めて。

(……人の気配は無い……それに、この館が放棄されてから数年は経ってるな……埃が凄い……だが、一晩位なら問題無さそうだな)

手早く着替えたアーノルドは、軽く周囲を見回してからそう判断した。窓の外は激しく雨が窓を叩き、時々魔物の遠吠えが聞こえる。

(ドアには、先ほど木材を挿したから簡単には開かない筈だが……)

今後どうしようか考えていると、エリーが

「お父さん、きがえたよ」

と言つて、裾を引っ張つてきた。振り向いてみれば、確かに着替え

終わっていた。それを見たアーノルドは、しやがみ

「よし、じゃあこの館を探検しようか」

と努めて明るく言った。はつきり言っただけ、今の状況はかなり悪い。大雨により体は冷えていて、体を暖めたいところだが、焚き火は出来ない。

今のアーノルドに出きるのは、一人娘のエリーを不安にさせないことだった。そんな自分に無力を感じながら、アーノルドはエリーの手を引きながら館の探索を始めた。

(やはり、この館は貴族が建てたものだ……しかし、何の為に……) アーノルドはそう推察しながら、慎重に歩を進めた。せめて、エリーだけは助けようと心に決めて、腰に装備していた錠の紐を緩めた。

その時、エリーがアーノルドの服の袖を引いて

「お父さん」

とあるドアを指差した。黒を基調にした、高級感溢れるドアだ。

「じゃあ最初は、ここからだな」

「うん」

エリーが頷いたのを見たアーノルドは、ドアノブを掴み、押した。その直後、カウベルの音が鳴り、視界が一気に明るくなった。予想外の明るさに、アーノルドとエリーは思わず目を腕で隠した。すると

「おっと、お客様か」

「本来はもう営業時間外なんだが……いらっしやいませ」

と二人の男の声が聞こえた。ようやく視界が快復したアーノルドは、五人の男女が居ることに気付いた。敵か味方が分からず、アーノルドは思わず錠に手を伸ばした。

すると、早希が

「あ、濡れてますね。少々お待ちください」

と言って、持っていた箒をアレツタに手渡してから、奥に消えた。少しすると、大きめのタオルを二枚持ってきて

「こちらをお使いください。濡れたままでは、風邪を引いてしまいますから」

とアーノルドとエリーに差し出した。

「ありがとうございます」

「感謝する……」

敵ではないと判断したアーノルドは、受け取ったタオルで体を拭き始めた。エリーの方は、アレツタが手伝い始めた。拭き終わると、店長と明久が

「うーん、どうやら訳ありのようですね……」

「店仕舞いですが、このまま返す訳にもいきませんし……賄い程度になりますか、食べますか？」

とアーノルドに問い掛けてきた。

「……いいのか？」

「はい。それに、そちらの子は空腹のようですし……」

実は先ほどから、小さく腹の虫の音が聞こえている。流石に、子供が空腹なのに無視することなんて出来ない。

「もう食材も大分無いので、大した物は作れませんが……そちらの席に座って、お待ちください」

明久がそう言うと、店長と二人で奥に入っていった。

(こちらにお座りください)

「む、感謝する……」

「はい、これで平気かな？」

「ありがとうございます」

クロとアレツタが席を引いて二人を座らせて、早希が人数分の水を持ってきた。それから、十数分後、

「お待たせしました、ポトフです」

「ポトフ……？」

「いい匂い……」

二人の前に先に置かれたのは、野菜が多めに入ったスープだった。スープ自体はほぼ透明で、少し黄色い印象を受ける。

「いや、大した物じゃなくてすみません」

「ライスとパン、どっちにしますか？」

「私はライスで……エリーは？」

「わたしもライスで」

「承りました」

二人の注文を受けて、炊飯器から皿に御飯をよそい、二人の前に置いた。

「ライスとポトフは、お代わり自由ですので。幾らでも食べてください」

「さて、僕達も一緒に食べますね」

『いただきます』

明久の言葉の後に、全員で言うてから食べ始めた。

そして、ポトフを食べたアーノルドは驚きで目を見開いた。ポトフ自体は、至ってシンプルな煮込み料理だ。

だがアーノルドは、その中に濃厚かつ繊細な旨味を感じた。

（野菜自体が甘い……しかし、香辛料がその甘さを引き立てて、それがコクを生み出している……素晴らしい味わいだ……野菜が中心だが、この豚の腸詰めも、美味しい……作り方だけでなく、素材から違うのか……）

ポトフをある程度食べたアーノルドは、次にライスを口にした。

（このライス、ほのかに甘い……私を知るライスとは、全然違う……）

アーノルドが知るライスは、茶色くボソボソした物で、ライス単体で美味しいと思ったことはなかった。

（確か、異世界食堂と言っていたか……）

異世界食堂と教えられ、最初は疑ったが、周囲を見回して納得した。灯りや調度品が、見たこと無い物ばかりだったからだ。そうこうしている内に食べ終わり、更に店長達の好意でフロアの端に布団を敷いて、寝る場所を用意してもらい、翌朝には朝食まで食べさせてもらった。

「ウチは七日に一度開いてまして、まあ、次は六日後ですが……もし来るのであれば、それを覚えておいてください」

「それと、こちらを。旅人のようですから、おにぎりを用意しました。お食べくださいませ」

「感謝します」

明久から二人分のおにぎりを受け取ったアーノルドは、エリーと一緒に退店し、消えていくドアを見ながら

(なるほど……この館は、このドアを確保するために建てられたんだな……そう考えれば納得できる。それに、恐らくだが他の場所にも、ドアが有るのだろうか……探してみるか)

と結論し、エリーと一緒に雨が止み、青空が見える外に出たのだった。

57 皿目 おでん

その日は、雪が降る日だった。東大陸の東端のある山に、人食い鬼が出るという話があった。しかも、一体だけではなく二体。それも、夫婦という話だった。

更には、その鬼の夫婦が現れるのはよく人が通る山道だった。

その鬼夫婦は、賢かった。山道を見張り、単独か少人数の旅人や行商人を狙い、襲っていた。そうすることで事態が露見するのを遅らせられるからだ。

しかし、気付かれれば冒険者を差し向けられるのが道理。

その鬼夫婦を討伐しようと、数多くの冒険者が向かったが、誰も帰らず、武器だけが見つかるという事態が多発していた。

のだが、ある日を境にその活動がピタリと止んだ。誰かに討たれた、というのが主だった噂だが、確証はなかった。

しかして実際は、異世界食堂の常連となっていた。

「おー寒い寒い……ほれ、早う中さ入れ」

「すまん、アンタ」

鬼夫婦、タツジとオトラは山の中に建っている少し大きめの小屋に入った。その小屋の奥に、異世界食堂に通じるドアがあった。

二人は体に付着していた雪を払い落としてから、ドアを開けた。

「いらっしやいませ！ 洋食のねこやにようこそ！」

そんな二人を、早希が出迎えた。なお初めて出迎えた時は、驚きと恐怖心で固まったのを、早希は今も覚えている。

「おう、嬢ちゃん。何時ものローストチキンを大皿で頼む」

「それと、今日は酒じゃなく、ライスを頼むわ」

「はい、承りました」

二人の注文を受けて、早希はキッチンへと向かった。何時もならばタツジとオトラは、ローストチキンのお供に酒を注文する。だが最近では、少し控えるようになってきたが、その理由は後述する。

「相変わらず、ここは暖つけえな」

「本当に」

直前まで雪の中に居たために、今の二人は体が芯まで冷えきっている。しかしねこやの中は、空調で暖かい空気が満ちているので、少しずつだが体が暖まる。

そうして先ずは水が置かれ、少し待つとローストチキンが大皿で二人の前に置かれた。

それを食べようとしたタツジだが、フとあることを思い出した。それは、来始めてから少しした時に、常連の老魔法使いアルトリスから聞いたこと。『内容にもよるが、鍋料理を鍋ごと持ち帰ることも出来る』

という話だった。最近は山での食糧調達が捗らず、下手すれば食べないことすらある。それを思い出したタツジは、偶々近くを通ったアレツタに

「おう、嬢ちゃん。ちいつと聞きたいことがあるんだがよ」

と声を掛けた。

「はい、どうしました？」

「前に、この店じゃあ金を払えば鍋料理を持って帰ることが出来るって聞いたが、どうなんだ？」

アレツタが振り向くと、タツジはそう問い掛けた。するとアレツタは、僅かに悩んでから

「少々お待ちください。店長さん達に聞いてきます」

と告げてから、キッチンの方向に向かった。

それから少しすると、明久が出てきて

「鍋料理を持ち帰るということですが、内容によりませんが出来ますよ」と答えた。それを聞いたタツジは

「それじゃあ悪いが、ひとつ適当に頼んでもいいですか？ ああ、急ぎじゃねえから、ゆっくりで構わねえよ」

「では、こちらにお任せ。ということで、構いませんか？」

「ああ、俺達は料理はさっぱりだからな。頼むわ」

「分かりました。今から作りますので、少々お時間を頂きますが、ご了承ください」

明久はそう言つて、キッチンに戻った。

(さて、何を作ろうかな……あの人達が居るのは確か、東の方の山だつて話だったな……だったらおでんで、もう一度煮ることを考えて……)

明久はそう考えながら、おでんの調理を始めた。

そして、約一時間後。

「すいません、お待たせしました」

「おう、悪いな」

タツジは銀色のお鍋をクロから受け取り、お金を支払うとオトラと一緒にねこやを後にした。

そして翌日の朝。タツジは、いい匂いで目が覚めた。

「起きたね、アンタ。丁度温まったところさ」

「おう、悪い。腹が大きくなってきたのに」

タツジは急いで起きると、器を用意した。

実はオトラのお腹には、二人の子供が居るのだ。だから最近、お酒は控えるようにしてきたのだ。

「まだ産まれるには、ちいつとばかり掛かるけどね」

「それでも、後少しだ。大事にせんとな」

オトラと変わったタツジは、鍋を少しかき混ぜてから、器によそい始めた。汁は薄いきつね色で、いい匂いが空腹を刺激する。適当によそくと、タツジはオトラの隣に腰掛け

「んじや、食うか」

「んだな」

と二人して食べ始めた。

「見た目は薄そうだが、いい出汁が出てるだな。この料理は！」

「おでんって言うらしいで、アンタ」

最初に汁を一口啜ったタツジは、驚いた。器の底が見えるのに、濃厚な味わいが口いっぱいに広がったからだ。そして最初に口に運んだのは、餅巾着だ。

お揚げで作った巾着もだが、中のお餅も出汁をよく吸っていて、味わい深い。

「このお餅。村で買うやつとは、全然違うな！」

「んだな。こつちの方が柔らかけえ」

二人が知るお餅は、少し茶色く固い。しかしねこやで出されたお餅は、モチモチとして柔らかい。

「こつちの具……肉かと思えば、違うな」

「んだな。豆か？」

二人が食べたのは、がんもどきだ。その名前の由来は、昔がんと呼ばれた鳥の肉を横して作られたらしく、その食感是非常に似ていると言われている。いわゆる、精進料理のひとつだ。次に二人が食べたのは、白く柔らかい、はんぺんだった。

「この白いの、プルプルしてるぞ」

「おお、面白い食感だ！」

今まで食べたことのない食材ばかりで、二人は驚き、楽しみながら鍋の中のおでんを食べていく。そして、半分ほど食べると

「んじゃ、俺は動物を捕まえに行くから、おめえは」

「薪割りでもしてるさ」

二人はそう会話すると、一日を始める。

元人食い鬼の、山で生きる一日を。

58 皿目 年越しそば

年末の午後10時。

全ての業務が終わり、一同はフロアに集まっていた。これから、一年の締めくくりをするために。

「全員、今年一年間お疲れさん」

『お疲れ様でした！』

店長の言葉の後に、明久達の言葉が続いた。先ほど最後の客が帰っていった。

「しかし、この一年は一気に変わったな……」

「ですね……新しい世界に繋がったりしましたね」

店長の言葉に、明久は同意するように頷いた。異世界食堂と呼ばれるねこやだが、最近は一つの世界だけでなく、次々と新たな世界に繋がるようになってきた。

それを受けて店長と明久は、更なる新たなメニューの開発に力を入れている。

「さてと……年末と言ったら」

「アレ、ですね」

二人はそう会話すると、キッチンに向かった。これから、一年最後の賄いを作るのだ。そして、年末は決まっている。それは

「はい、お待たせ」

「年越しそばだ」

二人がキッチンに入って、数十分後。二人は計5つの丼を持ってフロアに来た。

「年越しそば？」

「一年の締め食べる料理で、来年も健やかに過ごせますようにって意味が有るんだよ」

アレツタが首を掲げると、早希が説明した。

蕎麦は同じ商店街の老舗の蕎麦屋からの貰い物だが、出汁と具は二人で作った物だ。

出汁は鰹と昆布の合わせ出汁。具は海老の天ぷらと特製のタレに浸したお揚げだ。

それを全員の前に置き

「んじゃ、来年も頑張っていこうってのと」

「今年一年間、お疲れ様でした」

『いただきます！』

クロが箸に四苦八苦しただが、全員で蕎麦を食べ始めた。すると、アレツタが

「このお蕎麦というのは、独特な風味がするんですね」と少し不思議そうにしていた。

「前に食べたラーメンというのに似てますが、色も味も全然違います」「あー、うん。あつちには小麦粉。こっちは、そば粉を使って作られる。材料から違うけど、そば粉は独特な風味が特徴と言えるね」

アレツタの疑問に、明久が説明した。

小麦粉は黄色主体になるが、そば粉は灰色主体だ。そこから、全然違うだろう。

《このお揚げというのは、甘いのにしょっぱい。けど、美味しい》
「それはな、ウチ特製のタレに浸けておいたお揚げだ。好評で何よりだ」

店長はそう言いながら、未だに箸の扱いに苦労してるクロに、箸の使い方を教えている。早希は早希で、海老の天ぷらを食べて

「……出汁の基本は、鰹と昆布だけど……他に何か隠し味が……」

と出汁が気になるようで、何やらブツブツと呟いている。そして、そんな早希の呟きを聞いた明久は
(さて、早希ちゃんは、干しシイタケと乾燥したホタテ貝柱に気付くかな?)

と観察していた。実は今回の出汁に関しては、店長から明久に一任されており、早希の料理人への試験の一つのような扱いになっていた。それはさておき、蕎麦を食べ終えると

「さて、繰り返しになるが、これで今年一年は終わりだ」

「また来年も、皆無事に集まって頑張らしましょう」

と店長と明久の言葉があり、一年最後のねごやは幕を下ろしたのであつた。

59 皿目 アサリの酒蒸し

「……ん……店長、これでどうでしょうか？」

「どれどれ……ん、美味い。これなら、大丈夫だ。上げよう」

明久が小さな皿を店長に手渡すと、店長はその皿の汁を飲んで、頷いた。それを聞いた明久は

「アレツタちゃん！ これを、二階のレオンハートさんに届けてきて！」

「はい！ 分かりました！」

明久の指示を受けて、アレツタは料理を乗せたカートを押してエレベーターに入った。二階のベーカリーきむらの隣の店。レオンハートに届けに行った。レオンハートは夕方から開くおしゃれなバーで、マスターは夕方から深夜まで開く前の腹ごしらえとして、夕方に料理の注文をしてくる。注文内容はその度が変わるが、大抵はお酒に合う料理だ。そして、ねこやで出されるお酒は、そのマスターが選んだものだ。二店で同時に購入するので、お得意様価格で買えるので、安い値段で提供出来るのだ。

すると店長は、明久が作った料理を見て

「ふむ……これを、酒のつまみのオススメにするか」

「あ、これなら、あのドワーフの人達が喜びそうですね」

明久の言葉に、店長は頷いた。このねこやに来る客の中でも、特に酒好きな客達だ。酒に合う料理が有るなら、よく注文する。

そう予想した店長は、アルトリウスが書いたメニューの中からそれをピックアップし、黒板に書いた。

この1ヶ月程来てない、あの二人のドワーフを思い出しながら。それから、約二時間後。

「まったく！ 寒くて敵わんわい！」

「ほれ、もう少しじゃ！ 頑張らんかい！」

雪が深く積もる山を、ガルドとギレムは登っていた。彼等が住む地方は、豪雪地帯と呼べる雪山で、この1ヶ月の間は特に吹雪が酷く、彼

等は泣く泣くねこやに来るのを断念していた。

いくら頑丈さが取り柄のドワーフだろうが、吹雪の中での登山はあまりにもリスキーだった。

そうして、今日。奇跡的に快晴となり、彼等はねこやに向かうために深い雪の中を進んでいた。武器としても使えるシャベルを振り回し、道を掘り進めながら。

「火の神から危うく空の神に鞍替えしようかと思っただわい」

「気持ちに分かるわい……儂も同じじゃったわい」

二人して火を扱う仕事のために、赤の神を信仰している。しかし、こうも長い間吹雪が続けば、天候を司る空の神に鞍替えしようかと思っってしまったのだ。

「実に、20日は経ったかの……今日は晴れたから、行けなかつたら悔やみきれんわい！」

「分かったから、シャベルを振り回せ！ 雪を掻き分けるんじゃ!!」

山に入って、早数時間。二人はシャベルを振り回し続け、漸くあの山小屋に到着した。以前とは違い、木製から石小屋になっている。木製だったら、雪の重みで潰れていただろう。二人で建て直して、正解だった。

「一緒に建て替えて、正解じゃったわい」

「あんな家、長持ちしないと分かった時は、慌てたぞ！ 急いで近くの岩場から石を調達したり……お前も火を使うんじゃから、木材の目利き位出来るようにならんかい！」

ガルドの言葉に、ギレムは後頭部を掻いた。確かにギレムは建築は門外漢な為に、よく見れば隙間があるわ、釘の長さが不揃いだわ、木材も強度が低いのだったりと、まあ適当だった。それを知ったガルドは、建築も出来たので、急いで石小屋への改築を始めた。ギレムを徹底的に使い走りにして材料を運ばせ、設計図通りに置かせた。その甲斐あって、頑丈な石小屋が完成。今も、高さ2mの雪の重さに耐えている。

そして、目的のねこやのドアがある場所。そこは、ドワーフでも諦めかける金属。超硬金属アダマンダイトを使って作ったドアを使って封鎖されている。

る。

鍵も特別製の物を使用し、二人が持つ鍵でしか開けられないようにした。二人がよほどのうっかりをしない限り、使われる可能性は無いだろう。

そして二人は、着ていた熊の毛皮のコートを脱ぎ、コート掛けに掛けると、そのドアを開けて、中に入ってドアを閉めた。

そして、目的のねこやのドアを見ると、笑みを浮かべてドアを開け「おう！ 来たぞ！」

「とりあえず、ビールを大ジョッキで3杯じゃ！」

と声を大にして、注文した。

そして手近な席に座ると、早速置かれたビールを二杯速攻で飲み干し、三杯目を少しずつ飲みながら

「さて、今日は寒いからのう……何を飲むか……」

「じゃったら、アツカンが良さそうじゃな。量が少ないのが難点じゃが……さて、嬢ちゃん！ 今日の酒のつまみはなんじゃ？」

ギレムの問いかけに、早希は

「今日は、アサリの酒蒸しですよ」

と説明した。

「ほう！ 初めて聞くわい！」

「そんじゃあ、そのアサリのサカムシというやつを大皿で二つとアツカンを二本頼むわ！」

「はい、分かりました」

注文を受けて、早希はキッチンに向かった。そして、少しすると

「お待たせしました！ 熱燗とアサリの酒蒸しです！ 此方の醤油を使っても、美味しいですよ」

とアレツタが、料理を運んできた。

「ほお……これが、アサリのサカムシか……」

「随分と小さい貝じゃが……」

二人はアサリの小ささに目を引かれたようだが、すぐに鼻に入ってくる酒の匂いに気付き

「これは、随分と酒の匂いがするわい」

「しかし、酒精は見えん……風味付け用かの？」

二人はそう言いながら、アサリを一つずつ取り、中の身を取り出して、口に運んだ。その直後、目を見開き

「これは、旨い！ 確かに、酒によう合うわい!!」

「そうじゃな!! しかし、量が少ないのが難点じゃ！ 嬢ちゃん、どんどん持ってきてくれ！」

と興奮しながら、一皿目を完食した。そして、二皿目を食べようとした時

「そういえば、このシヨウユとやらを使うと美味しいと言っておったな」

とガルドは、シヨウユを取り、皿全体にくるりと円を描くように掛けた。

「ふむ……中々香ばしい匂いじゃが……」

「問題は味じゃが……」

先ほどまでは、二人好みの酒の風味が口の中に広がった。次はどうなのか。二人は期待しながら、アサリの身を口に運んだ。次の瞬間、酒の風味と磯の風味が見事に調和して口の中に広がった。

「ほおー！ こりゃ美味いわい！」

「本当じゃわい！ おおい！ アツカンの追加を頼むわい！」

「はあい！ 分かりました！」

味に満足した二人は、更に追加注文。その結果、閉店間際まで飲み食いしたのであった。

新しい仲間

朝5時。

「ああ……お腹空いた……」

そう呟くのは、大胆な改造が施されて脇が露出している巫女服を着た少女。博麗^{はくれいれいむ}霊夢である。彼女が居るのは、幻想郷の博麗神社だ。

幻想郷というのは、世界で忘れられし者達。妖怪、吸血鬼、魔法使いといった、所謂オカルトの存在が、最後に流れ着く場所である。

そして彼女が住む神社は、その幻想郷の大事な要の場所であり、彼女の一族は代々その幻想郷の治安を維持する役目を担ってきた。

霊夢も15という若さだが、その実力は幻想郷でも随一であり、その役目を十分に果たしていた。

しかし、彼女は貧乏だった。博麗神社は山の上の方にあり、更にはその周囲は妖怪が住む森のために、中々人が来なく、それに比例するように賽銭も中々入らない。

入った賽銭も、神社が壊れた際の修理費の為に貯金している。彼女はこの年齢で、現実主義者^{リアリスト}であった。

「……お腹空き過ぎて、一切やる気が起きない……」

霊夢はそう言いながら、自室の畳の上をゴロゴロと転がった。先も言った通り、霊夢は賽銭のほとんどを貯金に回しているために、中々人里で買える物も出来ず、二三日何も食べないことなどザラだ。

だから霊夢は、その年齢の割に小柄だし痩せている。その巫女服の脇からあばら骨が浮いて見える程だ。

そして、自室で転がっていると、ある感覚を覚えた。

「……なんか、敷地内に変な力の流れが……」

流石に自宅の敷地内に異変を感じたとなれば、調べない訳にはいかない。そう判断した霊夢は、起き上がると机の引き出しから札を取り出し、更に何時も戦闘で使う御幣を持って自室から出た。

それを見つけたのは、神社の敷地の外れの物置の中だった。

物置の中には、彼女が普段使う箒や塵取りの他に、昔は祭事の時に

使っていたらしい道具が納められているのだが、その物置の壁際に、黒いドアが有った。

「……なんで、こんな場所にドアが……」

霊夢はドアを調べると、文字に気付き

「洋食のねこや……レストランのドア？」

首を傾げながら、ドアの取っ手を握って開いた。

「おっと、今日一番のお客さんかな？」

「いらっしやいませ……って、巫女服？」

そんな霊夢を出迎えたのは、店長と明久だった。どうやら掃除中だったらしく、モップを持っている。

「……ここ、外の世界？」

「えつと……その外の世界って、どういう意味か分からないけど……」

「ここは通称、異世界食堂って呼ばれる所だね……恐らく、そちらからしたら異世界の筈なんだ」

霊夢の問いかけに、明久と店長が答えた。その時、可愛らしい腹の虫が聞こえた。流石に恥ずかしかったらしく、霊夢は顔を赤くした。それを聞いた店長と明久は顔を見合わせてから

「なんなら、飯を食ってくか？」

「僕達もまだだから、一緒にどうかな？」

「けど私……お金無いわよ……？」

二人の言葉に、霊夢は思わずそう返した。

「大丈夫だよ、ツケでも」

「けど私……収入が不安定なのよ……」

「ん、どういうこと？」

霊夢の言葉が気になった明久が首を傾げると、霊夢は自分のことを話し始めた。話し終わると、着替え終わった早希が

「つまり、霊夢ちゃんはその年で巫女さんでもあり、事件を解決する警察みたいなのもやってるんだ……」

と感心していた。すると、霊夢は

「ただ、賽銭は中々入らないし異変事態も起きて月一位……報酬は貰えるけど、大部分は貯金に回して……日々に使えるのは微々たる金

額……結果として、1日2日位は食べない日があるのよ」

と説明した。しかし内心では

(……私、なんでこんなこと喋ってるのかしら……)

と首を傾げていた。先にも書いたが、霊夢は現実主義者だ。そんな話をして、変わらないと思っていた。

すると、明久が

「霊夢ちゃんは、本当に偉いね」

と言いながら、霊夢の頭を撫でた。撫でられること事態は、時々ある。保護者代理のような妖怪や一部の身長の高い知り合いから撫でられることが度々あった。しかしそれは、やはり知り合い故に気楽さがあった。

しかし明久のそれは、純粹な優しさからだった。

(……こんな気持ちになるの……もしかして、初めてじゃないかしら……)

霊夢はそう思いながら、明久に撫でられていた。そして少しすると、明久は

「店長……彼女を、ねこやで雇いませんか？」

霊夢からしたら、予想外の提案をした。

「はい!？」

「ん？ まあ、彼女が良ければ俺は構わないが……」

「軽い!？」

店長の気軽さに、霊夢は驚いた。すると明久は

「さつき触ってわかったけど、霊夢ちゃんかなり痩せてて心配で……」

実は握手した際に、明久は霊夢のあまりの細さに驚いたのだ。

「ふむ……なるほどな……確かに、それは心配になるか……」

「だけど……」

「いいんじゃないですか？ 三人でも、回らないことがありますし……」

明久の案に賛成したのは、早希であった。実は早希は、特別営業の時はバイトリーターみたいなたち位置を任せているのだ。一番最初はアレツタだが、アレツタは性格的に指示を出すのに向いていない。

年齢的にはクロだが、クロは一人で居た時間が余りに長かったことから辞退。結果、消去法で早希になった。

「けど……」

「働いてくれるなら、お給料だけじゃなく、一日三回は賄いを出すけど」

「やります……はっ」

「なんか、デジャブ」

今の一連のやり取りに見覚えがあった店長だったが、そう決まれば話は早い。アレツタに案内されてシャワールームに行つた霊夢がシャワーを浴びて体を綺麗にしてる間に、早希が下着類を買いに行き、数十分後

「……なんか、着なれなくて違和感が……」

ウエイトレスの服を着た霊夢が、その場に居た。

すると早希が

「……サラシで分からなかったけど……霊夢ちゃん、胸大きかった……Cはあつた……」

と自分の胸をペタペタと触っていた。胸に関してはデリケートなので、明久と店長は聞き流す。

こうして、なんだかんだと新しい仲間が追加された。

60皿目 炒飯

「さて、朝の賄いはどうするか……」

「んー……あ、店長。炒飯にしませんか？」

「ああ……昨日のご飯が、ちょうど余ってたな。使うか」

店長の呟きを聞いた明久は、軽く確認していくなかで、炊飯器の中にご飯が残っていることに気づいた。そこからは、二人で分担して料理を始めた。

店長が炒飯を作り、明久が付け合わせの汁物と中華風サラダを作った。

そして、数十分後。

「ほいよ、今朝の賄いは炒飯だ」

「サラダは、既に味があるからね」

店長と明久が料理を持っていくと、女子三人が楽しそうに談笑しながら準備していた。やはり近い年な為に、会話が弾むようだ。クロは、三人の会話を静かに聞いている。

そして、店長と明久が

「既に自己紹介したかもしれないが、今日から新しくウエイトレスとして働いてくれる、博麗霊夢ちゃんだ」

「今日が初めてだから、色々とサポートしてあげてね」

と告げた。そして

『いただきます』

と挨拶してから、食べ始めた。

（炒飯……確か、一回だけ美鈴が作ってくれたかしら？）

霊夢は、店長が作った炒飯を見ながら、過去を思い出した。

紅美鈴、ホン・メイリン霊夢達が住む幻想郷に住む妖怪の一人で、普段は紅魔館と呼ばれる家の門番をしている。（居眠り常習者でもあるが）

その美鈴は中国生まれの妖怪らしく、料理もそちらに精通していて、過去に一度だけ霊夢も料理を作ってもらったことがあった。その時も美味しかったが

(この人達は、どうかしら……)

霊夢はそう思いながら、スプーンで口に運んだ。その直後、思わず目を見開いた。

(凄く美味しい……！　ご飯はパラパラなのに、全体に味がまんべんなく行き渡ってる……美鈴とは、比べものにならないわ……)

霊夢は驚きながら、今度はサラダを食べた。中華風サラダだが、作り方は至ってシンプル。きゅうりとトマトを乱切りで切ったら、塩で軽く味付けし、最後に胡麻油を和えて味を整えただけだ。

しかし、シンプル故に料理人の腕が判るのだ。

(凄い……素材の味を活かしながらもこんな味……妖夢より美味しい……)

妖夢こと、魂魄妖夢。

霊夢の数少ない友人の一人で、半人半霊の少女。普段は白玉楼という場所で庭師兼料理人をしており、有事の際には時々霊夢と一緒に解決に動いたるする剣士でもある。

霊夢が知る限り、料理の腕は幻想郷でもトップランクの一人である。なにせ、その白玉楼の主が凄い大食いであり、美食家だ。

その主を満足させるために、量と質を両立した料理を毎日作っているのだから、自然と腕は上がるのだ。

(このスープだって、凄い深い味わい……この人達、凄腕の料理人なんだ……)

霊夢はただただ、店長と明久の料理人としての腕に驚いていた。この後霊夢は、明久に二杯目をよそって貰って、完食。

「……凄く、美味しかったわ……」

「うん、よかった」

「さて、急いで片付けるか……早いと、そろそろ来る人が居るからな」
霊夢の言葉に、明久は笑みを浮かべ、店長は手際よく片付けを始めた。そして、全員分のお皿を片付けた時、カウベルが鳴り

「いらっしやいませ、洋食のねこやにようこそ！」

本日の第1来客を、早希が出迎えた。

こうして、霊夢のウェイトレス業務が始まった。

61 皿目 シーフードピラフ

帝国出身の雇われ従者のアルフレッドは、一人の見目麗しい少女を伴って、帝都の市街地を歩いていた。

「本当なんでしょうね……アルフレッド？」

「本当ですよ、お嬢様」

今のアルフレッドの雇い主たる少女、アイーシャにアルフレッドは微笑みながら答えた。

アイーシャだが、帝国産まれでなく、今居る帝国より遙か西方、砂の国の産まれで貴族の少女だ。

その証拠に、肌は褐色だ。

そのアイーシャが帝国に居る理由は、砂の国の次期国王たるシャリーフが帝国の姫と婚姻を結び、正式に国交を樹立したことで交易だけでなく、様々な分野で人の行き来が増えた。

アイーシャはそんな帝国と交易を始めた砂の国の貴族の娘で、帝国に來たのは本人の意思とは関係無い。父親が、世界を知るべきだと連れてきたのだ。

アイーシャからしたら、帝国は下に見ていた。

今の帝国は、はつきり言ってもまだ歴史的には若い国になる。一度は滅んだ旧帝国の生き残りのヴィルヘイムが一代で帝国を建国・拡大し、今の規模になって、漸く50年である。

確かに榮えてはいるが、一部の分野ではまだ荒削りな分野が目立つのは事実。そんな面に、アイーシャは帝国を下に見ていた。

「こんな国に、私の食べたい料理があるとは思えないんだけど……」

「まあ、確かにそう思うでしょうが、事実でして……こちらです」

そう言つてアルフレッドは、アイーシャの手を握つて大通りから路地に入った。大通りに比べたら狭く暗い道を、二人は進んでいく。

「……こんな道の先に、店が有るとは思えないわ……それに、本当に食べられるの？ 米と海の幸を使った料理が……」

砂の国では一般的な穀物の米と、砂の国の港町で取れる海の幸。砂

の食べたでは魔道具開発が盛んなために、海の幸を塩漬けにせずとも内陸部に運べるが、帝国ではそういった魔道具が無い為に塩漬けにするしかなく、アイーシャは帝国に来てから食べた魚料理が信じられなかった。

「ええ、既に確認済みですから、大丈夫ですよ……ああ、見えました」
アルフレッドがそう言った時、確かに道の先にその扉はあった。猫の彫刻が目立つ、黒い扉。

「……なんで、こんな所に扉が？」

「そういう扉らしいのです」

アルフレッドがねこやの扉を見つけられたのは、本当に偶然だった。今から14日前、アルフレッドは、偶々個人的な買い物に出ていて、その帰りだった。

帝都ではまず見ないハーFRINGを見たアルフレッドは、そのハーFRINGが路地から出てきたことに疑問に思い、なんとか捕まえるかどうかどうして路地から出てきたのか問い掛けた。

そして、ねこやのことを聞いたのだ。7日に一度だけ出てくる、秘密の扉のことを。

その時は胡散臭いと思ったアルフレッドだったが、7日後に行ってみると、確かに有ったのだ。

「では、入りましょう」

アルフレッドはそう言って、扉を開けた。すると

「いらっしやいませー！ 洋食のねこやにようこそー！」

とアレツタが出迎えた。そのアレツタを見て、アイーシャは

「……魔族が働いてるの？ このお店は？」

と信じられない、という表情を浮かべた。砂の国ではあまり魔族は居ないために、アイーシャは魔族に対する偏見のようなものがあった。

「彼女は、半魔族ですよ……それに聞いた話では、魔物も来るそうです」

「は？ 魔物も？ そんな訳……」

アイーシャがそこまで言った時、二人の背後の扉が開き

「ム、ジャマダ」

ガガンポが現れ、アイーシャは固まった。アルフレッドが素早くアイーシャの手を引き道を譲ると、ガガンポは慣れた様子で椅子に座り、注文した。

それを見たアイーシャは

「このお店、正気なの!? 魔物まで来るなんて!」

とアルフレッドに詰め寄った。

「前回来たのは夕方で、見てませんでした……凄いですね」

アルフレッドも驚いた表情を浮かべながらも、空いている席にアイーシャと一緒に座った。すると、早希と一緒に霊夢が来て

「お、お冷やです……こちらメニューになります……お客様は、東大陸語は読めますか?」

と少したどたどしいが問い掛けてきた。すると、アルフレッドが

「私が読めるが、大丈夫。既に注文は決まっている。シーフードピラフを二人分。それと、カツファ……じゃなくて、コーヒー2つを食後に」

と注文した。それを聞いた霊夢は、メニューを脇に挟み

「承りました」

と言つて、下がっていった。

それから、少しして

「お待たせしました、シーフードピラフです」

と霊夢が、二人の前にシーフードピラフを置いた。

「では、ごゆっくり」

そう言つて下がっていった霊夢を見送り、アイーシャはお皿に盛られたシーフードピラフを見た。砂の国で見た米とは形が違うが、白い米に、丸まった赤いシユライ^エピ^ビに、格子状に切れ目が入られたクラー^イコ^カ、そして剥き身の貝が乗っていて、よく見ると米の中に様々な色の野菜が細かく刻まれて混ざっている。

「わあ……」

初めて見た料理に、アイーシャは声を漏らした。そして、スプーンを持ったアルフレッドが

「お嬢様、冷める前に早く食べましょう」

「わ、分かっているわよ！」

アルフレッドの言葉で我に帰ったアイーシャは、スプーンでよそうと口に運んだ。その直後、口の中に一気に海の幸の風味が広がった。それだけでなく、バターの風味と帝国では貴重な香辛料の風味も広がる。

その中でも、ちゃんと主張してくる米の味。その米の味が懐かしくて、アイーシャは思わず涙を溢した。

小ぶりながらも、プリつとしたシユライプに食べやすいようにと格子状に切れ目が入られたクラーク。そして、アイーシャも知らない貝から出た旨味が米に染み込んでいて、スプーンが止まらない。

気づけば、アイーシャの前にあつた皿は空になっていて、満足感があつた。

その後、二人はカツファを飲んでから、お金を払って退店。消えていく扉を見ながら

「不思議なお店ね……」

「別名で、異世界食堂と言われているのですからね……私達には、わからない法則かと」

と話、二人は住んでいるホテルに向かったのだった。

62 皿目 ライスバーガー

「席、空いてる!?!」

勢いよく入店してきたのは、エルフの若い女性。ファルダニアだった。

「わあ!?! ファ、ファルダニアさん!?!」

真後ろからの大声に驚いたアレツタだったが、そのファルダニアの後ろに見慣れない少女のエルフが居ることに気づいた。するとファルダニアは、その少女の手を引きながら

「空いてる席に座らせてもらおうわよ」

と言つて、適当に空いていた席に座った。

そこに、霊夢が来てメニューを差し出そうとしたが、それを早希が止めて

「何時ものように、こちらにお任せで構いませんね?」

「ええ、お願い。あ、この子の分も私と同じようにしてちようだい」

「承りました」

そう返答した早希は、霊夢を伴ってキッチンの方に下がった。恐らく、エルフのことに關して説明するのだろう。

そしてファルダニアは、目の前の少女エルフ。

アリスを見た。

(まったく……ハーフエルフの隠れ里の人達なんでしょうけど……酷いことをするわね……)

一人旅をしていたファルダニアは、今は公国外れのある山間部に來ていた。夜に差し掛かり、高い木々もあつてかファルダニアの居た山間部はあつという間に暗くなった。そんな山間部を、アリスは一人で寂しそうに歩いていったのだ。

エルフだから分かり難いが、アリスは恐らくまだ30歳程で、言動から見てもまだ幼いと言える。

そんなアリスが、親も居ない状況で山の中を一人歩いていた。

となると、考えられるのは一つしかなかった。

（……………チェンジリング取り替え子……………ね）
チェンジリング取り替え子

それは、人間同士やエルフ同士が交わっても時折、ハーフエルフが産まれることがある。

そう言った場合は、多少特殊な環境下にはなるが、住むことに不都合は無い。

しかし、チェンジリング取り替え子には、もう一つの意味があった。

ハーフエルフ同士が交わった時、時々エルフが産まれるのだ。

エルフはハーフエルフよりも長生きなために、成長が遅い。そのせいで、ハーフエルフの里では持て余していたのだろう。

そこに拍車を掛けたのが、アリスの不器用さと少々頭の回転が悪いこと。

アリスと出会って1日経ったが、ファルダニアから見てもかなり不器用だと思う。

（頭の回転が悪いのは、まだ30年しか生きてないから……………100年は経たないと頭の回転もだけど精神的に未熟な面が目立つ……………それに、多分だけど……………いい教師役が居なかったのね……………）

教育面でも、ハーフエルフとエルフでは全く違う。

ハーフエルフは人間社会に生きることができているが、エルフではそれは難しい。食生活や価値観が違うのだ。

（……………多分、この子の親が亡くなったから面倒を見る気が失くなって、隠れ里から放逐したのね……………私が出会ってなかったら、最悪は奴隷にされてたかしら……………）

エルフは見目麗しく、極一部の貴族達の間では森の宝石と呼ばれていて、奴隷として入手すれば箔が付くとすら言われている。

（とはいっても、どうしよう……………私、子守りの経験なんて無いのよね……………）

ファルダニアが担当していたのは、主に調理と異変の対応。これはまあ、ファルダニアが未婚だったからという理由があるのだが。

そしてアリスは、霊夢が置いたレモン水をゆつくりと飲んでいて、その飲み方は、子供そのものだ。

(どうしようかしら……)

とファルダニアが考えていると、霊夢がやってきて

「お待たせしました……きんぴらかき揚げのライスバーガーです……えっと、衣には卵は使っていないので、ご安心ください……こちらのお味噌汁はお代わり自由です……では、ごゆっくり」

ただとどしく言って、二人の前にお皿が置かれた。

そして霊夢は、アリスのコップにレモン水を注いでから去った。それを見送ったファルダニアは、皿の上に置かれてある2つのライスバーガーを見て

「本当に、この店のレパートリーは多いのね……」
と呟いた。

豆腐ステーキ、納豆スパゲツテイーと納豆ご飯、更には豆乳シチューだけでなく、新たな料理だ。

元々いたエルフの里で料理担当だったファルダニアからしても、結構なレパートリーになる。

「これは、根菜ね……幾つかの根菜を揚げてるのね……つて」

ファルダニアはライスバーガーを観察していたが、気付けばアリスがムシャムシャと食べていた。しかも、その顔にはキラキラとした表情が貼り付いている。

(まあ、仕方ないか……私があげたミソシル以外、丸1日は何も食べてなかったみたいだし……)

ファルダニアがアリスを見つけたのは1日前だが、聞いた話では2日前からアリスは一人で山をさ迷っていたらしい。

しかも、アリスの不器用さも相俟って食糧は中々見つからず。

結果アリスは、ファルダニアが作って余った味噌汁以外は食べてなかったのだ。(なお味噌は、クリステイアンから貰った味噌)

そこに、見事な料理が並べば我慢出来ないのも仕方ないだろう。

(ライスバーガーってことは、ライスを使ってるのよね……この揚げ物を挟んでるのがライスかしら……)

ファルダニアは観察しながら、1つ目を食べ始めた。ファルダニアの予想通り、かき揚げを挟んであるのがご飯を焼き固めたものだが、

表面には出汁醤油が塗られてあり、口の中に出汁醤油の風味が広がり、そこにご飯本来の甘味が交わる。

ファルダニアからしたら、それだけでも十分に美味しいが、そこにゴボウとニンジン。後はファルダニアが知らないゴマを使った料理。きんぴらごぼうの味が合わさり、今まで知らなかった味が広がる。(くっ……こんな料理、知らなかったわ……今度、食材を入手したら、挑戦しないと……)

料理研究家たるファルダニアは、その負けず嫌いな性格から更に料理研究する決意を固める。

ファルダニアだが、旅の最中にエルフとしての知識を使って薬の調合を手伝ったり、冒険依頼を受けて旅の資金を稼いでいる。

それはさておき、ファルダニアが吟味しながら1つ目を食べている間に、アリスは味噌汁をお代わりし、2つ目も食べている。

(やっぱり、お腹空いてたわよね……次からは、二人分作るしかないわね……資金稼ぎ、頑張らないと)

ファルダニアはそう考えながら、2つ目も食べ始めた。

そして数分後、ファルダニアが財布からお金を出していると

「どうぞ、ファルダニアさん。おにぎりは詰め合わせです。そちらの子の分もありますよ。あ、サービスですので」

と明久が、ファルダニアの前に紙の箱を二つ置いた。

「ありがとう、貰うわ……」

感謝の言葉を言いながら、ファルダニアは紙の箱をカバンに仕舞ってからアリスと一緒に退店した。

アリスは消えるドアを見ながら

「ファルダニアさん。わたしも、りょうりのことしりたい」

と言ってきた。それを聞いたファルダニアは

(まあ、公国にはエルフは居ないし……ハーフエルフの隠れ里なんて知らないし……仕方ないわね)

と考えるから、アリスを見た。

「いいけど、ちゃんと私の話を聞いてね？ 怪我とか毒には注意しないといけないから」

「うん！」

ファルダニアの言葉を聞いて、アリスは嬉しそうに頷いた。

なおファルダニアは、アリスを引き取り一緒に料理研究の旅をすることを手紙で父親に報せたのだが、その手紙を読んだ父親が驚きの余りに椅子から転げ落ちるのだが、ファルダニアからしたら知ったことではない。

交2 皿目 タンドリーチキン

「つだあ……疲れた……あの組織、あんなに戦力を整えやがって……俺だけだったら、絶対に無理だったろ……」

「お疲れ様ですわ、レイ」

お昼過ぎに帰宅した一組の男女。その男性の方はソファア―に腰掛けながら愚痴を溢した。すると、ガスマスクを装着したモノクロの服を着た女性が、その男性。

レイに劳いの言葉を掛けた。

彼女の名前は、スケアクロウ。一目では分かりにくいのが、彼女は戦術人形と呼ばれるロボットである。

彼女はある経緯からレイの相棒となり、レイと共に傭兵として活動している。

そしてレイは、その筋では結構名が通っている傭兵である。実はもう一人（一体？）戦術人形が居るのだが、タイミング悪く定期検査でメーカーに行っている。

そのレイ達だが、実はこの2日間、依頼である非合法組織の壊滅を行った。だが、事前に得ていた情報よりもその組織の戦力が多かったために、いくら腕利きのレイとスケアクロウの二人でも壊滅させるには時間が掛かってしまい、帰ってきたのが少し前のことだった。

そのために、食事すらまだ取っていないのだが、作る体力も気力も無かった。

「レイ……食事を取りませんと……」

「分かってるけど……作る気力が……」

スケアクロウの言葉にレイは頷いたものの、中々動こうとしなかった。それを見て、スケアクロウは自分が作るべきかと考えながら視線を動かし、それを見つけた。

「レイ……」

「んお……どうし……なんだあれ？」

スケアクロウに呼ばれたレイも、それを見つけた。ネコの彫刻が施

された、黒いドアだ。

「……ドア、ですわね……」

「見たまんまな……アーキテクトのイタズラか？」

アーキテクトというのは、スケアクロウの妹機と言える戦術人形に
辺り、二人が所属する傭兵ギルドで開発要員になつている戦術人形
だ。

好奇心旺盛かつ少々アホの子で、時々子供みたいなイタズラもす
る。そのアーキテクトのイタズラかとも思ったが、それでも手が込み
過ぎている。

傭兵としてしつつ、レイは重たい体を動かしてドアに近寄つた。す
ると、スケアクロウが

「レイ……ここに彫られてる文字……日本語では？」

「YOU、何言っちゃってんの……え、マジ？」

「真剣と書いて、マジですわ」

スケアクロウの言葉にレイはまさか、という顔をしたが、スケアク
ロウは至つて真顔だった。この世界では、第三次世界大戦と
コーラップス流出
北蘭島事件により世界規模で生活圏が減り、特に日本はその殆どが重
度汚染区域になり、人が住めなくなった。

それでも日系人が生き残っているが、最早日本語という言語は無く
なつたに等しいのだ。

「……まさか、開くのか？」

レイは半信半疑だったが、ドアノブを掴んで回してみると、カチャ
リという音がして、僅かに開いた。

「…………これで見えたのが部屋の壁だったら、アーキテクトを説教
するぞ、俺は」

ただでさえ疲れてるのに、下らないイタズラをして精神的にも疲れ
させたからお説教だ。そう思いながらレイは、ドアを開けた。その直
後

「いらっしやいませ……洋食のねこやにようこそ」

少し緊張した表情の霊夢が、二人を出迎えた。

「……何処だ、ここ……」

レイが思わず呟くと、スケアクロウがレイの袖をチヨイチヨイと引いて

「レイ……その、信じられないかもしれませんが……ここ、過去みたいですよわ」

「……YOU、何言っちゃってんの？ ……え、マジなの？」

スケアクロウの言葉に一瞬驚くレイだったが、すぐに真顔になった。そして、スケアクロウは

「えつと、今しがたネットに繋がたんですが……私が知るのよりも大分技術的に古いんです……大体、2020年代辺りかと……」

「……えええええ……」

俄には信じがたいことを告げられ、レイは困惑した。そこに、アレツタが近寄り

「霊夢さん、どうしました？」

と霊夢に問い掛けた。そのアレツタの両側頭部の巻き角を見てレイは即座に腰の拳銃を抜いて、構えた。

その直後、気づけば席に座っていたタツゴロウが刀を抜いて

「そこまでしておけ、お主……ここは食事処……武器を抜くのは、些か礼儀知らずなのでは？」

とレイを制止した。まさに、一瞬の早業にレイが固まっていると

「えつと……お客様、何か失礼でもありましたか？」

と早希に呼ばれたらしい、店長が現れた。

そして店長は、とりあえずレイとスケアクロウを奥に招き入れて、明久に対応を任せた。

「えつと……すいません、何か此方の不手際でもありましたか？」

「ああ、いや……傭兵としての性というか……」

「予想外の事態になると、銃を抜くのが癖みたいなものなんですの」
明久の問い掛けに、レイとスケアクロウは気まずそうに答えた。

「傭兵……失礼ですけど、貴女……」

「はい、なんですの？」

「もしかしてですが……代理人という戦術人形のお知り合いですか？」

まさかの名前を出され、スケアクロウは驚いた表情で

「代理人は私の姉ですが、なんで……」

「姉妹でしたか、なるほど……いや、似た印象だったもので……ということとは、喫茶鉄血と関係ありますか？」

更に予想外の名前が出てきて、レイとスケアクロウは顔を見合わせた。二人からしたら並行世界の代理人が営む喫茶鉄血。そこと知り合いの食堂。となれば、最早異世界の食堂だ。そこから二人は、異世界に渡ったと結論着けた。

「……異世界に渡ったのか、俺達は……」

「最早、何でもアリですわね……」

「あ、なんか結論に至りました？」

二人が天井を見上げていると、明久は結論に至ったと悟り、首を傾げた。そして二人は、何とか平常心に戻ると

「それで、洋食のねこやって言ってたよな？」

「ということは、ここはレストランですか？」

と明久に問い掛けた。

「はい。色々とありますよ……こちらが、そのメニューです」

明久はそう言っつて、二人に通常のメニューを差し出した。そして開くが、生憎と二人には分からなかった。

二人が住む世界は、先に言っつた戦争と事件で酪農や農業に大打撃を受けていて、料理のレパトリー等は大幅に減ってしまった。

「とはいえ……どういふ料理か分からないな……」

「ですわね……」

一応メニューには、レイ達にも分かる言語で説明が書かれてあるが、よく分からない。すると、明久が

「でしたら、こちらにお任せにしますか？」

と助けを出した。

「……そうしてもらえると、助かるかな……」

「私も、お願いしますわ」

「承りました。では、フロアでお待ちください」

明久の言葉を聞いて、二人はフロアに移動。空いてる席に座り、待

つことにした。その間に、フロアを見回した。先ほど、レイに刀を向けたタツゴロウ。それに、長い杖を傍らに置いているアルトリウス。頭がライオンのライオネル。ガガンポと、自分達の常識からは想像も着かない人物達が居る。

「……異世界にも、色んなパターンがあるんだな……」

「まるで、一昔前のアニメの世界ですわ……」

アーキテクトは暇になると昔のアニメ（日本アニメ）を見るが、まるでその登場キャラのような見た目の人物達が美味しそうに料理を食べている。

それを見た二人は、全員がただ料理を食べに来ているだけと知った。その時

「お待たせしました、タンドリーチキンです」

と早希が、二人の前に皿を置いた。

「これは……」

「タンドリーチキンと言いまして、鶏の胸肉、手羽先、モモ肉をオリジナルブレンドのスパイスに一晩漬けた後に焼いた料理です」

早希は説明しながら、ライスとコンソメスープの器、最後にフォークとナイフを置き

「ライスとスープはお代わり自由ですので、何時でも申し付けてください。それでは」

と言って、下がっていった。早希を見送った二人は、料理に視線を向けた。皿の上には、茶色いペーストのような物が付き、見事な焼き色の鶏肉と野菜が盛られている。

そして何より、香ばしい匂いが二人の空腹を刺激する。

レイは、フォークとナイフを持つと

「んじゃあ……まずは……」

レイは、鶏肉を一口サイズに切って口に運んだ。その直後、今まで味わったことのない味が口の中に広がった。ピリリとしつつも濃厚な肉の味、それを際立たせるスパイス。その味わいに、レイは思わずライスを口に掻き込んだ。そして

「旨すぎるっー」

何処ぞの蛇のようなセリフを言って、更に鶏肉を一口食べた。先ほど食べたのより脂が溢れ、口の中に広がる。どうやら、違う部位を食べたようで、新しい味わいが口を満たす。肉を一口食べる度に、新しい味わいが口の中に広がり、レイとスケアクロウは食べるのが止まらなくなる。そして気付けば、ライスを二杯ほどお代わりし、コンソメスープもお代わりした。

「レイ……美味しかったですね……」

「だな……あ」

レイはその時になって、支払いをどうしようと考えて、そしてあることを思い出した。

(あ、アレがあった)

そうして、店長が現れると

「支払いなんだが……これでいいか？」

と何処からともなく、金塊を取り出して手渡した。

「金塊!？」

まさかの支払いに、店長は驚いた。

「レイ……その金塊はどうしたんですの？」

「いやな、あの組織の部屋を一つずつ調べてたらな、何かボスのらしい部屋の金庫の中から見つけたんだわ……まあ、依頼料金の割に敵の数が多かったからな……貰っておいた」

スケアクロウの問い掛けに、レイがそう答えた。

「ま、まあ……とりあえず受け取っておきます……」

「あ、こちらサービスです。傭兵ということなので、サンドイッチの詰合せです」

レイがビニール袋を受け取ると、店長が

「当店は7日に一度来れますので、またの来店をお待ちしています」

と何時もの説明をして、レイとスケアクロウは退店した。そして、消えていくドアを見ながら

「ところで、レイ……なんで見つけた時に教えてくれなかったんですの？」

「いやな、その直後に敵に遭遇しちゃったから、忘れてたんだわ」

「つーーん」

「マジかよ……」

この後、スケアクロウの機嫌を直すのに時間が掛かったレイだった。

なおレイが店長に渡した金塊だが、かなりの金額になったので、暫くは払わないでも済むようになったりする。

63 皿目 豚まん

怒涛のようにお客を捌き続け、午後1時を少し過ぎた頃。ようやく、ねこやのスタッフ達はお昼になるが

「さて……今日は、どうしますかね……」

「んー……あ、そうだ……あれがあったわ」

早希やアレツタ達がお皿を洗ってる間に、明久と店長はスタッフ一同で食べるお昼を決めようとしていた。その時、店長が何かを思い出したように冷蔵庫を開けて、一つの紙箱を取り出した。

蓋を開けると、中には幾つも白い物が入っていた。それを見て、明久は

「ああ、あのお店のですか」

「ああ……あそこのは、この近所ではかなりポリュームもあるからな。これにしよう」

店長はそう言つて、大きな鍋に水を入れて火に掛けると、湯気が出始めてからその鍋の上に竹製の籠を置いた。その間に明久も鍋で調理を始めた。そこに、霊夢が現れて

「お皿、食器洗浄機？ に入れて、後は乾燥させるだけ、だそうよ」と連絡してきた。どうやら、皿洗いは一段落したようだ。

「ん、お疲れ様。休憩室の机を、拭いといってくれるかな？ もう少ししたら、お昼持つていくから」

明久はそう言つて、霊夢に台布巾を差し出した。それを受け取った霊夢は、気になった様子で

「お昼は何かしら？」

と問い掛けた。

「今日のお昼は、豚まん」

「それと、中華風卵スープだね」

店長と明久はそう言つて、調理に戻った。

店長が蒸しているのは、商店街にてねこやと並ぶ古参のお店。中華料理屋、笑龍の豚まんである。

笑龍は戦後すぐに開き、60年を超える老舗だ。店主はねこやと同じように二代目が変わっており、その付き合いは先代から続いている。だから、ねこやの秘密は先代から知っていて、それは今の笑龍店主とその奥さんたる春子も知っている。

店主は一時期、その笑龍で過ごしていたことがあり、その間に中華料理を覚えた。

もしかしたら、店長が笑龍の三代目の店主になっていたかもしれない笑龍。そうならなかったのは、ある事件が起きたからで、そのことは今でも店長の心に傷痕を残している。

それはさておき、笑龍の豚まんはある意味で名物料理の一品である。

先代店主が材料から拘り、餡はたっぷりと入っていて、更には肉汁が溢れ出てくる。それは二代目にも受け継がれていて、お持ち帰りでもお店で蒸すか自宅でも蒸せるかが選べるようになっていく。

本来は冬限定の品だが、最近はやはりお持ち帰りも増えてきたので、一年を通して売り出すかを検討中らしい。

その豚まんは、今朝方に春子さんが持ってきてくれたものだ。

店主は、蓋を開けて蒸気の中から見えた豚まんを見て

「……うん、流石は師匠だ。いい腕をしている」

と呟き、皿に乗せていく。そして、明久と一緒に休憩室に入り

「ほい、お待たせ」

「卵スープは、お代わりもあるからね」

と全員の前に置いた。

「これは……白パンですか？」

「まあ、外側はそうだな。豚まんって言うてな。熱いから気をつけてな」

アレツタの質問に答えながら、店長はアレツタのお皿に豚まんを乗せ、明久がよそった卵スープを置いた。

そうして店長は、豚まんを一口食べると

(……うん……やっぱり、中華料理じゃあ師匠に敵う気がしないな……)

と思った。周りのパンの柔らかさと仄かな甘味。それと調和している中の餡たる豚肉と野菜。豚肉は粗めの挽き肉で噛む度に口の中に豚肉本来の旨味が広がる。

そして、野菜はシンプルに塩胡椒のみで味付けされている。

これは確かに、会社帰りのサラリーマンやOLが何個も買うのも領ける。

そして店長は、修行中の時を思い出した。

もう1つの家族と言える、笑龍。春子さんは特に、店長を息子のように接してくれた。

懐かしくも、もう戻ってこない日々。そして……

「店長、どうしました？」

「ああ、いや……なんでもないさ」

店長が固まっていることに気付いた明久が呼び掛けると、店長は我に帰った様子で豚まんを食べていく。

店長の脳裏には、一人の寂しがり屋の少女が居た。

64皿目 お子様ランチ

古くからある大きな城の片隅。そこに、顔立ちが良く似た双子が居た。

双子が居るのは、普段から危ないと言われて更には見張りの兵隊が居る高い塔だ。しかし双子は、兵隊が交代のタイミングを見計らってやってきた。その甲斐あって、兵隊の姿は無い。

「アルフ、どう?」

「だいじょうぶ、みはりはいないよ、マリー」

王族の双子、アルフとマリーはその塔に入るためのドアをゆっくりと開けてから、滑り込むように入った。長い螺旋階段を登りながら双子は、これまで聞いた噂を思いだし

「ねえ、ほんとうにだいじょうぶだよね?」

「それを、これからたしかめるんだよ」

怖がってるマリーの問い掛けに、アルフは少年らしい好奇心旺盛という表情で答えた。マリーは不安に駆られながら、アルフの後を追いつけた。暫くすると、二人の前にドアが姿を見せた。

アルフ、一度マリーを見て

「あけるよ」

と言ってから、ドアを開けた。部屋を見た二人は、少しの間その場で固まった。

双子からは用途が分からない道具が多数置いてあり、何をしているのかが分からなかった。そうして、双子が恐怖で動けなくなっていた時

「誰か居るの?」

と声が聞こえて、双子は振り向いた。その先に居たのは、双子の伯母に当たる女性。ヴィクトリア王女だった。

「ヴィクトリアおばさまー」

「なんで、ここに?」

双子が問い掛けると、ヴィクトリアは視線の高さを合わせて

「なんでって、ここは私の研究室だからよ……それより、お母様達からここに入るなって言われなかったの？ 危ないからって」

「たしかにいわれたけど……」

「おばさまがいるなら、だいじょうぶ！」

マリーの健気な言葉に、ヴィクトリアは固まった。同じ王族内でも、腫れ物を扱うような感じだったが、どうやら双子はハーフエルフに対する差別意識は無いらしい。

そこはやはり、年代差というべきものかもしれない。

今の公国の民の過半数はハーフエルフに対して、強い嫌悪感を抱いている。しかし、アルフやマリーといった子供世代はそうではない。実際、公国産まれでもようやく10代前半辺りの世代はハーフエルフに対する差別意識が無いのが確認されており、例え他国でハーフエルフに出会っても普通に会話したりしているらしい。

それはさておき、アルフとマリーの言葉に毒気を抜かれたヴィクトリアは、軽くため息を吐いた。そして、双子を見て

「そういえば、お昼は？」

と問い掛けた。ヴィクトリアの記憶力違いでなければ、国王と王妃は貴族達との会食をしていて、他の兄妹達は諸外国との外交の最中だった筈だ。

「あ……」

「まだなの……」

双子がそう言った直後、小さく腹の音が鳴り、それを聞いたヴィクトリアは

「……仕方ないか」

と言って、指を鳴らした。その直後、部屋の端辺り。床に魔法陣が書かれている辺りに一つの黒いドアが現れて

「わっ」

「おばさま。あのドアは……」

「異世界食堂に行くためのドアよ」

双子からの問い掛けに答えながら、ヴィクトリアは双子を伴いながらドアを開けて潜った。

「いらつしやいませ、洋食のねこやにようこそ」

そんな三人を出迎えたのは、霊夢だった。まだ緊張した表情で三人を出迎え、そんな霊夢を初めて見たヴィクトリアは新しく雇ったのか、と判断した。

すると、霊夢は

「空いている席にご案内します」

と言って、三人を手近な席に案内。そこに、アレツタが来て

「いらつしやいませ、ヴィクトリアさん。あ、こちらの二人は……」

「はじめまして。サマナークこうこくおうぞくまつしの、アルフ・サマナークです」

「おなじく、マリー・サマナークです」

アレツタが視線を向けると、アルフとマリーは王族らしく優雅な仕草で挨拶した。そんな双子を見たアレツタは

「可愛い方達ですね！　ご兄弟ですか？」

「双子の甥と姪よ……私には、何時ものようにプリン・アラ・モードを……双子には、お子様ランチをお願い」

「分かりました！　あ、霊夢さん、あちらのお客様をお願いします！　」
「分かったわ」

ヴィクトリアから注文を聞いたアレツタは、霊夢に新しく入ってきたお客を任せて、キッチンに向かった。すると、アルフとマリーは珍しそうに店内を見回している。

「ここは、異世界食堂って言って……美味しい料理を出してくれるのよ」

ヴィクトリアの説明を聞いたアルフとマリーは頷いてから、店内の調度品を見た。双子も幼いとはいえ王族のために、高級品には慣れている。しかしそんな双子からしても、ねこやの調度品は見たことが無い物ばかりだった。その時

「あ、おじいちゃんだ！」

「ほんとだー！」

と双子は、アルトリウスに気付いた。

「ぬあつ!?　なんで双子がここに……ヴィクトリア!？」

「たまたま、私の研究室に来たから連れてきたのよ、師匠」

アルトリウスが驚いた表情でヴィクトリアを見ると、ヴィクトリアは淡々と答えた。アルトリウスは魔王討伐後、公国に請われて王宮付きの魔法使いになり、途中からは若い世代への育成を始め、ヴィクトリアが最後の愛弟子になる。

そんなアルトリウスだが、子供が全般的に苦手らしい。ヴィクトリアが過去に聞いたのは、どう接していいか分からず、更には下手に魔法を発動させてしまい、ケガさせるのが怖いのだとか。

そして、双子がアルトリウスやライオネルにじゃれていた時

「えっと……料理をお持ちしましたが……」

霊夢と早希の二人が、三人分の料理を持ってきた。それを見て、ヴィクトリアが

「アルフ、マリィ、戻ってきなさい」

と双子に声を掛けた。ヴィクトリアに呼ばれた双子は戻ると、席に座った。なおライオネルだが、意外と子供には慣れているらしい。そこはやはり、魔族の国で大人気の剣闘士だからだろう。

それはさておき、霊夢と早希は料理を置き

「こちらが、プリン・ア・ラ・モードです」

「こちらが、お子様ランチになります。ごゆっくり」

と告げてから、離れた。ヴィクトリアの前には、慣れたプリン。そしてアルフとマリィの前には、数種類の料理が乗せられたお皿が置かれている。

そのお皿の上にある料理は、オムライス、ハンバーグ、エビフライ、サラダ。そしてプリンが乗っている。

なお、小さい子どもが食べることを考えて、全て小さめサイズだ。

そのお皿を見て、双子は

「おばさま！　こんなにようり、はじめてみました！」

「おしろのりようりにんたちより、おいしそうです！」

「……彼らも一生懸命作ってるのよ」

子供の無邪気さは、時に見えない刃になる。もし宮廷料理人達が聞いたら、立ち直れないかもしれない。

その宮廷料理人達も、公国内では有数の腕を持っているのは確かである。

ヴィクトリアの私見だが、色んな分野で技術力の差があるので、そこはどうしようもないと思っっている。

それはさておき、アルフとマリーは最初にスプーンを持つと、王族らしいテーブルマナーで料理を食べ始めた。

最初に食べたのは、オムライスだ。

「ふわぁー！」

「このりょうり、なかにライスがはいってる！　おいしい！」

双子は初めて食べたオムライスに、眼を輝かせている。店長や明久の世界では、オムライスは子供からお年寄り世代まで広い人気の料理の一つである。今回のお子様ランチのは、少し甘めに味付けしてあり、子供でも食べられるように調整してある。

次に双子が食べたのは、ハンバーグだ。

この料理もまた、幅広い年齢層に人気の料理だ。こちらも、子供が食べることを考えて胡椒は控えめにしている。

「このりょうりもおいしい！」

「はじめてたべました！」

興奮気味に語る双子の目は、キラキラと輝いている。そんな双子を見て、あまり表情が変わらないヴィクトリアも微笑んでいる。もし、ハインリヒが見ていたなら、顔を赤くして固まっていただろう。（まだ来てない）

そして双子は、エビフライ（小さめ）を食べて

「ん！　このシュライプ、すごくおいしい！」

「こんなシュライプ、はじめてー！」

と絶賛した。もし、ハインリヒが居たら感激していたかもしれない。気付けば、周りに居る客達は和んでいる。無邪気な子供故か。

そして、野菜を食べてから最後に

「おばさま、このりょうりは……」

「プリンって言うのよ……甘いわ」

双子はヴィクトリアの説明を聞いて、少し渋面を浮かべた。以前に

も説明したが、彼らの世界の甘味はかなり甘さがくどく、子供からは不評なのである。

双子もその例に漏れず、甘い料理に苦手意識があるようだ。そこに、ヴィクトリアが

「大丈夫よ……このお店のはね……」

そう言って、自分から一口食べた。それを見て、アルフとマリーも食べて、驚いた。確かに甘い、程よい甘いに僅かに苦味が混じるキャラメルソースがその甘さを補助する。

「これもおいしいー！」

「うんー！」

双子は満面の笑みを浮かべながら、顔を見合わせた。

そして、食べ終わると

「では、こちらは何時ものです」

と明久が、ヴィクトリアにプリンの入った箱を差し出した。そしてついでに

「君たちには、こつちをあげるね」

と言って、小さな箱を差し出した。

「これは……」

「なんですか……？」

「クツキーっていう焼き菓子だよ。サービスであげるね」

双子が問い掛けると、明久はそう言って双子の頭を撫でた。中身を見た双子は、一度箱を机に置いてから

「ありがとうございます」

「また、このおみせにきます」

と礼儀正しくお辞儀した。

「はい、お待ちしています」

そうしている間に、ヴィクトリアがお会計を済ませて、退店した。その後、ヴィクトリアが

「異世界食堂は、7日に一度行ける……来たくなったら、また私の所に来なさい……見つからないようにね」

と言って、双子の頭を撫でた。

65 皿目 フルーツゼリー

「ふわぁ……」

初めて見る光景に、アリスはそんな声を漏らした。

今、ファルダニアとアリスが居るのは、東大陸の南の方にある港街だ。

「ここに来るのも、50年振りね……」

そしてファルダニアは、久しぶりに来た場所を見て、感慨にふけていた。約50年前、ファルダニアは父親とまだ生きていた母親と三人で、旅行を兼ねた旅をしていた際に、この港街に来ていたのだ。

アリスは初めて見た海に、顔を綻ばしている。

「けど、とうとう海か……」

料理を極める旅を始めて、早くも数ヶ月。ここまで、色々であった。まず、その発端となる異世界食堂を知ったこと。そこから、父の友人たるクリステイアンに出会って、発酵という技術を知り、ファルダニアからしたら馴染み深いエルフ豆を使った料理を知り、アリスと出会った。

そのアリスだが、今は冒険者の魔法使いという見た目になっている。これはファルダニアが考えた、トラブル避け対策だ。アリスはまだ子供なために、人を疑うということを余り知らない。

そこで考えたのが、見た目からだった。今のアリスの見た目は、移動のしやすさも兼ね備えつつも、冒険者の魔法使いという物になっている。

帽子を被り、足首辺りまであるローブ。そして、少し長めの杖を持っている。

ここに来るまでに、様々な経験をしてきた。数人の冒険者と一緒になって依頼をこなしたこともあったし、中には悪徳商人に騙されかけた時もあった。

まあ、良い経験だったと考えた。その時になって、50年前の両親の考えに気付き、ファルダニアは苦笑した。

(もう、分かりにくいわよ。父さん、母さん)

父親は今では子煩悩だが、昔は里を代表する切れ者だったらしい。母親は昔から病弱だったが、頭の回転は早く、里でも随一の知恵者だったと聞いている。当時は気付かなかったが、漸く二人の当時の考えに気付けた。

(要するに、世界を知って、見聞を広めろってことね……)

そう考えながらファルダニアは、好奇心旺盛な表情のアリスを見て「さ、行きましょう」

「うん！」

アリスを連れて、港街に入った。

そして、港街を歩いてみると

「いらつしやい！ いらつしやい！ 砂の国から輸入してきた、カツファだ！ 今や、帝国の王もお気に入り一品だよ！」

「おーい、白砂糖の上物はあるかい？ 光の神殿の巫女様から、大量に頼まれてな」

「なんだ、この値段は!? 如何に上物とはいえ、この値段では海国のウメシユの上物が5本は買えるぞ!？」

「おや、知らないのかい？ それは、ドワーフが作った新しい火酒さ。なんでも、あの偏屈で知られるアインガルドがこれを手土産にしたら、一発で鍛冶を引き受けたって聞くぞ」

と活気が満ちた声が聞こえる。

「……人間の街って、たった50年でこんなに変わるものなのね……」
自分の記憶の街との変わり度合いに、ファルダニアは困惑していた。

「……アリスはまだ人混みに慣れてないし、はぐれないでね……って、アリス!？」

気付けば、隣に居た筈のアリスの姿が無かった。

「これだから、子供は!？」

アリスはまだ30年しか生きてない、エルフではまだまだ子供だ。それ故にか、興味が引かれるとフラフラとしてしまう困った部分があった。

そんなアリスを見つけたのは、数分間走り回ってからだった。

「ほあ……」

「ああもう、漸く見つけた!!」

アリスはある店先で、透明な物の中に色とりどりの果物が浮かんでいる物を見ていた。

「アリス！ 何回も一人で行動しないでって、言った……あら、これも食べ物なの？」

アリスに注意しようとしたファルダニアは、その時になってアリスが見ていたのが食べ物だと気づいた。

「ああ、そうだよ。これは、フルーツゼリーって言ってね。この前来たエルフの人も、美味しいって言ってくれたよ。どうだい？」

ファルダニアの問い掛けに、椅子に座っていた売り子が答えた。匂いから動物由来ではないのを確認してから、ファルダニアは少し考えて

「……それじゃあ、二人分買おうわ」

「まいどあり」

ファルダニアがお金を取り出している間に、売り子は手早く二人分よそうと、お金と入れ替わりに手渡した。

それを一口食べると、ファルダニアとアリスは驚いた表情で

「ん、美味しい！」

「これ、おいひい！」

と同時に声を挙げた。そしてファルダニアは、更に追加を注文し、食べると

「ねえ、これを作った人の場所を教えてください？」

と問い掛けた。

時は少し巻き戻り、一日前のことになる。この港街では、岬の魔女と呼ばれる女性が居た。彼女が港街に住むようになったのは、今から約60年前になる。

彼女名前はカミラ、海や水を司る青の神に使える神官である。

そのカミラが住むのは、港街からかなり離れた岬の淵に建てられた家だ。道の方にも入り口は有るが、カミラにとっての本当の入り口は

床にあった。

床の一ヶ所がボタンと開き、そこから様々な海産物を入れた網を持ったカミラが入ってきた。

カミラはその網を床に置くと、腰かけたのだが、その下半身は青い魚のそれだ。彼女は、人魚なのだ。

そのカミラは、両手を組んで

「偉大なる青の神よ……」

と祈り始めた。すると、下半身は人の見た目が変わった。カミラがこの港街に住むようになった理由は、今から約60年前のこと。カミラは人魚のみが住む海底帝国の神殿の命令で、港街に住み、混沌に属する者達に対する抑止力になれ、と言われたのだ。

最初は嫌がっていて、港街の人達にもかなり意地悪く接していた。それが変わったのは、今から約10年前になる。

突如として、家の中に黒い扉。ねこやの扉が現れたのだ。最初は驚き、警戒したカミラだった。だが、訪れて初めて食べた料理。フルーツゼリーを見て、驚いた。

透明なゼリーの中で、まるで浮いているように見えるたくさんのフルーツに目を奪われた。

そして、食べても驚いた。最初はフルーツだけの味かと思ったら、仄かに甘いではないか。しかも、プルプルとした食感。

「さて……今日も出かけるとしましょうか」

カミラはそう呟くと、出現していた扉を開けた。

「いらつしやいませ、洋食のねこやによるこそー」

そんなカミラを出迎えたのは、カミラからしたら監視対象のアレッツタだ。しかしカミラは

(まあ、この店なら大丈夫か)

と不思議と確信していた。

「よく冷えたフルーツゼリーを頼むわ」

「はい、分かりました！」

カミラは注文しながら、近くの席に座って、まず空間に意識を向けた。

(相も変わらず、赤の神は来ているみたいだね……この店全体に、濃密なまでに赤の神の気配がある)

それだけでなく、赤の神の神官に金の神官。そして何より驚いたのは、黒の神が居たことだ。最初は驚きで固まり、何故誰も苦しむ様子が無いのか気になったが、自分も平気なのだから、そんなものか、と思っただ。

そして待っていると、霊夢が

「お待たせしました、フルーツゼリーです」

と運んできた。そして、カミラの前に置くと

「それでは、ごゆっくり」

と言って、下がっていった。それを見送ったカミラは、自分の前に置かれたフルーツゼリーを見た。その見た目は、自分が再現した物に瓜二つ。透明なゼリーとその中で浮いているように見えるたくさんのフルーツ。

「では……」

スプーンで掬ってから口に運ぶと、口の中で簡単に崩れ、更に仄かな甘味が広がる。

(やっぱり、柔らかさが全然違うわね……それに、果物も……完全に再現したいけど、ここでしか味わえないからこそ、楽しみなのよね……) 自分が再現し、今は売り子が代わりに作り売っているフルーツゼリーは、目の前のフルーツゼリーを再現しようと試行錯誤してみたのだ。

最高位の青の神官として、海底帝国の数万の人魚達を率いる立場のカミラは、海中に生息している様々な海産物の効果や作用を知っている。それらと偶々港街で入手した作物で、今のフルーツゼリーを再現したのだが、まだまだ理想の柔らかさには到達していない。

勿論だが、カミラは満足していない。

(また、知り合いの商人さんに色々と融通してもらおうかしら……)

カミラはそう考えながら、フルーツゼリーを満足行くまで堪能した。

10年前から、カミラは様変わりした。

それまでは、幾ら青の神からの直接の命令とは言えども、地上に行くというのはカミラからしたら、左遷にも等しいことだった。

しかし、フルーツゼリーを知り、それを再現したいと考えるようになってから、積極的に人に関わるようになり、病気になった人を治療したり、港街の漁師達の為に祈るようになったりして、そこを頼りにして、様々な物を入手するようになった。

そしてそこから、自分の考えも変わった。

そして気付いてみれば、港街も大分大きくなり、様変わりしていた。

「……人間も、愚かな者ばかりじゃないのね……」

今の不老長寿のカミラからしたら、非常にゆつくりとだが人間も前に進んできている。様々な物を作り出し、自分達の生活をより良い方向に進ませようとしている。

ならば

「……まだまだ、見守りましょうか……いずれ、復活する混沌から助けるために……」

遙か過去、自分が信奉する青の神を含めた六柱の神は、偉大なる創造神から命じられて、混沌を倒すために協力した。

何度も倒されそうになりながら、何度も地上の生命体が滅びそうになりながらも、六柱の神は自分達の眷属となった神官達と協力し、幾多の犠牲を出しながらも、混沌を撃滅した。

そうして、創造神の名の下に、ある契約が成された。

1、また混沌かそれに属する神が現れた場合、協力して立ち向かうこと

2、六柱の神同士は、決して争わないこと

3、六柱は、高位の神官を必ず各地に置き、混沌を監視させ、もしもの時は抑止力とさせること

カミラはその3つ目の契約を果たすために選ばれ、更には青の神の血を一滴与えられたことで、エルフ並みに等しい不老長寿を手にした。それにより、この60年は見た目はさほど変わっていない。

「お会計、いいかしらっ？」

「はい！ 少々お待ちください」

カメラが立ち上がると、偶々出ていた明久が受け取りに来た。そしてカメラは、胸元から取り出したお金を渡して、退店した。

この時の彼女は知らない、翌日に料理の研究の為に旅をしているエルフ達が出会うことを。

66 皿目 天津飯

「ではな、また来るぞ」

「はい、またのお越しをお待ちしてます」

最後の客たる赤の女王を見送りすると、店長は手を叩いて全員呼び「はい、全員お疲れ様だ」

『お疲れ様でした』

苦労と、全員は返答しつつ頭を下げた。そうして、明久が「それで、どうだったかな、霊夢ちゃん？」

と霊夢を見た。すると霊夢、今日1日のことを振り返っていく。最初は、神社の敷地内に出たドアの確実から始まった。そこからあれよあれよと、気付けば働くことになった。

「最初は驚いて、緊張して……まあ、いい勉強になったわ……まあ、疲れたけど……」

「その気持ち、分かります」

霊夢の言葉を聞いて、アレツタは同意するように頷いた。どうやら、初めて働いた時を思い出したようだ。

（咲夜がどういう仕事してるか、何となく分かったわ……今なら、素直に称賛出来そうよ……）

霊夢が思った咲夜というのは、幻想郷に住む人間の一人なのだが、吸血鬼が当主を務める紅間館という建物のメイド長をしている女性だ。能力もあるだろうが、その全てをそつなくこなす完璧なメイドである。

「さて、俺と明久で賄いを作るから、そっちでフロアの掃除を頼んだ」「分かりました」

早希の指示で掃除が始まり、明久と店長はキッチンに入った。

「さて、何を作りましょうか……」

「それなんだがな、これを倉庫で見つけたんだ……使わないとな」

明久が腕組みすると、店長が棚から缶詰めを取り出した。それを見て、明久は

「店長、それはどうしたんです?」

「確か、レオンハートの店長からお裾分けって貰ったやつだ。使わないと、もったいないだろ。高そうなやつだしな」

確かに、金色に輝く缶詰めは高そうに見える。

「んじやあ、メインは俺が作るから……」

「付け合わせは、僕がやりますね」

二人は分担して、料理を始めた。店長は卵と野菜を幾つか取り出し、明久は肉と野菜を取り出し、作り始めた。フロアの方からは、何やら楽しそうな会話が聞こえてくる。やはり、同年代が集まると会話は弾むようだ。

それを聞き流しながら、二人は手早く料理を作っていく。

店長は中華鍋を手慣れた感じで、振るいながら

(この鍋も、長いよなあ……よく壊れない)

と思っていた。その中華鍋は、店長が笑龍で修行している時から使っており、約20年近くになる。キッチンと手入れもしながら使っているために、愛着もある。

(まあ、使える内は使い続けるか……)

店長はそう考えながらも、手を止めずに調理を続けた。そして、約一時間後

「はい、お待たせ。天津飯」

「それと、回鍋肉だよ」

早希も一緒に、夜の賄いを持ってきた。

「天津飯……」

「なんていうか、不思議な見た目の料理ね」

アレツタと霊夢は、天津飯を興味深い様子で見っていた。確かに、初めて見たらかなり不思議な見た目だろう。茶色の餡が掛かった黄色い料理だ。

「そして、この料理だが……」

店長はそう言って、スプーンを入れた。すると、餡が掛かった卵の下から、ご飯が見えた。

「餡が熱いから、気をつけてくれな」

『いただきます』

店長の言葉に頷いてから、全員で食べ始めた。霊夢は、最初にスプーンでよそった天津飯を見て

(外の世界じゃあ、こんな料理も考えられてるのね……)

と思った。トロリとした餡もだが、卵には何か入っているのが分かる。

(と、見てるだけじゃなくて、食べないと……勿体ないし……)

霊夢はそう思っ、口に運んだ。次の瞬間、予想を上回った熱が一気に口の中に広がり驚いたが、すぐに対処。すると今度は、餡の味付けに使ったのだろう醤油と酢の風味が広がる。それだけでなく、卵の中から感じる蟹の確かな味わいと(ご飯から感じる出汁。それらが見事に調和し、疲れた体に染み渡る。

「……美味しい」

「それは良かった」

「良かったら、こっちも食べてね」

霊夢の呟きを聞いた店長は笑みを浮かべ、明久は回鍋肉を薦めた。先に食べていたアレツタが

「回鍋肉の濃厚な味と、天津飯の少し酸っぱい味がよく合います!」

と興奮していた。遅れて食べた霊夢も、アレツタと同じことを思った。

(本当に、この2つはよく合うわ……回鍋肉って料理は、凄く味が濃い……それに対して、天津飯は僅かな酸味……食べる手が、止まらなくなる……)

2つの料理の熱で汗が出るが、それも気にならない程に美味しい料理に霊夢は夢中になった。そして気付けば、天津飯も回鍋肉も無くなり、満足感が満たしていた。

(こんなに満足感を覚えるの、何時以来かしら……)

霊夢がそう思っていると、明久が

「霊夢ちゃん、今日泊まっていったら?」

と提案してきた。

「え……」

「いや実は、アレツタちゃんがその休憩室で一晩寝泊まりして、朝食を食べてから帰るんだ。だったら、ついでに霊夢ちゃんもどうかなって。一人増えるなんて、大差ないから。あ、朝食も出すよ」

霊夢が驚きで固まると、明久は説明しながら休憩室を指差した。確かに、早希も一緒に準備している。しかも、朝食も出すという魅力的過ぎる提案に

「……分かったわ、ありがたく泊まらせてもらうわ」

と提案に乗った。明久は頷くと、早希とアレツタに霊夢も休憩室で寝ることを知らせ、もう一組分布団を用意。

「それじゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

店長や明久、早希は自分達の部屋の階に行き、それを見送った霊夢とアレツタは

「え、えつと……ちよつと五月蠅いかもしれませんが、よろしくお願ひしますね」

「ええ……よろしくね」

二人は、一緒に寝たのだった。

67 皿目 鰯の塩焼き

「なーんか、久しぶりに見たな……このパターン」
「ですねえ」

早朝にフロアに降りてきた店長と明久が見つけたのは、ドアの前に倒れ伏している一人の男性だった。その格好から、恐らくは行商人だろうと予想する。

「お客さーん、起きてくださいーい」

「はっ!? 俺、生きてる!?!」

店長が声を掛けると、その男性はすぐに飛び起きた。

「あれ、ここ何処!?!」

「ここは、通称で異世界食堂と呼ばれてる所でしてね」

「お客様からしたら、異世界になります」

周囲を困惑しながら見回す男性に、店長と明久は説明した。それを聞いて、その男性は驚いた表情で

「ここが、あの噂の異世界食堂!?!」

と店内を見回した。その男性は色んな所を旅しながら、各地の特産品を売り、路銀を稼ぐ行商人だった。そんな中である噂を聞いていた。それが、異世界食堂だった。

曰く、美味な料理を手頃な値段で食べられる店。

曰く、一般人だろうが貴族だろうが、果ては魔族だろうが差別をせずに料理を出してくれる店。

そんな噂を聞いていた彼だが、実際に来るまで信用していなかった。

しかし、気付けばその噂の店に居る。困惑しない訳が無かった。だが、落ち着いて思い出してみれば

「そうだ……俺は確か、魔物に襲われたんだ……」

その原因となったのが、人々がよく通る山道で起きた崖崩れ。崖崩れにより、その山道が使えなくなってしまう、行商人は新しい道を探す為に山道を歩いた。しかし、それがいけなかった。

道に迷い、夜になってしまった。しかも木々が鬱蒼と生い茂っていたために、星を見ることも出来なかった。

更に最悪なことに、そこには亡霊レイスが集団で居た。多少腕には自信のある行商人だったが、流石に亡霊となると話は違う。

亡霊を倒すには、高位の神官から祝福を与えられた武器か魔法が付与された武器が必要で、どちらにしてもかなりの金額が必要なのだ。

しかし、行商人は持つておらず、全力疾走で逃げるしか取れる選択肢はなかった。だが、長時間歩いてから走るとなると、疲れから少しずつ追い詰められてしまう。

もう駄目だ、と諦めかけていた時、少しの光が見えた。

行商人はさすがの思いで光の方に走り、消え始めていたドアを開けて、そのまま飛び込んだ。

そして、今居る場所。閉店後の異世界食堂が安全だと分かると、疲労から寝てしまったのだ。

「まあ、何やら訳があったと思いますが……」

「それよりも、朝食は如何ですか？」

「なに？ いいのか？」

行商人からしたら、避難場所として勝手に使わせてもらったのが申し訳ない位だが、食事も提供してもらえるとというのは予想していなかったのだ。

「ええ、構いませんよ。実は、我々もこれからでしてね。一人分増えるても、負担はなんら変わりません」

「それに、お客様は空腹の様子。空腹のお客様を無視するなんて、出来ませんから」

実は先ほどから、男性の腹の音が聞こえていた。

「……すまない、貰えるか？」

「構いませんよ」

「そちらの席に座って、お待ちください」

いつの間にかやってきていた早希達が、机を拭いたりして準備していた。男性はその席に座り、待つことにした。そして、数十分後。

「お待たせしました、鰯の塩焼きです」

と早希が、男性の前にお皿を置いた。見事な焼き色の魚と、添えられている大根おろし。更に、ご飯と味噌汁を置いて

「ライスとお味噌汁はお代わり自由ですので、何時でもお申し付けください。それでは」

早希はそう言つて、店長や明久の座っている席に座り、男性の近くにはアレツタと霊夢が座っている。

男性は改めて、鰯の塩焼きを見た。

(塩焼きかあ……かなりしょっぱいんだろうなあ)

男性も行商人なために、保存向きの魚がどれ程しょっぱいかよく知っている。しかも、生臭い印象が強かった。

警戒しながら、箸で魚を解してみた。すると、パリツという音がして、芳ばしい匂いがした。

「まさか……」

一口食べて、男性は目を見開いた。

(これが、魚本来の味なのか!? 塩が程よく効いていて、身もふんわりしている!)

それだけでなく、生臭い感じが一切ないし脂が口の中に広がる。自分の知る魚との違いに、男性は驚きながらもライスを口に運んだ。

その時、霊夢が大根おろしと一緒に食べていることに気づき、男性も真似して食べてみて、再び驚いた。

(なんだこれ!? 少しくどい位だった脂が、サツパリとしている! それだけじゃなく、見事に調和している!)

そこからは、最早無我夢中で鰯の塩焼きを食べていた。ご飯と味噌汁をお代わりし、鰯を綺麗に食べた。

「お代だが……」

「ああ、銀貨一枚です」

「なに!？」

男性からしたら、まさに破格の値段だった。そんな値段は、港町でしか見たことが無かった。大都市だったら、最低でも銀貨5枚分程の値段はする。

「じ、じゃあ……これで」

「毎度」

「お客様、こちらはサービスのにおにぎりです。お持ち帰り下さい」

店長は銀貨をポケットに仕舞い、明久がおにぎりの入った紙の箱を差し出した。それを、男性が受け取ると

「お客さん、当店は7日に一度来れますよ。あ、次は6日後になりますかね」

と説明した。それを聞いてから、男性は退店し、消えていくドアを見ながら

「本当にあつたんだな、異世界食堂……」

と呟いて、自分が落とした荷物を見つけた。幸いにも荒らされた様子は無い。少し土や葉っぱを落としてから背負い

「よし……樽が本当なら、色んな所にドアがあるみたいだから……探してみるか！」

と言って、歩きだした。その後、入国した公国で長期保存出来る箱が有ることを知り、背負えるサイズを見つけると、それを使って港町と遠くの街を行ったり来たり of 行商人になり、魚の美味しさを伝えていくことになるが、この時はまだ知らない。

68 皿目 バーベキュー

「……これで、大丈夫だよな……」

「……多分……」

明久と店長は二人して不安そうにしながら、入り口辺りに貼った紙を見ていた。明久と店長には読めないが、異世界の言語でこう書かれている。

《本日限定、バーベキュー。各種取り揃えてます》

そして、朝から注文が殺到していた。

「おーい！ 肉の串焼きをくれー！」

「ついでに、海鮮のも頼むわい!!」

酒飲みたるドワーフ二人は、大ジョッキ片手に串焼きの肉やシーフードをガツガツと食べまくる

「生き物を食べるなんて……」

周りで肉やシーフードを食べている他の客に、少し不機嫌そうにしながらファルダニアとアリスが野菜の串焼きを食べている。今日は、バーベキューの日である。

バーベキューの日を考えたのは、先代店長の大樹だ。

大樹は何か夏らしいイベントは無いものか、と考えていたら、まだ小学生だった今の店長が学校のイベントでバーベキュー大会が有ると聞き、それをねこやの夏のイベントに採用した、というのがバーベキューの日の始まりであり、それ以来、夏の大人気イベントとなった。矢継ぎ早に繰り出される注文に、明久と店長は忙しく動いた。

「肉とシーフードの盛り合わせ、持っていてくれー！」

「野菜も出来たよー！」

「はい、わかりました！」

「持っていていきますー！」

明久と店長が怒涛のように串に刺しつつ、焼いて皿に盛ったのを、早希やアレツタ、クロ、霊夢が持つていく。普段なら定番メニューを頼む常連客達も、この日は好き内容の串焼きを頼んでいき、

怒涛のように消えていく。食べ終わった串は即座に回収され、洗われ
たらまた即座に食材が刺されては焼いて出す。ひたすらに、その繰
り返しだ。

この日ばかりは、何時もは出すサービス等は中々出せない。そちら
に手が回らないからだ。

フロアの四人も、ひっきりなしにカウンター辺りと各席を行ったり
来たりで忙しそうだ。

明久が見た限り、何時もの常連客達の他にはなのはやその娘のヴィ
ヴィオ、フェイトが仲良く食べていて、ゴブリンスレイヤーが牛飼
い娘、受付嬢の二人に挟まれて固まっていたり、何故か泣いてるシロエ、
直継、アカツキの三人が居たりと、割りとカオスな状態になっていた。
「見ない間に、何があつたのやら」

何があつたのか気になる明久だったが、忙しのために直ぐに意識を
調理に戻した。でない、幾ら店長とはいっても調理が追い付かない
のだ。そして、また怒涛に繰り出される注文を、明久と店長はこなし
ていく。

そして一息吐きながら、またカウンターから明久はフロアを見た。
すると、以前に来た傭兵だというレイとスケアクロウの他に、もう一
人が親しそうな様子で同じ席に座って串焼きをバクバクと食べてい
る。三人目はどうやら、ティナと呼ばれてるようだ。まあ、美味しく
食べられているならば、料理人冥利に過ぎるというものだ。明久はそ
う思つて、新しい食材を切り始めた。

また少しすると、明久はカウンターからフロアを見た。何時の間に
か、代理人とダミーが来ていて食べていたのだが、ダミーは純粋に楽
しんで食べていて、代理人は串焼きを食べては時々

「この味は……」

と何やら呟いている。恐らくは、タレの味を分析しているのだろ
う。串焼きだが、素材への味付けはほぼしておらず、焼いてる途中と
最後に塗っているタレに秘密がある。ねこやのバーベキュータレは、
先代店長から受け継がれ、それを守りながら去年更に改良したもので
ある。

(さあ……隠し味のすりおろした桃には気付くかな!!)

その桃も、知り合いの八百屋が数有る桃農家の中から厳選した桃を使用している。代理人は、それに気付くだらうか。そう思っていると「串焼きの盛り合わせ、お願いします!」

「ごつちも、盛り合わせだ!!」

と注文が入って、明久と店長は調理に戻った。こうして、バーベキューの日は過ぎていく。フロアは賑やかに、会話の音が響きながら。

69 皿目 スコッチエツグ

その日、彼。エミリオは朝から緊張していた。まず、エミリオの目の前に居るのが、彼が信奉する赤の神に使える神官の中でも大物のルシアだということ。

「よくいらして下さいました。貴方のことを、私達は心から歓迎します」

「は、はい……自分のような修行中の身の若輩者が、神聖なこの地で修行させてもらうことを、光栄に思います」

当代屈指の大神官、ルシアは緊張しているエミリオの頭を、彼の身長の上半分以上はある尾で優しく撫でた。

ルシアは、人ではなく亜人の一種たるラミアだ。女性の上半身に大蛇の下半身の一族で、女性しか存在しない。

そんなルシアの一族は、長い間赤の神に使えてきた一族で、エミリオの聞いた話では今から約1000年以上昔にあつたエルフの一族との戦争において、赤の神から与えられた強大な力でエルフを焼き尽くし、ルシア自身も今から約10年近く前に起きた他の神の神官戦士との戦でたった一人で相手を撃滅させたという逸話がある。

そんなルシアの年齢は50を超えている筈なのだが、肌の艶も色香も、全くそう思えない程に若々しかった。

その理由は、赤の神から直々に与えられた一滴の血によりエルフに近い不老長寿を得たからだ。

(やはり、僕は……)

その時、ふとエミリオの心中は暗くなった。

神官としては未熟なエミリオだが、他には無い才能が確かにあつた。それは、《少女のような可憐な容姿》だ。

何時も男らしさを求めるエミリオからしたら、どうしても無視出来ないのだ。

男と気付かれなかったり、《男だと認識しながらも》愛を囁かれたことが何回もある。男らしさに憧れて、髪を短くしたり男らしい服装を

したりとしてみたが、今のところ効果は無い。

ルシアがそういった面を見たのなら、エミリオからしたら複雑だ。

「大丈夫ですよ……貴方は、確かに私が見込んだのですか」

ルシアはそう言つて、再び尾でエミリオの頭を撫でた。先に述べたが、ルシアはラミアであり、そしてラミアは、女性しか存在しない種族の亜人だ。

「どうやって子を為すかというところ、定期的に人の男性と交わって卵を産み、それから産まれるのだ。」

そしてここ、赤の神殿の総本山とも言うべき聖殻神殿には、ルシアを含めて多くのラミアが保護され、繁殖している。

しかし、単独で繁殖出来ないために、ある地方のラミアは危険な存在として大多数が討たれてしまい、絶滅の危機にあるらしい。

そしてエミリオは、ルシアの案内で聖殻神殿の奥へと進んでいく。すると、ある場所に入れば多くのラミアが人間の赤ちゃんサイズの卵を抱えてトグロを巻いている姿が見えた。

「今日は特別な日……特別に、聖地へのご案内いたしますわ」

そう言つて、ルシアはエミリオを先導して進んでいく。

「せ、聖地ですか？」

「ええ……私達にとつても……そして、貴方にとつても特別な聖地ですわ」

エミリオが困惑した様子で問い掛けると、ルシアは愛を囁くように耳元で囁いた。

すると、何人かのラミアが

「ほら、あれがルシア様が仰っていた方よ」

「まあ、素敵。流石はルシア様ね」

「あら、あちらは……ああ、今日はドヨウの日だったのね」と会話していた。

(ドヨウの日?)

初めて聞く言葉に、エミリオは困惑しながらもルシアの後に続いた。そうして進んでいると、神殿に居るとは思えない場所。洞窟に

入った。

「ここが……いえ、納得しました……濃密な、赤の神のお力を感じます」

如何に未熟とはいえ、エミリオも赤の神官。自身が信奉する赤の神の気配と力に気付かない訳がなかった。

「ええ、そうでしょうね……では、案内をします……着いてきて下さいね」

「は、はい」

ルシアの後に続き、エミリオも洞窟に入った。どうやらある程度は手入れされているようで、歩くのには困らない。

「なるほど……大切な物とは……」

進んでいく内に、どんどん強くなる赤の神の力。恐らくは、遙か太古に混沌と戦い、剥がれ落ちた赤の神の鱗。そして、もう一つが

「はい……私達の娘です」

そこには、まだお腹が大きいラミアや、小さなラミアを抱えたラミアが居た。

「あの娘達が抱えている卵は、孵るのに時間が掛かります……季節が3つは経たないと、産まれてきません……」

ルシアはそう言っつて、一人のラミアに近づいた。すると、そのラミアは振り向いて

「ああ、お祖母様……どうかされましたか？」

とルシアに問い掛けた。どうやら、孫娘のようだ。

「楽にして頂戴、ルーミア……今日は、貴女が行く予定だったと思うけど……今日はお客様をお連れしたのよ」

ルーミアは、ルシアの言葉でエミリオに気付いたようで

「初めまして……ルーミアと申します。よろしくお願ひしますね、神官殿」

と優雅に一礼した。

「それでね、ルーミア……」

「大丈夫ですよ、お祖母様……その代わりに」

「ええ、アレね……分かっているわ」

ルーミアの言いたいことを察し、ルシアは優しくルーミアの頭を撫でた。

「あの……アレ、とは……?」

「すぐに分かりますわ」

話に着いていけないエミリオは混乱しているが、ルシアはそんなエミリオの手を握り、更に奥へと進んだ。すると、あまりにも場違いな物を見つけた。

「え……なんで、こんな所にドアが……?」

「ふふ……これは、今から約10年前に私どもの信じる神が授けてくださった神の地へと繋がるドアですわ」

ルシアはそう言っ、ドアの取っ手を掴んで引いた。

そして、ドアが開いた直後

「うわっ!?! なんだ、この濃密な赤の神の力は!?!」

エミリオは、まるで粘液のような濃密な赤の神の力に驚いた。そんなエミリオに、ルシアは微笑み

「覚悟してくださいね……このドアの先は、我らが赤の神から与えられた神のごとき料理が提供される場所なのですから」

と言っ、エミリオの手を引いてドアを潜った。すると、心地よいベルが鳴ったかと思えば

「いらっしやいませ、洋食のねこやへ。空いてる席にご案内します」

そんな二人を、霊夢が出迎えた。そして霊夢の案内で、二人は近く空いてる席に案内されて、座った。

そして、エミリオは周囲を見回してから

「……色々な方がいらっしやってるんですね……」

と驚いた。ライオネルにガガンポ、タツゴロウにアルトリウス。そして何よりも、途中と奥に居る光の高位神官達。あまりにも、統一性が無い。

「ここは、通称異世界食堂……私達からしたら、異世界の食べ物屋になります……」

ルシアが説明すると、霊夢がおひやとメニューを持ってやってきて「こちら、おひやです。メニューは……」

「それでしたら、既に決まっています。スコッチエッグをお願いします。私達の分は、半分は完熟でもう半分を半熟。付け合わせは、パンでお願いします。それと、お持ち帰り用に20個程とテキーラを……エミリオ様も、それでよろしいですね？」

「は、はい……お任せします」

まだ状況を把握していないエミリオは、ルシアに任せることにして、頷いた。そのやり取りを聞いた霊夢は、手早く注文表に書いてから

「はい、承りました。お持ち帰り用のは、お帰りの際にお渡しします。では、少々お待ちください」

と答えて、奥に下がった。それを見送ったエミリオは再び周囲を見渡し、それを見たルシアは

「珍しいですか？」

とエミリオに問い掛けた。

「はい……ここは、赤の神の聖地なのですよね？ 先ほど食べ物屋と仰ってましたが……」

「はい、その通りです。何しろ、赤の神が自ら来店する場所なのですから」

「ええ!? 赤の神御自らですか!？」

ルシアの話を聞いて、エミリオは驚くと同時に納得してしまった。それならば、店内に満ちる濃密な赤の神の力が説明が付くからだ。

「はい……それもこれも、このお店の食べ物が美味な為ですわ……幸い、赤の神が訪れるのは真夜中のようなですから、その前にお暇しましょうね」

「は、はいー」

神官団でも会えるのは極僅かな赤の神に直接会うなど畏れ多い為、エミリオはルシアの言葉に素直に頷いた。それから少しすると「お待たせしました。スコッチエッグです。では、ごゆっくり」

と明久が、二人分のスコッチエッグを持ってきた。明久が置いた2つの皿の上には、小さな丸いマルメットと薄い緑色の葉野菜。そして赤い彩りのペーストと肉に、白い卵が幾つか乗っている。

「美味しそう……」

「その結論は早いかもかもしれませんが、味は私が保証します。では、いただきますでしょうか」

「は、はい」

ルシアに促されて、エミリオはパンを持った。すると、ルシアが「この切られているのが、完熟。こちらの切られてないのが半熟です。先に完熟から、いただきますでしょうか」

「はい……あの、こちらは何故切られてないんですか？」

「ふふ……その理由は、後程」

エミリオからの質問に、ルシアは微笑みながら返答。気になりながらもエミリオは、パンを一口食べて

「あ、美味しい……」

と呟いた。エミリオの知るパンより遥かに柔らかく、更には仄かに甘い。

「それはパンという食べ物だそうで、コムギという植物の実を挽いてから固めて焼く食べ物だそうですよ」

「コムギ……聞いたこと無いですね」

勤勉家なエミリオでも、小麦のことは知らなかった。しかし、美味しいのは事実であり、エミリオが一つ食べきると

「パンも美味ですが、スコッチエッグを食べましょうか」

「は、はい」

ルシアに言われて、エミリオはスコッチエッグを見た。まるで、様々な色で構成された年輪を彷彿する料理に、エミリオは息を飲んだ。そして、肉と野菜、そして完熟の卵を一緒にして食べた。すると口の中に、肉の濃厚な脂と野菜の瑞々しくも仄かに甘い味、そして卵の濃厚な味が一気に広がった。

「美味しいー！」

「ふふ……それは良かった。次は、そのチリソース。赤いペーストを、お肉に着けて食べてみてくださいませ」

「はい、分かりました」

ルシアの言葉を聞いて、エミリオは牛肉にチリソースを少量着けて

から口に運んだ。次の瞬間

「辛っ!？」

余りに予想外の味に驚いたが、直ぐにその美味しさに気付いた。確かに、食べた瞬間はその強烈な辛さに驚いた。しかし、直ぐに野菜と卵により辛さが中和され、肉の旨味を引き出していた。だから気付けば、汗を滴しながら、エミリオは完熟卵を全て食べていた。

そして残ったのは、半熟の卵。

「こちらの半熟ですが、注意してくださいね」

ルシアはそう言つて、先に肉にチリソースを着けてからその上に半熟卵を乗せた。見よう見まねで、エミリオもやってみたが、その時に気付いた。

(完熟のより、柔らかい?)

卵が完熟のものに比べて、柔らかい。不安さえ覚える柔らかさだが、ルシアが気にしてないのだから、それで正解なのだと言い聞かせた。そして、ルシアに続いてナイフを入れた直後

「わっ!? 中から!？」

「はい。半熟というのは、半分だけ固まった状態なのつです」

ルシアはそう言つて、卵が絡んだ肉を食べた。それを見習い、エミリオも食べた。すると、先ほどの完熟とは違って口全体に卵の強い風味が広がって、チリソースとよく絡んでいる。

「うわ……」

「ふふ……この完熟と半熟、どちらが美味しいか……このお店に来て以来、一度も決まらないのです」

「ですが、納得出来ません。どちらも、甲乙付けがたい」

ルシアの言葉に、エミリオは納得した。エミリオも、どちらが美味しいかと聞かれたら答えられない自信がある。その後、二人は全て食べ終わり

「ふう……美味しかったです」

「ふふ、それは良かったです」

線は細いが、見事に完食したエミリオに、ルシアは男らしさを感じた。すると、明久が霊夢と一緒に現れ

「こちら、お持ち帰り用のスコッチエッグ20とお酒です。お待ちせしました。」

と言つて、ルシアとエミリオの前に置いた。数を数えたルシアは「確かに。ありがとうございます」

そう言いながら、胸元から銀貨を数枚取り出し、明久に差し出した。枚数を数えた明久は

「はい、確かに。またのご利用をお待ちしています」

明久と霊夢に見送られながら、二人は退店。出迎えたラミア達にスコッチエッグを配った。

後に、ルーミアとの間に10人以上の娘を作る名神官の始まりになる。

70皿目 麻婆豆腐

客も一段落し、明久と店長は賄いを作るために冷蔵庫を開いていた。

「えっと……玉葱に挽き肉、ネギか……」

「こりや、アレだな」

「ですね」

そして二人は、調理を始めた。店長がメイン料理を作り、明久がスープを作る。そこに、フロアーの片付けが終わったらしく、霊夢が現れて

「フロアーの掃除は終わったわ。アレツタとクロは倉庫に行つて、早希は食器を食器洗い機に入れてる」

と報告した。それを聞いた店長は、洗つて絞つた布巾を差し出して「だったら、休憩室の机を拭いておいてくれるか？ これからお昼にするからな」

と頼んだ。布巾を受け取つた霊夢は、頷いてから休憩室に向かっていった。それを見送りつつも、店長と明久は調理を進める。

そして、食器洗い機に食器を入れてきた早希にも休憩室に向かわせ、倉庫から戻ってきたアレツタとクロに出来た賄いを運ぶのを手伝ってもらい

「お待たせ」

「今日の賄いは、麻婆豆腐だ」

机の上に、賄い料理たる麻婆豆腐を各人の前に置いた。付け合わせとして、春雨とワンタンのスープもある。

「麻婆豆腐ってことは、豆腐を使った料理なのね……」

「そうそう。熱いから、気を付けてね」

霊夢の呟きを聞いた明久は、スープを置きながら注意を促した。確かに、立ち上る湯気がその熱さを物語っている。

そして、全員が席に着くと

『いただきます』

何時もの挨拶をしてから、食事が始まった。

そして、一口食べた霊夢が

「確かに熱いけど……少し辛いのが癖になる美味しさね」

と評価し、もう一口食べるとご飯を口に運んだ。

それを横目に見つつ、店長は過去に思いを馳せた。

実は店長は、一時期は中華料理店の店長になるつもりで修行していたのだ。しかし、事故で他界した両親の代わりに面倒を見てくれた先代店長の木村が病気で倒れ、そのまま他界してしまったために、ねこやを継いだ。

その影響で、賄いには店に出ないメニューとして中華料理がよく出ることがある。

今回の麻婆豆腐がその例になるだろう。

実は、今回の麻婆豆腐の調理に使った中華鍋は、その修行時から愛用している代物で、修行先だった笑龍で貰ったものだ。修行時から愛えると、10年以上は使っている。

(本当、物持ちがいいな……俺は……)

店長はそう思いながら、自分で作った麻婆豆腐を食べた。霊夢が言った通り、少し辛めの味付けが癖になる。

この味付けも、笑龍で教えられたものだ。

店長を鍛えた笑龍の店長は、四川料理店で修行したらしく、全体的に少々辛めの味付けが好みらしいが、お店では子供向けも考えて辛さを変えられるようにしている。

それはさておき、次に明久が作ったスープを口にしました。

鶏ガラスープの中に、短めに切られた春雨と小さめのワンタンがあり、春雨には鶏ガラスープが染み込み、ワンタンはエビが入っていて噛む度にプリツとした食感が楽しめる。

(……ある意味、良い拾いものだよな……)

明久の料理人としての加入は、本当に助けだった。平日は他の料理人も居るが、良い刺激になっていて、土曜日は時々忙しい時の見事な仕込みや分担して作れるようになっていた。更には、新しい料理のレパートリーも増えた。

特に、明久の得意料理だったパエリアに関しては、店長も驚きだった。実は店長も、パエリアは作れるがどうにも満足していなかったために、賄いにも出さない料理だったが、明久のパエリアでその違いに気付いて、最近では少しずつ改良してきていてメニュー入りも間近になってきている。

「店長、お代わりです！」

「はいよ」

その時、アレツタがご飯のお代わりをしてきたので、店長は意識を戻してアレツタが差し出してきた器にご飯をよそったのだった。

年末

「さて……今年も終わりだな」

「ですね」

明久と店長は、最後の客の見送ってから毎年恒例の年越しそばの準備を始めた。

蕎麦は商店街の老舗蕎麦店から貰った物で、味は保証済み。ならば、それを活かすも殺すも自分達次第である。

「今年は、色々の良い素材も集まったしな」

「ですね。今年は、ちよつと豪華に出来そうですね」

そしてキッチンには、年越しそばに乗せるネタ用のエビの他に様々な素材がある。それらを見て、明久と店長は袖捲りし

「さてと……俺は蕎麦を茹でながらかき揚げを作るが……」

「僕は出汁を作りながら、エビの天ぷら、大葉の天ぷら、シイタケの天ぷらを作りますね」

役割分担し、調理を始めた。

例年は年越しそばの具は、エビの天ぷらとかまぼこ位だが、今年は色々な業者から様々な物が入手出来たのだ。

店長は丁寧に蕎麦を茹でながら、かき揚げを作り始め、明久は出汁を作りながら三種の天ぷらを作り始めた。

とはいっても、出汁は前日から準備を進めていて、後は最後の仕上げとして合わせてから熱する位である。

つまりは、天ぷら位だ。

エビは下ごしらえとして、殻を剥いてから内臓を取り出し、水洗いしてから少し茹でてから水で冷やして絞める。次にシイタケも傘の根っこ部分で切り離しておく。

大葉は水洗いして、キッチンペーパーで拭いておく。

そして、衣用に小麦粉を水と山芋で溶いたのを用意し、エビ、シイタケ、大葉に薄く着けていく。

厚く着けると、揚げるのに時間がかかってしまい、下手したら中の

具に影響が出てしまうし、かき増しになる。

それを適温に温めておいた油が入った鍋に、丁寧に入れていく。

その後は、各種に合わせて揚げていく。

そして、後は店長が茹でた蕎麦を入れた器に明久が作った出汁を掛け、かき揚げ、エビ、シイタケ、大葉の天ぷらを別のお皿に乗せておく。天ぷらは各自好きなように食べる形にし、蕎麦の上にはかまぼことネギ。ほうれん草のお浸しを添えておく。

そうして出来たのを、店長、明久、早希の三人でフロアーまで運び

「さて皆……今年一年、お疲れ様」

「年越しそば作ったから、食べようか」

と言つて、全員の前に置いた。

年越しそばを見て、霊夢が

「こんなに豪華なの……中々無いわね……」

と感嘆していた。幻想郷でも年越しそばは食べられるが、特に霊夢はいつも質素な物になる。

「うわあ……衣サクサク……これは、水だけじゃない……」

早希は大葉の天ぷらを出汁に浸けてから食べたが、その衣のサクサク具合に驚いていた。霊夢は蕎麦を一口すすり

「蕎麦もだけど、出汁も凄い美味しいわ……店長さん達、凄いわね……」

と素直に感嘆していた。

幻想郷の食生活は、和食が大半な為に蕎麦や出汁には慣れている霊夢でも、その美味しさに驚いていた。

そこから少しの間、蕎麦を啜る音だけが店内に響いた。そして食べ終わると、店長が立ち上がり

「さて皆、今年一年お疲れ様。特に問題もなく、今年を無事に越せたのは皆の協力あってこそだ。来年も、よろしく願います」

『よろしく願いますー！』

店長に続いて、全員が頭を下げた。

こうして、ねこやの一年は幕を下ろした。

71 皿目 スコーン

「おーす」

「あ？ なんだ、珍しい……って、ああ……あの時期か」

ある朝、キムラベーカーリーからパンを受け取った後、フライングパピーの店主が現れ、店長は珍しそうにしてから、すぐに気付いた。

「ああ……イチゴフェアの時期ですか」

「おうよー」

明久が言った後、店主は脇に抱えていた紙袋からイチゴジャムが詰められた瓶を幾つか取り出して、近くの机に置いた。そして、近くに停めていたゴンドラの上に置いてあったケースから、キツネ色に焼かれた丸いパン。

スコーンを取り出して、机に残っていた皿に幾つか置いた。

「スコーンってことは、試食か」

「ああ！ 今年はいいいイチゴを入手出来てな、試しに作ってみたらめっちゃ旨く出来たんだ！ まあ、量は少ないが、味で勝負よー」

店主は元気よく言いながら、スコーンとジャムをアレツタやクロ、早希と霊夢の方に差し出した。

店主が焼いたらしいスコーンは、全くのプレーンの物で味は素材と僅かに使ったバター位だろう。だが、それ故に味付けとなるジャムの味わいが遺憾なく発揮される。

「という訳でだ……味見頼むわ！ 俺も味見したが、やっぱりお前の方が正しいからな！」

「お前な……少しは自信を持ってやれよ……」

店主の言葉に、店長は半ば呆れた様子で立ち上がって店主が置いたジャムとスコーンを見た。

スコーンの形は少し歪だが、そもそもスコーンに定形は無いから問題にはならない。だが、イチゴジャム。

店主はよほど特殊な物以外は、自分で作って店で販売している。イチゴジャムは、一年中販売しているジャムの定番だが、イチゴフェア

の時は更によりを掛けて選んだイチゴをじっくりと煮込んで作るのだ。

「ふむ……砂糖自体は控えめにしてるな……」

「ですね……それによって、イチゴ自体の甘さと酸っぱさが際立って
ます……」

「流石、分かるか」

店長と明久は、一口サイズに切ったスコーンにジャムを塗り食べるから、自分達の評価を口にした。少し遅れて、早希とアレッタ、クロと霊夢も食べて

「これは……そもそもの素材のイチゴが凄い甘いんですね……砂糖の甘さが、そんなに感じられない……」

「ふわあ……お砂糖を使わないで、こんな甘さが出せるんですね……」
(甘くて、クセになる……)

と三人は、概ね好評価だった。

そして霊夢は

「へえ……洋菓子ってこんな味わいなね……不思議……」

と不思議そうにしながらも、更にスコーンを食べた。霊夢は休憩時間には、基本的に紅茶しか飲まないため、クッキーは食べず洋菓子分野の味は知らなかったようだ。

しかし、そんな霊夢も毛嫌いせずに食べていることから良い評価と判断した店主は

「うしっ……明日から、このイチゴジャムを売り出すか……つと、アレッタちゃん」

「はい、なんででしょうか」

アレッタが振り向くと、店主はゴンドラの下から別の紙袋を取り出し

「ほい、これ」

とアレッタに差し出した。そのサイズから、渡したのはアレッタが定期的に買うようになったクッキーの最大サイズの缶なのは確かだが、アレッタは少し首を傾げながら中を確認して

「て、店主さん！ これって!?!」

と中から、イチゴジャムの瓶を二つ取り出した。

「おうよ！ アレッタちゃんはウチの常連さんだからな！ 何時ものクッキー缶二つ。そして、100ポイントとして今回はジャムをプレゼントだ！ 一応長期保存用に砂糖は少し多めにしてあるが、早めに食ってくれな」

「ありがとうございますー！」

店主の言葉に、アレッタは頭を下げてからロッカールームに入った。恐らく、帰りに持って帰るために仕舞っておくのだろう。

それを見てから店主は、多少世間話をしてから自分の店の仕込みのために戻っていき、ねこやは開店のためにキッチンに向かったのだった。

72 皿目 ハムカツ

「これで、いいかな……つと」

鏡が無い為にちゃんと確認出来ないが、少し癖つ毛の焦げ茶色の髪に櫛を通し、滅多に着ない一張羅を着て、彼女。エレンは納得した。彼女は丸太で建てられた家の夫婦の為の部屋で、準備をしていた。普段着ている袖口がボロボロの服ではなく、結婚式や街への買い物や木材の売り込み位にしか着ない一張羅を着て、花を煮詰めて自作した口紅を塗り、エレンは部屋から出た。

そして、狭い居間で待っていた家族に

「どうかな、これ」

と問い掛けた。しかし、三人の子供は

『母ちゃん、早く行こうよ！ お腹空いた！』

と元気よく、エレンに抱きついた。そして、旦那たるヘルマンは「おう、よく似合ってるよ。それじゃあ、早く行こうか」

と軽く言って、椅子から立ち上がった。心の込もってない言葉に、少しイラツとしながらも、行くことにした。

家から出ると、大きめの倉庫の隣にあるロバ用の厩舎に向かう。その厩舎の端に、目的のドアが有った。

ねこやのドアだ。

「じゃあ、開けっぞ」

ヘルマンはそう言うと、ドアをゆっくりと開けた。カウベルが鳴り「いらっしやい、ヘルマンさん、エレンさん」

「いらっしやいませ」

店長と早希の二人が出迎えた。店長はヘルマンとエレンが結婚する前からの知り合いで、随分と長い間の付き合いになる。

「今日も何時も通りで？」

ヘルマンとエレンの二人は、異世界の文字が読めない。それを店長は、先代の頃からの付き合いで知っているので、メニューは渡さない。

それに、この数年は一家として注文は変わらない。

「おう、日替わりを4人分だ」

「今日の日替わりは、なんですか？」

「今日はハムカツです。パンがよく合うと思いますよ」

「それじゃあ、パンで頼むわ。何時も通り、パンとスープを先に持ってきてくれ」

エレンからの問い掛けに、店長は朗らかに答え、早希はパタパタと明久の居るキッチンに向かった。

料金が多少安くなる日替わり定食だが、その中でも一番安い料理なのが、ハムカツになる。

店長は五人の案内をアレツタに任せ、キッチンに向かった。

そして座ると

「母ちゃん！　アイス食べたい！」

「オレはコーラが飲みたい！」

と上二人の兄弟が、月一の贅沢で駄々を捏ねた。アイスは最近広まってきたようだが、高い為に貴族御用達。コーラは、このねこやでしか飲めないからだ。

するとエレンは、ため息交じりに

「あのね……ウチには、そんな余裕が無いのは分かってるだろ。ねえ、アンタ」

とヘルマンに同意を求めた。するとヘルマンは、気まずそうに頬を掻いてから

「……すまん、俺もビール飲みたい」

と僅かに、視線を逸らした。ヘルマンのその言葉に、エレンは深々とため息を吐いて

「アンタねえ……大人として領いてほしかったよ……」

「明日から、切る木の数増やすからよ……それで手打ちにしてくれねえか……？」

ヘルマンが両手を合わせて頭を下げると、エレンは

「……アイスかコーラ、どっちかにしなさい。両方はダメ。それと、ビールは瓶で……アタシも飲むから」

『やったー!!』

「割り増しで頑張ります」

僅かにヘルマンを睨みながら言うと、息子二人は大喜びで話し合い始め、ヘルマンは深々と頭を下げた。

家計を一手に引き受けてるエレンに、ヘルマンは弱かった。そしてエレンは、近くを通った霊夢に追加で注文し、料理を待った。

ヘルマンとエレンが異世界食堂に来るようになったのは、今から約十数年前になる。

その時の二人はまだ結婚しておらず、力はあるが上手く交渉や計算が苦手なヘルマンをエレンが支えていた。

そんなある日、準備をする為に厩舎に向かったヘルマンがまるで転がるように小屋に戻ってきて

『厩舎に、変なドアがある！』

と教えてきた。聞いた時は、また変なキノコでも食べて幻覚でも見たか、と思ったが、見てみたら本当にだった。恐る恐る開けたら、異世界食堂だった。

その時は大樹と手伝いに来ていた今の店長の二人だったが、その時から日替わり定食を頼むようになっていた。

とはいえ、貧乏な木こりが来店出来るのは、月に一度だけ。仕事の幅を広げたら、話は別だろうが、字も読めず学の無い二人には無理な話だった。

その後、大樹が病気に倒れて、今の店長に代わり、二人が結婚して子供が産まれてからも月に一度の贅沢は続いている。

その時、五人の前にパンとスープが運ばれ

「お先に、パンとスープです。ハムカツとビール、アイスはハムカツと一緒にお願いしますね」

とアレツタは伝え、去っていったのだが、ヘルマンがそんなアレツタのお尻を見ていた。だからエレンは、ヘルマンの耳を掴み

「アンタ……?」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

少々だらしのない旦那ヘルマンを躡るエレンのも、妻の役目だった。願わくば、上

二人にはこんな風にならないでほしい。

ヘルマンが謝ったので耳を離し、エレンはひとつのパンを2つに割ってからバターを塗った。

暖かいパンの熱でバターが溶け、食欲をそそる。

一口食べれば、口の中にパンの甘さとバターのほのかな塩気が合わさり、幸福感が満ちていく。

初めて食べた時は、その美味しさと柔らかさに驚いた。

二人が知るパンは固く、塩気が強かった。

しかも、それがお代わり自由。

スープも、来る度に味が違う。今回はコーンスープだ。

しゃきしゃきとしながら、甘いコーン。それと、塩気のあるスープが見事に調和している。

(ああ……頑張つてよかった……)

エレンは家族と一緒に、スープとパンのお代わりを貰いながら、この1ヶ月を振り返った。

自分を見下して、安く買おうとする商人と激しく交渉し、旦那がどういふ訳か熊を倒してきたりと、忙しかった。しかし、それらは全てこの異世界食堂で料理を食べるのを活力にしたから、出来たこと。

その時

「お待たせしました、ハムカツです」

と五人の前に、料理が運ばれてきた。見事なキツネ色の衣の料理だ。料理を持ってきた霊夢は、ソースを指し示して

「そちらのソースを掛けても、美味しいですので、ご自由にどうぞ。では、ごゆっくり」

と説明してから、去っていった。そして、またヘルマンの耳を掴んでから

「いただきます」

『いただきます！』

と全員で言ってから、食べ始めた。先にヘルマンが、ソースを全体に掛けてから

「ほれ」

とエレンに渡した。エレンはほんの少し掛けた。

そしてエレンは、ナイフでハムカツを半分に切った。厚さ1cmはあるが、片方は間にチーズが挟まっている。

(今回は、チーズ入りとそうでないのか……)

何回か食べてるハムカツだが、その度に中身が違う。前は間に酸っぱいの(梅干し)が入って、さっぱりしていた。

エレンは堪らなくなり、口許に運んだ。

サクツというこ気味の良い音と共に、口の中に甘辛いソースの味。そして、香辛料とハーブ、肉本来の味が広がり、見事に調和している。

「んー！」

エレンはハムカツの美味しさに、思わず頬を綻ばせ

「うめえー！」

「美味しいー！」

子供達はソースを着けずに食べ、笑みを浮かべている。ヘルマンは豪快に切らずに食べ、一気にビールを飲み

「あつー！ やっぱり、揚げ物の後にビールは最高だなー！」

と声を上げた。この時、ヘルマンは気付かなかったが、カウンター席に座っていたアルトリウスが同意するように頷いていた。

そしてエレンは、チーズ入りハムカツを、新しく持ってきてもらったパンに切れ込みを入れてから、キャベツと一緒に挟み、食べた。

(んー！…これがあから、この店での揚げ物はやめられない！)

ハムカツサンドを食べてから、ビールを飲む。それが、エレンの少ない楽しみだった。

揚げ物サンドが、エレンのねこやでの楽しみのひとつだった。以前に店長から聞いて始めてから、外れたことのない食べ方だ。

ふと気付けば、一番下の娘以外が同じ食べ方をしている。娘はまだ口が小さい為に出来ず、少し悔しそうにしているが、元々の料理が美味い為に直ぐに機嫌は直る。ねこや様々だった。

そして食べ終わると、明久が来たので

「それじゃあ、お勘定をお願いします」

と言って、財布ごと渡した。これは、先代店長の頃からのやり方で、

店長や明久を信頼しているからのやり方だ。

「はい、毎度ありがとうございます」

お金を取った明久は、財布をエレンに返した。大分軽くなった財布を仕舞い、一家は退店。

一張羅から何時もの服に着替え、ヘルマンと上二人は明日の準備。エレンと娘は、今日出来る縫い物をすることにしたのだった。

73 皿目 スイカシャーベツト

「さて……どうするか、これ……」

「流石に、このサイズは中々……」

お盆の土曜の朝方、店長と明久は目の前の緑と黒の縞々模様が特徴の夏の果物。スイカを見て唸っていた。

それは今朝の搬入の時、野菜を何時も卸してくれる業者がオマケにと渡してくれたものだ。今年は少し不安な天候だったが、予想外に大きくかつ甘く育ったらしい。

確かに、サイズはかなりの物で、量ってみたらなんと10kg近くあった。

流石にそのサイズとなると、消費するのも一苦勞になる。

一頻り唸った店長は、うん、と頷き

「うし……困った時の知り合いだな」

「ああ、フライングパイプの店長さんですか」

明久の言葉に、店長は頷いた。

意外に知られていないが、フライングパイプの店長は一流のパティシエであり、国際大会に出場した経験もある。更に言えば、季節ごとに様々なお菓子を考案・開発しているので、デザートのパートリ―は店長や明久を圧倒している。

「んじゃ、後で何か良いのがないか何種類かメモ貰ってくる」

「分かりました」

一先ずそう決めた二人は、一度スイカを仕舞ってから仕込みを始めた。そして、翌日の早朝。

「おはようございますー！」

「おはようさん」

「おはよう」

何時ものように起きて、朝食を食べてから

「それじゃあ、私達は帰りますね」

「あ、待って。アレツタちゃん、霊夢ちゃん」

帰ろうとしたアレツタと霊夢を、明久が呼び止めた。二人が振り向くと、明久と店長が

「アレツタちゃん、自分から注文して忘れないでくれ」

「ああー。そうでした、ありがとうございます！」

「はい、これ」

「これは……」

それぞれ、ビニール袋を手渡した。

アレツタに渡したのは、メンチカツサンドが三人分と大サイズのクッキー缶。霊夢には、おにぎりの詰め合わせ。

そして、共通して一つの魔法瓶があった。

「あの、このポットは……」

「ん？ 昨日の夕食に出したデザートが入ってる。まだまだ余ってるから、持って帰っていいよ」

「魔法瓶だからまだ保つけど、早目に食べてね」

「そんな！ 魔法の瓶まで！」

「いいからいいから」

「流石に、食べきれないからね」

魔法瓶の事を聞いたアレツタは、魔法道具と勘違いしていたが、明久と店長に押されて受け取った。そして二人は帰宅した。

時は少し遡り、サラの別荘。

その自室で、サラはウンウン唸りながらペンを走らせていた。そんなサラが見ているのは、従兄のウイリアム・ゴールドjrから貰った手帳だった。

サラは手帳を貰った後、一度実家に戻って親族にウイリアム・ゴールドjrが生きてる事を知らせ、証拠として手帳を差し出した。

その手帳は、ウイリアム・ゴールドが直接jrに渡した物で、途中までは確かにウイリアム・ゴールドの筆跡。

そして後半は、jrの特徴的な字なことが分かった。

分かったのだが、余りにも字が特徴的過ぎて実家の親族には中々読めなかった。

しかし、読めた部分もあり、その部分を読んだ親族達はその手帳を

秘匿し、サラに解読してもらおうことにしたのだ。

すると、実家から監視役として先日から泊まり込みで来ていたシアが、欠伸を噛み殺しながら部屋に入ってきて

「姉さん……徹夜したのね？」

と呆れながら問い掛けた。

サラの机の端には、まだ若干燻っている蝋燭があり、更に言えばサラの目元にはクマが出来ていたからだ。

するとサラは、少し興奮した様子で

「仕方ないじゃない。この手帳に書いてあるの、かなり衝撃的な内容ばかりなんだから」

と答えた。

トレジャーハンターのサラからしたら、その手帳に記されている内容は、まさに一攫千金に値する情報ばかりだった。

東大陸と西大陸でも、多数の魔獣が居る為に人が入るには困難な地域があり、jrはどうやら、その地域にも入ったらしい。

更に驚いたのは、南大陸への渡航方法が記載されていたことだ。

それを、シアに言ったところ

「え？ でも南大陸って、東と西大陸から行った船は、全部沈められてたよね？」

と困惑していた。

今まで、何度となく数多の商人や国がその領土や商売の幅を広げようと、南大陸を目指した。

だが、通称で龍神海という魔の海域が存在し、その海域に入った船は、一部の例外を除いて、全て沈められた。

その例外というのが、南大陸の船だった。

「兄さんはどうやら、古代エルフが残した門型の魔道具で南大陸に渡ったみたいだけど……その龍神海は、海底に青の神が治める海底帝国があるみたいなの……つまり」

「あー！ 自分達の領土を、無作法に入ってきた連中を、迎撃したってこと!？」

シアの答えに、サラは

「その通り！ 確かに考えてみたら、人魚とか何処に住んでるのか知らなかったけど、海底帝国があるなら話は繋がる。確かに、何処の誰とも知らない輩が、無断で領土に入ってきたら、兵士を差し向けて迎撃する位はするわよね」

と称賛した。サラとシアも貴族の家の為に、領土問題は分かる。そこから考えると、無断に立ち入り、あまつさえ勝手に通られようとしたら、迎撃するのは当然の権利なのだ。

「兄さんも確信した訳じゃないみたいだけど……どうやら、人魚と仲良くなっておけば、比較的安全に通れる可能性はあるみたい……」

「そっか……幾ら青の神とは言っても、水中に住む魔族の全てを治める訳じゃないからね……」

魔族と一括りにしても、中には混沌に属する魔族も居る。それらから襲撃を受ける可能性は、十分にある。

「だけど姉さん……そんな重要な情報の書かれた手帳を、ここで解読しているの？ ほら、あの娘とか……」

「ああ、アレツタ？ あの娘なら大丈夫よ。まずあの娘、字が読めないみたいだし……何より、良い娘だもの」

シアの懸念を、サラは一蹴した。

最初は確かに、知り合いだったから雇った。しかし一緒に住んで、家事を任せていたら、アレツタの性格を知った。

真面目でしっかり働く。そこから考えて、邪なことは考えないだろう。

その時

「サラ様、只今帰りました。あ、シア様。お迎え出来ず、すいません」
と件のアレツタが帰ってきて、挨拶してきた。そして、サラが徹夜したことを見抜き

「サラ様……また徹夜ですか？ お体に悪いですから、控えて下さいと前にも言いましたよね？」

と少し呆れた様子で忠告してきた。

「ごめんね、アレツタ。それより、頼んでたアレのは買ってきてくれたかしら？」

「はい、ここに有りますよ。今用意しますから、お待ちください」

アレツタはそう言つて、部屋から出ていった。するとシアが、不思議そうに

「アレつて、なに？」

「お祖父様のお宝で、私が好きな料理よ」

シアからの問い掛けに、サラは机の上を軽く片付けながら教えた。少しすると、アレツタが家政婦の服に着替え、大きめのお盆を持って現れた。

「どうぞ、メンチカツサンドです」

「んー！ これよこれ！ ドヨウの日はこれよね!!」

アレツタが机の上に置くと、サラが早速一つ掴んだ。

シアは、初めて見る料理に、うろんげな表情で

「これが、料理……？」

と首を傾げた。するとサラは、早速一つ食べ終わり

「シアも食べてみなさいって、美味しいから」

とオススメした。それを聞いたアレツタが、魔法瓶を開けながら

「ああ……道理で三人分だと思いました。シア様の分もだったんですね」

と言つてきた。どうやら、サラが二人前食べるのは何時もの事らしい。これは、サラが見つけたドアがかなり遠く、中々行けない距離の為に、アレツタが出勤する時に頼むようにしたのだ。

一応別のドアも探しているが、中々見つからないらしい。

そして、サラにオススメされたシアは、一つ掴んで見てみた。見た目は何とも言い難く、黒っぽい何かを白いパンに挟んであるようには見ええない。

しかし、サラが美味しそうに食べているのを見て、シアも勇気を出して一口食べて、驚いた。

「何これ?! 凄く美味しいー!」

口の中に広がる濃厚な肉の味。肉の味に調和して、ソースの風味も広がるが、同時にレモンの酸味で脂のしつこさが無くなり、さっぱりする。

あつという間に一つ食べ終わると、シアは時々アレツタが出すクッキーを思い出して

(アレと同じ出所かしら……どんな所なのかしら?)

と首を傾げた。そして、メンチカツサンドを食べ終わった時、アレツタが

「サラ様、シア様。此方もどうぞ」

とアレツタが、底の深い器を出した。器の中には、薄い赤が特徴の冷気を感じる何かが入っている。

「アレツタ、これは？」

「これは、ねこやのある世界のスイカと呼ばれる果物を使った、シャーベットだそうです」

サラの問い掛けに、アレツタはスプーンを置きながら答えた。シャーベットと聞いて、サラとシアは以前に実家で食べたシャーベットの思い出した。

氷のデザートはかなり高価だが、かなり味が薄く、正確には果物の氷漬けという感じだった。

それを思い出した二人は、さほど期待しないで一口食べて、驚いた。スイカという果物は知らなかったが、しっかりとした果物の味わいに、仄かな甘さが美味しかった。

予想外な美味しさに、サラとシアは思わずシャーベットを掻き込んだのだが

「あ!?! そんなに一気に食べたら……!」

『いったああ……!』

実は、昨日の夕食の時にアレツタも同じ経験をしていたが、忠告が間に合わなかった。

「あー……直ぐに引きますから大丈夫ですけど……」

「くっ……結構クるわねえ……!」

「けど、これ美味しいわ……」

サラとシアは、そこまで言う二人で目を合わせて

『おかわり、ある?』

と同時に問い掛けた。その問い掛けに、アレツタは苦笑を浮かべな

がら魔法瓶の中に残っていたスイカシャーベットを出したのだった。

幕間 新装開店

「……これで、合ってる……よな」

「多分……大丈夫だと思いますが……」

土曜日の早朝、店長と明久はドアに新しく掛けた看板を見ながら不安そうにしていた。ねこやのドアに掛けられている看板は、実は交換出来るようになっていたのだ。

そこに新しく掛けたのは、異世界の言葉。東大陸語と日本語、英語が彫られた看板だった。

それぞれで、洋食のねこや、と彫られている。

「いや、本当に不安になるな……向こうの言葉」

「そうですね、僕達には全く読めない文字ですから、確認のしようが無いですし……」

店長の言葉に同意しながら、明久は看板を見た。

以前より少し大きくなっていて、上から日本語、英語、東大陸語で彫られている。いるのだが、東大陸語は二人からしたら、何らかの記号のようにしか見えないので、どう彫られているかの確認など、到底出来なかった。

そして、二人がフロアに戻ると、直ぐにドアが開き

「おはようございます！ 看板、変わりましたね！」

とアレツタが入ってきた。

アレツタは東大陸語の世界の住人だが、彼女は読み書きが出来ないが、看板が変わったことには気付いたようだ。その直ぐ後に、再びドアが開き

（おはようございます……私たちの世界の言語の看板、作ってくれたんですね）

クロが入ってきて、そう告げた。彼女は基本念話だが、文字は分かるらしい。そのクロが言うのだから、問題無いようだ。店長と明久が安堵していると、早希がキッチン側からフロアに入ってきて

「おはようございます！ 何かあったんですか？」

と首を傾げた。すると明久が、一度ドアを開けて

「ほら、この看板。異世界の言葉に対応したのを作ってもらったんだ」と早希に説明しながら、見えるようにした。そして、看板を見た早希が

「あ、本当ですね！ お知り合いに頼んだんですか？」

「まあ、そうだな。ウチの机や椅子とか作ってくれた知り合いの会社だ。じいさんの時からの付き合いだ」

早希の問い掛けに、店長はそう答えた。

なにせ、机や椅子は人間用にしか考えて作っていないので、時々耐久的に使えなくなる時がくる。

しかも、人間が普通に使ったのなら長く使える椅子や机が、早く摩耗するのだから、気付くのもやむ無し。

そこで、先代が知り合いの家具製造の一人を抱き込み、そこを懇意にするようにした。おかげで、格安で机や椅子が仕入れられるようになった。

「おはようございます」

そして最後に、霊夢がやってきて

「看板、変わったのね」

と言った。やはり気付いたようだ。

「おう。前々から考えててな。ようやくだ」

店長はそう言って、既に用意していた賄いの朝食を並べ

「さて、皆……今日から心機一転、頑張っていくぞー！」

と意気込んだのであった。

洋食のねこや、新装開店である。

74 皿目 ロースカツ

土曜日のお昼少し手前に一台のタクシーが、ねこやビルの前に停まった。タクシーの運転手は、後ろに座っていた一人の老婆に向けて「お客さん、着きましたよ」

と声を掛けた。その声で、軽く寝ていた老婆は起きて

「ああ、すみませんね……はい、お代」

と料金を支払った。料金を受け取ったタクシー運転手は、その老婆に

「一応教えておくと、ねこやは今日明日はお休みですよ」

と教えた。どうやら、その老婆はねこやに用があるらしい。しかし老婆は、鞆から一つの古びた鍵を取り出して

「大丈夫です、中を見たいだけですから」

と言つて、ねこやビルの階段を降りていった。そして、目的のドアを見て老婆。やまがたこよみ山方曆は

「……こんな看板、いつの間にか作ったのかしら？」

と首を傾げながら、鍵を刺して錠錠。ドアをゆっくりと開けた。そして、懐かしいカウベルの音が鳴り

「いらつしやいませ！ 洋食のねこやにようこそ！」

と曆をアレツタが出迎えた。出迎えたのだが、曆はアレツタの両側頭部の角を見つめていた。

「あ、あの……」

「ああ、ごめんなさいね。料理だけど、ロースカツのライスの大盛りを
お願いね」

アレツタが困惑しながら呼び掛けると、曆は手短かに注文してから近くの席。アルトリウスが座っている席に向かい

「久しぶりね、アルトリウス」

と声を掛けて、席に座った。

「ヨミ……そうだな、30年振りか……」

曆を見たアルトリウスは、曆のもう一つの名前。ヨミと呼んだ。

約70年前、混沌の魔神を倒した四人の冒険者。通称四英雄。

剣神、アレクサンドル。賢者アルトリウス、最強の冒険者ヨミ。そしてもう一人により、魔神は倒された。

だが魔神は最後の足掻きに、ヨミに対して魔法を発動して、ヨミからしたら異世界。地球に跳ばしたのだ。

その後ヨミは、第二次世界大戦が終わった直後の日本で目覚め、先代店長。

山方大樹に助けられ、その後は一緒に店を経営するようになり、ねこやビルの地下に空いていたテナントで洋食のねこやを始めた。

その後、暫くの間は二人で店を切り盛りしていたが、暦は妊娠を期に店から離れ、大樹は病気で倒れるまで料理人を続け、二代目の店長に変わったのだ。

「にしても……色々と変わったのね……魔族を雇うなんて」

「彼女は半魔族だ。時代は変わったんだ……あまり嫌ってやるなよ？」

彼女は、真面目だ」

暦がアレツタを軽く睨むと、アルトリウスがそう言った。

暦だが、元々は魔族と魔神を滅ぼす為に生み出された存在なのだ。

魔力はアルトリウスに並び、剣技はアレクサンドルに匹敵した最強の冒険者。それが、ヨミだった。

「ええ、分かっているわ……そちらも、色々と変わったのでしよう？」

自分でそう言った暦は、改めて自分がこの世界で過ごした70年という年月が多大な影響を及ぼしたと実感した。

「ああ……30年前に、軽く話しただろ？ 魔族と手を結んだ帝国と

いう国のことを。30年の間に、東大陸最大の国になったぞ？ その影響で、公国や王国でも、魔族が相応に住むようになってきている」

かつて、魔族とは全力で殺し合うしか知らなかった戦友に、アルトリウスは30年前と同じように時の流れを感じた。

（エルフ達からしたら、30年など瞬き程度かもしれないが……我々からしたら、長い年月だ……私も老いたしな……）

アルトリウスは、以前より動きが鈍く、細くなった指を見ながらそう思った。

異世界食堂が開いた頃、エルフが大きくその数を減らした大災害。大病役という事件より前に、エルフは一度アルトリウス達からしたら異世界。地球に侵攻したことがあったのだ。

しかし、地球には精霊が居なかった為に侵攻は失敗。その際に持ち込まれた魔道具があつたが、魔法という存在を知らなかった為に、ただの骨董品として売りに出され、様々な場所を転々とした魔道具の鈴。

それを見つけたのが、40年という歳月の間に孫まで出来ていた暦だった。

かつて、自分が居た世界と地球を結ぶ事が出来る魔道具を見つけた暦は、暦が異世界出身かつ経緯を知っていた大樹と相談した。

すると大樹が

『だったら、暦の元の世界の人達を、客として招いてみるのはどうだ？』

そうすれば、元の世界がどうなったのかも知れるだろ？』

と言って、異世界食堂を開くことが決まったのだ。

そして、一流の魔法使いの腕を持つ暦により、魔道具は調整の後に再起動を果たし、最初の客としてやってきたアルトリウスと再会して、色々と驚いたのを、今でも鮮明に覚えている。

それはアルトリウスも同じで、魔法の研究をしていたら、突然見たことのない黒い扉が現れ、警戒しながら開けてみたら、40年前に死んだと思っていた戦友に再会し、更に味わった事のない美味な料理に驚いた。

(いや、その後の30年にも驚いたがな)

異世界食堂と関わりが始まった30年の間に、アルトリウスも知らないだけで、かなりの影響を受けた。

魔道具、料理、飲み物と挙げたらキリがない。

「それで、この10年はどうしていたのだ？ 前の店長が死してから、お前も店に来なくなったから、お前も冥府に旅立ったと思つたぞ」

「あの後、孫の家に住むことになってね……」

久しぶりの再会に、アルトリウスと暦は語り続けた。それは、暦が注文した料理が来るまで続いた。

「お待たせしました……ロースカツのライス大盛りです。では、ごゆっくり」

霊夢が料理を置くと、見送ってから暦はソースとレモンを取り、ロースカツの皿の近くに置いた。

その時暦は、黒い服のウエイトレス。クロに気付いて固まった。すると、それに気付いたアルトリウスが

「気づいたか……アレは、黒の神だ」

「……それにしても、皆普通ね……」

クロこと黒の神は、死を司る。それを知っていた暦は、軽く周囲を見回したが、誰も苦しんでる様子が無い。

「……あの戦争の時代でも、黒の神のオーラで倒れる奴は居たが、今を生きる人々……特にこの店に来る連中は、生命力が強くなっている。あの姿ならば、問題なからうて」

クロの存在に肝を冷やしながらも、暦は意識をロースカツに向けた。

ロースカツは瑞々しいキャベツと合わさり、光っているように見える。

(うん……やはり、トンカツ定食はこうじゃないと)

暦はそう思いながら、箸を取った。

暦にとつて、ロースカツは思い出深い料理だ。地球に初めて来て、助けられた若かりし頃の大樹に初めて出されたのが、ロースカツだった。

なおロースカツだが、今やトンカツと呼ぶのが主流になっており、これはトンカツが出されるようになった頃は揚げ油が量が少なく高かった為に、フライパンに薄く張って焼くように揚げていたからロースカツと呼ばれたと言われているが、諸説ある。

その後は、豚という意味のトンカツになったとされている。

「……いただきます」

暦は大樹から教わってから言い続けてる食前の挨拶を言ってから、そつと箸で真ん中辺りの一切れを持ち上げた。

暦は最初は、何も掛けないで食べるのが流儀だ。

きつね色の衣と、白い脂身と肉のコントラストが美しく、暦が口に運ぶと、サクリと音が聞こえる。

(ああ……美味しい……)

口の中に広がる良質な肉の濃厚な旨味に、暦は初めて食べた時を思い出した。

大樹が作ったロースカツを食べて、暦は初めて異世界に渡ったと自覚したのだ。

香ばしい衣と瑞々しい肉を味わう為に、最初は何も付けないのだ。それが、暦が70年の間に見つけた拘りの食べ方だ。

(よし、次は)

最初に肉本来の旨味を堪能した暦は、ソースとレモンを掛けた。そしてキャベツにも掛け、レモンは最後にカツ全体にサツと絞り掛ける。

(うん。やっぱり、ソースだ)

自分好みの味付けにしてから、また真ん中辺りの一切れを持ち上げると、皿の端に用意されているカラシを僅かに着けてから、口に運んだ。

口の中に広がる、僅かに残る衣の香ばしさとソースの甘辛い味わいとレモンの強い酸味。そして、カラシのピリツとした味わい。それらが見事に混ざりあつた味に領きながら、ご飯を口に運んだ。

(やはり、メシがよく合う！ トンカツを美味しく食べるには、メシでなくてはな！)

濃厚なカツの味を、ライスの仄かな甘味が優しく包む。

元が米を主食とする山国の産まれで、その後は70年も日本に住んでいた暦にとって、ライスはなくてはならない存在だった。

素晴らしいロースカツには、ビールより何よりご飯。それが、暦の結論だった。

瞬く間に食べ終わった暦に、アルトリウスはビールを飲みながら「本当に、旨そうに食べるようになったな。ヨミよ」

と懐かしそうに言った。アルトリウスがよく知っていたのは、魔神討伐の為の旅の最中のヨミで、料理を食べても無表情だったのだ。

しかし、地球に渡ってからには美味しそうにかつ、幸せそうに食べていた。

「あら、美味しいのを美味しそうに食べるのは当たり前でしょ？」

アルトリウスにそう言うと、暦は近くを通ったアレツタに

「ごめんなさいね？ 悪いのだけど、店主を呼んでくれるかしら？」

大事な話があるの」

「え、は、はい」

いきなりそんなことを言われたアレツタは、店長を呼びに行った。すると、店長と一緒に明久も来た。

「やっぱり、ロースカツのライス大盛りは婆ちゃんだったか」

店長はどうやら、注文内容から確信していたらしい。

明久は明久で、店長の祖母が来ていたことに驚き、早希も曾祖母が来ていたことに、今気づいたようだ。

「いつの間にか、こんなに特別営業に関わる人が増えたのね」

「まあね。で、大事な話ってなんだ？」

店長が問い掛けると、暦は一旦仕舞っていた古い鍵を取り出して

「これを、渡しに来たの」

と店長に差し出した。

「ん？ 合鍵なら、持ってるが……」

実は、店長が持つてるのは合鍵だったのだ。そして、暦が持っているのは、文字通り《マスターキー》なのだ。

「合鍵では、ダメなの……このマスターキーには、他に大事な役割があるの……」

「大事な、役割？」

「そう……もし、貴方が異世界食堂を終わらせようって考えたら、このマスターキーを折りなさい。そうすれば、扉の魔法も消えるわ」

暦はそう言っつて、マスターキーを店長に手渡した。

実は一度、暦は異世界食堂を終わらせようとしたことがあったのだ。

大樹が病気で倒れた時、マスターキーを折ろうとして、店長に止められたのだ。

「……実はな、じいちゃんに言われたんだよ……もし、俺になんかあったら、お前に全部任せる。売るなり好きにしろつて……けど、出来たらでいいから、店を続けてほしいとも言われたんだ」

それは、暦も初めて知った大樹の遺言だった。

その甲斐あり、常連は通い続け、新しい料理や味が増えたから、新しいお客も出来た。

そろそろ、新しい世代に全て任せてもいいのだろう。

「だから、このマスターキーは任せるわ」

「……わかった」

暦の言葉を聞いて、店長は大事にマスターキーをポケットに仕舞った。

そして店長達は、暦に頭を下げて

「それでは、また何時でもお越しくください」と告げた。

「ええ……今度は、平日に来るわ……それと、裏口から出てもいいかしら？」

暦は料金を明久に渡してから、裏口の方に向かっていった。もしドアから出たら、地球に出るのか、異世界に戻ってしまうのか分からず、それを試す気は暦には無かったからだ。

（そうだ……私は地球で良い……愛した大樹が生まれ、死んだ世界で私も最後まで生きよう……今の私の世界は、この地球なんだ）

暦はそう思いながら、タクシー乗り場まで向かったのだった。

75 皿目 親子丼

産まれも育ちも山国で、今も山々の間や上にある村々や町を巡りながら芸をする旅の芸人。

ハチロウは、お手製の地図を片手に山道を歩いていた。

まだ日が登り始めたばかりの時間な為に暗く、視界は悪かった。慣れるとはいえ、山道は基本的に危険だらけだ。今歩いている道も、柵などは無いので踏み外せば深い崖に落ちて命を落とすし、時々危険な魔物に遭遇することもある。

だから、山国での移動は常に危険と隣り合わせだ。

ハチロウは周囲に気を配りながら、目的地に着実に向かった。

そして歩き始めてから、暫く。完全に朝日が昇りきった時間に、目的地。ねこやのドアがある場所に到着した。

一年に一度、春から夏に移り変わるタイミンに来るのが約束になっている。

(おつとうとおつかあは元気だろうか)

手拭いで汗を拭きながら、ハチロウはそう思っていた。ハチロウの《おつとうとおつかあ》の二人も、ハチロウと同じように旅の芸人であり、簡単に会うことは出来ない。

そこでハチロウは、互いの無事を確認する意味も含めて、《おつとうとおつかあ》が知っていた異世界食堂で一年に一度会う約束をしたのだ。

汗を拭き終わったハチロウは、最近年老いてきた《おつとうとおつかあ》を思い出しながら、ドアを開けた。

(いらっしやいませ)

偶々近くに居たクロがハチロウに気付いたようで、頭を下げた。

(お席にご案内します。メニューを……)

「あ、頼む料理は決まっていますけど、人を待ちたいんです。その人達が来たら、その時に注文します」

(分かりました。お席はこちらです)

クロに案内されて、ハチロウは席に座った。ハチロウの《おつとうとおつかあ》の姿は、まだない。

そこから、一抹の不安が頭を過る。だがその不安な考えを、頭を振って無理やりにも消し去った。

でなければ、不安に押し潰されそうな気がしたからだ。

それから十数分程の間、ドアが開く度にそちらに視線を向けてはガツカリするのを繰り返した。

その時、ドアが開き

「いらっしやいませ、洋食のねこやにようこそ！」

と小さな二人を、アレツタが出迎えた。

「二人なんだが……」

「おや、ハチロウが先に居るでねえか。待たせてしまったかの」

「おつとう！ おつかあ！」

ハチロウに近寄ってきたのは、年老いた旅ハイフリング小人の夫婦だった。

ハチロウと二人の出会い、ハチロウはまだ幼い頃に村の口減らしの為に元の村からかなり離れた山の中で捨てられていたのだ。

この旅小人の夫婦は、ハチロウと出会った時は自分達の子供が全員独り立ちしてから、暫くした時の事だった。

その時ハチロウは泣いていて、流石に泣いてる子供を無視出来なかつた為に拾い、色々教え込んだのだ。

山道の歩き方、身を護る為の護身術、字の読み書き、生計を建てられる大道芸を教えて、その後の十年は一緒に旅をした。

その後、ハチロウが青年と呼べる年齢になったら、ハチロウと別れて夫婦二人の気ままな旅に戻った。

その時に約束したのが、一年に一度。異世界食堂で会って話そうだった。

「おつとうにおつかあ、少し遅かっただな」

「いやはや、歳は取りたくないでな……」

「近くのドアの場所が、山の上の方でな……山道を歩くのに、時間が掛かってしまったんじゃ」

ハチロウが心配して聞くと、二人は軽く腰を叩きながら答えた。幾

ら旅好きな旅小人とはいっても、寄る歳には勝てないのだ。話を聞くに、この一年の間に自分達でも分かる位に歩くのが辛くなってきたらしい。

そこで最近考えているのが、旅を辞めて一ヶ所に定住すること。扉の近くに家を建てれば、問題ないだろう。

「けど、お金は……」

「それならば、蓄えがあるわ」

「そうだな。余生を過ごすには、十分だな」

ハチロウの問い掛けに、二人は顔を見合わせてから答えた。二人はハチロウより長く旅の芸人をしてきたベテランの旅小人だ。蓄えは、ハチロウより大量にある。

「食費は……」

「そつちも大丈夫だ」

「歳を取って、大分減ったからね」

旅小人は、かなりの大食いだ。それこそ、その小柄な体の何処に入るのかと疑う程で、ねこやもそれなりに食糧は備蓄しているが、足りなくなる事が起きる程だ。

しかしどうやら、歳を取ったらその食べる量も減るらしい。

その時、アレツタと霊夢が来て

「お待ちせしました。親子丼です」

「失礼します」

と三人の前に、一つの丼と味噌汁の入ったお椀を置いた。そして、

霊夢が

「お箸とスプーン、どちらをお使いになられますか？」

「ワシらはスプーンを」

「俺は箸を」

霊夢は、夫婦にスプーン。ハチロウの前に箸を置いて

「それでは、ごゆっくり」

と頭を下げて、下がった。

蓋を開けると、中には黄色と白の斑模様の中に多数の肉が混じった料理。親子丼が見えた。

親子丼、これは鶏の卵とその鶏の肉を使った料理なので、親子を使った料理だから親子丼となった、とされている。

これをハチロウは、二人に拾われた日に食べた。

その時は先代店長が作ってくれて、初めて食べた親子丼に感動したのを覚えている。

実の両親に捨てられ、落ち込んでいたハチロウを二人が引き取ってねこやに案内してくれて、初めて三人で食べた思い出の料理。

その時に、二人から

『これはな、親子丼っちゅう料理でな』

『親と子一緒に食う……でな、こう思うんじやよ。この親子丼を一緒に食ったワシらも、もう親子じやよ』

その言葉に、幼かったハチロウは救われた。

そして、一口食べたハチロウは、空腹感からがむしやらに食べた。夜明け前から山道を登った為に、かなり空腹だったのだ。それは二人も一発で、軽く親子丼を食べ終わり

「ふう……食ったわい」

「んだな。次は、何を食べようかのう……」

「そうだなあ……次は……」

まだ食べたい三人は、メニューを見ながら次に頼む料理を決めて、親子三人の会話を穏やかにしたのだった。

76 皿目 カルビ丼

太陽が天より僅かに低い時間、海国の宮殿の奥に住んでいるシュイリーは、出掛ける準備をしていた。

今彼女が着替えているのは、本来自分が着るドレスではなく女官が着るべき女官服だ。

何の防護の施しもされていないので、もし襲われでもしたら一撃で終わってしまう。しかしその格好が、彼女の信じる一般人の格好だった。

(これなら、何処にでも居る村娘に見えますわね)

自分の格好を再度確認してからシュイリーは、目的の場所に向かい始めた。

向かう場所は、宮殿の中庭にある花園だ。そこには様々な花が植えられており、四季折々に花が咲き乱れる。

その一角に、目的の物がある。

中庭に到着したシュイリーは、普通に進めるのを確認し

(やはり、あの陰陽師は今も離れているのは本当みたいですね)

シュイリーの脳裏には、狐顔の陰陽師の姿が過った。

実は今から使おうと思っている物、ねこやのドアは、普段はその狐顔の陰陽師が占有しており、普段は他の人に使わせない為に迷いの術が掛けられているのだ。

それにより、そのドアから一定範囲に入るとドアから離れてしまうのだ。

しかし、今日はその狐顔の陰陽師は外務を担当している宰相から酒宴に誘われており、無下に出来ない為に宮殿を離れているのだ。

そして大概の術は、術者が遠く離れると効果を失うものだ。

狐顔の陰陽師が宮殿から離れるという話を教えてくれた女官に、シュイリーは心中で感謝しながら、3ヶ月振りにねこやのドアの前に立ち

(久しぶりに食べられますわ)

と思つてから、ドアを開けた。軽やかなカウベルの音が鳴り響き
「いらっしやいませー!」

「おや、シユイリーさん。お久しぶりです。何時もので?」

元気なアレツタの声の後に、明久が出迎えた。シユイリーは空いて
いた席に座り

「ええ……カルビ井をお願いしますわ」

「承りました。少々お待ちください」

明久は微笑みを浮かべてから、空の器が乗ったトレイ片手に奥に消
えた。すると、入れ替わりに早希が現れて

「お冷やです。お代わりの際には、お声掛けください。それでは」

と冷えた水の入ったコップを置いて下がった。早希の所作を見て
いたシユイリーは

「……女官に欲しい人材ですわね」

と本音を漏らした。

シユイリーがねこやのドアを知ったのは、本当に偶然だった。その
日も、狐顔の陰陽師は宮殿から離れていて、シユイリーはその時夜の
散歩で中庭に来ていた。

その時に、ねこやのドアを見つけた、

最初は困惑し悩んだが、ドアを開けて入ったら受け入れられた。そ
の時は明久と店長の二人だけだったが、二人はまるでシユイリーを何
処にでも居る一人の少女として受け入れ、それが新鮮だったシユイ
リーは狐顔の陰陽師が居ない時に来るようになったのだ。

(何れは、私だけのドアを見つきたいですわ)

店内の話聞く限り、ねこやのドアは様々な所に出現するらしいか
ら、今は狐顔の陰陽師が居ない時にしか来れないが、信頼出来る女官
達に頼んで探してもらっている。

(その時が楽しみですわ)

そう考えていると、霊夢が来て

「お待たせしました、カルビ井です。デザートは食後にお持ちします
……どうぞ、ごゆっくり」

とシユイリーの前に、井とスープの入った器が乗せられたトレイが

置かれた。一礼した霊夢は静かに下がり、それを見送ったシュイリーは生唾を飲み込んでから丼の蓋を開けた。

すると、濃厚なタレの匂いがシュイリーの鼻を刺激してくる。

(ああ、この匂い……最初に思い出しますわ)

シュイリーがカルビ丼に魅了されたのは、正に初めて来店した時になる。その時は夜遅くで、夕食を食べてから大分時間が経っており、育ち盛りだったシュイリーはお腹が空いていた。

なんとか我慢しようとしたが、香ばしいタレの匂いに刺激されてお腹が鳴ったのだ。それを聞いた明久と店長は、シュイリーも一緒に食べるかと誘い、出されたのが二人の夜食として作っていたカルビ丼だったのだ。

それ以来、カルビ丼はシュイリー専用メニューになっている。

(まずは、匂いを楽しむ……)

箸で一口分持ち上げると、シュイリーは濃厚なタレの匂いを嗅いだ。海国では嗅げない匂いに、ドンドンと食欲が刺激される。

(そして、思い切り食べる)

宮殿では出来ない豪快な食べ方も、醍醐味だろう。口の中に広がるタレの甘辛い味。そのすぐ後に、海国よりも甘い米の味が広がる。

(早く、海国でもこの米が食べたいですわ)

海国では日常的に食される米だが、少し茶色く、パサパサしている。その差が分からず、シュイリーは女官達と一緒に庭の一ヶ所で様々な試みを繰り返している。

それはさておき、そこからシュイリーは豪快にカルビ丼を掻き込むように食べていく。

(ああ、美味しいですわ……!)

米だけでなく、肉。野菜とタレ。それらが合わさり、調和して、シュイリーを魅了する。

そして、あつという間にカルビ丼を完食し、味噌汁を飲んでいると「お待たせしました。デザートのアイスです」

とアレツタがシュイリーの前に、アイスを置いた。最近では、遠く離れた砂の国で作られたと聞いているが、どうやら再現出来たのだろ

う。

それを少しずつ食べてから、シュイリーは胸元から財布を取り出して

「お代ですわ」

と銀貨を、明久に差し出した。受け取った明久は、ポケットに仕舞い

「こちら、サービスのカルビサンドイッチです。またの御来店をお待ちしています」

とシュイリーを見送った。

宮殿の中庭に戻ったシュイリーは、消えていくドアを見ながら

（早く、私だけのドアを見つけますわ！）

改めて、心に決めたのだった。

77 皿目 マカロニグラタン

とある小さな国の小さな町。その小さな宿兼料理店は、その日も大忙しだった。

「おーい！ こっち、騎士のシチュー追加だ！」

「こっちも、二皿頼む！ ついでに、パンとビールもだ！」

「はーい！ 少々お待ちください！」

その宿兼料理店の看板娘、マイラは目が回るような忙しさの中でも、確実に業務をこなしていた。

注文を聞き、お金を貰い、料理を出して、お客が帰った後には卓を片付ける。

一応店主の父親の考えで新しく人を雇ってはいるが、それでも手が回っていないかった。

騎士のシチューを出すまでは、行商人や旅人位しか来なくて暇だったが、今では陽が登り始めた時間に開店し、陽が沈みきって月が出てくる時間まで、ずっとお客がひっきりなしにやってくる町一番の人気店になった。

聞いた話では、首都に到着するのが遅れてまで寄ってくれる人も居るのだとか。

騎士のシチューを出すきっかけになったのは、今から一年前になる。

当時父親は、何とか店の経営を盛り上げたいと考えていたが、中々良い案が出なかった。その時に出会ったのが、偶々その町に来ていた旅小人の夫婦が作った騎士のシチューだった。

その夫婦は旅先で料理を出して路銀を稼いでいたらしく、その時小腹が空いていた父親はさほど期待しないで騎士のシチューを食べてその美味しさに驚き、これだ、と思っ、その夫婦にレシピを教えるほしいと頼み込んだのだ。

夫婦は父親の熱意に負けて、銀貨100枚でレシピを教えてくれた。その金額を聞いたマイラは、目眩を覚えた。何せその金額は、当

時の1ヶ月の売り上げの半分の金額だったからだ。

料理一つで、経営が良くなる訳がないとマイラは詰め寄ったが、父親は大丈夫、絶対に売れると自信満々だった。

最初は然程売れなかったが、一人から一気に話が広がり、今や当時の四倍近い売り上げを叩き出し、その殆どが騎士のシチューになるのだから、父親の商人としての勤もバカに出来ない。

「うし……今はこんなもんか……マイラ、夕方まで休んでいいぞ」「はい」

騎士のシチューを煮込んでいた二つの大鍋と材料が無くなったのを確認した父親は、マイラに休憩に入るように促した。

他にも豚の腸詰めや煮込みやダンシヤクを煮たのや、簡単なスープや酒も出しているが、やはり今の売りは騎士のシチューだ。それが無くなったと知ると、一気に客足は鈍る。

母親が病気で早くに亡くなった為に一人娘のマイラは、厳しくも経営を教えられながら、大事に育てられた。

何れは婿を取り、店を継ぐのだから、倒れられたら店が無くなってしまう。

「忙し過ぎるのも、考えものだよねえ……」

娯楽の無い田舎町では、休憩に入っても部屋でボーっとすることしか出来ない。

疲れた体でベッドに横たわると、マイラは以前の暇だった時を思い出した。

以前までは本当に暇な時は暇で、なんなら朝から夕方まで寝ている事もあった。

しかし、父親と二人で帳簿を見てはため息を吐いていた時に戻ってしまうのも、ごめん被るのだが。

(少し寝ようかな)

と思った時

「おーい、マイラ。居るか?」

と窓から、一人の青年が声を掛けてきた。体を起こして見ると、窓枠に両腕を乗せる格好で、隣のパン屋の次男坊で幼馴染みのヨハンが

居た。パン屋の次男坊だが、自警団に所属しており、腰には少々古い剣を差している。

「なによ、ヨハン。どうかした?」

「実はさ、この前すつごいメシ屋見つけたんだけどさ……一緒に行かないか?」

マイラが問い掛けると、ヨハンは即座に要件を告げた。しかしマイラは、ヨハンが告げたすつごいメシ屋、というは聞いた事が無かった。小さな田舎町なので、ちよつとした噂も即座に町全体に伝わる。

「すつごいメシ屋?」

「おう! まあちよつと変わった店だけど、滅茶苦茶メシが旨いんだ! どうだ?」

「滅茶苦茶旨いメシ屋……聞いた事ないけど、嘘言ってる様子も無いし……行くわ」

マイラはそう言って、自身の財布を取ってから父親に少し出掛ける事を告げてから外に出た。

そして昔みたいにな、二人は手を繋いで歩き始めた。

それから、しばらくして

「ねえ、ヨハン……もしかして、私騙されてる?」

「いやいや! 騙してなんか無いって!」

「じゃあなんで、メシ屋に行くのに森の中を歩いてるのよ」

先導しているヨハンを軽く睨みながら、マイラは問い掛けた。今二人が居るのは、町に近い山の中である。

「だから、変わった店だって言っただろ?」

「……で、なんでこんな山の中にその旨いメシ屋があるって知ったの?」

マイラが問い掛けると、ヨハンはマイラを指差し

「二年前なんだがな、お前の店に騎士のシチューを覚えてくれたハーFRINGの夫婦が居たろ? 先輩から聞いたんだが、あのハーFRINGの夫婦、妙な歌を歌いながらこの山に入ってたんだと。んで俺も確認したのは、町に来たハーFRINGは、全員この山に入ってたんだ」

「ハーフリングが、全員？」

ヨハンは自警団な為に、町の主要な出入口に立っている事が多く、その際に確認したのだろう。

しかし、マイラには俄には信じられなかった。

只の偶然では？ そう思ったのだ。

「そう。全員、同じ歌を歌いながら……今日はドヨウの日。異世界食堂に行こうってな」

ヨハンがそこまで言っつて、山頂付近の高い巨木がある開けた場所に
出た時、マイラはその巨木の根元にそのドアを見つけた。

黒猫の彫刻が彫られ、東大陸語で洋食のねこや、と書かれた看板が
掛けられた黒いドアだ。

「……なんで、こんな場所にドアが……」

「通称、異世界食堂って言っつて。ほら、入るぞ。今日は朝食っつてな
いから、腹ペコペコなんだ！」

ヨハンはそう言っつて、マイラの手を引きながらドアを開けた。カウ
ベルが鳴ると

「いらっしやいませ、洋食のねこやにようこそ」

二人を霊夢が出迎えた。二人は霊夢に案内されて、近くの席に座り
「注文が決まりましたら、お呼びください。それでは」

「……なに、あれ……」

霊夢が去ると、マイラが思わずという風に呟いた。
するとヨハンが

「なんでも、異世界の衣装らしいぞ？ 異世界食堂じゃ、普通なんだ
と。少し恥ずかしいみたいだけど」

マイラの疑問の意味を察して、ヨハンは以前に店員アレックサから聞いた話を
した。

「異世界……？ ここ、異世界なの？」

「そうだぞ？ あれ、言っつてなかったっけか？」

「聞いてないわよ……」

昔から少々抜けてる幼馴染みにマイラはため息を吐きつつ、店内を

見回した。

「……なんかおかしいわね、ここ」

そして見回して、客筋が（マイラからしたら）おかしいことに気付いた。

少々めかし込んでいるが、普通の家族に、マイラからしたら一生縁の無さそうな上等な服を着た貴族らしい人物に、長い杖を持った老人。若い女性の司祭のグループに、ヨハンの100倍は強そうな剣士。

挙げ句の果てには、明らかに人間ではない存在。

小さい小人や妖精。二足歩行の蜥蜴人や翼の生えた二人の少女達や下半身が蛇の女性。

客筋が読めなさすぎた。

しかし、その光景に間違いなく異世界なんだな、と妙に納得したマイラは、本を開き、綺麗なサマナーク語で書かれた説明文を読み始めた。

そして、軽く見てからマイラは

「値段は、ウチより少しだけ高い位かしら……」

と呟いた。すると、ヨハンが

「値段はそうかも知だが、例えば……あ、この料理に付く白パン。食べ放題なんだと。しかも、値段変わらず」

「なにそれ!？」

ヨハンが写真を指差しながら説明すると、マイラは驚愕した。隣がパン屋な為に、白パンの値段は知っている。

それを、一切お金を取らずに食べ放題というのは利益にならない、とマイラは思った。

「この店の方針なんだと。パンと日替わりのスープ。後、ライスってやつはお代わりし放題なんだとよ」

ヨハンが告げたその言葉に、マイラは何故か敗北感を覚えた。

マイラが頭を抱えていると、ヨハンが一つのメニューを指差して

「オレのオススメはこれだな。マカロニグラタン」

「マカロニグラタン……?？」

説明文には、騎士のソースにチーズを乗せて焼いた料理と書かれてある料理だった。とりあえず、その料理を早希に注文し、待つこと十数分後

「お待たせしました。お熱いので、気をつけてください」

と明久が料理を持ってきた。その格好から料理人だと検討を付けつつ、マイラは運ばれてきた料理。マカロニグラタンを見た。

楕円形の器一杯に満たされた騎士ホワイトソースのソースに、見事な焼き目が付いた薄いチーズから漂う芳ばしい匂いが、マイラの食欲を刺激する。

「さて、食べようぜ！ これは、熱いうちに食べるのが旨いんだ！」

ヨハンはそう言って、熱つ、と何回も言いながら食べ始めた。そうしてマイラも、フォークをマカロニグラタンに差した。

チーズの下から出てきたのは、真つ白な騎士のソースが絡まった様々な具材。マイラは息を吹いて少し冷ましてから、食べた。

最初は熱さに驚いたが、すぐに美味しさに目を見開いた。マイラの店を出すよりも濃厚な味が口一杯に広がり、具材の味と合わさってフォークが止まらない。

時々間に挟む白パンや野菜スープで口の中をリフレッシュして、またグラタンを口に運ぶ。

そのサイクルが止まらなくなる。

途中で白パンと野菜スープが無くなったので、思わずお代わりし、完食した。

(チーズと騎士のソースって、合うのね……)

マイラは味の分析をしながら、ある事を考えていた。

(この料理を再現すれば、更に売り上げ上がるかも……)

やはり、マイラも商人なんだろう。そんな考えが浮かび上がった。しかし、流石に料理店に対してレシピを教えるというのとは失礼だというのはマイラにも分かる。

旅小人は、旅の路銀稼ぎだった為に教えてくれたのかもしれない。だからマイラは、マカロニグラタンを出来る限り分析し、再現しようと考えた。

幸いにも、マイラも店を継ぐのと嫁修行で料理は問題なく出来るよ

うになっている。

出来る筈だ、とマイラは考えた。

「もし、マイラの店で出せるようになったら、毎日行くな、これは」
「ふふ、頑張ってみるわね」

その会話を最後に、二人は会計して退店した。

その後マイラは、一人でも度々来て味を分析。

暫くしてから、店に新たな料理。マカロニグラタンが出されて、更に売り上げが上がったのであった。

一年の始まり

新年初の営業日の朝、明久と店長、早希の三人は揃ってある料理を作っていた。

三段重ねの重箱に、作った料理を詰めていると

「おはようございますー!」

「おはようございます」

ほぼ同時に、アレツタと霊夢が出勤。少し遅れて

(おはようございます)

クロが出勤してきて、全員揃った。その時、ちょうど料理の詰め込みも終わり

「いいタイミングだな」

「着替えたら、すぐに座って。新年の挨拶と、朝ごはんにするから」

店長と明久がそう言って、早希は手早く机を拭いた。

アレツタと霊夢が着替えて座ると、店長が立ち上がって

「皆、新年明けましておめでとございます。今日から、また新しい一年が始まります。去年は皆の協力のおかげで、無事に営業出来ました。今年も無事に営業する為に、皆が一年間ケガもなく、病気もせずにごせる事を願って、おせちと七草粥を用意しました。ですので、それを食べて、今日から元気に、愛想良くお客様を迎えましょう……いただきます」

『いただきますー!』

店長が新年の挨拶を終えると、全員で食べ始めた。

特に霊夢は、自身が巫女という立場な為に新年の挨拶とおせちと七草粥の験担ぎはよく理解している。

「この七草粥……」

「お、気付いた? それ、実はもち米とお餅も混ぜてあるんだ。お腹持ちが良いようにね」

七草粥を食べた時、普通のお米と食感が違うことに霊夢が気付く、明久が説明した。どうやら、もち米とお餅を入れてあるようだ。確か

に、モチモチしていて、お腹に溜まる感じがしていた。

お粥というのは水分がかなり多い為に、消化が良い為に直ぐにお腹が空いてしまう。それを防ぐ為にもち米を混ぜるのは、結構ある。だが更にお餅を混ぜることにより、更にお腹持ちが良いようにしたのだ。

これもまた、料理人の工夫の一つだ。

「なるほど……確かに、お腹に溜まる感じがするわね」

「おせちのシユライプと合わせると、凄く美味しいです！」

アレツタはおせちに詰めてあったエビと合わせて食べていて、霊夢はきんぴらごぼうと一緒に食べている。

基本七草粥は薄く塩を振ってあるだけなので、薄味だ。それを、それぞれで味付けしている。

今回、味付け用にとシラスと葱と胡麻油を混ぜた物も用意した。早希はそれを七草粥に掛けて

「シラスの塩味と胡麻油が合わさって、美味しい」

と呟き、心のメモ帳に記しておいた。

そして、全員が食べ終わったのを確認して、店長が

「さて……開店の準備するか……皆、頑張っていくぞ」と意気込んだ。

『はいー』

そして、新しい一年が始まった。

78 皿目 チョココロネ

「もう1ヶ月か……」

2月は中旬、早希は買い物から戻りながらねこやに入ろうとしていた。その時、一人の少年。

ベーカリーキムラの翔太を見つけた早希は

「あれ、翔太くん？ どうしたの？」

と問い掛けた。翔太は両手で紙袋を持っている。

「あ、あの……えっと……」

翔太のその様子に、早希は翔太が何をしようとしているのか察した。すると、翔太は早希にその紙袋を差し出して

「こ、これ！ あの金髪の子に渡してください！ それでは!!」

と早希に紙袋を手渡した直後、走り去った。

「……若いなあ……」

言つて早希も若いのが、触れないでおく。早希は軽く中身を見てから「ふふ……青春してるなあ……本当は逆だけど」

と言つて、ねこやに入った。

「すいません、遅くなりました」

「おはよう」

「おはようございます!」

「まだ開店前だから、問題ないさ」

（おはようございます）

入ってきた早希を出迎える面々に挨拶してから、早希はアレツタに近寄り

「アレツタちゃん、これ。翔太くんからプレゼントだよ」

と先ほど預かった紙袋を、アレツタに差し出した。

「え、翔太さんが？ ……なんだろ、これ」

「お、チョココロネだな」

「バレンタインだからね」

紙袋の中身を見たアレツタが首を傾げていると、同じように中身を

見た店長と明久が教えた。

2月14日、バレンタインデーである。

「そういえば、ベーカリーキムラ。フライングパイパーに負けないうって息巻いてたな」

「あはは。あの店長さん、負けず嫌いですからね」

毎年バレンタインデーになると、フライングパイパーの売り上げは平時の三倍近い売り上げを記録する。やはり専門店なだけあり、バレンタインデーの売り上げはベーカリーキムラは敵わなかった。

「えつと……良いんでしょうか、これ……」

「翔太くんからのアレツタちゃんへのプレゼントなんだから、食べてあげて感想を言ってあげた方が翔太くんも嬉しいよ」

アレツタが迷っていると、明久はそう論じた。

早希は着替えに行つて、仕込みがある程度終わった明久は少し休憩していた。

すると、アレツタは紙袋からチョココロネを取り出して

「ふわぁ……綺麗……」

と呟いた。綺麗な焼き目のチョココロネを見て、アレツタは感動していた。アレツタも簡易ながら料理を作るようになり、焦げ目なく料理を作るのが難しいと分かる。

しかし翔太の作ったパンには、焦げ目が一切無い。

（頑張ってるんだなあ……翔太さん）

アレツタはそう思いながらも、何時もの言葉を言つてからチョココロネを一口食べた。

「甘いー」

チョコクリームが予想以上に甘いことに興奮したが、すぐにカカオ豆の苦さで甘さが引いていく。その調和に、アレツタは再び翔太を称賛した。

（翔太さん、本当に頑張ってるんだなあ……）

アレツタは知らなかったが、日本のバレンタインデーは女の子が意中の異性に好意を示す為に、チョコをあげるイベントである。

つまりこの場合、立場が逆だが翔太はアレツタに好意を示している

のだ。

バレンタインデーの意味をアレツタが知るのは、まだ先になる。

その後、着替えてきた早希に店長が

「……………何時渡すんだ？」

「……………後で渡す……………」

店長のからかい半分の問い掛けに、早希は顔を赤くしながら呟いた。その後早希は、朝食後に店長が敢えてキッチンから離れた際に買ってきたチョコを明久に差し出した。

その日、明久の動きがぎこちなかった、と後に店長は語る。

79 皿目 ハンバーガーセット

「へへっ！ ようやく手に入ったぜ、銅貨9枚！」

ある小さな国のある山間部の小さな村。そこで、ジャックと呼ばれる少年が懐から財布を取り出して、中のお金を見ては嬉しそうにしていた。

ジャックはある店に行く為に、薪割りしたり、家にあつた鉋で巨大鼠退治をしたりと、七日間掛けてお金を貯めたのだ。

そして、ある場所に到着すると

「お、ようやく来たな」

「もう少し遅かったら、先に入る所だったよ」

三人では一番年上のテリーと村で唯一の魔術師の息子のケントの二人が、一番最後に来たテリーを出迎えた。どうやら、もう少し遅かったら先に入っていたようだ。

「おっと。それは、危なかった」

「それじゃ、入ろうか」

テリーとケントの言葉に頷き、三人は森の中のある小屋の近くにある枯れ井戸の底にあるねこやのドアを開けた。

「いらっしやいませ。洋食のねこやによるこそ」

そんな三人を、霊夢が出迎えた。

「お好きな席へ、どうぞ」

「ああ」

「おう」

「うん」

霊夢に促されて、三人は空いていた近くの席に座った。

すると霊夢が、三人分のおしぼりとお冷やを持ってきて

「注文は、なんでしょうか」

『ハンバーガーセット！ 飲み物はコーラで！』

霊夢が問い掛けると、三人は揃って同じ注文をした。

霊夢がキッチンの方に行くと、三人は

「楽しみだな」

「だな。村で食べる料理とは、比べ物にならないからな」

「うん。僕の家でも、ここみたいな料理は無いからね」

とウキウキしていた。そして、軽く周囲を見てから

「にしても、この店って亜人多いよな」

「確かにね……あの扉から来てるのは分かるけど、何処から来てるんだろうね」

「不思議だよな。俺達の世界には、この店でしか見ない亜人がうじゃうじゃ居るってことだよな」

と会話した。三人は未だに村から出たことが無い為に、村の外の世界を一切知らないのだ。だから、ねこやに来る度に世界の広さを感じていた。

異世界食堂の所は、彼らの世界の色々な所に現れては、その扉を利用して客が来る。

しかし、何も使うのは三人のような人間だけではなく、亜人。魔族や半魔族も居るのだ。

腐った豆のソースをかけたパスタを食べるエルフに、毎回プリンだけを食べるハーフェルフ。そして、酒を浴びるように飲みながら魚料理をたらふく食べている二人のドワーフ。

来る頻度は少ないが、ガヤガヤと騒ぎながら大量の料理を食べる^旅ハーフリングと^小ここまでは、まだ三人にとっても常識的な範囲だ。

話では聞いているが、旅人や冒険者はたまに村にやってきては、泊まったり、村で依頼を果たしていく。

しかし、異世界食堂には三人の常識外れの客がゴロゴロとやってきては、各々が好きな料理を頼んで食べる。

「どうなってんだろうな、この店」

「さあなあ……」

「まったく分からないね……」

と三人が首を傾げていると、アレツタと早希がやってきて

「お待たせしました」

「コーラのハンバーガーセットです」

と三人の前に、二枚ずつお皿を置いた。

「おお！」

「待ってました！」

「美味そう！」

アレツタと早希の二人が離れると、三人は改めて自分たちの前に置かれた二枚の皿とコップを見た。

揃って右側の皿は、ダンシヤクを細い棒状に切って揚げた後に塩で軽く味付けした料理。フライドポテトが大量に盛られていて、皿の端にはトロつとした赤いソースが少量ある。

次に、三人の左手側には黒くてシユワシユワと泡が発生する飲み物。コーラが注がれた大きめのコップがある。

ケントはコーラを見ながら

（どうやって出来てるんだろ、この飲み物……火山地帯でたまに見つかる水と関係してるのかな？）

と内心で首を傾げた。

そして最後に、三人の正面の皿にメイン料理のハンバーガーがある。

二枚の円形に整えられた白パンで、塩胡椒で味付けされた肉と新鮮な野菜、チーズ。そしてチーズの上にマルメットを使った赤いソースが掛かっているのを挟んでいる。

「そんじゃあ」

「食べますか！」

「だね！」

そして三人は、ハンバーガーセットを食べ始めた。

「うむ。やっぱり、ここの揚げ物は良い油を使ってるんだな」

テリーはフライドポテトを食べると、確信した様子で頷きながら言った。

食べるとホクホクとした食感を残しながらも、ホロホロと崩れるフライドポテト。

テリーが家庭教師から聞いた話では、遠く離れた帝国では一般的に食されている料理のようだが、店によっては

油臭かったり色が違うらしい。

考えてみたら、ねこやは田舎の少年達から見たら遙か雲の上の存在の人達に満足してもらおう料理を、非常に手頃な値段で提供してくれている。

それでよく商いが回るな、とケントは思った。

そして三人は、あつという間にハンバーガーセットを食べ終わると、コーラを飲む。

三人だが、ハンバーガーセットを食べ終わっても追加を注文するのが大抵の流れだ。

「すみません。フライドポテトを追加で」

「僕は、コーラをお願いします」

「俺、ハンバーガー追加！」

テリーは口元に付着していたソースを拭きながら、ケントは空になったコップを持ちながら、ジャックは指に付着していたソースを舐めながら追加注文した。

「はいよ」

そしてその注文を、たまたま出ていた店長が聞いた。三人を見ながら、店長は以前にホットドッグを食べに来ていたカップルを思い出していた。

そして、少しして

「ふう……食った食った」

「美味しかったね」

「うむ。やはり、ここの料理は他とは一味違うな」

三人は満足そうに頷きながら、財布を取り出した。

「お金、ここに置いておきますね！」

「美味かったよ！」

「満足した！」

「はい！ 分かりました！」

キッチンの方から明久の声が聞こえて、三人は財布から出したお金を机の上に置いて退店した。

そして、枯れ井戸の底に戻ると

「よしっ！ 戻って、特訓するか！」

「うん、そうだね」

「うむ。旅立ちも近いからな！」

実は三人は、15歳になって村の掟で大人と認められたら、冒険者になろうと約束していたのだ。その為に、それぞれ剣や魔術の特訓をしていた。

「けどそうになったら、ハンバーガー食べられなくなるな……」

「ああ、そうだね……」

「確かにそうだな。しかし、世界は広いんだ。他に美味しい料理があるかもしれないぞ？」

ジャックとケントは少し残念そうにするが、テリーはそんな二人の背中を叩いた。

この三人が大人と認められて、村を離れるのはもう少し先の話。

80 皿目 ナポリタン

カウベルの音が鳴り、店員の霊夢に出迎えられながらシリウスとレウスの二人は席に行く途中で

「ぼっちゃん、私はこれで」

「ああ。見て学んでこい」

と別れて、レウスはキッチンの入り口近くの席に座った。最近来る度に、レウスはキッチン入り口近くの席が空いていたら、そこに座って中を見るようになっていた。当然明久や店長は気付いているが、止める理由は無いからと放置している。やはり、腕利きの人の行動を見ると、学べる事があるからだ。

レウスは近くに来た早希に、シーフードピザを注文した。

(本当に熱心だな、レウスは)

中をジッと見るレウスに、シリウスは呆れながらもメニューを開いた。今レウスが座っている席は、レウス曰く料理人の特等席との事だった。

それはさておき、シリウスは近くを通ったアレツタを呼び

「すまないが、ナポリタンをウインナーで頼む。それと、食後にカフェオレを」

と注文した。

「はい、分かりました！」

シリウスからしたら異世界で、ベーコンと呼ばれる燻製肉とウインナーと呼ばれる腸詰め料理。その2つを使った料理たるナポリタンは、シリウスのお気に入り料理になる。

今はこのナポリタンの料理の再現に取り組んでおり、レウスとは別にやっている。

それはさておき、シリウスは店内を見回して

(だけど、やっぱりお客の出身が読めない)

と思った。

実は最近、ある噂が出回っているのだが、それはシリウスからした

ら有り得ないと思っていた。

それは、南大陸に渡れる方法を見つけて、更に南大陸からの商人が東大陸と西大陸に来ている。というものだった。

シリウスが居る東大陸とアルフェイド商会として、あまり交流が多くない西大陸。そして、今まで情報があまり無い南大陸。

東大陸と西大陸。そして南大陸の間には、竜神海という魔の海域が存在する。シリウスが知る限り、その竜神海に入った船は例外無く全て沈められた。

長い間、様々な方法が試されて突破しようとしたが、成功した者は居らず、今では帰らずの海域とすら言われ、誰も近寄ろうとしない。そもそも、本当に人が居るのかすら分からないのが実状だ。しかしシリウスは、はたと気付いた。

異世界食堂には、様々な場所から色んな人がやってくる。もしかして、南大陸の人が居るのではないかと、シリウスは改めて観察を始めた。

見慣れた東大陸の服を着た人族、エルフ、リリパッドや旅小人。そして、魔族。

次に、あまり見慣れない服を着た肌の黒い男女。恐らく、西大陸一の大国。砂（ジャリーフとラナー）の国の人達。

とそこまで確認したシリウスだったが、重要なポイントに気付いた。

（しまった……南大陸の人達の服を知らないから、分からない！）

自分のうっかりに、シリウスは頭を抱えた。しかし、噂が有るのならば確実に南大陸にも扉は有る筈であり、もしかしたら来店者の誰かがその情報を得て、流したのではないかと考えた。

（出来ることなら、その人に出会って、情報を聞きたい）

アルフェイド商会の若き代表として、シリウスは商機を掴もうと思った。その時

（お待たせしました。ナポリタンです）

と近くにクロが来ていた。

クロはトレイの上にあった色鮮やかな麺料理をシリウスの前に置

き

(こちらのお2つは、お好みでご使用ください。それでは)

と下がっていった。そして、赤みが強い橙色の麺料理。ナポリタンを見たシリウスは、頭を軽く振って、先ほどまでの考えを頭の中から追い出した。

これは、シリウスの祖父であり、アルフェイド商会先代代表たるトマスの教育の賜物だった。

『我々アルフェイド商会は、食べ物を扱う商会だ。だから、食べ物には真摯に向き合いなさい』

この教育には、シリウスも同感を覚えていた。

故にシリウスは、先ほどまでの考えを一旦追い出して、ナポリタンに意識を集中させた。

そしてこの姿勢が、シリウスが若くしてアルフェイド商会の代表に選ばれた理由だった。

舌の繊細さと料理に対する姿勢、これがシリウスの父親より優れていたのだ。シリウスが新しい代表に選ばれたのだ。

それはさておき、シリウスはナポリタンを観察した。

マルメツト^トを使ったソースたるケチャップによって、綺麗に色づいた麺。見たことの無い緑色の野菜の細切りと異世界のキノコ^ム。そして、ほのかに歯ごたえが残っているオラニエ^{ネギ}。

鮮やかな赤いナポリタンは、お菓子を除いて最も華やかな料理だ、とシリウスは思っている。

(さて、頂こう)

シリウスはフォークを持つと、ケチャップとバターの匂いが香るナポリタンを一口分巻くと、口に運んだ。

(うん……やはり、炒めると風味が変わるな……)

口の中に広がるのは、茹でただけでは得られない香ばしさだった。ケチャップの柔らかい酸味とバターの味が絡み付いた麺は、それだけでご馳走だとシリウスは思った。普段食べている麺料理とは違う風味の違いは、その調理法にあった。

これは、特等席で見っていたレウスが気付いたのだが、普段の麺料理

は茹でた麺と別に作ったソースを和えるだけである。

しかしナポリタンは、茹でた麺と別に作ったソース。具材と一緒に炒めていたのだ。それこそが、ナポリタンの香ばしきの秘訣だった。(うん……やはり具材は美味いが、多すぎるとバランスを損なうな)

一緒に炒めてある具材を食べて、シリウスは頷いた。
ナポリタンの具材は、一般的なマルメツトソースを使った料理と比べて少ない。

だが、バターと一緒に炒められた具材は、それらには無い旨味が凝縮されている。具材が多くなれば、主役の麺が脇役になってしまう。それらを考えると、やはり具材は少ない方が良く、とシリウスは判断した。

(やつぱり、具材は麺を引き立ててこそだな……)

更に味わつていて、シリウスは更に具材に別の役割があることに気付いた。具材と一緒に食べると、それぞれの旨味が麺に付加される。麺と具材が一体になったのが、ナポリタンだとシリウスは評価していた。

(さて、そろそろ味付けを変えるか)

そう思ったシリウスは、クロが後に置いた2つ。

緑色の容器の粉チーズとガラス瓶のタバスコを取った。

両方とも、かけ過ぎないように慎重にかけていく。

そして、一口食べるとシリウスを襲ったのは猛烈な辛さ。しかし、すぐにチーズがその辛さを和らげる。

(よし！今回は完璧に出来た！)

自分好みの味わいになり、そこからシリウスは、無我夢中でナポリタンを食べた。

国でも屈指の大商会たるアルフェイド商会の若き代表のシリウスだが、今の姿は年相応の食べ盛りの青年の姿だった。

食べ終わると、霊夢が持ってきたカフェオレを飲み干して、シリウスはキッチンとお金を払い、レウスと一緒に退店した。

扉を潜った瞬間、シリウスの表情は若き代表の物に変わった。ここからは、経営者としてレウスと一緒に料理の再現に励む。

81 皿目 ポテトチップス

ヴイルヘイム^{ヴイルヘイム}がダンシヤク^{ダンシヤク}を得たのは、本当に偶然かつ道楽だったのだ。その日、たまたまヴイルヘイムがお店に来店し、その最中に大樹は一度材料が少なくなっただけで買い物に行った。

そこに、幼かった店長がやってきて、学校で育てたじゃがいもを持っていった。

最初はそれが野菜だとは知らなかったヴイルヘイムだが、当時の店長が

『これで、じいちゃんにコロツケ作ってもらおうと思ってたんだけど』という言葉を聞いて、じゃがいもがコロツケの重要な材料と知った。ヴイルヘイムはじゃがいもを、店長から金貨一枚で買い取り、帰還した。

当初はそれで、自分の分のコロツケが作ればいいと思っていた。しかし、じゃがいもは建国し、領土を広げてきてあまり土壌の良くなかった土地でも、大量に作れた。

そこからヴイルヘイムは、じゃがいもを国中に広めた。

それが、小麦が作れず食糧難に苦しめられていた帝国を大いに救い、そこからヴイルヘイムはついでに劣化版だったがコロツケのレシピを公開。

一気に、帝国ではじゃがいもを使った料理が開発され続けた。

なお、そんな経緯故に帝国では六柱の龍神の中では大地の神たる緑の龍が広く信仰されている。

これは、ヴイルヘイムがじゃがいもを神から授かった実だと発表したからに他ならない。

発表されてから、年に10以上のペースでじゃがいもを扱う開拓地が拓かれ続けてきた。

なお緑の龍は、基本的に直接的戦闘力は高くない。

緑の龍は、黒や赤の龍を支援するのが主体だった。

混沌との戦闘が終わった後、緑の龍は豊穰の神として扱われ、神官

達も豊作の為に働いた。

ダンシヤクを深く研究し、帝国各地に広げていった。

この数年の間に急激に増えた開拓地と、それらの開拓地を結ぶ街。その街の一つに新しく赴任した緑の神官の一人たるソフィは、1日の務めを終えて、秘密を守る為に尾行に注意しながら街郊外の森に向かっていた。

(ああ、お腹空いた……早く行かないと)

その森は、各開拓地の中に決められている森林保護区になっており、勝手に木を切るのは禁止されている。

ソフィが向かう先にあるのは、その保護区を管理する為という名目で建てられた小さな小屋である。

中に入れるのは、決められた人員のみになる。

つまり、この場合はソフィだけだ。

そして、その小屋の中にねこやのドアは有った。ドアを見つけたのは、着任した時になる。

そしてソフィは、期待に胸を膨らませながら、ドアを開けた。

「いらっしやいませ。洋食のねこやによるこそ」

そんなソフィを霊夢が出迎え、近くの空いてる席に案内しようとしたら

「あ、彼女と相席いいかしら？」

と一つの席を指差した。そこには、同じ緑の神官を示す神官服を着た一人の獣人が居て、ガフガフと何か食べている。

「少々お待ちください」

霊夢は一言断り、その獣人神官に確認し

「どうぞ」

とその席に案内した。

入れ替わりに、早希がやってきて

「お冷です。ご注文は……」

「何時も通り、ビールとポテトチップスの大盛！ 味付けは、塩と塩のり、チーズでお願い！」

早希の確認の言葉に被せ気味に、ソフィは注文した。

ソフィからしたら、7日に一度の貴重な時だから、我慢の限界だったのだ。

注文を受けた早希が離れると、ソフィは目の前の神官。

アデリアを見て

「久しぶりね、アデリア。元気してた?」

と笑みを浮かべて、問い掛けた。

するとアデリアは、食べていた^{スバニッシュ}オムレツの卵焼きを飲み込み

「久しぶり、ソフィ。忙しくて中々来れなかったよ。次には、弟も連れてくるね」

と答えた。

ソフィが居る帝国から遠く離れた、西大陸の緑の神官のアデリア。因みに、ソフィは緑の司祭であり、その若さから考えるとかなりの出世になる。

そんな二人が出会ったのは、やはりこのねこやになる。

ソフィが初めて来た時、既に何回か来店していたアデリアがねこやの事を教えたのだ。

その時から、ソフィとアデリアは仲良くなり、時々一緒になったら相席して料理を食べるようになる。

歳も近く、半魔族に対する差別意識もなかったソフィと明るく朗らかなアデリア。同じ緑の龍を奉じるといふ共通もあったからだ。

そもそも、緑の龍を奉じる人種というのは非常に珍しく、緑の龍を奉じるのは大半がアデリアのように半魔族だ。実は司祭のソフィが開拓地に着任したのも、ある意味でそこが起因しており、帝都で居心地が悪かった為に志願して開拓地に来たのだ。

帝国では半魔族も積極的に受け入れている為に、帝都の司祭や高司祭、神官は半魔族ばかりだった。

ソフィ自体に差別意識は無くとも、居心地が悪かったのは仕方なかったのかもしれない。

それはさておき、ソフィとアデリアは久しぶりの再会に談笑していた。アデリアはどうやら弟が移住してきたようで、それと合わせて忙しかったようだ。

そこに

(お待たせしました。ビールとポテトチップスの大盛です)

とクロがソフィの前に、料理を置いた。

(お熱いので、気をつけてください。それでは、ごゆっくり)

クロを見送った後、ソフィは料理に視線を向けた。

非常に薄くスライスしたじゃがいもを一気に揚げて、味付けする。という料理としては非常にシンプルだが、ソフィはポテトチップスが好きだった。

「大地を見守る我らが神よ。我らに実りと糧をもたらしいたいただき、感謝します」

何時もの祈りを捧げてから、ソフィは素手でポテトチップスを一枚取った。

(うん。やっぱり、揚げたてが一番よね)

まずは、塩から食べる。

薄くとも確かに感じるじゃがいもの風味に、うっすらと感じる塩気が合わさる。

パリパリという食感は、じゃがいもと油が良質な証拠。

(うん！ やっぱり、ポテトチップスは皮の部分が美味しい！)

ソフィは自分の考えが正しいと信じて、ビールを飲んだ。

帝都ではコロツケが有名だが、同じ位有名なのがフライドポテトだ。

ソフィの実家はフライドポテトの店を出しており、帝都ではフライドポテトはホクホクとしつつもホロホロとした実が旨いという主張と、油でカラリと揚がった皮の方が旨い、という主張により日夜議論が交わされている。

因みにソフィは、皮派である。

そんな彼女にとつて、薄くスライスされ揚げられたポテトチップスは皮に等しい物だった。

(それに、味付けも良い！)

実家では塩味が基本的だが、塩も高い調味料な為に非常に薄味になることもある。

しかし、ねこやでは塩味だけでなくのり塩とチーズというソフィからしたら予想外の味付けに出会い、思わず実家に手紙で提案した程の衝撃だった。

のりに関しては、その磯の風味から海に関する予想し、何とか入手しようとする手尽くしているが、中々見つからない。

次にチーズは、中々合うのが見つからないという。

是非頑張ってもらいたい、とソフィは思った。

のり塩は磯の風味がするのりに塩が非常にマッチし、口の中に海を感じた。

そして、チーズ。

細かく挽かれたチーズだが、濃厚な味がじゃがいもと合わせり、幸福感に包まれる。

気付けばビールを二杯おかわりし、大盛のポテトチップスを食べながら、アデリアと会話を楽しんだ。

途中でポテトチップスは冷めてしまったが、ポテトフライとは違って、ポテトチップスは冷めても美味しい。

ポテトフライは冷めてしまうと、しんなりして歯ごたえも微妙になっってしまう。しかしポテトチップスは、冷めてもサクサクのまま最後まで食べられる。

それが、ソフィがポテトチップスを気に入った理由だった。

流星に持って帰って数日すると湿気ってしまうが、火傷せずに美味しく食べられるのは衝撃だった。

最近、実家ではポテトチップスの再現に取り組んでおり、それにより日に日に売り上げが上がってきていると手紙に書いてあった。

(ポテトチップスは美味しいし、実家は売り上げが上がってきたし、最高だね！)

その日は久しぶりのアデリアと会話を楽しみながら、ソフィは満足いくまでポテトチップスを堪能したのであった。

82 皿目 オイルサーティン

海国に無数にある島の一つに、ドワーフが住む島がある。その島は火山により形成された島で、農作物に向いていない代わりに、鉱物が豊富な為に鍛冶が盛んで、ドワーフが住み着いた。

ドワーフ達は鍛冶で作った商品売り、食糧や作業に使う炭を入手してきた。

そんな島に住むドワーフの一人、老女のメイファンは痛む関節の節々に沁みる温泉に身を任せながら

「いやあ……沁みるねえ……」

とため息混じりに呟いた。

そしてメイファンは、ゆっくりと沈んでいく太陽を見た。温泉は島でもかなり高い位置の海に面しており、絶景を楽しめるのが特徴的だ。

しかしそんな立地の為、その温泉に入りに来る人数は少ない。実際、今もメイファン一人しか居ない。

この温泉は湯治にも使われる程に効能が良いが、来るのは鍛冶仕事から引退したドワーフばかりになる。

実際、メイファンも鍛冶の一線からは退き、孫まで取り上げた経験のある熟練の一人だ。

この温泉には、関節の痛みを取る為という名目で7日に一度来ている。

温泉と夕焼けを楽しみながら、メイファンはある程度すると

「そろそろ、行くかね」

と言って、温泉から上がって服を着た。

温泉から少し離れた林の中、少し開けた場所にそれはあった。通称異世界食堂、洋食のねこやのドアだ。

「いらっしゃい」

メイファンがドアを開けると、店長が出迎えた。

「注文は何時も通りに、ビールで？」

「ああ、頼むよ。喉がカラカラでね」

店長にそう返しながら、メイファンは近くの席に座った。そして、初めて異世界食堂に来た時を思い出した。

その時は、店長は先代店長。つまり、大樹だった。

豪快な性格だが、出された料理はその美味しさに驚いた。

見た目に反して、繊細だと驚いた。それからもう30年近く来ているが、店長は代わり、更に店員も大幅に増えた。

「……まあ、あたしも大分歳を重ねたからね……」

「お待たせしました。ビールです」

メイファンが小さく呟くと、霊夢が大ジョッキのビールをメイファンの前に置いた。

メイファンの中で、決まっている最初の飲み物。それがビールだ。ねこやで初めて飲んで、それ以来嵌まっている。

「料理はもう少々お待ちください。それでは」

霊夢はそう言つて離れ、メイファンはまず一口飲んだ。

キンキンに冷えたビールが喉を通り、胃に入っていく。その感覚は、最初から変わらない。

「ふう……旨い……」

適度に効いたクーラーで、火照っていた体が冷えていくのを感じつつ、ビールの苦さを堪能する。

(やっぱり、一人に限るね。同胞の男と来たら、酷いことになる)

ドワーフの男達が一緒に飲んだら、それはもう潰れるまで飲み食いする。別にそれが嫌いな訳ではないが、やはり雰囲気合わない。

「お待たせしました！ 鰯のオイルサーディンです！」

アレツタはそう言つて、底の深いお皿をメイファンの前に置いた。中には頭と内臓を取った鰯が僅かに焼かれた状態でたつぷりの油の中に浸かっていた。

「こちら、ケチャップとマヨネーズ。醤油です。ご自由にお使いください」

「ああ、悪いんだけど。新しくウメシユを瓶で」

「はい、わかりました！ 後程お持ちしますね」

追加注文で新しくお酒を追加し、それを聞いたアレツタはキッチンに消えた。それを見送ってから、メイファンはオイルサーデインを見た。

これも、初めて食べたのは大樹の時だった。

メイファンにとって魚は食べなれた食材で、味は知り尽くしていたつもりだった。

しかし、オイルサーデイン油漬は初めてだった。

そして驚いたのは、その柔らかさ。

オイルサーデインは骨まで柔らかくなる程に煮込んであり、小骨に至ってはまるで無いように食べられる。

初めて食べた時は、こんな料理があるのか、と驚いたものだ。

（先代は、これを自家製だと言ってたね……上等な鰯が入った時だけって）

トウガラシトウガラシとガレオンニンニクの風味が口の中に広がる。恐らく、自家製なのは今も変わらないだろう。

ゆつくりと食べていると

「お待たせしました。梅酒の瓶です」

と早希が新しく梅酒を持ってきた。入れ替わりに、飲み干した大ジヨツキを回収し

「それでは、ごゆつくり」

と言って、下がっていった。

（……変わったね。この店も）

最初は大樹と少々無愛想な暦の二人だけだったが、途中で暦が居なくなり、代わりに今の店長が入り、大樹が居なくなつて、気付けば青年の明久が入り、アレツタが入り、クロが入り、早希が入り、霊夢が入った。

（あたしもそろそろ、誰かに教えるかね……）

メイファンはそう考えながら、梅酒を飲む。

（む。また美味しくなってる……どうやったら、こんな味になるんだい）

実は、メイファンは鍛冶から引退した後、梅酒造りを始めた。今や島でも一番高く取り引きされており、上物は金貨で取り引きされている。

それは、この店で初めて飲んだ時に感動し、再現を始めたのが始まりだった。

年々改良を繰り返しているが、未だにメイファンは満足していない。

(さて、また解析するかね。今に満足しないように)

メイファンはそう考えながら、梅酒とオイルサーディンをゆつくりと楽しんだ。

83 皿目 かき氷・抹茶宇治金時

青い空の浮かぶとある孤島で、イルゼカントは大あくびをして

「……ああ、暇だ……」

と呟いた。何処までも続く青い空と、ゴーレム達により手入れが行き届いた庭園。生きる事には困らない、全てが揃った空に飛ぶ島。それが、イルゼカントが居る所だった。

島内のあらゆる木には様々な種類の果実がたわわに実り、生活に必要な事は島中に配置されているゴーレム達がやってくれて、寒暖差もなく、命を脅かすような危険な生物も居ない。

両親から聞いた口伝と大量の書物。それが、250年余り生きてきたイルゼカントの知識であり、世界の全てだった。

「最近では、研究も飽きてきたなあ……」

衰弱し動けなくなった両親から頼まれた、千年を超える年月を費やしたある魔法の研究。今から200年前に死んだ両親から頼まれてから暫くは打ち込んだ研究だったが、最近では最早意味らしい意味を見出だせず、ダラダラと過ごしていた。

今から200年前に眠るように死んだ両親によれば、イルゼカントはエルフと呼ばれる種族らしい。

両親によれば、エルフは他種族を遥かに凌駕する寿命と遥かに高度な知識。そして何より魔法により、世界を支配する権利があると言っていた。

しかし、今から数百年前に衰退したという。

その理由は、大疫病だったという。両親が野蛮だと言っていた龍種か、もしくは過去には頻繁に侵攻していた異世界からかは分からないが、未知の病気が大流行し、エルフを滅亡寸前まで減らしたのだという。

たった20年で滅亡の危機に瀕したエルフは、覇者の地位から陥落。幾人もの偉大な魔法使いと今や口伝と書物に記されただけの魔

法が喪われ、エルフは覇者から転げ落ちた。

それが許せなかった一部のエルフ達は、ある賭けに出た。残されていた魔道具。飛行島を起動させ、何人たりとも近づけないように幾重にも結界を張り、空に研究所を設立し、喪われた魔法を復活させようとした。

そして、その末裔にして最後の一人がイルゼカントだ。

「まあ、空に逃げたから俺が産まれたんだから、そこは感謝するけど……」

最初はその好奇心から、両親から引き継いだ魔法の研究をしていた。しかし、たった一人で二百年も研究しても、他人と検証が出来ない為に、研究に意味を見出だせなくなった。

「さて、今日は何をしようか……」

最早何をすればいいか分からず、そんな日々が後七百年は続くと考えたら、恐ろしさすら覚えた。

しかし

「ん……何やら、妙な魔力の流れが……」

普段とは違う魔力を感じて、イルゼカントはその場所にゴーレムに乗って向かった。

そこは、魔道具の真上。最も魔力の濃い場所であり、両親の墓所だった。

「へえ、これは……転移魔法か。それも、異世界に繋がる類い……珍しいな」

イルゼカントはようやく、次の暇潰しを見つけたと言わんばかりに無造作にねこやのドアに歩み寄った。

畏かもしれない、という思考すら抱かず、イルゼカントはドアを開けた。

「ほう……これはまた。初めてくる場所だな」

イルゼカントは入った場所。ねこやの調度品を見ながら、そう呟いた。すると、キッチンの方から店長と明久が姿を見せたのだが

「ん？ なんだお前達は。そこまで魔力が無い人間が居るのか？」

イルゼカントは、店長と明久から全く魔力を感じられず、思わず首

を傾げた。

「えつと……お客さんですかね」

「私たちは、この店の店長と料理人ですが」

「店？ 確か、お金を対価に物品を提供する場所だったか……」

イルゼカントの言葉を聞いて、明久と店長はよほどの田舎者か世間知らずが来たな、と思った。

「ええ、まあ。ここは料理屋ですが」

「料理屋ということは、料理を出す場所か」

料理は、知識としては知っている。

飛行島には料理する必要のある物は無かったが、煮たり焼いたりして、本来なら単品で食べられない物を食べられるようにすることだ。

因みに、死んだ両親は栄養さえ足りてればいいという思考で、それは若干ながらイルゼカントにも引き継がれている。

「では、その料理をくれ。なるべく珍しいやつを」

「珍しい……」

「実は、まだ開店準備中ですので……軽めの物になりますが。デザートとか」

「構わん」

そこまで会話した時、ドアが開き、アレツタが入ってきて

「おはようございます……あ、いらっしやいませ」

と若干眠そうなアレツタが現れた。アレツタを見て、イルゼカントは

「ほう……混沌の神の眷属か。実物は初めて見た」

とアレツタを観察し始めた。すると、店長が

「すいません、お客さん。彼女は着替えないといけないので」

「ほら、アレツタちゃん。シャワー浴びて、着替えてきて」

そこに、いつの間にか来ていた早希が、アレツタと御幣を持っている霊夢を連れて奥へと消えた。

その後、イルゼカントは適当な席に座って周囲を見ていたら

「お待たせしました。かき氷の抹茶宇治金時です」

と早希が、イルゼカントの前に透明な器に盛られたそれを置いた。

「これは……」

「かき氷と言いまして、伝統的なデザートの一つで、今回はそのかき氷の内の抹茶宇治金時となります。では、ごゆっくり」

早希はイルゼカントに教えながら、イルゼカントの前にスプーンとお茶を置いて離れた。早希を見送ったイルゼカントは、かき氷を見た後器を触り

「この冷たさ……中に入ってるのは、雪……なのか？」

と考えた。次に見たのは、深緑色の抹茶。

「この草色のはなんだ？ 薬草の煮汁に似ているが……」

本当に小さかった頃、一度体調を崩した際に両親が薬草を煮たのをイルゼカントに飲ませた事があった。

その時の苦さを思い出し、苦い表情を浮かべながらスプーンで口に運び、固まった。

(確かに苦いが、優しい苦さに……甘い)

予想に反した味が口の中に広がり、冷たい。

次に口に運んだのは、濃い紫色に見えるべちやつとした物。アッコだ。

(見た目は固そうだが、予想より柔らかいな……それにこれは……豆か？ 灰かに甘い……)

そしてイルゼカントは、その2つと氷をスプーンで一気にすくい、食べた。次の瞬間、ズキリとした痛みが一瞬だけして、イルゼカントは止まった。

「くうっ……今のは、一度に多く食べたからか……」

そして次に、白くて丸い物。白玉団子を口にした。

「ふむ……面白い食感だが、大して味は……」

途中まで言っただけイルゼカントは、ある考えに至り、全て纏めて口に運んで、目を見開いた。

(やはりそうか！ これらは、全部を纏めて食べれば調和する！ これが、料理というものか!!)

初めての経験に、イルゼカントは感動しながらかき氷を食べた。時々くる頭痛に耐えながら、イルゼカントはかき氷を食べ終わると、

今はお金が無い事を告げて、ツケにして退店。

消えていくドアを見ながら

「なるほど……この世界も異世界も、捨てた物ではないらしい……」

と呟き、次には祖先が念のためにと残したお金を持っていこう、と心に決めた。

84 皿目 ホットドッグ

「おお！ 今日がドヨウノヒだったか！」

数日前から毎日来ていたトウイチロウは、小さい頃からの遊び場だった巨木の根元にネコヤのドアを見つけて、嬉しそうにした。

事情があり、今から約8年程前から来れなくなってしまうたねこや。

ねこやのドアは、殆ど自分の記憶通りだった。違うのは、東大陸語が書かれた看板が掛かっている事。

「……さあ、行こうか。ア……」

そう言つて振り向いた先には、誰も居ない。それに気付いたトウイチロウは、少し寂しい様子で

「そうだった……今は、一人だったな」

小さく呟きながら、トウイチロウはゆつくりとドアを開けた。カウベルの音が鳴り

「……懐かしいな。8年前と、変わらない……」

内装を見たトウイチロウは、目を細めながら呟いた。

そこに、アレツタが近づき

「いらっしやいませ！ 洋食のねこやにようこそ！」

とトウイチロウを出迎えた。そのアレツタの声に、料理を持ってきていた店長が反応し、トウイチロウを見て

「おや、もしかしてトウイチロウさん？ お久し振りですね……今日は、お一人ですか？」

と問い掛けた。

店長の記憶では、以前トウイチロウは幼馴染みの少女のアヤと一緒に来ていた。そしてトウイチロウからしたら、記憶よりも幾分か老けたが、間違いなく店長だった。

「ああ。だから今日は、ほつとどつぐとこーらを一人分で頼む」

「はいよ……お一人分ですか？」

「ああ……今日は拙者の分だけだ。しかし、土産用に三人分頼む」

トウイチロウはそう言いながら、手近な席に座った。

そして店長は、約8年の間に何か大きな変化があったのは理解しながら、キッチンに戻っていった。

席に座ったトウイチロウは、久しぶりのねこやに感慨深くなりながら、店内を見回した。

殆ど変わらない落ち着きのある内装に、思い出が甦る。

初めて来たのは、今から約10年程前だった。

当時トウイチロウは、武者修行の旅に出る為に知り合いから剣の手解きを受けて、前衛も出来る支援系。巫女の役割のアヤと一緒に特訓していた。

そんなある日、大木の根元にねこやのドアが現れた。

ちようどお腹が空いていた二人は中に入り、その時に試作品という形で出されたホットドッグに魅了された。

それからは特訓し、帰る少し前の腹ごしらえにホットドッグを食べながら帰る、というのが習慣になった。

(思えば、この店に来たから、世界の広さを知ったのだったな……)

それは、料理を食べに来る客の混沌さだった。

その大半がトウイチロウ達と同じ人だが、魔族や半魔族、亜人とその当時は村の事しか知らなかった二人からしたら、予想外過ぎる見ただ目の人達に度肝を抜かれた。

しかし、それがあったからこそ、トウイチロウ達は旅先で出会った様々な人達と会話する事が出来た。

(まあ、旅ももう終わりだがな……)

約8年、世界中を旅して、それなりに名前は売れたと思う。しかし、アヤとの関係の変化が武者修行の旅に終止符を打って、故郷に帰ってきたのだ。

「お待たせしました！ ホットドッグとコーラのセットです！」

そこに、トウイチロウからしたら、異世界の服を着たアレツタがやってきて、料理を置いた。

旅立つ前には店長一人だけだったが、8年の間に店員は大分増えた

ようだ。

(変わらぬものは無い、か……)

以前旅先で出会った最強の剣士の言葉を思い出しながら、トウイチロウはその料理。ホットドッグとコーラのセットを置いたアレツタを見た。

「お持ち帰りの分は、後程お持ちします!」

「すまぬな、娘」

「それでは、ごゆっくり!」

アレツタは元気よく頭を下げて、去っていった。

「では、頂くとしよう」

アレツタを見送ったトウイチロウは、そう言っただけでホットドッグを見た。

真っ白なお皿に乗せられた、見事な焼き色の付いたパンに挟まれた豚の腸詰めと赤と黄色のソース。

料理と見たらかなりシンプルな物だが、未だにこのねこやでしか食べられない料理だ。

(この料理は、握り飯と同じように素手で食べるものだ)

トウイチロウはそう思いながら、皿の上のホットドッグを掴んだ。やはり焼きたてなのだろう、仄かに暖かく、パリッとしたパンと、熱

気が分かる太いソーセージ。

それに、トウイチロウは大きくかぶり付いた。

その瞬間、口の中で味が爆発した。

溢れる肉汁、仄かな酸味の赤いソース、そして黄色のソースの辛味が、口の中で絡み合い、深い味わいに変わる。

久しぶりに味わい、特訓していた時の事を思い出す。

(思えば、あの頃はこれが普通だと思っていた……)

米が当たり前だった山国のトウイチロウとアヤからしたら、パンが主食の東大陸で食べられると思っていたのだが、実際に食べてみて、歴然の差に二人して肩を落としたものだ。

(むう……このおらにえとたまなが、またいい味だ……)

辛味が無くなり、むしろ甘く感じるオラニエとソーセージの下に敷

いてあるたまなが、口の中の肪をさっぱりさせる。

(やはり、ほつとどつぐは出来立が一番だな……アヤにも、出来立てを食べさせてやりたかった)

今は隣に居ないアヤを思い出しながら、トウイチロウは残りのホットドッグを食べ、コーラを飲み干すと

「ごちそうさま……」

と手を合わせた。そこに、店長と明久が歩み寄り

「お待たせしました。こちら、お持ち帰り用のホットドッグです」

とトウイチロウの前に、ビニール袋を置いた。

それを確認したトウイチロウは、懐から財布を取り出して

「会計を頼む」

と財布を差し出した。

トウイチロウはどうにも、金勘定に疎い。そこもアヤが担っていたのだが、店長ならば信じられると思っていた。

店長は財布の中から必要なお金を取り出し

「はい、毎度あり」

と財布をトウイチロウに返した。

「では、また来る」

「はい。お待ちしております」

トウイチロウの言葉に、明久が微笑みを浮かべながら頭を下げた。

そしてトウイチロウは退店すると、消えていく扉からすぐに目を離して

「待っているよ、アヤ……すぐに、このほつとどつぐを食べさせてやるからな」

と急ぎながら、かつ転ばないように、村に帰り始めた。

二人の間に産まれた愛し子の世話で、家から離れられないアヤに、暖かいホットドッグを食べさせた為に、トウイチロウは走った。

85 皿目 モンブラン

王国出身の冒険者トーマスは、その素晴らしい味に驚きと感激を覚えていた。

（嘘だろ!? 菓子ってのは、こんなに旨いものなのか!?)

トーマスが食べている菓子は、マローネ^栗がふんだんに使われていて、トーマスを知る菓子とは大きく外れたものだった。

菓子のてっぺんに乗っている見事なまでに黄色く、芯まで甘く煮込まれた一粒のマローネ。

そして、口に入れただけで融けるクリームにも、マローネの風味を濃厚に感じる。だが、甘さがくどくない。

トーマスを知る菓子は、甘さがくどくて一度食べたら暫くは食べたくなくなる程だった。

しかし、その菓子。

モンブランは、また食べたくなる物だった。

「その嬢ちゃん! このモンブランっての、もう1つくれ!」

「はい、分かりました!」

トーマスの注文を聞いて、早希はキッチンの方に消えた。それを確認したトーマスは、残ったモンブランを口にしながら

（最初はたかが菓子探しに銀貨3000なんて、バカげてるって思っていたが……これなら、納得する! こいつは、亡くなったメイド頭の婆さんに感謝だな）

トーマスはそう思いながら、心中で顔も知らないお婆さんに感謝した。

発端は、今から約10日前になる。

探し物専門の冒険者、《探し屋トーマス》はある貴族。

マローネの名産地の領主の奥方のエレアノールの依頼を受けて、王都から3日かけてその領主の館に来た。

そうして依頼されたのが、モンブランの搜索願いだった。

その領地の東側には、よく手入れされたマローネの木が立ち並び、秋になれば大量のマローネが収穫され、そのマローネを用いた料理で榮えてきた。

そうした由来の為に、通称でマローネの町と呼ばれ、そして、王国国内で使われるマローネの約9割はこのマローネの町から流通した物が使われるという。

ある意味で、王国には欠かせない町の支配者。それが、エレアノールなのだ。

「で、では……その……」

「はい……マローネを使った菓子。モンブランを探しだしてほしいのです」

まさかの超高額報酬に見合わない探し物の内容に、トーマスは耳を疑った。

（正気か？ たかが菓子に、銀貨3000枚も出すか？）

20代半ばで既に子持ちとは思えない妖艶さのエレアノールは、事の経緯を話し始めた。

それは、エレアノールの祖父の時から仕えていたベテラン中のベテランのメイドだった元メイド頭だった女性は、今から数年前から町の特産品たるマローネを使った素晴らしい菓子を何処からか買い付け、それを主人に提供してきたらしい。

それは、今まで食べてきたどの菓子よりも素晴らしく、エレアノールも含めて領主一家をあつという間に魅了した。

一度は毎日食べたいと言ったらしいが、そのメイド頭は7日に一度しか無理です。と言ったらしい。

それからは、毎年秋の時期が楽しみになっていた。
だが

「昨年にそのメイド頭さんが亡くなってしまい、何処で買っていたのかが分からなくなってしまった……と」

「ええ……私達も方々まで手を尽くしたのですが……」

昨年の冬に、その元メイド頭は風邪を引き、その風邪が悪化して掛かった肺の病気が原因で帰らぬ人になった。

それ自体は、よくある事だ。

人間というのは、何が原因で亡くなるか分からない。

しかし問題は、その元メイド頭しかモンブランの販売店を知らなかった事である。

元メイド頭は自分の年齢を考えて、次代のメイド頭を育てていた為に、通常の業務上では混乱無く引き継ぎが出来た。

しかし、モンブランの販売店の事を教える前に元メイド頭は亡くなってしまった。

最初は、町の特産品を使った菓子なのだから、簡単に見つかると思っただけという。しかし、町中を探しても、伝を使って探しても見つからなかった。

そこでエレアノールは、冒険者に依頼を出して、それをトーマスが引き受けたのだ。

「……だが、これは困った……」

依頼を引き受けたトーマスは、まず町で調査をした。

元メイド頭は人柄もよく、町中の人達がよく覚えていた。

そして町の有力者や町に来る貴族は、元メイド頭が買ってくるモンブランが好き、とよく言っていた。

モンブランは、領主だけでなく、町や町に来る貴族も魅了し、この町の発展に深く関わっていたのだ。

エレアノールは例え見つからなくても、トーマスに害は出ないようにする、と言ったが、そのプレッシャーは半端ない。

トーマスは約七日間の調査の末、ある場所にたどり着いた。それは、領主の館のメイド達が住まう離れの家、そこから少し離れた物置小屋だった。

元メイド頭は七日に一度、その物置小屋に行っていた、という証言があった。

元メイド頭はその領主の館では、重要な立ち位置だった。そんな立場の人物が、七日に一度とは言っても休みをとって遠くに行ける訳がない。

ならば、七日に一度入ったその物置小屋が怪しいとトーマスは睨ん

だ。

そして三日間、その物置小屋を毎日見回りしていた三日目の朝方に、それを見つけた。

「なんだこりや……」

古い人形や小さなドレスが納められた物置小屋の片隅に、見慣れないドアを見つけた。

しかも、トーマスにも分かる東大陸語で異世界食堂と書かれてある看板が掛かっている。

「まさか……これか……?」

トーマスは半信半疑で、そのドアを開けた。

「おっと、随分と早いお客様だ」

「いらつしやいませ。洋食のねこやにようこそ」

そんなトーマスを出迎えたのは、純白の料理人服を着た二人の男だった。

「洋食のねこや……?」

「ええ。そちらからしたら、異世界になりますので、別名で異世界食堂とも言われています」

トーマスの呟きに、若い男。明久が答えた。

それを聞いたトーマスは、ある噂を思い出した。

そこは、通常では考えられない値段でとてつもなく美味しい料理が食べられるという異世界食堂の噂。

まさか実在するとは思っていなかったトーマスだが、まさかと思つて

「……モンブラン、あるか?」

と問い掛けた。すると、髭を生やした中年の男性。店長が

「モンブラン? ……もしかして、ジゼルさんのお知り合いですか?」

その名前を聞いて、トーマスは内心で大当たりとガッツポーズした。ジゼルというのは、元メイド頭の名前だ。

「ああ……顔も知らないがね」

そこから、トーマスは元メイド頭が亡くなった事を教え、モンブランが買えるか聞いた。

すると、明久が

「ええ、買えますよ」

と教え、モンブランの味が気になっていたトーマスは、一個食べてみる事にしたのだ。

そして、驚きと共に一個で満足出来る訳もなく、結局は四個もトーマスはモンブランを食べた。

そこに、アレツタと霊夢が来て

「お待たせしました！ お持ち帰り用のモンブラン、6個です！」

とトーマスに二つのビニール袋を差し出し、トーマスは銀貨3枚を払って、退店した。

そして消えていくドアを見ながら、トーマスは

「けど、もったいねえな……」

と呟いた。何せ、今回はモンブランだけを食べたが、他にも後から来た客達が様々な美味しそうな料理を食べていた。それらも食べてみたいと思っただが、今回は依頼を優先し、帰ってきた。

モンブランを渡して報告したら、もう領主の館の敷地には簡単には入れなくなるのは道理だ。

「……だがま、俺は探し屋トーマスだ。自分で見つけてやらあ」

トーマスはそう結論すると、エレアノールに報告する為に本館に向かっていったのだった。

86 皿目 フルーツグラタン

まだ秋の少し肌寒い朝とも言えない、夜。

ヴィクトリアは、一人緊張しながら着替えていた。

(今日が依頼があった日……)

ヴィクトリアは一応王族の一人な為、冒険者ではない。しかし、師匠たるアルトリウスからある役割を任されていた。

それは、通称異世界食堂のメニューの試食と、新しいメニュー表作りだ。

着替えている内に日が登り始め、それと同時に何時もの場所にドアが現れた。

「……行きましようか」

新しいメニューに胸を高鳴らせながら、ヴィクトリアはドアを開けた。

「いらつしやい」

「今日は、ありがとうございます」

ヴィクトリアを出迎えたのは、店長と明久の二人だった。そして店長はキッチンに向かい、明久はヴィクトリアを近くの席に案内した。

「……それで、今日は何かしら?」

「本日試食してもらうのは、フルーツグラタンです」

明久がそう説明した時、店長がヴィクトリアの前に置いたのは、ヴィクトリアが知るグラタンより一回り小さい器だった。

ヴィクトリアが知るグラタンは、騎士のソースがふんだんに使われた料理で、メイン料理に当たる分類だ。

そして今置かれたフルーツグラタンも、騎士のソースに似たのがたっぷりのフルーツに掛けられていて、グラタンと言うだけあって焼き目もある。

「熱いので、お気をつけください」

「ありがとう」

店長と明久を見送り、入ってきたアレツタに挨拶してから、ヴィクトリアは改めてフルーツグラタンを見て

(彼らの事だから、変な料理は出さないだろうけど……)

若干だが、フルーツグラタンという料理を警戒していた。異世界食堂のメニュー表、それを書いたのはヴィクトリアとアルトリウスの二人である。

これは先代から続いてきた事で、アルトリウスが先代の頃からの料理を書き、ヴィクトリアが今の店長が入ってから始めたデザート類の実際に食べて書いたのだ。

二人は味の表現が的確な為に、頼むようになったのだ。

ちなみに、ヴィクトリアがデザート類を担当しているのは、アルトリウスが甘いのを苦手としているからだ。

(よく見たら、ソースが黄色い……騎士のソースじゃない……)

淡い黄色いソースを見たヴィクトリアは、あるクリームを思い出して、小さいスプーンを持ち、焼いた事で出来ていた薄いパリパリとした皮を破って、その下にあつたフルーツとソースを掬って口に運んだ。

(……カスタードクリームじゃない……)

口の中に広がる味に、ヴィクトリアはクリームの本体を探り始めた。

まずフルーツだが、これは一度甘く煮込まれたものとヴィクトリアは察した。

その理由だが、本来のフルーツよりも柔らかく、噛む度に甘い汁が溢れたからだ。

そして問題のソース。

ヴィクトリアが最初、それをカスタードクリームと予想したのは、色合いから自分が愛してやまないプリンと色合いが酷似していたからだ。

しかし、風味が違う。

(これは……乳は使っていない……代わりに、葡萄酒の香りがする)

今度はソースだけを僅かに口に運び、ヴィクトリアは何が使われて

いるか察した。

(そうか……熱するから、カスタードクリームだと相性が悪い……だから、葡萄酒の入ったクリームを使っているのか……)

ヴィクトリアはそう考えながら、また一口食べた。

(酒精は完全に飛んでるけど、葡萄酒の香りが楽しめる……これはこれで美味しい)

ヴィクトリアからしたら、新しい分類のデザート。

様々なフルーツも味わえる。恐らくフルーツは、季節によって変わるだろう。

そう考えながらヴィクトリアは、全て食べ終わると店側が用意していた紙に詳細に書き始めた。

そして書き終わると

「はい、これでいいかしら?」

「はい。何時もありがとうございます」

食べ終わった器を回収しに来た店長に、差し出した。

すると、明久が近寄ってきて

「こちら、何時ものプリンになります」

とヴィクトリアの前に、何時も食べるプリン・ア・ラ・モードを置いた。

するとヴィクトリアが

「このフルーツグラタン……お持ち帰りって出来るかしら?」

と問い掛けてきた。

「はい。少々お時間を貰いますが、出来ますよ。冷めたのは、また違った味わいになりますよ」

「じゃあ、3つお願い」

「承りました」

ヴィクトリアは最近よく来る双子に、食べさせてもいいか、と思っ

た。その時、ドアが勢いよく開き

『わああああ!?!』

と霊夢と一緒に、二人の少女達が現れた。

「え、何事？」

明久が驚きながら近付くと、押し倒されていた霊夢が申し訳なさそうに

「……………ごめんなさい……………騒がしく来ちゃって……………」
と謝罪した。

霊夢の友人達

霊夢が二人の少女に押し倒された日から、少々時間を遡り幻想郷の魔女の森。その中にある一軒の家にて

「なあ、妖夢。最近霊夢が丸一日居ない日があるの、気付いてるか？」

とんがり帽子を被った金髪の少女。霧雨魔理沙きりさめまりさが、机の反対側に座っているもう一人の少女。知人の魂魄妖夢こんぱくようむに切り出した。

「それは、霊夢だつて出掛けてる時はあるから仕方ないと思うけど……」

妖夢の言葉に、魔理沙は机を叩いて

「だからって、丸一日は気にならないか？」

「うーん……」

魔理沙の言葉に、妖夢は唸った。すると魔理沙は、そんな妖夢の手を掴み

「2日後の早朝！ 博麗神社に集合だ！」

「……大丈夫かなあ……」

魔理沙の提案に、妖夢は不安な表情を浮かべた。

それから二日後、二日はまだ日が登りきる前に博麗神社の霊夢の部屋が見える位置に隠れていた。

「あふ……眠い……」

「我慢しろ、あたしだつて眠いんだ……」

妖夢が欠伸をしていると、魔理沙はそんな妖夢の頬をグニグニと引っ張った。恐らく、眠気覚ましだろうか。

かくいう魔理沙も、眠そうな表情である。

その時、霊夢が部屋から出てきた。

「お、出てきた」

「流石霊夢、しゃっきりしてる」

霊夢は二人と違い、目はぱっちり開いている。完全に目が覚めているようだ。そのまま霊夢は縁側に座り、靴を履いて移動を始めた。

「よし、追うぞ！」

「うん」

二人は霊夢に気付かれないうように、茂みに隠れながら、霊夢を追い掛けた。

霊夢は何時もと同じように、箒が仕舞われている小屋に向かっていく。

それを見た妖夢は

「今日は、普通に掃除するみたいだよ？ ほら、「戻ろう」

と魔理沙に提案した。しかし魔理沙は

「いや、待て……あの小屋から、妙な魔力の流れを感じる……何かあるぞ」

と小屋を覗んだ。

魔理沙が気付いたのは、魔理沙が魔法使いだからだろう。それに対して、妖夢は剣士。

分野が違うのである。

魔理沙は霊夢が小屋に入ると、茂みから飛び出して小屋に近付いた。それを見て、妖夢も魔理沙に続いて小屋に近付いた。

そして魔理沙が扉を静かに開けると、中では霊夢が見慣れぬ扉を開けようとしていた。それを見た魔理沙は

「その扉かあ!!」

と霊夢に飛び掛かった。

「えー！ 魔理沙!? それに、妖夢!？」

妖夢は半ば暴走してる魔理沙を止めようと、魔理沙に飛び付いていた。結果、霊夢に二人分の体重も掛かり、霊夢は二人に押し倒されるように扉を開けてねこやに入った。

「え、何事?」

「……ごめんなさい……騒がしく来ちゃって……」

近くに居た明久が覗いてきた事に気付き、霊夢は魔理沙と妖夢に一発ずつ拳骨を落としながら謝罪した。

それから数分後、仕事着に着替えた霊夢と魔理沙、妖夢は机に座っていた。

その対面には、明久と店長の二人が席に座り、その後ろには早希の姿もある。

「つまり……その二人は霊夢ちゃんの知り合いつてこと？」

「ええ……こつちが霧雨魔理沙。もう一人が、魂魄妖夢よ」

「霧雨魔理沙だ！ よろしくな！」

「魂魄妖夢です」

霊夢が軽く紹介すると、魔理沙は快活に、妖夢は礼儀正しく挨拶した。

「どうやら、私が一日居ない事を不思議に思つて見張られてたみたいなのよ……」

「それで、ドアを開けるタイミングで飛び付かれて、あんな風に入つたつて訳か……」

店長の言葉に、霊夢が申し訳なさそうに頷いた。すると、魔理沙が「だってよ、気になったんだよ」

「もう少し、節度を持ちなさいつてことよ……まったく……妖夢まで一緒になつて……」

「ご、ごめんね、霊夢……」

霊夢が軽く睨むと、妖夢は頭を下げた。

「一応説明すると、ここは洋食のねこやつて名前のお店」

「そのドアは、様々な異世界に様々な場所に出るんだ」

「つまり、ここは異世界つて訳ですか……」

「すげえ魔道具だぜ……」

店長と明久の言葉に、妖夢は感心し、魔理沙は驚いていた。特に魔理沙は、魔道具販売店を営んでいるから、尚更だろう。

「魔理沙、一応忠告しておくけど……」

「なんだよ」

「あの鈴を持つていこう、なんて考えないようにね……ここのお客……猛者揃いだから」

「え、そんなに？」

魔理沙がドアの鈴を見ていた事に気付いた霊夢は、魔理沙に忠告し、魔理沙は固まった。

「ええ……私が知る限り、魔理沙より格上の魔法使いが数人。それと、妖夢より強い剣士も居たわ……それに……紫達、五大老並みかそれ以上の力を持つ人も居る……」

「やめとく」

「懸命ね」

実は魔理沙は、自身が興味を持った物を勝手に持つていくという悪癖があった。それを霊夢が先に牽制し、止めたのである。

「ねえ、霊夢……そんなに凄い剣士が居るの？」

「ええ……大分おじさんんだけど、あの圧は凄いわよ……」

「……会ってみたい……」

妖夢は妖夢で、どうやらその凄腕タツゴロウの剣士に興味が湧いたようだ。妖夢はある家の料理人でもあるが、庭師でもあり、二刀流の剣士でもあるのだ。

やはり、剣士としたら強い剣士と会ってみたいのだろう。その時、明久が腕時計を見て

「あ、そろそろ朝の賄いを作らないと」

「そうだな……君たちも食べるかい？ 多分、まだ朝食食べてないんだろ？」

店長が問い掛けると、妖夢の方から腹の音が聞こえた。それを聞いて、店長は

「最初はサービスしておくよ。食べていきな」

と言って、キッチンに入った。

87 皿目 かきたま餡掛けにゆうめん

霊夢達が食堂の掃除をしている間に、明久と店長はキッチンに入り「さて、賄いは何にするかな……」

「店長。これ、使いませんか？」

店長が首を傾げていたら、明久がある箱を取り出した。それは、夏のお中元の定番の一つ。そうめんの入った箱だった。

「ああ……まだ、大量に残ってたな」

「ですね……夏の間は大分減りましたが、まだまだ残ってますよ」

これは恐らく、どこのご家庭でも悩み事の一つかもしれないが、大量に送られてきて、家族で食べてもまだ大量に残る。

それは、この二人も例外ではなかった。

未だに数kgは残っているのだ。少しでも減らしたい、というのが二人の思いだった。

「ふむ……よし、明久。メインは任せた」

「分かりました」

店長から任された明久は、まずそうめんを茹で始めた。

それから、十数分後

「はい、お待たせ。かきたま餡掛けにゆうめんだよ」

「こっちは、中華風サラダだな」

と人数分の朝の賄いが出された。

寒い為に、暖かい料理が良いと考えた明久は、そうめんを茹でながらかきたま餡掛けを作り、中華風の出汁と合わせたのだ。

「それじゃあ」

『いただきます！』

何時もより多人数だが、朝食が始まった。

「これ、そうめん……？」

「本当だ。味付けで、こんなに変わるんだな」

妖夢と魔理沙は幻想郷でそうめんになれている為に、驚いていた。

特に妖夢は、仕えている家で料理人もしている為に驚きはひとしおだった。

（そうめんはつゆで食べるって思ってたけど……こんな食べ方があったなんて……！）

妖夢からしたら、そうめんはめんつゆに付けて食べるという固定概念があった為に、他の食べ方は考えられなかったのだ。

特に、かきたま系の料理というのは主に病人向けという考えも強かったから尚更だ。

そして、一口食べて再び驚いた。

（しょうがを使って風味を付けるだけじゃなく、保温性も上げてるんだ……この人達、凄い）

先にも述べたが、妖夢は仕えている家で料理人もやっており、主人はかなりの大食いかつ美食家だ。その為、質と量の両立で料理を作っている妖夢は、料理に関してかなりの自信があった。

しかし、調理の仕方や味付けに衝撃を受けた。

「旨っ！ めっちゃ旨い！ 霊夢、羨ましいぞ！ こんな旨い料理を、7日に一回食べてたなんて!!」

「私は働いてるのよ、ここで。その雇用条件に、三食ごはん付きなのよ」

魔理沙は心底羨ましそうに、霊夢を睨む。しかし霊夢は、気にした様子もなくにゆうめんを食べている。

「あ、そういうえば着替えてるな。それ、制服か」
「そうよ」

短く返答すると、今度はサラダを食べる霊夢。

それが目に入ったのか、妖夢はサラダを食べた。

（これ、ゴマ油と塩を使って味付けしてるんだ！ それに、ワカメと一緒に使う事で食感の変化も起きて飽きない！）

やはり料理な為に舌が肥えてる妖夢は、サラダの味付けに気づいた。匂いからゴマ油には気付いていたが、食べて確信したようだ。

そこからは、夢中になって食べた。

ふわふわのたまごと暖かいにゆうめん。そして、中華風サラダ。ど

ちらも、妖夢からしたら新しい発想の料理で、食べて味を覚えようと
考えたからだ。

そして、少しすると

「いやあ、旨かったあ……これ、また来たくなるな」

「うん、本当に……」

食べ終わった魔理沙と妖夢は、満足した様子で呟いた。

特に妖夢は、何か真剣に考えている様子だ。

「じゃあ、私達は食器を持っていきますね」

「お願いします」

早希は立ち上がると、アレツタやクロと一緒に食器を回収してキツ
チンに向かった。

霊夢も同じように、魔理沙や妖夢の食器を回収し立ち上がった。そ
の時だった。

「あの……私に、料理を教えてくださいませんか？」

と妖夢が告げた。

その言葉に、全員の視線が妖夢に集まった。

理由

妖夢からの予想外の言葉に、店長と明久は驚いた。
すると霊夢が

「妖夢の料理の腕は、保証するわ。妖夢が仕えてる家の主が、大食いかつ美食家なのよ」

と店長と明久に説明した。

質と量の両立、それは料理では難しいが、妖夢は出来ているという。それは確かに、腕が無ければ成し得ない事だ。

しかし

「とはいえ、彼女の腕を見ない事にはな……」

「店長。お昼のまかない、任せてみたらどうでしょうか」

店長が腕組みし悩んでいると、食器を洗浄機に入れたらしい早希が提案した。

確かに、一度は確認しないと判断は出来ないだろう。

すると霊夢が

「だけど妖夢。なんで、働きたいなんて……」

「実は、幽々子様から、最近味が代わり映えしないって言われて……」
霊夢からの問い掛けに、妖夢は少々苦い表情をしながら答えた。

幽々子こと、西行寺幽々子。

彼女が、妖夢が仕えてる家の主で、幽霊なのだが大食いかつ美食家なのだ。

妖夢はそんな幽々子の家で、庭師兼料理人として働いているのだ。だがどうやら、料理のレパートリーに悩んでいる様子。

「ここに来て分かったの……私は、固定概念に固まり過ぎてるって」
「なるほどね……」

妖夢からしたら、にゆうめんとというのは考えもしなかったらしい。そこから、レパートリーを増やせるかも、と考えたようだ。

「うーん……まあ、まかないなら良いかな……」

「一度、彼女の腕を把握しましょうか」

明久の言葉に、店長は頷き

「えっと、妖夢ちゃん。だったね？」

「はい！」

「とりあえず、お昼のまかないの時に腕を見させてもらって、考えさせてもらうけど、それで良いかな？」

店長の言葉に、妖夢は頷き

「はい！ 大丈夫です！」

と答えた。それを聞いた店長は

「それじゃあ、他の皆は何時も通りに」

と指示を出した。すると霊夢が、魔理沙に

「はい、あんたは帰る」

「アタシもこの店に居たいー」

魔理沙は、まだねこやに居たいらしい。しかし

「自分の店があるでしょうが。ちゃんと経営しなさい」

「う、確かに……まあ、新しいアイデア出だし……帰るか」

実は魔理沙は、霧雨魔道具店という店を経営しているのだ。売っているのは、彼女が作った魔道具だ。

自分の店があるのだから、ちゃんと経営すべきだろう。

魔理沙はドアに歩み寄ると

「次は、客として来るな！」

と言って、退店した。

その直後、扉が開いたのを確認して

「いらっしやいませ、異世界食堂にようこそ！」

今日一人目を、アレツタが出迎えた。

そして暫くして、お客が一段落したのでお昼にする事にした。

「本当に異世界なんですわ……」

「驚いたでしょ？」

休憩室から度々フロアを見ていた妖夢が驚いた表情で呟くと、霊夢が苦笑しながら問い掛けてきた。

そして、キッチンに入ると

「さて、約束通りにお昼のまかないは任せる」

「ここにある食材や調味料は、好きに使っていいから」

と店長と明久は、妖夢に軽くキッチンの使い方を教えた。霊夢から、幻想郷はかまどで火を焚いたりすると聞いたからだ。

しかし、妖夢が戸惑っているのを察して

「早希ちゃん。フォローお願い」

「分かりました」

早希に任せたのは、店長と明久が手伝ったら、妖夢の腕が分からなくなってしまうと考えたからだ。

そして妖夢は、調理を始めた。

指摘

妖夢が作り始めて、十数分後。

「お、お待たせしました……」

「今日はかき揚げうどんよ」

「どうぞ」

妖夢を先頭に、霊夢と早希が人数分の料理を持ってフロアに現れた。どうやら、今回妖夢が作ったのはかき揚げうどんだったようだ。

見事な黄金色の汁に、白いうどん。そして、大きめのかき揚げが乗っている。

かき揚げはニンジン、ゴボウ、タマネギ、エビ、三つ葉を使った、オーソドックスな物だ。

そのかき揚げも綺麗に纏まり、きつね色に揚がっている事から、妖夢の料理の腕前が伺える。

「さて」

「じゃあ、いただきます」

店長と明久の言葉の後に、全員も食べ始めたのだが、妖夢は店長と明久がどう反応するのかが気になり、ソワソワしている。

それに気付いている二人は、微笑ましい気持ちを覚えながら、それぞれ食べ始めた。

店長はかき揚げを一口食べて

「うん……すっかり火が通っていて、かつ綺麗に纏まってるね……具材はオーソドックスだから、料理人の腕が問われるけど……うん、十分に美味しい」

と評価。そして、汁を飲んだ明久は

「出汗はカツオと昆布の合わせ出汁だね……比率も見事。これは、旅館とかで出されてるのと遜色無いレベルだ」

と評価した。それに安堵する妖夢だったが

「だけど……うん。君の主人が言いたい事が、何となく分かったかも」

という店長の言葉。

「それは、一体……」

「一言で言うと、教科書通り過ぎるんだね」

妖夢の問い掛けに、明久が答えた。

「あ、勘違いしないでね？ 間違いなく、妖夢ちゃんの料理は凄く美味しい。それこそ、旅館やお店で出せるレベルだよ」

妖夢の顔が不安そうになったからか、明久は少し慌てた様子で語る。

「うん。出汁の比率や取り方も丁寧。かき揚げも、綺麗に纏まって均一に揚がっている」

「ちよつと待っててね」

明久はそう言つて、キッチンに消えた。

そして、十数分後

「はい」

と妖夢と同じ、かき揚げうどんを持ってきた。

見た目は、妖夢のと変わらない。

「食べてみて」

明久に促されて、妖夢はまず出汁を一口飲んで驚いた。

「これ……私のより、味が深い……カツオと昆布……それに、椎茸？」

「正解」

三種の合わせ出汁。ちよつとしたアレンジだ。

「基本的な出汁は、妖夢ちゃんの残ってたやつを使って、椎茸の出汁を合わせた。そして、かき揚げ」

妖夢はかき揚げを一口食べて、目を見開き

「此方は、椎茸が増えて……それに、とうもろこし？」

と自分が食べて出来た断面図を見た。

確かに気付きにくいのが、トウモロコシも追加されている。

「その椎茸は、出汁を取った後に切つて入れたんだ。それに、衣にも出汁を少し混ぜて、衣に味を着けた。やったのは、それだけ……けど、どうかな？」

「凄く、美味しいです……」

ちよつとした追加で、大きく変わった味に、妖夢は衝撃を受けていた。すると、店長が

「確かに、教科書通りに作るのも大切だ。それが、最初の一步で、最初を固めれば、応用が出来るようになるからね」

「けどそこで立ち止まらずに、一步踏み出して、自分の味を追求する。そうすれば、味も変わっていく……」

店長と明久の言葉に、妖夢は感銘を受けていた。

確かに、今まで出してきた料理は教わったそのままの料理だった。

そこから発展させる、という考えが浮かばなかったのだ。

「けど、妖夢ちゃんは凄いね」

「だな。基礎だけで、ここまで美味しく出来てるんだから、料理に真摯に向き合ってきた証拠だ。十分に誇っていいよ」

明久の言葉に同意してから、店長が称賛した。

「あ、ありがとうございます」

「多分、基礎に関しては教えられる事は無いかな」

「ですね。後は本当にちよつとした発想が鍵になるかと思えます」

発想。それが、自分に足りなかったモノだと、妖夢は二人の言葉から察した。

すると、店長が

「とりあえず、君の料理の腕前は十分に分かった……だから君を、料理補佐として雇う」

と告げた。

「料理補佐？」

「基本的には、僕達の手伝いだね。時々、フロアの方も手伝ってもらおうよ。時々、四人でも回らない事があるからね」

明久と店長の補助。つまりは、二人がどのように調理しているか間近で見る事が出来る。調理という教えながらやるには難しい事なので、間近で見た方が早いと考えたのだろう。

「勿論、三食付き」

「それで良かったら、どうかな？」

妖夢には、迷う理由は無かった。

「未熟者ですが……お願いします」
こうして、新しく仲間が増えた。

88 皿目 スパニツシユオムレツ

街から常人だったら優に3日は掛かる山の中の小屋に、同族の中でも一際大きい体軀を誇る狼の獣人族の男。カルロスは、大きな荷物を大事に運びながら姉の住む小屋を見つけた。

「あ！ カルロス！」

「アデリア姉。久しぶり」

その小屋の前には、カルロスより大分小さく愛らしい姉。緑の神官のアデリアが居て、ピョンピョンと跳ねながら大きく手を振っていた。

カルロスとアデリアは家族だが、アデリアは母親の血が濃いのかカルロスより大分小柄で、愛らしい。

しかし、その戦闘力はカルロスを凌駕している。

アデリアは一族の中でも突出した弓の腕前と俊敏さを誇り、その2つと神官戦士として同年代では特に期待されていて、大神官に最も近いと評されている。

「ごめんね、カルロス。何時も持ってきてもらって」

「気にするな。アデリア姉は、強くなる事だけ考えていれば良い」

「うん……」

カルロスの言葉に、アデリアは少し悲しそうな表情を浮かべた。実は、アデリアはそんなに戦う事が好きではなかった。

それは、アデリアが優しい事が起因している。

魔物相手は仕方ないと割り切って戦えるが、人間同士では戦いたくない、と考えている。

これは、戦う事、強くなる事を旨とする獣人種ではかなり珍しい氣質であった。

そしてカルロスは、食糧や衣類。薬と次々とアデリアに頼まれたり、家族からのお土産を倉庫に入れていくが、最後に少し怪訝な表情を浮かべて

「だけど、本当に要るのか？ この銀貨50枚は」

と銀貨が詰まった革袋を差し出した。

それを受け取り、アデリアは

「良かった！ もうすぐで払うお金が無くなるところだったよー！」

と満面の笑みを浮かべた。それを聞いて、カルロスは首をかしげた。今居る場所では、お金を使う機会など殆ど無い筈なのだ。

するとアデリアは

「うーん、そうだね……そういうえば、今日がドヨウの日だし……直接見た方が良さね。カルロス、着いてきて」

と言って、歩き出した。それから向かったのは、普段はアデリアの修行場所として使われている岩場で、転がっている幾つもの岩に、アデリアのだろう爪痕が刻まれている。

その岩の中で、一際大きい岩の上に、黒いドアが鎮座していた。

「……アデリア姉、これはなんだ？」

「ん？ 異世界食堂の入り口だよ」

カルロスの問い掛けに答えながら、アデリアはドアを開けた。カルロスは入る事を躊躇しているが、アデリアが

「ほら。早く入って！ 入れなくなるから」

とカルロスの腕を掴み、引つ張った。

ドアを潜ると、カルロスは驚いた。アデリアの修行場所はかなり寒かったのだが、暖かかった。それだけでなく、明るい。

「ここが……」

「そう！ 異世界食堂！ 色んな食べ物美味しいお店だよ！」

カルロスが周囲を見回していると、アレツタを見つけて

「アレツタちゃん！ スパ……なんだっけ、芋を卵で包むやつ！ あれのパーテーさいず頂戴！」

「はい！ スパニッシュオムレツですね！ 少々お待ちください！」

アデリアの言葉から料理を特定したアレツタは、両手にお皿を持ちながら奥へと消えた。

するとカルロスは、小声で

「今の、混沌の教徒だろ？ 殺さなくても、いいのか？」

とアデリアに問い掛けた。

各神の信徒たる神官の役目は、各地で混沌の復活を阻止する為、混沌の教徒を抹殺する事。

それに従うならば、アレツタもその対象に選ばれる。

しかし、アデリアは

「いいのいいの！ アレツタちゃん、良い子だから！」

と告げて、近くの空いてる席に座った。

(アデリア姉が言うなら、いいか……)

カルロスはそう結論着けて、アデリアの対面に座った。

なおアデリアとしては、変な事をして《出入り禁止》になる方が嫌だから、カルロスを止めた。

そして、久しぶりに談笑している間に

「お待たせしました。スパニッシュオムレツのパーティーサイズです」

と霊夢が、料理を持ってきた。

まず、二人の前に小さな取り皿とフォーク、ナイフを置いた。そして、大きな皿を置いた。

「これは、パン？ ……いや、卵焼き!？」

カルロスは、そのサイズの卵焼きを初めて見て驚いた。

カルロスからしたら、卵を5個は使っているサイズの料理で、そんな料理を初めて見たからだ。

「そうだよ、凄いよね。これで、銀貨1枚なんだって」

そして、アデリアから告げられた値段に、再度驚いた。

カルロスが知っている値段は、卵一個で銅貨が5、6枚する。しかし、卵を5個は使っているスパニッシュオムレツが銀貨一枚という破格の値段。

アデリアはナイフで切ったひとつを、ナイフとフォークを使って、カルロスの皿に置いて

「さ、食べよう」

「お、おう」

アデリアに促されて、カルロスは大きく一口食べた。

「……ふめえ!!」

初めての味に、カルロスは驚いた。

卵焼きの中には様々な具が入っていて、それらもだが卵焼き自体にもうつつすと塩味が利いていて、胡椒の辛味とほんのりとチーズの味わいが絡み合い、カルロスはあつという間に皿に置かれた一切れを食べてしまった。

(ダメだ、全然足りん!)

と考えたカルロスが、さらに切っていた時、アデリアが赤い何かをスパニツシユオムレツにかけている事に気付いて

「アデリア姉、それは?」

と問い掛けた。

「あ、これ? ケチャップって言って、マルメットをお酢とか色々使って作ったソースなんだって。かけると美味しいよ」

アデリアはそう言って、ケチャップの容器をカルロスに手渡した。アデリアはケチャップがかかったスパニツシユオムレツを美味しくそうに食べ、それを見たカルロスも僅かにケチャップをスパニツシユオムレツにかけた。

色合いはまるで血を彷彿させるが、匂いは全然違う。

酸味が利いているらしく、すっぱい匂いがする。

ケチャップが付いた部分を食べたカルロスは、驚きで目を見開いた。

確かにケチャップをかけなくても十分に美味しかったが、ケチャップの味わいが更に深みを増してくれて、ケチャップが無いと物足りなさすら感じる程だ。

「旨いな、これ!」

「だよね。大体の卵料理に、このケチャップが合うんだ」

まるで子供時代に戻ったかのような弟の反応に、アデリアは満面の笑みを浮かべながらスパニツシユオムレツを頬張った。

そして、半分以上食べ終わると

「まだ食べる?」

「他に、どんな料理があるんだ!」

アデリアからの問い掛けに、カルロスは目を輝かせながら問い掛けてきた。そんなカルロスにクスリと笑みを浮かべ

「じゃあ、色々食べてみようか。後、お酒も。すみません！」

近くを通ったクロに、アデリアは更に追加の注文を出した。その後、後からやって来たソフィも交えて、談笑しながら料理を食べる二人だった。

89 皿目 中華粥

「ではな。また来る」

「はい、ありがとうございます」

「またの御来店をお待ちしています」

夜9時、最後のお客たる赤を見送ると

「お疲れ様、皆」

『お疲れ様でした!』

全員がフロアに集まり、片付けを始めた。

「初めての仕事、どうだった?」

「店長さんと明久さんの料理の腕に、終始圧倒されました……お二人とも、早く正確でした……」

早希からの問い掛けに、妖夢は1日を振り返って呟いた。妖夢も料理の腕にはかなりの自信があったが、店長と明久は素早くかつ的確に調理。それだけでなく、常連の様子から野菜を多くしたりと対応していた。

気遣いとの両立、それに妖夢は少しばかり意気消沈しているらしい。

すると、霊夢が

「なに弱気になってるのよ、妖夢」

と妖夢の頬を両手で挟んだ。

「確かに、今はまだ追い付けないかもしれないわ……けど、だからって最初から諦めてたら意味ないでしょう。少しずつでもいいから、上達する。それが一番確実でしょ?」

「……うん、頑張る」

霊夢の激励に、妖夢は頷いた。それを見ていた早希が、微笑んだ時

「間違いないわ! こころじゃ!」

「本当にあつたよ……」

と二人の客が入ってきた。

それは、数日前に遡る事になる。

「ああ？　料理屋を探してる？」

「そうじゃ……二三日前、知り合いのドワーフと酒盛りをしての……べろべろに酔っぱらって入った店で、上手い粥を食ったんじゃが……その店の位置や名前を覚えてないんじゃ……」

その町は、王国の王都から港の途中にある町で、それなりの規模を誇る。そんな町の衛士となれば、厄介事が持ち込まれる事が多々ある。

ウルリックはそんな町の衛士になった元傭兵で、三年程前にその町の花屋の娘に一目惚れし、傭兵から衛士になった。

そんなウルリックに、白髪と白い髭の老人。ソウジュンが頼み事を持ってきたのだ。

それが、料理屋を探してほしいというものだった。

「ドワーフと一緒に火酒を大量に飲んでたから、どんな店かは覚えてないと……」

「うむ……ただ、少し変わった店で、旨い粥を食ったのは覚えておるんじゃ……」

ソウジュンの話に、ウルリックは頭を抱えた。

ドワーフもだが、ソウジュンも町では結構知られた酒飲みで、べろべろになるまで飲んだとなると、かなり夜遅い時間だろうが、そんな時間まで経営している料理屋をウルリックは知らないし、粥を出すという店も知らなかった。

「悪いが、知らないな……」

「むう、そうか……衛士でも知らないとなると……簡単には見つからないじゃろうな……」

ウルリックの言葉にソウジュンは、肩を落としながらその日は帰ったのだが、それから数日後に事態は大きく動いた。

「はい、不法侵入で拘束する。どうせ物取りだろうが、残念だったな。ソウジュン爺さんの家には、俺らじゃ理解出来ない薬品ばかりだ。素人が触ったら、大変な目にあうぜ」

「物取りじゃないって！　確かに勝手に入ったのは謝るけど、オイラ

「はあの家の物置小屋にあるドアを使いたいんだ！」

「物置小屋のドア？」

一人のハーFRINGがソウジュンの家の敷地に入り込もうとしたのを、ウルリックが発見し、拘束。

するとそのハーFRINGは、ソウジュンの家の端にある物置小屋にドアがあると言った。

それを聞いたウルリックは、街中に居たソウジュンを捕まえて、一緒に物置小屋に向かったのだが

「このドア！ 覚えておる！」

「なんだ、このドア」

「知らないのかい？ このドアは、異世界食堂のドアさ。旨い飯や酒が安く食べられる店だよ。だけど、人が住んだら使えないね……今回勝手に入ろうとしてごめんさい。仲間達には、入らないように伝えておくよ」

とりあえず、そのハーFRINGは釈放し、ウルリックとソウジュンは異世界食堂に入ったのだ。

そしてソウジュンは、戻ってきた店長に

「以前食べた粥が食べたいんじやが、頼めるか!？」

と頼んだ。すると店長は、思い出したように

「もしかして、中華粥の事ですか？ あれは元々賄い料理で、お出しするのにも少々お時間を貰いますが……」

「構わんわい！ 無理言ってるのはワシじやからの！」

店長の言葉に、ソウジュンは頷いた。

そしてソウジュンは、ウルリックを見て

「ウルリックはどうするんじや?」

「どうせだ。最後まで付き合うさ。それに、俺も腹減ったしな」

ソウジュンとウルリックはそう言つて、近くの席に座った。そして、ウルリックにはメニューを手渡して、ウルリックはソーセージの盛り合わせと適当にお酒を注文した。

そして、約一時間後

「大変お待たせしました。中華粥です。お鍋は熱いので、こちらの

取っ手以外は触らないようにして、こちらの器に盛り付けて食べてください。それと、こちらの調味料とザーサイ。揚げパンはご自由にお使いください。それでは」

とソウジュンとウルリックの前に、それなりの大きさのお鍋で作った中華粥を出した。まだグツグツと言っており、熱いからか湯気も立っている。

「旨そうな匂いだな……」

「そっちの盛り合わせをくれるなら、食わせてやるわい」

そうしてウルリックはソーセージの盛り合わせを分けるかわりに、中華粥と一緒に食べることにした。言われた通りに取っ手部分以外は触らないようにしながら器に粥を盛り付けていく。

薄く黒い物と鶏肉。そして小さいシユライプが白いライスの中で際立つが、匂いも空腹を刺激する。

ソウジュンは陶器製の匙で掬い上げると、フーフーと冷ましてから、口に運んだ。

(ああ……この味じゃ……)

プリプリのシユライプに、ホロホロで煮込まれた鶏肉。そして不思議な食感の薄く黒い物が見事に調和している。

「旨っ！ なんだこれ!? ビールにも合うし！ 止まらん！」

「あ、こちら！ ワシの分も残せ！」

ウルリックはソーセージとビールも一緒に食べているが、がつつと粥も食べていく。

二杯目には、ザーサイも乗つけて食べた。

ザーサイのコリコリとした食感と、ほのかな酸味。そして、ソウジュンの故郷で使われていた魚醤の風味が口の中に広がり、旨かった。

そして三杯目は、揚げパンを使って食べた。サクサクとしながらも柔らかい揚げパンで少しずつ中華粥を掬っては食べて、途中で用意されていた醤油を使って味を変えて満喫した。

そうして気付けば、それなりの大きさの鍋の中身は無くなっていった。

「ふう……満足したわい」

ソウジユンはそう呟くと、ウルリックを見て

(まあ、こやつと嫁くらいには使わせてやるかの)
と思ったのだった。